復興亜細亜の諸問題

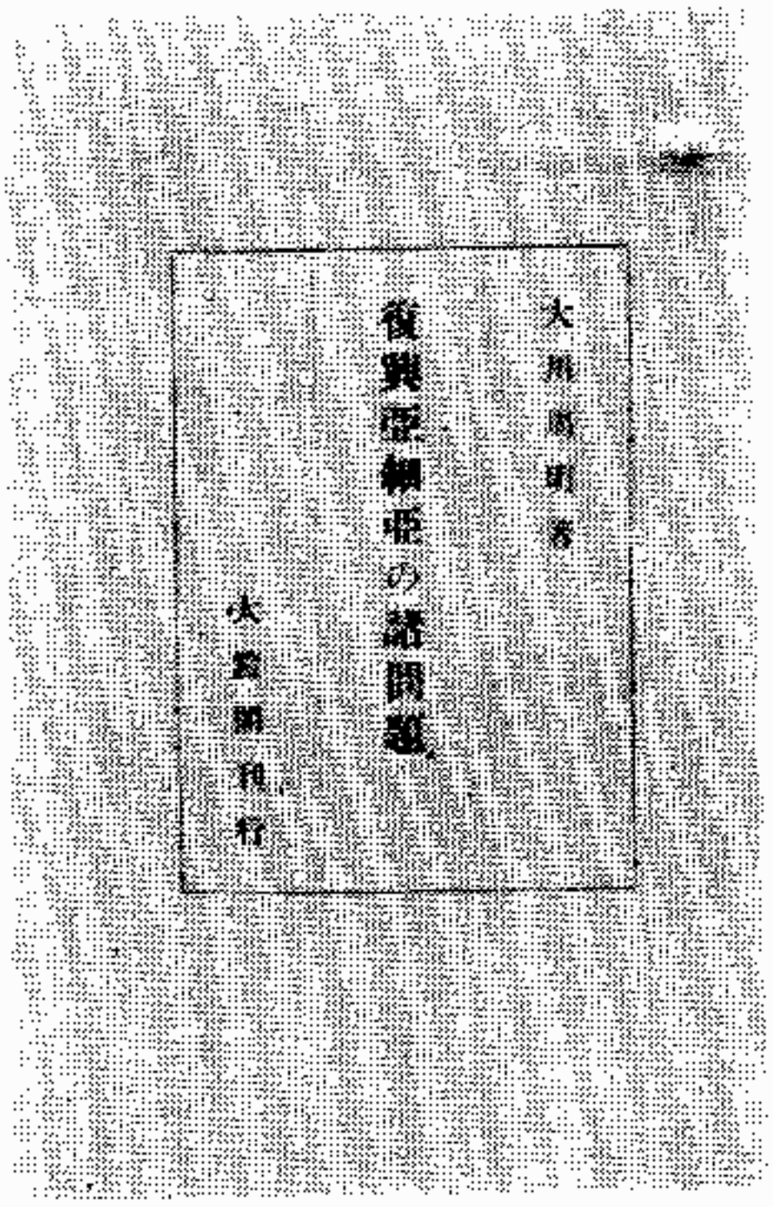
〔解説〕一、復興亜細亜は大川博士の畢生の念願であった。ヨーロッパ支配下に呻吟するアジアの解放、アジアの自由・独立統一を標榜して立った博士こそ真にアジア解放の先駆者であった。この第二巻に収録する著作十　編は、即ち博士の烈々たる闘魂溢れるアジア救国の大業績である。

一、第二次世界戦争（昭和十四年九月―昭和二十年）の結果、印度・パキスタン・セイロン・ビルマを始めアジアの国々は見事にその政治的独立を達成した。而してこの栄誉あるアジア独立の日の将来を、既にその半世紀の以前に於て徹見せる博士はヨーロッパ支配よりの自由・独立こそ一確実疑うべくもない世界史必然の発展段階である」と確言している。

「第一次世界大戦（大正三―八年）は英国をして発展の頂に登らしめた。巴里会議に於てロイド・ジョージが愚なる政治学者ウィルソンを糊弄しつつありし時が恐らく其の絶嶺に立てる時であった。而も向上の尽くる処は向下の初まる処、向下の窮まる処は向上の初まる処、此時よりして英国は嶮峻なる急坂を下り、此時よりして、亜細亜は向上の坂を登り初めたのだ。かくて中央アジア・エジプト・回教圏に及ぶアジア諸民族の独立運動を研討し、もって亜細亜問題乃至全亜細亜問題が明白に其意義を一変して、先には如何に欧羅巴が亜細亜を分取するかの問題たりしもの、今や亜細亜復興に関する博士の主著である。

苦闘する西蔵・タイ・印度・アフガニスタン・トルコ・エジプト・回教圏に及ぶアジア諸民族の独立運動を研討し、もってアジアの国民的自覚、アジア金剛の独立精神を鼓舞宣揚している。

一、本書は拓殖大学に於ける大正十年（一九二一）度の「東洋事情」講座の講義草稿を整理したものであって、後掲の「亜細亜建設者」（昭和十五年・一九四〇）とともにアジア復興に関する博士の主著である。



（大正十一年六月・菊版・四六二頁・大鐙閣刊）

序

一顧して長望すれば十年矢の如く去つた。竜樹研究を卒業論文として大学の哲学科を出た時、予が心密かに期したりしは、一生を印度哲学の色読に捧げることであつた。僧佉によつて知識を練り、瑜伽によつて之を体達するの道を説くウパニシャドこそ、汲みて尽きざるわが魂の渇きを癒やす聖泉であつた。かくて多くも要らぬ衣食の資を、参謀本部の独逸語の安飜訳に得つゝ、日毎大学図書館に通つて、心を印度哲学の研究に潜めた。

さて予に取りて決して忘じ難き一書は、サー・ヘンリ・コットンの『新印度』である。印度に対する至深の関心が現在の印度及び印度人に就て知る所あり度いと云ふ念ひを、いつとはなく予の心に萠し初めさせたことは、固より何の不思議もない。大正二年の夏であつた。一夕の散歩に神田の古本屋で、不図店頭に曝さるゝコットンの書を見出だした。予はコットンの為人も知らず、また此書が世にも名高き著作なりとも知らず、唯だ書名の『新印度』とあるに心惹かれ、求め帰つて之を読んだ。而して真に筆紙尽さゞる感に打たれた。

此時に至るまで、予は現在の印度に就て、殆ど何事も知らなかつた。印度思想の荘厳に景仰し、未だ見ぬ雪山の雄渾を思慕しつゝ、婆羅門鍛練の道場、仏陀降誕の聖地としてのみ、予は脳裡に印度を描いて居た。然るにコットンの著は、真摯飾らざる筆致を以て、偽はる可からざる事実に拠り、深刻鮮明に印度の現実を予の眼前に提示した。此時初めて予は英国治下の印度の悲惨を見、印度に於ける英国の不義を見た。予は現実の印度に開眼して、わが脳裡の印度と、余りに天地懸隔せるに驚き、悲しみ、而して憤つた。予はコットンの書を読み終へたる後、図書館の書庫を渉つて、印度に関する著書を貪り読んだ。読み行くうちに、単り印度のみならず、茫々たる亜細亜大陸、処として白人

の蹂躙に委せざるなく、民として彼等の奴隷たらざるなきを知了した。

ウパニシャドはいつしか予の机上より影を隠した。豊太閤裂冊の怒りに魅入られたる如き心を以て、亜細亜諸国の近代史を読み、亜細亜問題に関する著書を読んで、亜細亜に対する欧羅巴侵略の径路、亜細亜植民史及び植民政策の研究に列強角逐の勢ひを知らんとした。而して是くの如き研究は、更に予を駆りて近世欧羅巴植民史及び植民政策を講じ、東洋事情を講じつゝ、武侠の魂を抱いて紅葉ヶ岡の学堂に知識を練る青年と共に、没頭せしめ竟に今日に至らしめた。十年以前、出家遁世さへし兼ねまじかりし専念求道の一学徒、今は即ち拓殖大学に植民史を講じ植民政策を講じ、東洋事情を講じつゝ、武侠の魂を抱いて紅葉ヶ岡の学堂に知識を練る青年と共に、復興亜細亜を生命とする一戦士となつた。本書に輯めたる諸篇の多くは、大正十年度の一年間に於ける『東洋事情』講義草稿に加筆し、訂正せるものである。

初め予の研究の転向するや、予の諸友は之を以て邪路に踏込めるものとなし、須らく第一義の参究に復帰すべしと迫れること、唯に一再に止まらなかつた。就中当時住友の社員たり、今は内村鑑三氏の分身たる黒崎幸吉君が、国際問題に関する予の一小著に対し、切々として予が印度哲学より如是の研究に移るの非を諫めたる書面を送り来れることは、今尚ほ感謝なくして想起し得ざる所である。されど吾心は、最早塵外に超然として、瞑想思索を事とするに堪ゆ可くもなかつた。否、亜細亜酸鼻の源泉は、実に予が求めたりし如き出世間的生活を慕ふ心其ものに在ると思ひ初めた。亜細亜の努力、殊に印度至高の努力は、内面的精神的自由の体得に存し、且之によつて偉大なる平等一如の精神的原理を把握した。その神聖なる意義と価値とを正しく認識する上に於て、予は断じて人後に落ちるものでない。而も亜細亜は、此の原理を社会的生活の上に実現すべく猶子王の努力を用ゐなかつた。其の必然の結果は、内面的・個人的生活と外面的・社会的生活とが、互に分離孤立する小乗亜細亜の出現となり、一面には精神的原理の硬化、他面には社会的制度の弛廃を招き、遂に却つて白人阿修羅の隷属たるに至つた。亜細亜は其の本来の高貴に復るべく、

先づ二元的生活を脱却して妙法を現世に実現する無二無三の大乗亜細亜たることに努めねばならぬ。

等の社会的生活、その最も具体的なるものとして吾等の国家的生活に、吾等の精神的理想に相応する制度と組織とを与へねばならぬ。予は是くの如く考へた。是くの如く考へた故に、予は最も広汎なる意味に於ける政治の研究に深甚なる興味を抱いた。大乗的見地に立てば喫茶啖飯も亦第一義、小乗に堕すれば読経打坐も亦第二義となる。剣かコランかの信条を真向に振翳し、宗教と政治とに間一髪なきマホメットの信仰に、いたく心惹かれしも、亦実に此頃の事であつた。回教に関する本書の数篇は、如是因縁に由来する。

支那を除く亜細亜諸国の研究は、従来殆ど等閑に附せられて居た。従つて亜細亜に関する国民の知識は、予想以外に貧弱であり、亜細亜問題に対して風する馬牛であつた。今日に於ては、印度に関する多数の著書あり、亜細亜全般に関しては盟兄満川亀太郎君の好著『奪はれたる亜細亜』あり、之を数年以前に比して同日の談でないとは言へ、亜細亜知識の普及は尚未だ充分でない。若し之を知ること充分ならば、誰か抑え難き義憤を抱いて降魔の剣を執らざるを得ん。世界三大国の一と増上慢する日本さへ、神武の孫裔たる国民が、足一歩アングロ・サキソンの土を踏めば、即ち『好ましからぬ民』として世界の賤民扱ひである。自余亜細亜諸国のこと、また知るべきのみ。若し日本、民族の魂に、正義の為に百済を援けて大唐帝国に宣戦せる天智帝のこゝろ猶存し、面目の為に其友を殺さんとせる鎌倉権五郎のこゝろ猶存するならば、亜細亜の現状を究め、豊太閤のこゝろ猶存し、而も黙して坐し得る道理がない。本書の諸篇が、聊かにても復興亜細亜の大義を国民の其の大勢の趨く所を知つて、こゝろに鼓吹し得るならば、予の労作は酬ひられて余りある。

日本は『大乗相応の地』である。故に其の政治的理想は遠々として高からざるを得ぬ。国を挙げて道に殉ずるの覚悟を抱いて、而して大義を四海に布かんこと、是れ実に明治維新の真精神を体現せる先輩の本願であつた。新日本の

国民は、此の本願を伝統して森厳雄渾なる職責を負はねばならぬ。而して亜細亜の指導、海に布く唯一路である。そは日本の為であり、而して全人の為である。総ての亜細亜の為であり、而して全人の為である。総ての亜細亜をして、来りて日本を強め、而して復興亜細亜の実現の為に協力せしめよ。これ実に予が日々夜々の祈である。

なきは、今日の日本が尚未だ大乗日本たるに至らず、百鬼横行の魔界たることである。日本の現状、今日の如くなる限り、到底亜細亜救拯の重任に堪えず、亜細亜諸国また決して日本に信頼せぬであらう。堅く信ず、南洲小楠の霊、天上に瞑するに由なく、眼前の局促に囚はれ、蝸牛角上の競合に没頭して他を顧みざる日本政治家共を棄唾し、偏へに望みを純一武俠の青年に属して居ることを。吾等の正義は一貫徹底の正義でなければならぬ。吾等の手に在る剣は双刃の剣である。其剣は、亜細亜に漲る不義に対して峻厳なると同時に、日本に巣喰ふ邪悪に対して更に秋霜烈日の如し。かくて亜細亜復興の戦士は否応なく日本改造の戦士でなければならぬ。啐啄一時、大乗日本の建設こそ、取りも直さず真亜細亜の誕生である。

大正十一年六月

神奈川県大船常楽寺に於て

大川周明

第一　革命欧羅巴と復興亜細亜

『生活若くは生命は、不断に生成の途上に在る。吾等昨日の事変を反省しつつある間に、今日は既に進化の新方面が、目前に展開せらるるを見る。哲学が、灰白色に褪せて行く人生の、古びたる姿態を描きつつある間に、人生の他の一面は、燃ゆる紅の裡に躍動しつつある』――イリングワース『神と人との人格』

一　世界戦前の亜細亜問題

亜細亜民族は、第一に自由を得たる亜細亜は、周匝堅固に統一されねばならぬ。自由を得ねばならぬ。自由を得べきか、如何にして統一を実現すべきか、是れ実に亜細亜当面の関心事である。今日の亜細亜は一切に先ちて先づ奴隷の境遇を脱却せねばならぬ。奴隷に何の理想があり得るか。奴隷に何の問題があり得るか。奴隷に於ける亜細亜の問題は、亜細亜が自由を得たる時に始まる。奴隷は唯だ主人の意志に従ひ、主人の利益の為に動かさるる走屍行肉に過ぎぬ。故に真の意味に於ける亜細亜は、欧羅巴の民なりし時代に既に燦然たる文化を有して居た。彼等の或ものは今日の英独人が山野に狩猟を事とせる蛮南洋に浮べて諸島の経略に従つた。彼等の或ものは朔北の荒野に嵯峨し、人の住むに堪えずと思はしむる窮寒の地に見事なる国家を建設した。其中より出でたる英雄は中亜より欧羅巴に進み、国を黒海の岸に建て、屢々ダニューブ河

を越えて中欧を脅かした。彼等の或ものは迅雷の如く伊太利に攻入り、神の鞭として西欧民族を戦慄せしめた。

彼等は是くの如き偉大なる対外発展の力を示せるのみならず、内に在りては彼等に独特なる政治組織によつて其国を治めた。世界に比類なき大堡塁を築き大運河を開鑿した。西洋に先ちて磁石を用ゐ、印刷術を発明し、火薬銃砲を発明した。彼等は高尚なる文学、深遠なる哲学、高貴なる道徳を有して居た。而して世界の人心を支配する総ての偉大なる宗教は皆な亜細亜の間に生れ出でた。故に亜細亜人は其の歴史に現はれたる特質より見るも、或は世界文化に貢献せる事実より見るも断じて欧羅巴人の下に在るものでない。而も三百年の優勝は白人をして自負矜高ならしめ、三百年の劣敗は黄人をして自棄卑屈に陥らしめた。

然るに日露戦争は亜細亜自覚の警鐘となつた。吾等の勝利は四百年間曽て有色人のために破られざりし西欧民族に対する最初の打撃であつた。彼等が長き間の勝利の歩みは実に此時に於て最初の蹉跌を見たのだ。之と同時に吾等と人種を同じくする亜細亜諸民族は、俄然として自覚し初めた。曾に亜細亜民族のみならず、西欧列強の圧迫に苦しめる一切の民族の間に彼等に対する反抗のこころが昂まつて来た。極東の一小黄人国が面積に於て六十倍し、人口に於て三倍し、其の勇武を以て世界の恐怖たりし白人強国を敵とし、見事に之を打ち破れることは自余の亜細亜諸国に取りて真に驚嘆に堪へざる不可思議であつた。而も吾等は目のあたり彼等の不可能を可能ならしめた。而して彼等に鼓吹するに『吾等も亦』てふ希望を以てした。

此の希望は必然隷属民族の間には独立運動として、名義だけも独立を保てる諸国の間には国家改造運動として現はれた。欧羅巴が其の奴隷とせる民族の独立を高圧せんとするは何の不思議も無い。亜細亜諸民族の勃興は欧羅巴の最も欲せざる所であつた。第二十世紀初頭二十年の歴史は欧羅巴列強が亜細亜復興を欲せざりしことを、亜細亜に於て

議会制度行はれ、責任政府樹立せらるるを欲せざりしことを、明々白々に物語る。見よ、土耳古の革命成功し、瀕死の旧国が新たに蘇らんとせし時、彼等は一切の手段を講じて其の国力を疲弊させた。波斯の立憲政治も亦此国を両分せんとする英露両国の野心を妨ぐるが故に、其の議会は非道を極むる外国軍隊の暴力によつて顛覆された。支那革命が五族統一の国家的理想を象徴せる五色の新国旗を押立てて、之が実現に拮据せし時も、蒙蔵に占拠して支那を削せんと欲したる英露両国は、固より其の成功を喜ばなかつた。而して最も悲しむべく、且恥づべきは、亜細亜復興の指導者たる可き日本其者が、英国外交の翻弄する所となり、其の『離間制御 Divide and Rule』の政策を二重に成功せしめ、支那内部に党争の因を蒔き、同時に日支両国の背離を招くに至れることである。

是くの如くにして亜細亜の将来は尚ほ暗澹として居た。仮令亜細亜は其魂の底に自由と統一とを求むる心動き、而して此心を最も適確剴切に『亜細亜人の亜細亜』と云ふ一語に表象し、之を掲げて新亜細亜の理想とせしにもせよ、世界の大勢は此の理想を実現し得る日が、何れの時に来るかを疑はしめた。欧羅巴は、依然として世界の独裁者たるべき『神聖なる使命』を確信し、世界制覇の角逐を亜細亜に於て続行した。故に国際政局に於ける所謂亜細亜問題とは、欧羅巴列強が如何に亜細亜を其の利己の俎に載せ、如何に之を料理し、如何に之を分取するかの問題であつた。

日露戦争の世界史的意義は尚未だ歴史の進行の上に其の全面目を現はさなかつた。之を露呈するに至らしめたのは実に世界戦其ものである。

二　英独争覇としての世界戦

世界戦は其の表面に現はれたる相（すがた）としては英独の世界争覇戦であつた。欧羅巴の世界的覇権は、第十五世紀後半曾

て十字軍によつて鼓舞せられたる戦闘的精神が、海上の活動に旺向せる時に初めて其の萌芽を見た。かくて第十六世紀以来欧羅巴列強は世界的覇権獲得のために、不断の戦ひを続けて来た。而して第十九世紀初頭に於て勝利は一旦英吉利の手に帰した。

英国の地理的特徴、即ち大西洋上に於ける大英群島の位置並に其の島国性が、世界的覇権の発展を有利ならしめたことは最も明白なる事実である。さり乍ら斯くの如き地理的特徴が、英国発展の要件として利用せらるるに至りしは中世紀末葉以後のことに属する。第十六世紀以前の英国は、欧羅巴の辺端に位する僻陬の群島として、経済的並に文化的に、西欧大陸諸国の後塵を拝し、政治上に於ては、群島内部の国家的統一と仏蘭西の侵略とを以て、其の国是として居た。然るに亜米利加大陸並に東印度航路の発見は、英国史の最も重大なる転回点となつた。英吉利が此発見に刺戟されて、一面群島内部の国家的統一を成就すると共に、他面大陸侵略政策を放棄し去つて、其の進路を海洋並に海外諸国に向くるに及び、英国の地理的特徴は俄然として其の意義を発揮して来た。即ち英国の島国性は、四面環海の故を以て他国と直接の軋轢を防ぎ、大陸諸国が至大の犠牲を払へる国境戦争の紛糾を免れ、之によつて節約せられる国力を挙げて海上の活動に用ゐるを得せしめた。而して其の位置たる、欧羅巴大陸と大西洋との通過点に位し、著しく発達せる海岸線は、国民の為に無数の港湾を形成するが故に、殊には欧洲西北の一歩哨に過ぎざりし島国が、今や欧羅巴大陸の運命を海上に展開する自然の開拓者たるに至つた。

一五八八年、英吉利海峡に於ける英国艦隊三日の奮戦は、完全に無敵艦隊を紛砕し、徹底して西班牙海上権を顛覆した。百年に亙りしイベリア国民の優越は之と共に没落し、英吉利は第二の敵手として和蘭を選んだ。而して其戦はオリヴー・クロュウェル其人の雄渾なる精神と鉄血の意志とより迸れる、一六五一年の航海条例によつて、最も無遠慮に和蘭に対して挑まれ、一六五二年より一六七

四年の間に行はれたる前後三回の戦役によつて、従来『海洋の幸福なる所有者』と謳はれたる和蘭は、其の優越なる制海権を遂に英吉利の為に奪はれた。

和蘭を雌伏せしめたる英吉利は第三の敵手として仏蘭西と戦つた。英吉利は一六八八年より一八一五年に至る百二十六年のうち、其の六十四年間は実に戦争を以て終始した。地球上の執れの国民も英吉利の如く頻々たる戦争に参加せるはない。而して此間の諸戦争は欧羅巴戦争として記述されて居るけれども、実は西班牙王位継承戦を初めとし、墺太利王位継承戦・七年戦・乃至ナポレオン戦に至るまで一として欧羅巴並に植民地に於ける英仏争覇戦の反映ならざるは無い。ナポレオンが其の常勝の武威を以て欧羅巴を蹂躙せるに過ぎざりしかに観える。さり乍らナポレオンは英国勢力の圧倒を以て其の根本政策の遂行より打算せられたる、秩序あり系統ある一大組織を成すものである。洵にナポレオン衷心の熱烈真摯なる本願は、百年以来世界争覇の敵手たる英国より其の優越なる地位を奪ひ、仏蘭西の勢力を恢復して世界的帝国の冠冕を獲得せんとするに存して居た。故に彼は第一には地中海の制海権を占め、次で印度を経略し、これによつて英国の勢力を殺がんとした。第二には直ちに英本国に侵入して之を克服し、一切の要求を容れしめんとした。第三には英国商品の大陸輸入を禁止して致死の経済的打撃を加へ、之によつて英国を屈服せしめんとした。彼が一七九八年モールタ島を略取し、埃及に侵入し、一方使節を印度に派して諸藩王を煽動せるが如き、皆な第一策遂行の為に外ならぬ。而して英本国への直接侵入は、不幸にして仏国海軍が不完全なりし為に、再三実行を企てて遂に不成功に終つた。かくて彼は全力を挙げて第三策即ち大陸封鎖の厲行に着手し、全欧諸国に対して、或は干渉を加へ、或は侵略併呑し、或は同盟を結び、遂に欧洲全土を蹂躙するに至つた。

大陸封鎖は英国に取つて非常なる打撃であつた。一八〇三年のハンノーフェルの占領以来、ナポレオンは着々欧大陸の海岸を封鎖し、一八一二年露国に侵入せる頃には、英国の経済界は甚しき悲境に陥り、英蘭銀行の兌換券は八十パーセント以下に下落し、従来大陸に於て二十五法に相当せし一磅は今や僅かに十七法となり、商業上の恐慌起りて銀行の破産頻々相次ぎ、議会に於ても非戦論の声漸く高きを加ふるに至つた。故に若しナポレオンにして能く露国を征服し得たりしならんには、英国も遂には屈服を免れざりしなる可く、英仏其地を換へて世界的覇権は恐らく仏国の掌裡に帰したであらう。而も莫斯科の敗戦は、遂にナポレオンをして千仞の功を一簣に欠かしめたるのみに非ず、爾来運命は歩一歩此の千古の天才と逆行し、終に一八一五年ワーテルローの敗戦となり、其畢生の競争者の冷酷なる監視の下に、大西洋上の一孤島に流謫の身となるに及び、茲に英仏最後の世界争覇戦は、英国の完全なる勝利を以て其局を結んだ。

かくて第十九世紀の英国史は、最早や覇権獲得の歴史に非ずして維持の歴史となつた。これ英国が一九一四年の大戦に至る迄、一たびも決定的戦争を行ふの要なかりし所以である。唯だ夫れ英国の政策其ものは、第十九世紀に至りても何等変更せられたるに非ず、苟くも新興国の嶄然として頭角を現はさんとするものあれば、直ちに一撃を之に加へ、或は之を脅威して其の野心を放棄せしめずんば止まなかつた。クリミア戦争並に日露戦争に於ける露西亜、ファショダ事件以後に於ける仏蘭西の如き、皆この政策の俎上に載せられたるもの。而して近代独逸の勃興が欧羅巴の勢力均衡を脅かし、英国の世界的覇権に対する競争者たるに及んで、英吉利は第四の敵手として独逸を選び、所謂包囲政策によりて先づ独逸を孤立の地位に陥らしめ、遂に英独争覇の世界戦を見るに至つたのだ。

第十九世紀に於ける英吉利の発展は実に世界史的驚異である。そは政治的組織としては世界最大の国家であり、其の領土は地球全陸土の四分の一に亙り、其の人口は全人類の三分の一を占める。僅に三百年以前、フランシス・ベー

コンが其の著作に用ゐるを恥ぢたる英吉利言葉は、一億二千万人の母国語、五億五千万人に対する公用語、殆ど全世界に通ずる商業語となつた。而して此の世界制覇は、規模最も大なる経済的根柢の上に築かれ、英吉利は第十九世紀初頭、夙く既に世界商工業の首位を占め、通商貿易の中心点として覇を海運界に称へ、是くして獲得せる無限の富を以て、欧羅巴を債務者とする債権国となり、次で『世界銀行』たるに至つた。

さり乍ら英吉利の世界制覇は、何等徹底雄渾なる理想遂行の賜でない。アイゼンハルト、ブライ、トライチケ等の独逸史家が英吉利の膨脹を以て或は之を儕倖に帰し、或は之を譎詐騙取に過ぎずとするのは、必ずしも国民的偏見に基ける罵詈とのみ言へぬ。シーリー教授、其著『英国膨脹論』に論じて曰く、『英吉利帝国の発展は、当初より一個雄大なる目的を樹立して其の遂行を図れるに非ず、唯だ一の功業より自然に他の功業を生み、歩々自然に建設せられたるものである』と。かく論じたる時、彼は英国を弁護せんとして、実は其の覇権獲得が無主義・無理想の利己心より出でたることを最も腹蔵なく白状せるものである。英国の隆興は其の地理的位置と、国民の絶倫なる功利的聰明と、利己の機会を掴むに敏捷無比なるとによれるもの。その尨大なる国家は、経済組織に於て貪婪飽くなき資本主義、政治組織に於て投票函万能の民主々義、この両者を以て経緯せる一個無慚の地獄である。而も過去に於ける彼等の成功は、彼等を駆りて天人倶に許さざる増上慢に陥らしめ、ロスチャイルドの婿にして自由党の大臣たりしローズベリは、公々然グラスゴーの大学々生に演説して、『神は吾等に賜ふに世界支配の権を以てした』と言ふに至つた。

此の暴君に対して堂々叛旗を翻せるものは、勇敢なる新興独逸であつた。されど独逸の挑戦は、蛇に対する虎の挑戦であり、其の鋭き爪は英吉利の夫れと等しく、資本的帝国主義の爪牙であつた。そは貪婪の国・増長の国たる点に於て毫厘も英吉利と択ぶところ無い。仮令独逸の社会主義者レンシュが、其著『世界革命の三個年』に於て、如何に

牽強附会して、英独戦は世界革命戦なりと力説しても、独逸の起てるは決して革命の戦士としてではない。『パンの中身は既に英吉利の為に奪はれ尽し、独逸に残されしは唯だ其の外殻のみ』とは、独逸国民の代言者トライチケの抑え難き憤懣であつた。かくて独逸の志せる所は、英吉利が蛇の邪智を以て奪へる、味よきパンの中身を、唯だ虎の暴力を以て横取りするに在つた。

独逸は英吉利の本質其者を否定したか。断じて之をしない。其の資本主義・民主主義を否定したか。断じて之をしない。彼等は英吉利を罵つた。而も彼等の悪罵は決して英吉利の本質に対して加へられたのでない。そは単なる悪口雑言に外ならなかつた。偽善者と云ふ常套の非難以外に、直ちに英吉利の肺腑を刺す鉄崑崙の一句でもあつたか。洵にゲルマンの心胸には既に『アングロ・サキソン』が深く其根を下ろして居たのだ。彼等の奉ずる国是は、英吉利と等しく資本的帝国主義であつた。その政治的理想並に経済的組織に於て、亦何等本質的相違が無かつた。従つて彼等は其敵の心を心とせる『謀叛者』たるに止まつた。英独の孰れが勝利を得るにせよ、世界は依然として欧羅巴の鉄鎖に縛られ、唯だ其の鉄鎖の持主を代へるに過ぎなかつたのだ。

三　革命に脅かさるる欧羅巴

然るに英独争覇の世界戦は、其の混沌の裡より露西亜革命を生んだ。而して露西亜革命の成就者ボルシヱヰキは、啻に露国内の戦士としてのみに非ず、同時に欧羅巴革命の戦士として起つた。彼等は少数者が国民の物質的利益を壟断する資本主義を、其の根柢に於て否定し、全民の福祉を理想とする労働主義によつて、経済生活の統一を実現せんとした。而して之と共に資本主義の政治、所謂近世民主主義の政治を敝履の如く放擲した。

世界の民衆は英米資本家の宣伝に欺かれ、民主主義は資本主義の敵なるかに空想する。而も仏蘭西の社会主義者ド

レージーが、其小著『来る可き戦』に於て、骨を刺す辛辣を以て爬羅抉剔せる如く、『資本家其者こそ民主主義の指導者、その最も忠実なる推奨者、その最も熱心なる煽動者である。否、彼等は実に民主主義の発明者だ。民主主義は一個の黒き幕であって、資本家は此幕の蔭に隠れ、此幕を以て民衆の憤怒攻撃に対する無上の鉄壁として、強奪を肆まにして居る。』

蓋し民主主義の政治的特質は、多数を絶対とすることに在る。而も政治に於ける所謂多数とは、個々の主観の器械的合算でないか。真理は『質』にして『量』でない。そはゲーテが『最も嫌忌す可き者』とせる『多数（マヨリテート）』――能力乏しき先駆者と、適応力なき無頼漢と、同化され易き弱者と、自己の為すべき所を知らず唯だ他人に追蹤する民衆と、此等のものより成る『多数（マヨリテート）』によつて定められるべくもない。そは明朗透徹なる魂のみ、能く認識し得る所のものである。加ふるに今日の民主的議会政治は国家を器械的・地理的に分割して、其の代表は毫も国家生活を有機的に代表するものでない。故に革命露西亜は、近世欧羅巴の民主政治を一蹴し去つた。而して国民の経済的生活に即して、有機的なる政治的組織を断行し、選ばれたる少数者の魂によつて新露西亜を統一指導せんとした。ボルシェヰキは是くして生める新しき力を以て戦を旧欧羅巴に挑んだ。『欧羅巴の民主主義と云ふ汚れた着物を脱棄てる時が来た』とは、レニンの冷静なる宣告であり、『資本階級の欧羅巴滅ぶか、さもなくば吾等滅ぶであらう』とは、トロツキーの熱烈なる怒号であつた。

革命の混沌に乗じ、新生露西亜を強迫してブレスト・リトフスク条約に調印せしめたる独逸は、其後十五個月にして、果して革命の一撃成功するや、革命は既に終局せるかに考へ、民衆の革命的行動を制止して、一刻も早く秩序を回復することに没頭した。故にリープクネヒトの死を一段落として、普通選挙の上に立つ共和国の出現を以て、独逸革命の幕は一先づ閉ざされた。其後匈牙利、バイエルン、及び独逸諸

市に於て、露国の夫れと同一なる共産主義革命の勃発を見るに至つたが、悉く不成功に終り、ボルシェヰズムは其の西漸の歩武を阻止された。

さり乍ら、革命の種子は全欧羅巴に、深く且汎く蒔かれて仕舞つた。資本主義に対する不満は、戦後に於て最も顕著となつた。今や西欧資本主義は、一面に於て其の道義的信用を失へると同時に、他面自ら惹起せる物質的諸問題さへも、之を解決する能力なしとせらるるに至つた。而して事玆に至れる径路は、之を辿るに困難でない。蓋し世界戦は、交戦諸国に於て、強大なる社会的本能の復活を招徠した。真に死活の戦闘に没頭せる諸国は、宛も原始民族が其の部族的生活に於けるが如く、不断に全体的危険と団体的野心とを痛感した。さしも激しかりし階級闘争も、之が為に中止の姿となり、政党の権力争奪も之が為に一時其影を潜めた。国内に於ては全市民が利害を超越せる無私の社会的奉仕を強要せられ、戦線に於ては全軍人が愛国的義務として生命其者を国家に献げさせられた。加ふるに諸国の政府は軍人並に一般国民の士気を鼓舞する為に、一切の美弁麗句を以て、戦後の多幸を其の国民に約束した。国民は国家の存立の為に前後約五年に亙り、無限の報酬を懸けても尚且平時に於ては応ずるもの無かる可き危険なる生活に堪え続けた。戦終りて後幾百万の軍人が、協同互助を根本鉄則とする戦場生活より、最小の労力を以て最大の利益を収むることを主義とする利己競争の会社工場に帰り来れる時、彼等の或者は明白に、或者は漠然と、今日の社会組織に不満を感ぜざるを得なかつた。一個の人間が単に土地・鉱山・又は器械を所有すると云ふだけの事実で、同胞の日々の生活条件を左右する時に、何の正義があり得るか。彼等は現在の社会組織を以て彼等が人間としての向上を阻止するものと感じた。かくして戦争終局と共に一時中止せられたる階級闘争は再び開始された。而して其の激烈なることは到底戦前の比でない。蓋し欧羅巴人は多年の戦争によつて殺人に慣れ流血に慣れた。之によつて養はれたる殺伐の気象は、所思を遂ぐるに暴力を以てせしめ

易い。戦後の欧羅巴人は此点から見ても、之を戦前に比して著しく危険性を帯びるものである。

かくて革命は欧羅巴を脅威しつつある。若し欧州政治家が、更に高き統一原理によつて此の争闘を処理することなく、徒らに之を抑圧せんとするならば、恐らく非常なる社会的変動を免れぬであらう。此の国家内部の争闘は、それが長かれ短かれ続く限り、必然国力を弱めずしては止まぬ。而して吾等は此の現象の裡に欧羅巴世界制覇の終末が、既に近づきつつあるを默示される。

四　世界戦と非白人昂潮

欧羅巴民族が殆ど地球全面の主人公たるに至りしは、今日の英米人が好んで主張する如く、彼等が『正義人道の選手』たりし為に非ず、寧ろ地獄に於て支配者たらんことを欲せる剛健無比の戦闘的意志を所有せるが為である。彼等は、己が生存に適する条件を具備せる温帯地方を侵略せる場合には、悉く先住民族を駆逐掃蕩した。濠洲並に北米には殆ど全く土人の跡を絶ち、白人が唯一の住民となつた。彼等の住むに堪えざる熱帯地方に於ては、土人の労力なくしては一切の事業を不可能とするが故に、肆ままに彼等を虐使する。

之を亜米利加に見よ。甘蔗・煙草・木綿の栽培を南部に開始するや、先づ西印度諸島の土人に労働を強制した。余りに激しき苦役の為に西印度土人遂に亡び去るや、黒人奴隷を阿仏利加より輸入して虐使した。亜細亜に於ては爪哇土人が和蘭の為に三百年苦役を課せられた。阿弗利加に於ては黒人を駆使して、セネガルに落花生を、コアを、スダンに木綿を栽培し、トランスヴアルに於てはカフィル人に鉱山労働を強制し、其の逃走するや印度苦力を輸入した。彼等は斯くの如き経済的掠奪に際し、唯だ商品として有利なる栽培にのみ没頭するが故に、食料品の栽培を閑却し、之が為に無残なる飢饉を諸処に現出せしめた。加ふるに彼等は、此等の諸植民地を以て永久に自国商品

の市場たらしむ可く、一切の工業的発達を阻止して居る。

而も此等移大なる領土を支配しつつある欧羅巴人は、其数に於て驚くべく寡少である。無数の有色人が宛も水牛の幼童九万、馬来群島は八万、印度は十五万の白人によつて十人の死命が制せられて居る。

に牧せらるる如く、比較にもならぬ少数者によつて苦もなく虐げられて来たのだ。さり乍ら水牛が憤怒怨恨の角を翳して其の牧童に躍りかかる日が次第に迫つて来た。而して之を激成せる最近の刺戟も亦革命欧羅巴を生める世界戦其ものに外ならぬ。

世界戦の初期、独軍破竹の勢ひに戦慄せる英仏は亜細亜、阿弗利加の諸領土に於て能ふ限りの軍隊を募集して之を戦線に立たしめた。之を募集するに当りて英仏は彼等を呼ぶに『兄弟』を以てし、文化擁護の共同の目的の為に起てと称へ、彼等の忠誠を贏得るために、英仏は彼等に告ぐるに、世界戦は実に彼等自身の為の戦なることを以てしめ、ガリポリ或はサロニキに奮戦せしめた。彼等の勇気を鼓舞し、全世界に正義と自由とを確立する為なることを以てした。

支那は幾万の苦力を仏蘭西に送つた。彼等の多くは英軍指揮の下に弾丸雨下の間に働いた。遥羅は其の軍隊を西部戦に参加せしめた。印度は莫大の戦費を寄附し、且欧羅巴・小亜細亜・埃及に於て英吉利の為に戦つた。三十万を超ゆる合衆国黒人も、忠実に英仏の為に戦つた。阿弗利加黒人も、亦戦線に立つた。阿弗利加黒人軍隊は到るところ常に第一線に立たせられた。而して勇敢に英仏の為に戦ひ、日毎に戦場に傷き、又は生命を失つた。新聞は筆を極めて彼等の勇武を称揚し、一斉に『勇敢なる同胞よ』と書き立てた。而も彼等の死屍は葬むらるることなくして戦場に棄てられた。飢えたる犬が彼等の肉を啖つたであらう。雨露が彼等の骨を枯らしたであらう。されど彼等の霊魂は何等の慰安又は祝福の言葉に送られず、淋しく天に帰らねばならなかつた。彼等は重傷を負ふて痛苦に呻吟しても病院に収

容されなかつた。若し手当を加へても、再び戦場に立ち得ざるほどの重傷者は、悶えて死ぬが儘に放置された。ただ白人兵士を収容して、尚ほ余裕ありし時にのみ軽傷者を収容し、傷癒ゆれば直ちに駆つて再び戦場に立たせた。彼等は一切の残虐を忍び、艱難に堪えて、唯だ戦後に確立せらるる可き正義を期待した。

而も如何に甚しき幻滅ぞ。英仏の所謂『正義』とは、国際聯盟の相を以て現れたのだ。国際聯盟規約第十条は実に下の如く規定して居る。曰く『聯盟国は、聯盟各国の領土保全及び現在の政治的独立を尊重し、且外部の侵略に対して之を擁護することを約す』と。そは欧米の利益を呼ぶに国際的正義の名を以てし、之によつて一面には自己の良心を欺き、他面には世界の愚者を欺きつつ、外面的制度の確立によつて世界の現状を出来得る限り持続せんがため、隷属国民より自由を恢復するの権利を奪ひ、弱小国民より強大ならんとする権利を奪ひ、新興国民より老齢国民の後継者たる権利を奪はんとする為の規定でないか。さり乍ら一切の組織又は制度は、理法の具体的実現として之を無視し、国家の新に生れ、又は大に発展し、又は終に死滅するを防がんとするが如き、非法の計画並に努力は、晩かれ早かれ水泡に帰すべくある。世界戦は『不義』と『隷従』とを擁護すべき国際聯盟を生まんが為に戦はれたのでない。

国際聯盟の成立に拘らず、英仏の標榜し宣伝したる看板と文句とは、既に隷属民族の魂に、真個の自由と正義とに対する、抑へ難き要求を鼓吹した。かくして『現状維持』を根柢とせる国際聯盟の精神を破りて、欧羅巴世界制覇に挑戦する気勢が全有色人の間に漲るに至つた。今や国際聯盟が其の保全を約せる『各国の領土』に於て、到処白人覇権に対する土人の反抗を見ざるはない。世界戦中、仏蘭西の軍人並に労働者の供給地なりし北阿弗利加に於ては、国土擁護の為に仏人と協力せる土人が、之によつて自己の価値と威厳とを自覚し最早従来の待遇に甘んじなくなつた。

北米に於ては戦時に白人移民労働者帰国の為に、俄かに合衆国の経済的生活に擡頭し来れる黒人の自覚、並に戦場より帰りて受けし冷遇に対する黒人兵士の憤激が、合して一九一九年七月の黒白人争闘となりの町々を鮮血で彩ることとなつた。而して亜細亜全土に互りて、白人支配に対する抵抗が、昂まる潮の如くなつて来た。かくて白人対非白人の抗争が、漸く具体的に民族闘争の相を取らんとするに至つた。而して此の非白人昂潮の中心の力は、取りも直さず復興亜細亜其のものである。

五　復興途上の亜細亜

土耳古を除く全亜細亜の協力によつて戦はれたる世界戦が、其の終結と共に全亜細亜に漲る不安を見る時、吾等は此の雄渾にして悲壮なる戯曲の背後に在りて、之を展開せしめつつある偉大なる力に驚魂せざるを得ぬ。世界戦後の亜細亜問題は、最早全然戦前と其の性質を異にし、欧羅巴の支配に対する亜細亜復興の努力を意味するに至つた。而して是くの如き推移は、茲に欧羅巴人に取りてこそ亜細亜不安であるけれど、吾等亜細亜人に取りては、明白に亜細亜復興の努力である。

所謂亜細亜不安は、西は埃及より、東は支那に至るまで、種々なる姿を取りて現はれて居る。而して其の不安・混沌の間に輝く一貫脈々の光は、実に復興亜細亜の精神である。従順羊の如き爪哇土人すら、熱心に黄色人種の聯合を唱へるに至つた。爪哇在住の支那人は、和蘭政府の苛酷なる圧迫と戦ひつつ、本国の支那人と密接なる関係を樹立すべく努めて居る。一九一六年、バタギアの回教首僧は、和蘭女王誕生日祝賀式に参列することを拒んだ。数々の団体が、東印度諸島民聯盟を実現すべく志士の指導の下に画策して居る。印度に於ては迅速なる自治乃至完全なる独立が国民の強大なる要求となり、ガンヂィに率ゐられて規模雄大なる排英運動が起つて居る。亜富汗斯坦及び波斯は革命

露西亜と手を握り、英国勢力の駆逐に全力を挙げて居る。小亜の諸回教民族は、国際聯盟が定めたる委任統治並に保護統治を排斥すべく武器を取つて英仏と抗争を続けて居る。土耳古帝国最後の運命を負へるムスタファ・ケマール・パシャは、アンゴラに拠つて戦勝聯合国全体を其敵とし、掲げる所の弦月旗は正に利鎌の如く冴えて居る。

此等の総ての運動は、其の表面に現はれたる所では政治的乃至経済的であるが、実に徹底して精神的である。何となれば今の亜細亜運動は、目覚めたる亜細亜の魂に其の源を発して居るからである。之を土耳古に就て見る。青年土耳古党の初めて奮起せる時、彼等の則る所は西欧民主主義に外ならなかつた。然るに世界戦中に於て、彼等が唱道せる土耳古国民主義は土耳古精神の奥深く流るるツラン魂より湧き来れるもの。故に其の求むる所は、決して西欧の主義乃至制度を輸入せんとするに在る。印度に於ても吾等は同様の事を見る。世界戦前に於ける印度国民運動は、仮令アラビンダ・ゴーシュの鼓吹せる理想が、薄伽梵歌の聖泉に汲める印度本来の哲学的思索に根ざせりとは言へ、之に感激して革命の実際に活動せる青年は、少くとも其の手段方法に於て、西欧革命運動を模倣して居た。然るに今日ガンディに率ゐらるる革命運動は、単り其の精神に於てのみならず、一切の手段に於て徹底して印度的となつた。而して回教諸国の復興運動が政治的なると同時に精神的なることは、回教其者の本質より見ても明白である。彼等の欧羅巴と戦ふは、其の政治的支配・経済的掠奪を斥けんが為のみに非ず、実に彼等自身の信仰を護らんが為である。この二重の独立、精神的独立と政治的独立、これが目覚めたる亜細亜の今求めつつある所のものである。而して此の二重の独立に対する要求が即ち亜細亜不安の原因であり、且亜細亜復興の真意義である。

一九二一年三月十六日、労農露西亜と土耳古アンゴラ政府との間に締結せられたる条約は、其の第四条に於て、真に深甚なる思想を示して居る。曰く『両締盟国は、東方諸国の国民的自由獲得の為の運動と、露西亜労働階級の新社

会制度建設の為の運動との間に、多大の接触点あるを確認し、茲に東方諸国民の自由並に独立の権利、及び其の欲する所に従つて政体を選ぶの権利を宣言す』と。然り、革命欧羅巴と復興亜細亜とは、新しき世界史を経緯する根本要素である。

自由は進んで獲取すべきものにして、与へらるべきものでない。亜細亜より其の自由を奪へる民族は、絶倫なる意力の所有者であらう。故に彼等に優る強大なる『力』を実現するに非ずば、亜細亜は竟に自己の力は他の強弱によつて定まるものでねばならぬ。されど自己の力は他の強弱によつて定まるものでない。亜細亜は革命乃至内訌は、欧羅巴の国力を弱くするであらう。亜細亜は敢然として自己金剛の意力を発揮せねばならぬ。而して『力』とは思想の発動である。故に亜細亜は其の『力』を発揮する為に、正しき思想を把持せねばならぬ。その『力』をして剛健偉大ならしむる為には、雄渾森厳なる思想を体得せねばならぬ。その敵を克服する為には、其の敵よりも勝れる高貴なる思想に奉仕せねばならぬ。世界戦の神意は、革命欧羅巴と復興亜細亜とを、其の混沌・苦悩の裡から生み落すに在つた。吾友リシャル君曽て『万国の主』をして言はしめて曰く、

『さらば東方よ起て。今は汝、往きて西方と会ふ可き時なり。而して其の往くは戦士が敵に向つて進む如くならず、新郎の新婦に赴くが如くなるべし。而も之が為には、嗚呼西方よ、汝先づ其の悪しき夢――傲慢と狂暴との夢より醒めざる可からず。嗚呼滄に汝等は新郎新婦なり。汝等相結ばば、即ち将来を生まむ』

と。新しき世界の黎明が来た。欧羅巴は夢より醒めねばならぬ。而して亜細亜は惰眠より起たねばならぬ。

第二　西蔵問題の由来及び帰趨

『英国の印度喪失は、英国の領土に、アングロ・サキソンの有らゆる血と火と鉄とを以てするも、到底破れたる両端を接合し難き、一大破綻の発生を意味する』――ホーマー・リー『アングロ・サキソンの世』

『此の不幸蒙昧なる印度の為に、自由の勝利を告ぐる時来らば、記せよ、次の瞬間に、歴史の時計は海洋の女王の死を世界に告げるであらう。而して英国は、僅かに本店を倫敦に有する一大世界銀行となり了るであらう』――スナサレフ『印度』

『英国にして一旦印度を失はば、断じて世界的帝国の地位を保つことが出来ぬ』――カーゾン卿『波斯問題』第一巻

一　中亜に於ける英露の角逐

印度が英国に取りて、極めて重大なる意義を有するは、単に無限の天産と、無数の住民とを有するが故でない。印度は実に英国資本に対する巨大なる投資場であり、大志ある英国青年に取りて、文武仕官の好舞台であり、莫大なる商業の中心であり、重要なる海上聯絡点であり、軍隊の駐屯処であり、而して最も必要なる海軍根拠地なるが故である。シェークスピアを失はんより、寧ろ印度を失はんと言へる時代は既に過去となつた。今日の英吉利は、百のシェークスピアを失ふも、寧ろ印度の保全に焦慮する。

第十九世紀前半以来、英国外交の根本政策は、印度保全の一事に存して居た。而して其の要点は、第一に如何にして英国より印度に到る海路又は陸路、能ふべくんば海陸両路の支配権を、自己の掌裡に収むべきか。第二に如何にして直接印度自身を防衛すべきかに存して居た。而して此の目的の為に、英国は、印度の接壌諸国、即ち波斯・亜富汗斯坦・西蔵の独立又は不分割を以て根本方針とし、且能ふべくんば之を英国勢力の範囲たらしめんと欲した。

然るに一方露西亜帝国は、彼得大帝以来、印度侵略並に不凍港獲得の為に、大胆にして執拗なる努力を続けて来た（註一）。露国は屢々ボスフォラス・ダーダネルス両海峡を経て、地中海に進出せんと試みた。而して其の都度、欧洲列強殊に英国の為に阻止せられしは、言ふ迄もなく印度に到る海路の安全を確保するためであつた。

地中海進出を拒まれたる露西亜は、東方遥かに太平洋を望み、西比利亜・満洲を経て浦塩斯徳に到り、終に哈爾賓より南下して黄海に達し、旅順大連の両港によつて不凍の海口を獲得したるのみならず、更に朝鮮半島をも其の勢力範囲に入れんとした。而も朝鮮一度び露国の掌裡に帰するに於ては日本は直ちに国家的存立を脅威されねばならぬ。かくて日本政府は、露国多年の宿望たる海口を獲得せる機会に於て、極東に於ける日露両国の勢力圏を制定すべく、一八九八年三月、時の駐日露国大使ローゼン男に、極めて譲歩的なる日露協商の草案を提供し、若し露国にして、日本が朝鮮に於て自由行動を執ることを承認せば、日本は、満洲及び其の海岸を挙げて、全然露国の勢力圏内に置くことを承認すべしと提議した。此の提案はローゼン公使の尽力ありしに拘らず、遂に露都の賛成を得る能はず、露国は飽迄も朝鮮の放棄を肯んじなかつた（註二）。是くの如き形勢は、遂に日露戦争を惹起し、露国は啻に朝鮮半島より逐はれたるのみならず、其の獲得せる不凍港をも失ふに至つた。

而も当時の露西亜は、決して一敗地に塗るるものでなかつた。百年の国是は、断じて彼等の放棄せざるところ、彼等は飽迄も其志を遂げずば止まざらんとした。而して彼等の採るべき途は、更に捲土重来して前両策の遂行を図るか

或は方針を変じて、（一）波斯より亜剌比亜海及び印度洋に進出するか、（二）又は亜富汗斯坦及び西蔵より、印度に向つて南下するか、如上の執れかでなければならなかつた。

後の両者は、互に最も密接なる関係を有し、国際政局の上に於て、一括して中央亜細亜問題の名を以て呼ばれ、而して問題の中心は、常に印度其者であつた。波斯・亜富汗斯坦・バルチスタン・新疆・西蔵に関する一切の問題は、悉く印度を中心として論ぜられ、此等の諸国の価値は、印度との遠近によつて定まるものとされて来た。

第十九世紀末葉に至るまで、印度を脅かす英国の外敵は、唯だ露西亜一国であつた。然るに現世紀に至り、新興独逸帝国の大胆なる東漸政策は、伯林・バグダード政策の姿に於て、新しき而して恐るべき印度の脅威となつた。英国はバグダード鉄道の将来に関して、甚しき不安を感じ、一九〇三年、遂にエレンバラー卿をして『予は波斯湾頭に他国武器庫の建設せらるゝを見んよりは、寧ろ君府が露国の手に帰せんことを欲す』と声明せしむるに至つた。

この声明、並に時を同じくして英国外相ランスダウン卿が、波斯湾は印度国境の一部なり、と公言したことは、英国が多年の君府政策をも一変せることを示すものである。英国は土耳古保全を以て、百年に亙る伝統的政策として来れるに拘らず、遂に其の方針を一変して君府を露国に委ね、之によつて『印度並に英国海上権』を脅威せんとする独逸の東進に当らしめんとするに至つたのだ。而して是くの如き国際政局が、世界戦の根本原因をなせることは言ふ迄もない。錯綜せる近因があるにもせよ、世界戦究極の因縁は、実に亜細亜への路、惹いて亜細亜其者を奪ひ取らんとせる欧羅巴列強の飽くなき侵略の慾である。

（註一）露西亜の南下政策は、彼得大帝の遺詔に基くとせられて居る。此の名高き遺詔は、果して大帝の手に成れるや否やを疑問とするが、兎に角その中には下の如き一節がある。曰く『銘記せよ、印度商業は世界商業にして、能く之を統制する者は、即ち欧羅巴の覇者たり得ることを。故に一切の機会を逸せず戦を波斯に挑み、其の没落を促進し、波斯湾に進出せよ

而してシリアを経て古代近東貿易の復興に努力せよ。』

（註一）First G. Trubetzkoi: Russland als Grossmacht 第四九頁以下に、之に関する日露交渉の簡潔明瞭なる叙述がある。

二　英国と西蔵との関係

かくて中央亜細亜問題は、世界政策の根本問題の一である。而して西蔵問題は、中央亜細亜問題の一部たること、前述の如くである。而も吾等は茲に暫く西蔵問題のみを分離し、其の由来と真相とを略叙し、其の亜細亜の将来に対する意義を闡明すると同時に、中央亜細亜問題全般の面目をも彷彿せしめんと欲するものである。

もと英国は、西北境より来る印度の脅威に対しては、常に非常なる苦心を以て、之が対応に努めて来た。蓋し有史以来、印度侵略の企ては、其の二十一回は、多かれ少かれ目的を達して居る（註一）。而も其等の印度侵入軍は、悉く印度西北境を越えて来襲したのだ。従つて英国が心を此の方面に注ぐのは極めて当然のことである。然るに東北西蔵方面に至りては、峨々たるヒマラヤの天険、自然城壁をなすが故に、英国はネパール・ブータン両国を保護国としシキムを属領とすることによつて、東北境より来る危険を防ぎ得たと考へて居た。加ふるに日清戦争によつて其の本体が暴露せらるゝまで、世界は眠れる獅子として支那を恐れて居た。従つて英国は、一面には西蔵に政治的発展を試みて支那と事を構ふるを恐れ、他面には支那の力能く西蔵よりする露国の脅威を防ぐに足ると信じ、殆ど心を東北境に労しなかつた。

たゞ英吉利は、夙くに既にヘスティングスの時から西蔵と通商関係を開きたいと希望して居た。されど西蔵は、堅く鎖国主義を採り来りしが故に、其の目的は遂げられなかつた。既にして一八七五年、雲南に於けるマーガリー殺害事件に際し（註二）、英国は其の賠償条件の一として、英人の入蔵許可を要求し、支那政府これを承認して、翌年九月に

調印せられたる所謂芝罘協約に補遺として此事を明記した。其後一八八四年に至り、印度政府は芝罘協約の明文に基き、通商の目的を以てするコルマン・マコーレー一行の入蔵許可を支那に求めた。支那は、英国勢力の西蔵に及ぶを欲せざりしが故に、西蔵人の外人排斥を理由とし、一行の安全を保し難しとの口実の下に、一行の入蔵を拒まんとし、商議年に亙りて決しなかつた。されどマコーレー一行は、鋪迄入蔵を断行すべく、ダージリンに至つて一切の準備をなし、将に旅程に就かんとせし時に当り、英国の上緬甸台領より、英支両国に重大なる外交紛議を生じた。蓋し清朝の初、乾隆帝の時、緬甸王孟雲は、使を北京に派し、一七九〇年清朝より緬甸王に封ぜられ、十年一貢を命ぜられて此時に及んだのである。故に一八八六年、英国の緬甸を併合するや、支那は之に対して抗議を提起し、緬甸は支那の藩属なることを主張した。是に於て英支両国の間に談判開始せられ、其の結果支那は遂に『英国が緬甸に対し最高主権を有すること』を承認したが、同時に『光緒二年の芝罘条約により英国使節の西蔵に入るを許可せし件は、目下清国内障碍多きを以て一時中止すべし』と協定した。之によつてマコーレー一行の入蔵は中止となつた。西蔵人は一行のダージリンより引上げるのを見て、英吉利竟に為すなしと推測した。かくて翌一八八七年、一隊の西蔵兵、シキムに侵入し、ダージリンに近きスィンタオに城塞を築かんとしたが、之によつて復た英支両国の間に西蔵に関する紛議を生じ、支那政府は、一八九〇年駐蔵大臣升泰をカルカッタに派し、所謂英蔵条約に於て、東はブータンより、西はネパールに至る間の分水嶺を以て、英蔵の国境となし、支那は正式にシキムの英国保護領たることを承認した。而して一八九三年、清国政府は英国公使の要求に応じ、若干の改訂を加へて、更めて蔵印条約を締結し、西蔵の亜東 Yatung を開いて商市とし、英国領事館の設置を許した。されど西蔵の英人に対する反感は、此の事件によつて愈々高められ、益々鎖国の門戸を堅くするに至つた為に、英国は該条約によつて殆ど何者をも得る所なかつた。

（註一）Captain Gervais Lyons: Afghanistan 第二章 Fast Invasions of India に、過去に於ける印度侵入に関して、明瞭簡潔なる説明がある。

（註二）英国は、緬甸パモより雲南方面への通路を発見するため、一八七四年ブラウン大佐の下に一遠征隊を派することとなった。一行はパモに於て、支那人六名を伴ひて上海より来れる漢口領事書記生マーガリーと合し、緬甸兵百五十人を護衛として上海より来れる漢口領事書記生マーガリーと合し、緬甸兵百五十人を護衛とした。一八七五年二月六日、パモを発して雲南に向ひ、二月十八日国境を超えて雲南に入った。マーガリーは、上海より伴へる支那人と共に先発したのであるが、二月二十一日、土民の為に殺害の厄に遭った。而してブラウン大佐の本隊も、土民の激しき反抗に会ひ、同月二十六日、パモに向って帰途に就かねばならぬこととなった。

三　英露の西蔵争奪並に妥協

若し西蔵が、一切の外人に対して等しく門戸を閉ぢて居たならば英吉利も強て之を開かうとしなかつたであらう。然るに一九〇〇年に至り、達頼喇嘛の使節が、親翰と贈物とを携えて、露国皇帝を訪問したとの飛報は、英吉利政府を驚愕せしめた。蓋し露国の南下政策は、ローリンソンが慨嘆せる如く、『夜が昼に続くやうに』続行せられ、終に其指を西蔵にも染むるに至つたのだ。

もと露国は、夙くより蒙古及新疆を経路するに苦心して居た。而して此等喇嘛教国の懐柔操縦を容易ならしむる為には、西蔵の達頼喇嘛と結托するを以て最も得策とするのみならず、西蔵の奄有は、露国百年の宿願たる印度侵入にも、また好個の足場を与へるものである。かくて露西亜は、先づ露領内の蒙古族に属して喇嘛教を奉ずるブリヤート人を利用して、達頼喇嘛に接近するの策を講じた。ブリヤート人たる露人ドルヂェフが、此の役割を見事に果した。彼は能く達頼喇嘛の心を攬り、遂に参謀長となり、姓名を西蔵風に喀汪堪布（ガワンカンプ）と改め、達頼喇嘛の寵遇を一身に集め、露に使節を露都に派遣せしめたるのみならず、達頼喇嘛其の人の露

都行をさへ勧めつゝあつたのだ。

露国の是くの如き態度は、印度の東北境、また決して意を安んじ難きを英国に知らしめ、俄然として其の不安の念を昂めしめた。かくて英国は、復た清国政府と交渉を開始し、英蔵国境問題及び通商問題に関し、行ふべきことを提議した。支那は此の提議に対し、一九〇三年、委員を国境に派し実地に就て協定すべしと応へ、翌一九〇三年五月、印度政府は英国委員をして、西蔵国内に在りて、最も印度国境に近き一邑カムペ・ジョンに於て、支那及び西蔵委員と会商せしむべきことを通告した。

ヤングハズバンド大佐が、英国委員に任命された。彼は二百のシク兵を従へ、此年七月カムペ・ジョンに到着したが、支那及び西蔵委員は、年暮れんとして尚ほ其姿を見せなかつた。時恰も、日露の風雲急にして、露国は西蔵をみるの遑なかりしに乗じ、英国は此の機会に於て、権力を西蔵に確立し、露国勢力を根本的に顛覆するに決した。かくて二千の軍隊が、カムペ・ジョンに派遣された。ヤングハズバンドは、一九〇四年一月、之を率ゐてタン峠の嶮を越え、四月中旬江孜 Gyangtse に達した。西蔵人は其の前進を阻止すべく、三度英軍を襲ふたが、悉く撃退された。六月一日に至りヤングハズバンドは、書を達頼喇嘛に送り、六月二十五日以前に回答に接せざる時は、英軍をラサに進むべきを告げた。書面は開封せずして返附された。かくてヤングハズバンドは、正に到達せる援軍を合せ、三千の兵を率ゐて八月三日ラサに入つた。此時英軍の為に殺されたる西蔵人は、実に千五百を算し、而も英軍の死者は僅かに三十七名であつた。

達頼喇嘛は噶爾丹寺長に政府を托して青海に亡げた。英国は西蔵を強制して此年九月七日下の要項を含む条約に調印させた。一、西蔵は江孜 Gyangtse 噶大克 Gartok 亜東 Yatung を開いて通商地とし、英蔵両国商民の貿易を承認すること。二、印度国境より江孜及び噶大克に到る通路を阻碍する武備を撤退すること。三、西蔵は、予め英国政

府の承諾を経るに非ずば、西蔵の土地を外国に譲与・租借・売却・抵当、其他如何なる名義を以てするも、其の権利を外国に許与せず、又鉄道・鉱山其他の利権を外国に許与せず、又外国の西蔵に対する干渉に応ぜず、且外人の入国を許さゞること。

是くの如き条約は、明白に支那の主権を無視し、西蔵を以て全然英国の保護領たらしむるものなるが故に、清国政府は駐蔵大臣に打電して、之に調印することを禁じ、且つ唐紹儀を全権委員に任じ、一九〇五年一月、カルカッタに赴きて英国全権ヒルヤーと交渉商議せしめたが、英国は頑として譲歩を肯んじなかつた為に、唐紹儀は何等得る所なく張蔭棠をカルカッタに残して、九月北京に帰つた。然るに此年英国内閣の更送あり、新内閣は駐支英国公使サトーに訓令し、北京を会議地として、西蔵条約に就て商議すべきことを、清国政府に提議せしめた。支那は之に応じて唐紹儀を談判の局に当らしめ、一九〇六年四月、下の要項を含む英蔵追加条約の調印を見るに至つた。一、英国は西蔵の領土を占有せず、且西蔵の一切の政治に干渉せざること。二、清国は他の外国をして、西蔵の領土、及び一切の政治に干渉せしめざること。三、英国は江孜・噶大克・亜東の三通商場より電線を架設して、印度境内に通信するを得ること。

一方英国は、露西亜が日露戦争の敗北に疲弊せる機会を捉へ、一九〇七年八月、名高き英露協約を締結し、波斯・阿富汗斯坦・及び西蔵に関する協定を遂げ、多年に亘る中亜に於ける英露の角逐も玆に暫く中止せらるゝに至つた。該協約の西蔵に関する部分は、下の如くである。一、英露両国は、西蔵の領土保全を尊重し、其の内政に干渉せざること。二、両国は互にラサに代表者を派せざること。三、清国の西蔵に対する宗主権を尊重し、清国政府を経由するに非ざれば西蔵と交渉せざること。四、両国とも西蔵に於て利権を求めざること。五、現品と正金とを問はず、西蔵の収入の如何なる部分をも、之を両国又は両国臣民に対して抵当となし、又は之に供托するを得ざること。

四　西蔵問題の意義

西蔵は清朝の初、支那の版図に帰したるもの。宗主国としての実権が、如何なる程度まで行はれて居たかは別問題として、兎にも角にも、名義の上に於て明白に支那の外藩である。然るに英露両国が、全く支那を無視して、肆まゝに対蔵政策を行ひ、西蔵に関して条約を締結したることは、清国に取りて決して快いことで無い。此等の事情は、支那をして心を西蔵問題に注がしめ、先づ趙爾豊を駐蔵大臣に任じ、屯田制を実行し、新軍を教練せしめ、之を以て完全なる支那の一省たらしむべく努め初めた。然るに先にヤングハズバンド侵入に際し、青海に亡げたる達頼喇嘛は、青海より蒙古に至り、一九〇八年冬、北京より再びラサに帰つたが、清国の政策を喜ばず、密かに離叛を企謀した。時に趙爾豊は四川総督に改任せられ、聯予代つて駐蔵大臣となつて居たが、達頼喇嘛の野心を北京政府に打電したので、政府は趙爾豊に命じて西蔵に入征せしめた。達頼喇嘛は、四川軍ラサに到ると聴き、一九〇九年一月、ダージリンに奔つたので、清国政府は達頼喇嘛の名号を褫奪し、班禅喇嘛をして教務を代理せしむることゝした。

宛も此の時に当り、武漢に倒満興漢の挙兵あり、三百年の清朝、忽ちにして倒れ、玆に中華民国の出現を見た。この革命の混沌に乗じ、予てより清朝に隷属するを快しとせざりし外蒙古は、露国の後援の下に独立を宣言し、西蔵も亦之に次で独立運動を起し、支那遠征軍と戦つて、屢々之を破つた。初め達頼喇嘛のラサよりダージリンに奔るや、印度政府は之をカルカッタに招じ、歓待至らざる無かつた。今や達頼喇嘛は、故国の風雲動けるを見て、英人援助の下に兵を募り、銃器弾薬を携へて印度を発し、西蔵独立軍に迎へられて、堂々ラサに入り、蒙古と同じく独立を宣言した。

中華民国臨時大総統袁世凱は、一九一二年四月、西蔵を以て支那二十二行省と一般なることを布告し、断じて西蔵の独立を許さずと宣言し、征西軍を派遣した。英国は、西蔵に対する支那の武断政策が、自国に取りて不利を来たすべきを知り、革命後の混沌に乗じて西蔵問題を有利に解決すべく、此年八月、駐支公使ジョルダンをして、下の如き不法なる提議をなさしめた。一、英国は支那の西蔵内政に干渉するを許さず。二、英国は支那官吏が西蔵に於て行政権を行使すること、並に西蔵を一省として取扱ふことに反対す。三、英国は支那が其の軍隊を西蔵に駐屯せしむることを欲せず。四、若し支那にして叙上の提議を承認せずば、中華民国を承認せず。而して支那は、之に対して何等答ふる所なかつたが、再三ジョルダンの督促を受くるに及び、此年十二月二十三日附の通牒を以て、明白に此の提議を拒絶した。

一九〇七年の英露協約によれば、英露両国は、孰れも単独にて支那と西蔵問題の解決に従ひ得ざる事情となつて居たに拘らず、革命成り、清朝倒れて、露国後援の下に外蒙古独立し、露蒙の関係確立せらるゝに及び、英露の間に默契成り、英国は外蒙に於ける露国の自由行動を承認する代りに、露国も亦、英吉利の西蔵問題単独解決を默認することとなり、一九一三年一月、露国は外蒙古の活仏を、英国は西蔵の達頼喇嘛を慫慂し、双方の代表者を庫倫に会し、秘密会議を開きて蒙蔵協約を議せしめ、此月十一日、九箇条より成る協約成立し、其の調印を見るに至つた。その要領は、蒙蔵両国は、互に独立を承認し、提携して喇嘛教の弘布に尽力し、且通商関係を開始すべしと云ふに在つた。

是くの如き形勢は、支那をして狼狽せしめ且不安を感ぜしめた。かくて支那政府は、英国公使に対し『昨年十二月二十三日附支那政府の回答に対する英国政府の意思を、至急支那政府に通告し、支那政府をして、西蔵問題を熟考し速に円満なる解決を見るを得せしめんことを希望す』と述べ、間接に英支蔵会議の開催を促し、尋で五月支那政府自ら進んで英国公使に対し、西蔵問題解決のため、倫敦に於て英支蔵会議を開かんことを提議した。英国公使は同月二十六日、支那の提議に対し、西蔵人の意嚮を参酌して、印度国境ダージリンに会議を開かんことを要求し、支那政府

は之に同意した。然るに宛も第二革命の勃発するありて、為に会期を延期し、十月十三日、漸く第一回会議を印度政庁所在地デリーに移したが、両者の意見に甚だしき懸隔ありて、交渉更に進捗せずムラに開き、次で会議地を印度政庁所在地デリーに移したが、両者の意見に甚だしき懸隔ありて、交渉更に進捗せず一九一四年七月六日に至り、突如として交渉不調に終り、各代表者は遂に袂を別ちて去るに至つた。

此事ありて一個月、端なく世界戦の勃発を見、英国は死活の戦ひに没頭することとなり、西蔵問題は未解決のまゝ放置されて居た。既にして世界戦は終局を告げ、万国の視聴悉く巴里平和会議に向つて注がれ、また他を顧る遑なかりし時、大英帝国は独り綽々たる余裕を示し、一九一九年五月二十一日、ジョルダン公使をして、突如支那政府に向つて、西蔵問題の解決を提議せしめた。而して英国の西蔵に関して支那に要求する所は、実に左の二大要項である。

一、西蔵に完全なる自治を与へ、英支両国は、単に若干の護衛兵を有する辨理長官を派遣すること。

二、西蔵の領土は、青海を保護領とし、甘粛省の西寧・粛州地方約千六百平方里、新疆省の和闐地方約八百平方里打箭炉・巴塘、裏塘を含む四川省の辺境約一千平方里を支那より割き、以て西蔵領土の境界とすること。

若し此の要求に従へば、支那は啻に西蔵に対する宗主権を喪失するのみならず、新疆に於て大戈壁の南境一帯、甘粛に挟まる凸部一帯、四川に於て蔵・雲・川の三角境界線より、北方浜山々脈に至る辺境を割取せられ、蒙古を除ける支那外藩の半ばを喪はねばならぬ。加ふるに其の含まれたる境域は、悉く支那本部と辺境各地との交通の衝路に当り、支那本土保全の上に、極めて重大なる意義を有するものである。

徐総統は、英国の提議に対し、断じて是くの如き要求を承認する能はずとなし、或は西蔵内部の状況調査に名を藉り、或は支那の内外多事を口実として、開議の遷延を図つた。而して支那政府は、西蔵問題の解決に就て、『西蔵の自治を承認するも、其の領土は青海を含まず、現在支那兵の駐屯せる地方を除き、新疆・青海・西蔵の三境界点より南垂し、英領印度凸点に至る線を以て、其の国境とすべし』と云ふ譲歩的対案を有して居るが、而も之を以てしてさ

へ、英国の要求との間に、尚甚しき懸隔がある。

西蔵問題に於て、支那の最も憂慮とすべきは、曾に之によつて大なる領域を失ふのみならず、とする英国勢力の東漸に在る。支那本土に於ける英国の勢力は、既に揚子江流域に横溢して居る。西蔵より支那本土に通ずるは四川の辺境打箭炉を経て、揚子江を西に溯る英国勢力と、西蔵より東に下る英国勢力とは、茲に支那南北の間に合流介在して、一大劃線を描くに至るべく、而して是くの如くんば支那の前途、また知る可きのみと言はねばならぬ。而も支那の前途は、直ちに日本の前途である。此年の帝国議会に於て、時の首相原敬が、此の問題に関する一代議士の質問に対し、『予は西蔵問題の提議が事実なるや否やを確知せぬ。仮令事実とするも、吾国とは関係なき問題である』と答へたる驚くべき言葉は、予の今日に至るまで忘れ得ざる所である。

先年英国が支那革命の混乱に乗じ、初めて西蔵問題を提議せる時、上海民立報は、『狡英は暴露よりも甚だし』と憤慨し、国民の覚醒を促した。然るに更に此の問題が提出せられたる当時、支那の人心は唯だ山東回権に熱中し、幾層倍も重大なる意義を有する西蔵問題に対し、挙国殆ど痛痒を感ぜぬ如きものがあつた。而も日を経るに従ひ、支那の志ある者、漸く問題の重大に気付き、一方親米熱の昂騰に比例して、反英の気次第に濃くならんとした。英国は支那を駆りて、その最も恐るべき敵米国に走らしむるの不利を知り、屢々西蔵問題の解決を要求しつゝも、強迫威嚇の態度を以て支那に臨むことを避けた。而して支那は常に言を左右にして問題の解決を避け、年を経る今日に及んで未だ其の結着を見るに至らない。

五　戦後亜細亜と英国

世界戦前に於て、英国の中央亜細亜問題に対する態度は、根本に於て消極的であつた。その政策は、既に述べたる

如く、如何にして印度を外患より保全するかに在つた。英国は、世界の満腹国として、唯だ其の有てるものを失はさらんと努めて来たのだ。而も『慾に際限がない』のは、昔も今も変りなき事実である。世界戦終結当時に於ける英吉利は、少くも外観だけでは、その亜細亜・阿弗利加に於ける地位が、比類なく安固となれる如く思はれた。かくて有てるが上に有たんとする心抑え難く、中亜に於ける其の政策は、俄然として侵略的・掠奪的・積極的となつて来た。西蔵に関して支那に要求せる提議も、亦其の一例証に外ならぬ（註一）。海上の女王を以て甘んじたりし英吉利は、更に陸上の君主たらんとし、セシル・ローズの阿弗利加の夢、カーゾン卿の亜細亜の夢、此の二つの偉大なる夢が、将に実現せらるべく見えた。

印度百年の宿敵露西亜は、世界戦によつて、土崩瓦壊した。新興強大の第二の敵独逸は、悲惨を極むる敗亡者となつた。『ベルリン・バグダード』、さては『ハムブルヒ・ヘラート』と云ふやうな野心も、返らぬ夢となり果てた。英吉利は、印度に就て心を安んじた。仮令内憂はあるにしても、少くも印度の外患だけは取除かれたと思つた。

然るに時日の経過は、英国の表面の成功の裡に、恐るべき破綻潜み、英国の荘厳に見ゆる計画が、甚だしき誤算の上に立てられたことを、次第に明白ならしめた。第一に、革命露西亜が、旧露よりも恐るべき印度の『外患』として現はれた。そは、東洋諸民族の解放を標榜し、中亜諸邦を味方として、印度を縛る英吉利の鉄鎖を寸断すべく、有らゆる画策を講じ初めた。かくて英国の安心は束の間だけとなり、形勢は再び中亜を挟んでの英露対峙となつた。第二には、間接又は直接英国支配の下に在りし、亜細亜諸民族が、猛然として自由独立の精神を作興して来た。グラッドストン以来の『厳粛』なる声明を無視して保護国とせる埃及も、その激烈なる国民運動によつて、また独立を承認するの止むなきに至り、埃及に於ける英国の地位は、戦前よりも却つて安定を欠くに至つた。戦中に一旦地歩を占めたるメソポタミアも、土民の不断の反抗の為に、其の得たる大部分を放棄せねばならなくなつた。波斯を保護領とせる一

九一九年の新英波条約も、覚醒せる波斯国民の奮起によつて、遂に一片の白紙となり、徒らに波斯人の排英精神を烈しくするに終つた。戦前には、外国との交渉は総て英国を経べかりし亜富汗斯坦も、今や全然其の独立自由を承認せねばならなくなつた。而して英吉利の最後の宝玉印度は、国を挙げて大規模の反英運動を開始し、真個空前の『内憂』を醸しつゝある。かくの如く観来る時、吾等は大英植民帝国の現状並に其の将来の運命に対し寧ろ凄惨の気に打たるゝものである。世界戦は、疑ふべくもなく英国をして発展の頂に登らしめた。巴里平和会議に於て、ロイド・ジョージが、愚なる政治学者ウィルソンを翻弄しつゝありし時が、恐らく其の絶巓に立てる時であつた。

而も向上の尽くる処は向下の初まる処、向下の窮まる処は向上の初まる処。此時よりして英国は嶮峻なる急坂を下り、此時よりして亜細亜は向上の路を登り初めたのだ。かくて中央亜細亜問題、乃至全亜細亜問題が、明白に其の意義を一変して、亜細亜復興の努力を意味するに至つた。多年未解決の儘に残りし西蔵問題も、やがて真個の『解決』を与へられるであらう。曽て米国の名高き記者ギボンス、その西蔵に関する一論文を結ぶに下の一句を以てした。曰く『若し支那共和国が、新世紀の精神を体得せる一個強大なる組織をその内訌の間から生み出すならば、西蔵は印度を護る盾とはならずに、全亜細亜運動に於ける、日支印三国の接触点となるかも知れぬ』と（註二）。吾等は、ギボンスをして、其の先見の明を誇らしむるの日が、速かに来らんことを待つ。

（註一）仏蘭西の一新聞は、戦後に於ける英国の東方政策を非難して、下の如く言つた。曰く『英国は、勢力をメソポタミアに張り、アラビアにヒジヤズ王国を製造して、危険なる全アラビア主義の野心を煽り、パレスチナを掌裡に収めんとし、而して一九一六年の協約によつて仏国に約束せるシリアをさへも奪はんとする』と（一九一九年三月十三日ラ・リベルテ）。

（註二）H. A. Gibbons: New Map of Asia, p. 37.

第三　英仏俎上より脱出せんとする白象王国

一　暹羅王子の論文

暹羅が世界戦に参加して幾くもなかりし頃のこと、英国十年の留学を終へて、更に仏国巴里の大学に政治学を修つゝありし暹羅王国の一王子が、大学に提出すべき卒業論文を携へて、当時巴里に駐在せる米国記者H・A・ギボンスを訪ひ、該論文の一読を求めた。ギボンスは、其著『亜細亜の新地図』に、下の一節を王子の論文から抜萃して居る——

『吾等は、何ものにも勝りて、国家の独立を尊重し、之が為には、何ものをも犠牲にしても厭はぬ。如何なることがあらうと、吾等は外国の政治的支配又は勢力の下に立つを欲せぬ。暹羅人は、見事なる国民意識を有し、且国家を組織するに足る能力を具へて居る。若し諸々の国家が、互に他の独立を尊重することを欲せざるに於ては、強固にして永続すべき基礎の上に、国際法の発達を望むことが出来ぬ。然るに現実世界の状態は、若干の強国が弱小諸国に対して支配権を確立し、自国の必要に応じて、肆ゝに制定せる法律を、弱小諸国に強いんとしつゝある』

『その口実は、文化の相違と云ふことに在る。而も諸々の文化の優劣を、科学的に決定するは不可能のことに属する。故に、実際採用せられ実行せらるゝ決定の標準は、常に力——一切の智的並に道徳的要素を度外視せる強力である。この過誤は、大国の常に敢てする所。長大なる者が倭小者と会する時、体躯優れるが故に心性も亦優れりと合点する如く、量に於て大なる国家は、質に於ても優れりと自負するを常とする』（註一）。

ギボンスは論文を一読したる後、引かるゝ所の『大国』とは独逸に就て多く知る所なし。卿若し暹羅参戦の理由を知らんと欲せば、乞ふ過去二十年の暹羅史を研究せよ』と答へたと言ふ。然り、吾等現代暹羅史を研究する時、王子の所謂『大国』が果して孰れの国なるかは自ら明々白々となる。

印度と支那との間に介在し、後印度の名を以て呼ばるゝ東南亜細亜の一大半島は、往古より不思議にも外来民族争闘の舞台となり続けて来た。モンゴル人は幾度びか北方より侵入した。ドラギダ人は印度より来りて植民した。多数の仏教徒が錫蘭島より来りて伝道と植民とを行つた。南洋の諸海島からは、海賊が屢々侵略を試みた。民族と民族、部族と部族との間に不断の争闘が行はれた。其の割拠混沌の裡から、生存競争の優者となつて兎にも角にも国民的発達を遂げたるものに八民族ある。曰くモオン人、甘蒲塞人、安南人、緬甸人、シャアン人、ラオ人、暹羅人、及び馬来人。彼等は数世紀に亙りて、互に覇権を争ひ、互に勢力の消長あつた。

然るに第十六世紀に至り、更に新しき要素が、後印度に於ける争闘の舞台に加はつて来た。葡萄牙・和蘭・仏蘭西・英吉利の西欧民族である。彼等は各々後印度の主人たるべく、在来の諸国と争ふと共に彼等同志の間に相争ひ、之が為に葡萄牙と和蘭とは、争覇の舞台より追出された。而して英仏両国が、東西より此の半島を蚕食し初めた。

半島に国を成せる東洋諸民族は、従来唯だ同一武器を以て、同一文化の所有者と内輪の喧嘩を続けて来たのだ。然るに彼等は今や全然異なれる文化と、遥かに優秀なる武器とを所有せる、新来民族と戦はねばならぬことゝなつた。彼等は此の戦闘に於て、竟に新来民族の敵でなかつた。或は姦計に陥り、或は武力に敗れて、半島の中部に位せる暹羅のみが、腹背に敵を受けつゝ、辛くも彼等の劫掠を免れて、其の独立を保つて来た。さり乍ら此の独立は、東西より侵略の歩みを続け来りし二個の貪婪なる強国が、暫く緩衝地帯の

存在を必要とせるが故に、辛うじて許されたる独立に外ならぬ。かくて遥羅の領土は、一九〇四年の英仏協約により最小限度に狭められ、唯だ英仏両国が互に他が盤谷の宗権者たるを欲せざりしのみの理由を以て、独立国として存置せるに止まる。此の間に於ける英仏両国の対遥政策は、実に亜細亜に於ける欧羅巴植民史の縮図である。両国政治家・外交官・乃至軍人の遥羅に対して採れる行動は、正に『一切の智的並に道義的要素を度外視せる強力』のそれであつた。吾等は先づ仏蘭西が此国に加へたる横暴から点検して行く。

（註一）H. A. Gibbons: The New Map of Asia, pp. 75—76.

二　仏蘭西の遥羅侵略

仏蘭西が、後年度に野心を抱き初めたのは、決して一朝一夕のことでない。既にルイ十四世の時に於て、一希臘人ファウルコンを利用して仏国勢力の扶植を図つた。而も仏蘭西が半島の一角、交趾支那及び甘蒲塞に、初めて確乎たる植民的基礎を築いたのは、実にナポレオン三世の時である。而して一八七〇年、普仏戦争によつて一敗地に塗れし仏蘭西は、欧羅巴に於て失へるものを亜細亜に於て回復すべく、既に築ける基礎の上に、一個の植民帝国を東南亜細亜半島に建設せんと決心した。かくて一八八四年、支那海及び東京湾に沿へる安南・東京を保護国とし、次で其の利欲の眼を挙げて、当時遥羅領土たりし媚江流域の森林と鉱山とを望んだ。而して一八八八年、仏国政府は媚江東岸の地域は、元安南及び甘蒲塞の所領なるが故に、両国既に仏国保護の下に置かれたる以上、該地域も当然仏領たらざる可からずと主張し、其の割譲を遥羅に迫つた。遥羅は此の無法なる要求に対し、該地域は暫く之を中立地帯と看做し仏遥両国の境界は実地測量の上、之を劃定せんことを以てした。仏蘭西は此の提議に応じた。されど中立地帯侵犯を名目として事を遥羅と構へ、紛糾甚だしきを加へつゝありし時、一八九一年五月、ド・ラネサンの仏領印度総督任命

を見た。彼は一八六六年既に其著『仏蘭西の植民的発展』に於て、暹羅侵略を力説せる武断的帝国主義者であつた。彼を後印度に遣はしたる仏国政府の意思は明瞭である。仏蘭西は暴力を以て其の非望を遂ぐべく、一八九三年、事件を仲裁々判に托せんとせし暹羅の提議を斥け、七月初旬、仏国東洋艦隊を以て媚南河口を封鎖し、七月二十日、最後通牒を送りて媚江東岸の割譲、三百万法の賠償を要求し、暹羅の之に応ぜざるや直ちに盤谷を封鎖し、遂に暹羅をして無条件に其の提議に従はしめた。

此年十月十三日に調印を了せる仏暹条約によつて、仏国は完全に媚江東岸を掌裡に収めたる外同条約第八条に於て仏国は「其の保護民 Ressortissants の利益を保護するため、領事館の駐在を必要と認むる箇処」には、何処にでも領事館を設置する権利を得た。而も茲に保護——ルソルティサンと云ふは特殊の法律語である。仏蘭西は其の征服せる安南・甘蒲寨・東京人のみならず、仏国保護の下に立ちて特殊の利益を享有せんがため、新たに仏国領事館に登録せる支那人をも、其中に含ませようとした。治外法権の行はれし暹羅に於て、是くの如き権利を施行されることは、国家に取りて非常なる危険である。仏蘭西は其の植民地と暹羅領との接壌地方に、肆ままに領事館を設け、其の所謂保護民を爪牙として、飽くなき利欲を充たさんとしたのだ。かくて一八九三年より一八九六年に至る三ケ年間に、仏国保護の下に立つ保護民は、実に二百人より一躍して三万人の多きに達した。

暹羅は欧羅巴人以外の諸国民を、保護民として遇する仏国の行動に対して抗議した。その理由とする所は極めて正当である。蓋し治外法権は、法律・風俗・習慣・信仰等の相違が著しいとの理由によつて、欧米諸国が東洋諸国から得た権利であつて、従つて仏蘭西が、安南人・甘蒲寨人・東京人・支那人等の東洋民族、換言すれば風俗習慣乃至信仰に於て、何等根本的相違又は扞格を有せざる民族をも、欧米人と同じく治外法権の下に置くと云ふことは、何等の理由なき、従つて明白なる非道である。而も彼等の関心事は、固より正義に非ず唯だ利欲である。かくて仏蘭西は正当

なる暹羅の要求並に抗議に対して、一顧眄だも与へなかつた。而して暹羅は正義を徹底せしむる力を欠いて居た。

三　暹羅蚕食の為の英仏提携

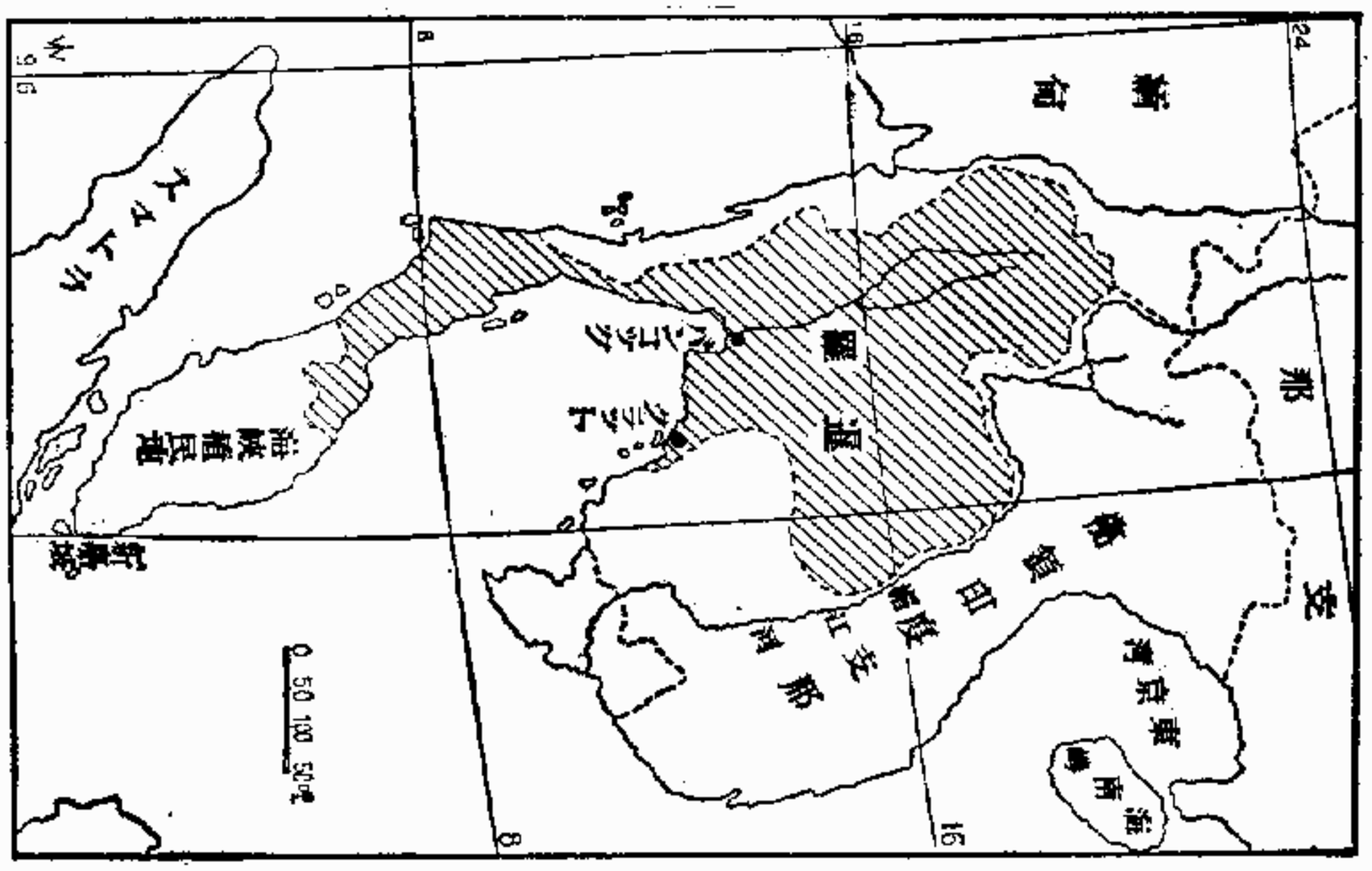
暹羅は総ての弱小国の常套手段たる以夷制夷の策に出でた。仏蘭西の為に非道を加へられた暹羅は、之に当るに英吉利の貪婪を以てせんとしたのだ。

蓋し英吉利は、暹羅に於ける仏蘭西勢力の西漸に対し、夙に神経を鋭敏ならしめて居た。故に暹羅からの提議は、彼等の待構へて居たところであつた。かくて一八九九年には英暹条約の締結を見、英国は其の治外法権に制限を加へて、一面好意を暹羅に示し、他面仏蘭西の権力濫用を制するの策に出でた。而して当時の仏国外相デルカッセは、英仏協商して独逸に当るを以て、仏国外交の根本方針として居たので、一九〇二年、仏蘭西の暹羅に於ける治外法権改訂案を発表し、以て英吉利の意を迎へようとしたが、仏国の輿論並に議会が甚しく反対した為に、遂に行はれずして止んだ。

是より先仏蘭西は、一八九三年の仏暹条約を履行せざることに対し、屢々暹羅より抗議を受けて居た。暹羅は最も条約に忠実なりしに拘らず、仏蘭西は自己に不利なる一切の条項を無視したのである。一九〇一年に仏蘭西は、該条約に従つてチェンタブン港より撤退すべきこと、嫺江沿岸の中立地帯及びアンコル・バッタンバン地方の司法権を引渡すことを暹羅側から要求された。而も仏蘭西は、曾に此の要求に応ぜざりしのみならず、更に其の司法権を嫺江西岸に拡張し、嫺江沿岸一帯の商権を独占することを求め、且暹羅政府に仏人顧問の採用を強要するに至つた。

この交渉の結果は、一九〇二年十月七日附巴里協約となつて現はれた。外相デルカッセは、英国との関係を顧慮して、暹羅を保護国とすることを諦めた。また治外法権にも制限を加へ嫺江右岸に暹羅兵営を置くことをも承認した。

現在の諸關係



一八九三年以前の諸關係

而も其の交換条件として、二万平方吉米に亙る広大なる地域を割譲せしめ、且媚江流域に於ける仏国資本の優先権を獲得した。

仏蘭西帝国主義者は、此の横暴を以てして、尚且饜くを知らなかつた。彼等は更に種々なる不法の要求を遅羅に向つて試みんとした為に、遅羅は再び英吉利に後援を求めんとした。さりながら此時に当りては英吉利自身が、西南より遅羅を蚕食せんとする貪婪の眼を輝かして居たのだ。英吉利は遅羅の哀訴に耳を藉さず、却つて仏蘭西との妥協によつて自己の非望を遂げんとした。此等両国は、恰も一九〇七年英露両国が波斯に対して執れると同一手段を以て、各自の政治的並に経済的利害を標準とし、一九〇四年、何等遅羅と図ることなくして、肆まゝに英仏協約を締結し、英国は仏蘭西が遅羅の東部地方を併合することを承認し、仏国は英吉利が西南半島の頸部を奪ふことを承認した。

而も仏蘭西は一方秘密に英国と如上協約の締結に関する商議を続けつゝ、他方更に遅羅に強要し、一九〇四年二月二十三日、遂に其の提議せる条約に調印させた。之によつて仏蘭西は、新たに東北並に東南に於て、八千平方吉米の地域を得、且クラット港をも奪取した。而して仏領印度支那と遅羅との間に既存せる中立地帯を更に拡張し、該地帯の保安の任務は仏国将校指揮の下に、甘浦塞人これに当ること、並に該地帯に仏国資本を以て鉄道を敷設することを承認させた。

次で一九〇七年に至り、仏蘭西は更に条約改訂を遅羅に迫り、一九〇四年の条約によつて定められたる中立地帯全部を仏蘭西に割譲せしめ、且媚江上流の四港を永久租借地とした。之によつて遅羅の失へる領土は、実に一万二千平方吉米。而して遅羅は此の報酬として、先に奪はれたるクラット港の還附を受けただけである。

東方よりする仏蘭西の無遠慮なる侵略に苦しみたる遅羅は、更に西方より英吉利の陰険なる侵略に遭つた。一九〇四年の英仏協約以来、英吉利は従来遅羅の属邦たりしケランタン・トレンガヌ・パーリス・ケーダを以て英領なりと

主張した。英国の真意は、之を奪ふことによつて邏羅半島の死命を制し、印度より支那に通ずる重要なる関門を、最も確実に掌握するに在つた。かくて種々なる交渉の後、一九〇九年三月十日、邏羅は遂に如上四属邦を英国に割譲するに至つた。之によつて失へる地域は一万五千方哩。而も印度洋への出口も最早無くなつたのだ。

四　現代邏羅の発達

叙上の如く英仏両国の非道に蹂躙せられつゝも、邏羅は孜々として内政の改革に努めた。而して独立国民たるの能力を立派に世界の面前に立証した。吾等は、現代邏羅が成就せる各方面の改革又は発達のうち、財政・交通・教育の三に就て、其の大体を略叙したい。

邏羅が各省単独会計の制を廃して、予算の編成実施を大蔵省に於て行ひ、歳入出を公表するに至つたのは、僅かに二十年以前のことに属する。爾来邏羅の財政は、極めて健全なる発達を遂げた。一九〇一年度の歳入は約三千六百十五万銖、歳出は三千六百六十四万銖にして、約四十八万銖の不足を生じたが、一九〇五年度には歳入五千百六十万銖、歳出五千九百七万銖、一九一〇年度には歳入六千三百五十万銖、歳出七千六百十万銖、一九一五年度には歳入七千七百二十九万銖、歳出七千二万銖となつた。

而して邏羅財政改革中、最も重大且賞讃に値するは、徴税請負制度及び賭博富籤税の廃止である。従来邏羅の収税制度は毎年の納税額を競争入札によつて、最高入札者に徴収を請負はしめて居たのであるが、是くの如き制度が財政の秩序ある発達に弊害多きは言ふまでもない。かくて政府は該制度廃止の方針を以て、着々歳入税目を整理し、収税組織を確立して、一九一七年、全く之を廃止するに至つた。次に賭博及び富籤は、従来政府之を公認したるのみなら

ず、官設賭博場を各地に設けて場銭を徴し、歳入の最も重要なる一財源として、其の六分の一を占めて居たに拘らず次第に之を廃止するの方針を採り、一九一七年、遂に其の全廃を断行した。

暹羅に於ける鉄道は、一八九二年に起工せる盤谷・コーラット線が、一九〇〇年末に竣工せるを嚆矢とし、今日に於ては官設広軌線九四六吉米、狭軌一二三吉米に達し、外に約一〇〇吉米の私設線を有するに至つた。盤谷・コーラット線は、暹羅米作地として名高き媚南平原を横断し、ゲンコイ山脈を越えてコーラット平原の中心コーラットに達するもの。盤谷を距る九〇吉米に位するバンパジ駅より分岐し、媚南河に沿ひて北上する北方線は、パリナムポ・ピサノローク諸市を経て、パンホアポンに達し、延長五八三吉米、将来は英領緬甸の鉄道と聯絡するに至るであらう。暹羅国内の最も富有なる地方を縦貫するものにして、此の鉄道の開通による経済的発展は極めて著しい。所謂南方線は盤谷より西行してプラパトムに達し、次で馬来半島東岸を南下し、英国海峡植民地鉄道と聯絡して遥に新嘉坡に達するもの。暹羅国内の最も富有なる地方を縦貫するものにして、此の鉄道の開通による経済的発展は極めて著しい。所謂南方線は盤谷より西行してプラパトムに達し、次で馬来半島東岸を南下し、英国海峡植民地鉄道と聯絡して遥に新嘉坡に達するもの。英国鉄道と同軌の一米狭軌にして、本支線を併せて一一七五吉米に達する。之に要する敷設費四百七十五吉磅は同鉄道を担保として、馬来聯邦政府より借入れたるものである。

次に暹羅の教育は約一万を算する寺院が、国民の初等教育機関たる役目を勤めて来た。寺院の僧侶は皆な若干の子弟を引受け、使役の傍ら文字を教へて来たのである。晩近に至り政府は教科書の編纂・教員の養成・校舎の建築に従事し、教育施設の発達に努めて着々効果を挙げ、学校数の如きも過去十五年間に四倍した。現在の学制は、小学・中学・専門学校の三種より成り、修業年限は夫々五年・八年・二乃至五年である。而して小学三年の修業者は中学に、中学六年の修業者は専門学校に入学し得る。最近には文・法・医・工の四科を有する官立大学が盤谷に設立された。

現在の官公立小学校数は三八〇、生徒数は約三万。中学校数は一二〇、生徒数約八千五百。専門学校は師範学校・商業学校・工芸学校・政治学校・郵便電信学校・警察学校の六校にして、生徒数約五百を算する。

暹羅の産業としては、農業に米、林業にチーク、鉱業に錫の三大国産を有する。此等に対する政策は尚未だ欠陥が多いけれど、次第に生産能率を高めつゝあることは事実である。要するに第二十世紀に於ける暹羅は、一切の外来の圧迫に拘らず、着々秩序ある発達を遂げて来た。此点に於てわが暹羅は、東洋国民に自治の能力なしと云ふ欧羅巴常套の侵略征服の為の口実を明白に裏切つて居る。吾等は不義の『強者』倒れ、正義の『弱者』興る日の近づきつゝあるを知るが故に、希望と同情とを以て白象王国の将来を見る。

第四　革命行程の印度

『圧制者あり、我母の胸に坐す。我母を圧の圧制者より救うまで、我は隋いて息まず』　ラビンダ・ゴーシュ

一　印度の国民的覚醒

近世に於ける印度覚醒の歴史は、約九十年の昔に溯る。印度の有識者が、其魂の底に激刺たる国民的自覚を生じ、上代印度諸理想の復興に対する熱烈なる希望を抱き初めたのは、実に一八三〇年前後のことに属する。而して此の希望と自覚とは、必然各種の改革、並に復興運動として現はれた。第一に宗教的方面に於ては、ラーム・モハン・ロイの梵教会創設、ダヤーナンダ・サラスワティのアーリャ教会創設、ラーマクリシュナの伝道、乃至幾多の宗教改革運動の出現を見た。次に学術文芸の方面に於ては、或は印度史並に古代文学の新研究となり、盛んに過去の荘厳を力説して国民に深甚なる感激を与へた。或は古代劇並に国民音楽の復興となり、カルカッタ、孟買、グジャラート、及び其他の都市に、古代印度劇を演ずる劇場の開設を見るに至つた。或はまた国民的絵画や、印度固有の建築に対する復興運動も起された。

此の国民的自覚は言ふ迄もなく政治的方面に現はれて、政治的改革乃至革命運動を促成した。即ち一八五七年には印度志士が『独立の第一戦』と称する大叛乱の勃発を見、北印度全部を騒乱の渦中に投じた。一八八五年には印度国

民会議の組織を見た。而して前世紀の末葉、東阿弗利加の一角に国を成せるアビシニアが、其の不当なる侵略を斥け、次で現世紀の初頭新興日本が強露を撃破せることが、欧羅巴圧迫の下に呻吟する諸弱小国に、絶えて久しき希望と勇気とを鼓舞し、世界に於ける隷属国民の血を怫然たらしめた。そは亜細亜復興の暁鐘として先づ土耳古革命を招徠し、次で波斯革命を生み、更に印度及び埃及に於ける国民運動を激成した。印度の政治的運動が頓に緊張の度を加へ、或は英国貨物を排斥する国産運動（スワデシー）となり、或は英国政府の羈絆を脱せんとする自治運動（スワラージ）となり、更に極端に走りては、爆弾と短銃と七首とを以てする政治的暗殺となつて現はれたのは、実に日露戦争以後のことに属する。嘗てツルベツコイ公爵、其著『強国としての露西亜』に於て、日露相戦ふに至らしめたるものは英国外交並に其の新聞紙なりとし、『英国の日本と結べるは、一面露国を疲弊せしむると同時に、他面日本の勢力を殺ぎ以て極東に於ける英吉利の地位を確乎たらしむるに至つた。而も英国は日本の勝利が、其他の方面に於て如何なる影響を世界政局に及ぼすかに就て、毫も想到する所なかつた』と述べて居る。然り、日露戦争の結果、印度の家々の神壇に明治天皇の御真影が飾らるゝに至らうとは、英吉利政治家の夢想だもせざりしところ。

二　国民運動の曙光

さて日露戦争によつて鼓舞せられたる、印度国民運動の中心は、英領印度に於て教育最も普及せるベンゴール青年であつた。年少気鋭のベンゴール青年は、屢々集会を催して、幾んに印度独立を演説した。こゝに於て時の総督カーゾン卿は、東部ベンゴール州を東西両部に分割せんと画策した。この分割策は、カーゾン卿の決して予期せざりし程度に州民の激昂を招いた。ベンゴール州民は、極力反対運動を試みた。而して一九〇五年八月七日、有志相図りてカルカッタ市公会堂に州民大会を開き、マニンド

ラ・チャンドラ・ナンディを推して会長となし、遂に『分割反対の実行方法として、英国貨物の総ボイコットを行ふ可きこと』を決議し、分割の取消さるるまで、断乎としてボイコットを継続す可しと宣言した。ベンゴールの経済界は一大恐慌を来たした。されど鉄血の如きカーゾン卿は、敢然として初志を貫き、十月十六日遂に分割を断行した。新たに分割せられし両州人民は、此日憤の火を消し、裸足にて家を出でて聖槽に浴すること、恰も大喪に会せるものの如くし、挙国一致の表象として、聖紐（ラキ）を以て互に手頸を縛り、以て限り無き忿懣反抗の意を示した。爾来ボイコットは益々激烈に行はれ、遂に英国新聞をして『斯くの如きボイコットは、英印間の関係を破壊し去ること、武装せる革命よりも甚だし』と言はしむるに至つた。

而して此運動に於て最も大胆敢為に英貨排斥を宣伝せるものは、実に血熱し易き青年学生であつた。されば印度政府は先づ該運動鎮圧の第一着歩として、峻厳なる学生取締を励行し、学生の国民運動に加はるを厳禁し、現に運動に関与せる多数青年は、種々なる罰則に処せられ、放校の厄に遭へるものも少なくなかつた。而して他方に於ては、強大なる警察力を以て、甚だしきは軍隊の力を以て、極力英貨排斥運動の鎮圧に努め、漸く其の気勢を弱めることを得た。

然るに、印度政府が青年学生に対して苛酷なる迫害を加へ、将来国民運動に加はる者は、直に之に放校を命じ、一切の教育を受くることを得ざらしむ可しとの命令を発せることが、名高き『国民大学運動』を激成するに至つた。此の命令に憤激せるベンゴール州有志は、国民教育会議を開き、全然政府より独立せる大学を創設し、純乎たる国民主義の下に哲学・科学・文学乃至工芸に関する教育を施さんと計画し、盛んに州内を遊説して熱心なる賛成を得た。此の計画に於て最も注意すべき一事は、従来印度諸学校に於て、最も重要なる学科なりし英語を第二語学となし、之に代ふるにベンゴール人にはベンゴール語及び梵語を、回教徒にはウルドゥ語・波斯語・及び亜剌比亜語を以て第一語

学たらしめんとせることであつた。吾等は此の事に於て最も明瞭に印度に於ける国民的自覚の正しく且強きを見る。

三　アラビンダ・ゴーシュ

この国民大学運動に際し、有志に推されて校長として其の計画の貫徹に尽力せる者は、実にアラビンダ・ゴーシュである。彼はヴレンティン・チロルが言へる如く、而して唯だ印度のみが生み得る偉大なる人格である。彼はゴーシュは、近代印度が生みたる、忘れたほど、長期に亙つて欧羅巴に留学した。彼が英国ケンブリッヂ大学に入るに先だちて修学せる一学校の校長はその在職三十年間に、未だ曽て彼の如く明敏俊傑なる頭脳を所有せる学生を知らずと驚嘆した。而してケンブリッヂ大学に於ては、特に希臘羅甸の哲学文学に於て頭角を現はし、常に第一等賞の受賞者であつた。彼の論文を読む者が直に知り得る如く、彼は欧羅巴思想に就て、驚くべき豊富なる蘊蓄を有し、深くして正しき理解を有して居る。夫れにも拘らず彼の精神は徹底して印度的である。

彼は真個の印度人として印度文明に関する至深の理解、印度精神の優越に対する神聖なる誇を有し、人類並に世界に対して印度が貢献すべき荘厳なる使命を確信する。故に彼に取りて最も神聖なる事業は、印度真個の生命並に精神の発揮に在る。彼は深く自己精神の至深処に沈潜し、一切外面の頽廃・混乱・桎梏を超じて永遠の光耀を放つ『真印度』を体得し、之を障碍する一切の内面的勢力の攻撃・撃破・滅尽のために、何ものをも恐れざる戦士である。

彼の人格並に言論は、印度青年の精神に深甚なる感激を鼓吹した。彼が、昔乍らの印度精神、殊に薄伽梵歌の宗教並に道徳を体験し、之を周匝なる思想体系に組織し、一切外来の思潮文化に対して明判官の断獄に類ふべき深刻透徹なる批判を下せる時、印度青年は煥乎として彼等の裡に潜める偉大なるものに触着し、俄然として火の如き国民的自

覚を喚起された。彼は多くの印度思想家の如く所信の断言に怯懦でなかつた。一九〇七年十二月、スラートに開かれたる国民会議に於て、彼は名高き『印度国民主義宣言』を朗読した。彼は此の宣言に於て、劣等なる文化の所持者英吉利が、優越せる文化の所持者印度に向つて其の劣等文化の採用を強制し、印度国民の神聖なる天賦を傷ひ其の如実の発展を妨ぐるの非理を高調した。彼は単に印度を英吉利の政治的覊絆より解放し、又は其の経済的壟断を打破するを以て究竟の目的とするものでない。彼の明朗透徹なる理性、秋霜烈日の如き意志が、常に真面（まとも）の敵として戦ふ所のものは、実に英国的精神其ものであり、英国的文化其ものである。

加ふるに彼は近代印度思想史に於て新しき路を開拓せる筈一人者である。薄伽梵歌の根本思想を把握せる彼の『行の哲学』は、寂静無為を以て高尚なるが如く考ふる印度人に向つて、単なる思索瞑想の無価値なること、行為が思索の実現且完成なることを教へた。彼は森林の小乗的隠者生活の無意義を力説し、人間は一切の成敗を超越して、神聖なる英雄的行動に終始す可きを高調した。而して彼の思想は、多数の印度青年に猛烈なる実行的意志を鼓吹した。

四　言論による革命宣伝

印度政府は、アラビンダ・ゴーシュを首領とする此の国民大学運動を黙視しなかつた。印度政府は、曽て最も御し易かりしベンゴールが、今は最も難治の一州となつたのは、教育の普及が州民の国民的自覚を喚起せるに由ることを熟知して居た。従つて、陰に陽に此の運動を圧迫し、遂に彼等はベンゴール語及び英語を以て、言論によつて其の精神を人民に鼓吹するの手段を執つた。彼等は実に彼等をして其志を成さしめなかつた。茲に於て彼等は、言論の力なりしは、サンデヒヤ及びバンデー・マータラムの両新聞であつた。数箇月ならずして、幾多の新聞雑誌を発行した。

而して言論の力は実に予期以上に偉大であつた。数箇月以上に偉大であつた。国民的精神は更に新しき力を以てベンゴール

を風靡した。『母国万歳 Bande Mataram』の声は、学校に、街頭に、私人の家々に、凡そ人の相会する所に響き渡つた。種々なる武術を教ゆる道場が処々に開かれ、ベンゴール青年は争うて此処に学んだ。かくて独立の思想日に旺盛となり、翌一九〇六年カルカッタに開かれたるベンゴール両州の全有力者を網羅せるの観を呈し、盛んに排英独立の気勢を煽つた。茲に於て印度政府は、警察力を以て該会議を解散し、各地の代表者に向つて即刻帰郷を命じた。

総てカルカッタを中心とせる此等の出来事は、忽ち印度各地に伝へられ、不穏は次第にベンゴール州以外に及んで来た。而して斯くの如き公会に対する圧迫は、竟に秘密結社の発生を激成し、青年の之に加はるもの次第に多きに至つた。

是より先極めて敏腕なりし、而して其の為に甚しく印度人の恨を買へるカーゾン総督は、時の印度軍司令長官キチナー将軍と、印度軍政改革に関する意見の衝突より其職を辞し、ミントオ卿代つて印度総督に就任した。卿は人となり温厚にして長者の風あるに加へて、前総督の露骨なる高圧手段を改めて調停的態度に出で、時の印度事務大臣モーレー卿の妥協政策と相俟つて、只管民心の緩和に努めた為に、好箇の総督として印度社会に人望を博した。

而して其の結果、ミントオ卿総督時代に於て、印度国民主義者間に両派を生ずるに至つた。一は新総督の施政方針に信頼の意を表し、漸を逐うて改革の実を挙げんとする穏和党である。他は新総督の方針も之を大局より観れば、前総督のそれと五十歩百歩なりとし、飽迄も積極的運動によつて初志を貫徹せんとする急進党である。この分離は印度革命史上、極めて注目すべき一事である。何となれば此の分離と共に、穏和党は次第に政府に接近し、急進党は次第に鮮明なる革命的色彩を帯びて来たから。

かくして急進党の諸氏は或は文筆を以て、或は弁論によつて、益々過激に排英主義を主張し、啻に経済的のみなら

ず、政治的並に社会的に、英吉利に対してボイコットを行ふべしと宣伝し初めた。一九〇六年より七年にかけて、筆禍口禍の為に縲紲の厄に遭へる志士は、夥しき数に上つた。而も印度に於ける排英の気勢は、之が為に殺がるゝことも無かつた。

五　国民運動の過激化

形勢は斯くの如くにして進展した。而して一九〇七年の初めより、印度に於て最も実行的なるパンジャブ人が、地租徴収の事より暴動を起し、軍隊内にも不穏の兆を見るに至つた。而して同年五月、パンジャブの首都ラホールの名士ラーラ・ラージパット・ライが、突如として逮捕せられ、裁判を受くることなく、従つて罪名を告げらるゝ事なくして直ちに緬甸に護送せられ、而して牢獄に投ぜられた。

印度政府は、何故に斯くの如き手段を敢てしたか。言ふ迄もなく彼を以てパンジャブ騒乱の首魁と目したからである。カルカッタ発行政府機関紙の如き、或は氏が十万の凶漢を手に入れて居ると書き立て、甚だしきに至つては、彼が亜富汗王を籠絡して、印度侵入を企てさせたとさへ大書した。而もライはその豊富なる学識と、その熱誠なる慈善事業並に教育事業との為に、印度上下の最も信頼好愛する先覚であつた。故に氏に加へたる政府の処置は、全印度の激昂を招いた。穏和党も急進党も、一斉に之に向つて攻撃非難の声を挙げた。此の出来事より以前、印度志士にして追放・監禁・其他の刑罰に処せられたる者は、固より少からぬ数に上つた。而も裁判によつて罪科を決定せらるゝ限り、印度人民は仮令判決に不服であつても、未だ曽て暴力に訴へて之に復仇せんとしたことが無い。然るに彼等が渇仰の一中心たりし名士が、突如国外の牢獄に運び去られたるを見て、血気に逸り立つ急進党の志士は、遂に非常手段を以て此の暴挙に対抗すべしと決心した。

此時に至るまで、印度人は、専ら言論文章を武器として英吉利政府と戦つて来た。印度人が初めたのは、実に此時以後のことである。見よ、先年印度政府が排貨運動鎮圧のため、グルカ軍隊をバリザアルに派した時にも、或はカルカッタに於ける地方会議を解散した時でも、該運動の指導者は能く激昂せる人民を制して、暴挙に出づることを戒しめた為め、当然流血を見るべくしても見ずに済んだ。さり乍ら此事ありて以来彼等の態度は一変した。

かくして一九〇八年の春、ビハールのムザッファルプールに於て、最初の爆弾が投ぜられた。そは国民運動に参加せる青年に、笞刑を課したる一英人官吏を暗殺する目的であつたが、誤つて無関係なる二名の英国婦人を斃した。而して此の計画に加はりし一人が、陰謀の顛末を告白した為に同志悉く捕へられて、アリポールの牢獄に投ぜられた。

この卑しむべき裏切者は、其名をナレンドラ・ナート・ゴサインと云ふ。而も彼は、同監房に繋がれたる二人の青年——カナイ・ラル・ダット及びサテェンドラ・ナート・ボース——の為に獄内に於て血祭に上げられた。而して彼等が法廷に於て審判を受けたる時、カナイ従容として答へて曰く、『予は彼を以て母国の敵なりと認めたるが故に之を殺した。こは予が全責任を負うて独断専行したる所、吾友サテェンドラの毫も関知する所でない』と。固より両人とも死刑を宣告された。而して彼等が絞刑に処せらるゝ日、カルカッタの老幼男女、相率ゐて刑場に赴き、カナイの屍体を墓地に運び、厚く之を火葬に附し、数千の会衆は悉く食を断ち足を露はして親戚故旧を葬むるの礼を行つた。この陰謀は本拠をカルカッタ市マニクトラア公園に置ける故を以て、マニクトラア爆弾事件と呼ばれ、実に現代印度国民運動に於ける最初の暗殺であつた。而して翌年には、之と同様なるダッカ陰謀事件が起つた。

次でペンゴール長官サー・アンドルー・フレーザーが三度暗殺に遭はんとした。而して其一度は、白昼彼が公務を

執りつゝありし間に行はれた。人望ありしミントオ卿すら、アーメダバードに於て爆弾を投ぜられ、夫妻辛うじて九死に一生を得た。印度事務大臣モーレー卿の秘書ワイリーは、白昼倫敦街頭に於て、印度青年の一撃に斃れた。此の青年が、『吾は卑しき生命を母国の為に捧ぐる光栄を誇る』と称して、従容絞刑台上の露と消えしことは、故国の危害が、英人及び政府に忠誠なる印度人の生命に対して加へられた。

印度政府は、此等の陰謀を以て国民党領袖の使嗾によるものとなし、峻厳なる糾弾を志士の行動に対して加へた。バアル・ガンガダール・ティラック、アラビンダ・ゴーシュ、ベピン・チャンドラ・パアル、チダムバラム・ピライ、アブドゥル・ハサン・ハスラート・モハニの諸氏が悉く囹圄の人となりしは、実に此頃の事である。而して是こそは印度に於ける『安政の大獄』であつた。

六　国民主義の勝利

形勢は斯くの如くにして進んで行つた。かくて一九一一年十二月、恰も欧羅巴に於ては、英独仏三国間にモロッコ問題の紛糾するありて、政界多忙を極めたりしに拘らず、英吉利国王は遥に玉輦を印度に運び、最も荘厳なる印度皇帝即位式を行ひ、之を以て一面には在印英人の士気を鼓舞し、他面には印度人民に威厳を示し、且この機会を以て多年不満の因たりしベンゴール分割問題に譲歩的解決を与へ、又突然首府をカルカッタより回教徒の中心地デリーに遷し、恩威並び行つて排英運動を閉息せしめんと腐心した。然るに英王のデリー滞在中、駐蹕の大天幕が、電燈の故障より火を失せる椿事が起つた。迷信深き印度人は、之を以て不吉の兆と言ひ触らし、一易者の如きは英国滅亡の期迫れりと占つて獄に投ぜられた。

次で一九一二年十二月、ミントオ卿の後を襲ひて印度総督に就任せるハーディング卿が、数千の軍隊と数万の群集との間を堂々と練り歩く最中に、爆弾飛来して従者数人は粉砕せられ、卿は幸に肩に負傷せるのみで危く一命を助かつたが、入都式の行列は中止せられ、非常なる騒ぎとなつた。而も犯人は巧みに踪跡を暗まし、十万ルピーの大金を懸けて必死に捜索せるに拘らず、遂に犯人の逮捕を見ずして了つた。而して此の出来事は、英吉利の調停政策も、竟に民心を緩和すること能はざるを示すと同時に、犯罪の現状を目撃し乍ら、一人として犯人を告知して大金を得んとする者なかりしを見ても、英国に対する反感が、如何に広く且深く民心に刻み込まれて居るかを示すものである。而して一九一四年春には、更にラホールに於て爆弾が投ぜられ、四名の絞刑者並に其他の処罰者を出したが、其内に数名の大学生もあつた。

かくの如くにして国民運動は、次第に印度の各方面・各階級に及んで行つた。ラムゼー・マクドナルドは其著『印度の覚醒』に述べて曰く、『予は屢々印度婦人が、演壇に立つことありと聞き、また国民運動の各方面に於て、婦人が活動しつゝありと聞いた。予は到る処に政治問題が内房の中に論ぜられ、志士に下せる政府の圧迫に反抗するため婦人が集会を開けることを聴いた。吾人の経験を以てするも、今や多数の印度婦人は、現に起りつゝある社会運動に注意を払ひ且之と歩調を一にして居る』と。凡そ如何なる運動も、婦人を動かすに至つて真に確乎たる根柢を得るを常とする。取分け印度婦人は、少くとも中流以上のものは、家族以外の人に其顔をも見せぬほど、消極的・退嬰的な慣習の下に育ち、殆ど度し難き内気者として定評を受けて居る。其の印度婦人が、亦昔日の内気者でなくなつたのだ。政治問題が内房に於て論ぜらるゝに至つたと云ふことは、特に印度に於て注目に値する。

而してラーラ・ラージパット・ライも亦、其著『青年印度』の中に、国民主義が如何に此頃に至りて、普く印度の民心を支配し初めたかに就て実に下の如く述べて居る。曰く『試みに田舎の人々の詩又は文を読め。殆ど教育なき、

又は全く文字なき男女の鄙びたる歌を聴け。村々の空地や集会所に於て人々の語るを聴け。田舎の小児又は赤貧なる家々の児等の遊戯を見よ。流行しつゝある謡を聴け。然らば諸君は、国民主義が如何に普く印度の生活に行亙り、如何に深く印度の精神に根ざせるかを知り得るであらう。如何なる外国人も、之を領会することは出来ぬ。真に之を領会し得るは唯だ印度人のみである。試みに土語にて発行せらるゝ新聞雑誌を読め。然らば諸君は英国に対する忠実を表白せる文字の奥に、母国の逆運、その惨憺たる現状に対して灑がれたる血涙を洞察するであらう。国民主義は、最早や狭い階級に限られては居らぬ。そは総ての印度人の精神に入り浸らんとして居る。親しく人民と交はる印度人の色を売る舞妓すらも、今や此の精神に動かされて来た。諸君にして欲すれば、彼等声を挙げ み能く之を知る。嗚呼、角て国民主義の歌を唱はん。一弦の琴を鳴らして、門並に憐みを求むる乞食芸人すら、如何なる歌を奏すれば、能く人を喜ばしむるかを知つて来た』と。

七　ラホールの陰謀

大勢かくの如き時に当り、端なくも世界戦が勃発した。印度革命主義者が此機に乗じて、宿志を成さんと企てたことは毫も異とするに足らぬ。果然一九一五年春、ペナーレス以西、殆ど西北印度全部に亙る大規模の叛乱が企てられた。此の計画は、周匝機敏を極むる間諜制度を有する当路の探知する所となり、事に連つて逮捕せられしもの前後実に四千人、有罪を宣告せられて、重きは絞刑より軽きは罰金に至る刑罰に処せられしもの八百人、画策中道に蹉跌して僅かに連絡なき掠奪・殺人等の暴動を諸処に惹起せるに止まつたが、これぞ所謂ラホール陰謀事件として一時印度の上下を震撼し、煽動的なる米国新聞をして『絞刑四百人、懲役八百人、監禁追放一万人』と伝へしめ、欧米の耳目を聳動せる一大事件であつた。

ラホール陰謀の策源地は、米国桑港の『印度革命本部』であつた。そはハル・ダヤールの創設にかゝり、戦前より機関雑誌『印度革命』を発行し、並に幾多の小冊子を印刷し、厳重なる官憲の目を潜りて、巧に之を印度に密送し、最も激烈に革命思想を鼓吹して居た。既にして世界戦の勃発となるや、志を同じくせる在外印度革命家は、或は米国より、或は加奈陀より、或は支那より、続々として本国に密航し、在印同志と鳩首凝議して、専ら事を挙ぐるの準備に心を砕いた。

偶々此時に当り、所謂駒形丸事件が突発した。そは英領加奈陀に渡航せる多数印度移民が、加奈陀官憲のために入国を拒まれ、日本汽船駒形丸に乗じて帰国するの止むなきに至れる事件である。此等の移民は、多くはパンジャブ人であつた。彼等は艱難と忿懣とに心身を苦しめつゝ、無益なる長途の旅を往復して、ベンゴール州の東海岸バッジ・バッジに上陸し、多数の者は故郷パンジャブに、少数のものはカルカッタに赴かんとした。然るに印度政府は、自由の行動を彼等に許すことを危険なりとし、わけても彼等のカルカッタに行くを欲せざりしが故に、警察力を以て彼等の行動を拘束せんとした。於是彼等の或者は、密かに携帯せる武器を執つて警察官に抵抗し、両者の間に激しき衝突を見、互に死傷者を出だしたが、結局少数の拘禁者を除く外、概ね故郷に帰ることを許された。

然るに此等の激昂せる帰還者がパンジャブに帰れる頃は、恰も革命党の志士が盛んに排英独立思想の秘密宣伝中なりしが故に、彼等の多くは相率ゐて革命運動に投じ、頓に革命の気勢を高めた。而して革命運動を指揮して実際の画策に当れる首脳者は、ラーシュ・ビハリ・ボース（ベンゴール人・印度教徒）、バイ・パルマ・ナンド（パンジャブ人・前パンジャブ大学教授）、カルタール・スィン（パンジャブ人・スィク教徒）、ギシュヌ・ガネーシュ・ピングレー（マーラタ人・印度教徒）、サッチンドラ・ナート・サニヤル（ベンゴール人・印度教徒）の諸氏であつた。此等の諸氏の生地及び宗教は、該運動が広汎なる規模の下に企てられたることを示すものである。

彼等は先づ青年学生の誘致に努めた。多くの学生は彼等に動かされて運動に加はつた。彼等は無智なる村民に向つて、英国の苛政を説明して其の敵愾心を鼓舞し、英国は彼等の宗教に干渉せんとしつゝありと告げて、其の宗教的情熱を煽り、世界戦の結果、英国は衰滅に瀕しつゝありと告げて其の勇気を振作した。

而して彼等が最も力を注ぎたるは、実に印度兵軍隊の誘致であつた。彼等の或者は蓼兵に応じて軍隊に入込んだ。或者は血縁ある傭兵に接近して、叛乱を勧めた。革命の檄文が、謄写筆写によつて複製せられ、密かに軍隊内に配布された。かくしてラホール騎兵第二十三聯隊、及びパンジャブ歩兵第二十六聯隊には、日に日に叛乱加盟者の数を加へた。計画は着々進捗し、一九一五年二月十九日夜半を期し、両聯隊は花々しく革命の第一烽火を挙ぐる手筈まで整つたが、将に発せんとする間際に、間諜の密告によつて計画露顕し、終に失敗に終つてしまつた。

此年九月二十五日、パンジャブ州長官オドワイヤーは、パンジャブ立法会議に於ける演説中に、ラホール陰謀に就て述べて曰く『若し彼等にして、官憲並に人民の協力により、迅速に抑圧せられざりせば、恐らく叛乱者が企画せる如く、一八五七年の大叛乱と同じく、パンジャブを挙げて無政府状態に陥り、啻に政府官吏のみならず、忠誠なる印度人の虐殺が行はれたであらう』と。以て該陰謀の容易ならぬ性質を知り得る。

八　全印度に頻発せる革命の陰謀

ラホール陰謀の発覚ありて未だ数月ならずして、更に第二陰謀事件が起つた。事に連なつて逮捕せられしもの二百五十人、うち八十余名は有罪の宣告を受けた。而して之と相前後して、ベナーレス陰謀事件が起つた。そは前述両陰謀と関聯せる革命運動にして、その重大なる点に於て亦両者に劣らぬものであつた。而も此陰謀も亦発するに先ちて

警察の探知する所となり、同志の逮捕せらるゝもの二百人、処刑者数十人を出だした。

叙上の陰謀と前後して、更に重大なる二個の事件が起つた。一は即ち新嘉坡暴動であり、他はラングーン陰謀である。一九一五年一月、印度本土に於ては、ラホール陰謀が着々計画を進めて居た頃、新嘉坡駐屯印度軍隊は、同じく革命党の誘致に応じ、逸早く蹶起して独立の旗を挙げ、英人士官を屠りて兵営を占領し、其の勢猖獗に赴かんとした。海峡植民地政府は周章狼狽を極め、日本領事に向つて再三援助を懇請し、その結果約百八十名より成る在留邦人義勇軍組織せられ、某予備陸軍大尉指揮の下に、市内警衛の任に当ることゝなつた。而して港内碇泊中の日本軍艦も、亦英国の希望を容れて若干の陸戦隊を上陸せしめ、叛兵の拠れる兵営を攻撃せしめた。

新嘉坡の叛兵は、日本が武力を以て独立の義挙を妨ぐ可しとは夢想だもしなかつた。彼等は、最も予期せざりし勁敵の出現に失望し且驚愕した。もと叛乱の首動者は、印度兵中の回教徒であり、印度教徒は当初より決死奮戦の意思なく、形勢の推移により態度を決せんとせる者多かりしに加へて、回教徒自身も亦日本を敵として戦ふの意なかりしを以て、殆ど抵抗を試むることなくして印度兵の大部分は我軍に投降し、大事に至らずして鎮定するを得た。

印度本土及び海峡植民地の形勢既に斯くの如くなる以上、緬甸も亦不穏を免れざりしは当然のことである。一九一六年に入りては、革命の緬甸に於ける活動頓に其数を増した。一九一五年八月以来、緬甸に於ける政治的犯罪は頓に多忙となり、ハルナム・スィン以下六名の志士、遥羅を迂回して緬甸に入り、各地に遊説して排英の気勢を煽り、且軍隊に接近して叛乱を教唆し、暹羅在留の同志と連絡を取りて密かに武器弾薬を輸入し、同志の或者は在支独逸人と気脈を通じ、雲南より緬甸に至る通路を踏査して他日の用に資せんとし、安南より雲南に入らんとして仏国官憲の為に通行を拒まるゝなど、経営頗る惨憺を極めたが、未だ事を挙げずして計画露顕し、首謀者以下同志の逮捕となり、死刑七名、終身流刑五名、以下十数名の処刑者を出だした。この出来事はマンダレー陰謀事件と呼ばる。

九　英国の対印政策

一面叙上の如き過激手段による独立運動が画策せらるゝと同時に、他面に於ては合理的手段に訴ふる自治運動が毎に勢を加へて来た。殊に一九一五年、印度国民会議と全印度回教同盟会とが、時を同じうして大会をボムベイに開いたことは、印度国民運動史上に於て特筆すべき出来事であつた。蓋し印度教徒及び回教徒を反目嫉視せしめ、以て国民勢力を両分することが実に英国印度領有の伝統的政策であつたのだ。政府は両者の敵愾心を煽りて互に相争はしむるに全力を尽して来た。かくて従来双方の有志が、度々妥協提携を画策して、而も常に失敗に終つて居たが、此時に至つて初めて其の実現を見たのである。かくて両団体の代表者は、一堂に会して交歓し、双方より委員を選んで国事を議し、自治の要求、義務教育の施行、産業の発達等に関し、一致の行動を執りて政府に当るべきことを決した。回教同盟総理ハック氏が、同大会に於ける演説に於て、挙国一致の必要を力説し、宗教の如何を問はず、一切の印度人は必然浮沈を共にすべき同舟の客なることを警告し、『予は第一に印度人たるのみならず、第二にも印度人、第三にも印度人、最後まで印度人なり』と高調せることは、会衆の非常なる喝采を博した。かくして合理的に自治を促進せんとする政治的運動が、急速に発展して来た。

英吉利政府は、事態の容易ならざるを知了した。殊に独逸に対する勝利、尚未だ覚束なく、印度の人と金と物資とを必要とすること最も急なる時代なりしを以て、一方高圧武断を強行すると共に、他方盛に懐柔政策を行ひ印度人に向つて種々なる約束を与へ、遂にモンテーギュ氏一行を印度に特派し、一九一七年冬より翌年四月に亙る実際の調査視察に基きて、印度統治改革法案の起草に着手せしめ、只管民心の緩和に努めた。

この改革法案は、一九一八年七月八日を以て発表された。而も其内容は、一九一六年十月、国民会議及び回教同盟

が、一致決議して要求せる穏健なる印度自治案との間にさへ、甚だしく径庭があつた。従つて急進派が、之によつて何等の満足を与へられざりしは言ふ迄もない。

而して此の改革案の公表ありて間もなく、更に別個の重大なる一報告が、印度に於て発表された。その報告とは、取りも直さずローラット報告である。是より先、印度政府は、下の目的のためにローラット以下五名の委員を任命した。曰く『印度に於ける革命運動に関する陰謀の性質及び範囲を調査して之を報告すること、及び斯くの如き陰謀の取締に際して生ぜる困難を検討し、若し其の必要を認めたる場合は印度政府をして有効に之を取締らしむべき法律を立案すること。』委員は、印度不穏の二中心、カルカッタ及びラホールに於て必死の努力を以て調査に従事した。而して印度に於ける革命運動が実に容易ならざるものなるを知悉し、之を取締る為には、最も厳格緻密なる法律を必要とすることを認め、茲に名高きローラット法案を起草し、一九一八年七月十九日、詳細なる報告を発表するに至つたのである。

ローラット法案は、曽て戦時非常法として発布せられ、印度政府が戦争終結と共に撤廃すべきを約せる印度国防条例を、叛乱条例の名の下に永久的のものとし、官憲に与ふるに、苟くも英領印度に於て、安寧秩序を害する危険ありと認むる時は、其の何人たるを問はず、また裁判を経ずして、直ちに之を逮捕・監禁・又は投獄するの権力を以てせるものである。

十　英国の政策に激せられたる革命運動

ローラット法案が、印度人を憤激せしめたるは固より其ところ。此年二月、該法案の帝国立法会議に上程せらるゝや、心ある印度人は悉く起つて反対運動を開始した。先づラホールに於て、『印度協会（Indian Association）』の大

会が、最初の大規模なる反抗の火の手を挙げた。次で三月三十日、デリーに於て、全市に亙る『休業　Hartal』が行はれた。商店は悉く其窓を閉ぢた。戸を開ける若干の商店は、群集の為に閉鎖された。群衆は、乗客に徒歩を強ひた。午後一時半頃、一団の群衆は鉄道停車場外に集まり、偶々三等乗客に御者を其家に帰らしめ、食物を売らんとせる構内売子を認め、之に向つて『休業』を求めた。売子は之に応じなかつた為に直に殺されて了つた。加害者両名は直ちに逮捕された。激昂せる群衆は、之を奪回すべく構内に流れ込んだ。而して警官の非常召集、軍隊の派遣となり、茲に群衆と官憲との間に惨憺たる衝突を生じ軍隊の発砲によりて、辛うじて群衆を四散させた。而も其後数日の間デリーの町は店を閉ぢ、鉄道も不通となつた。而して之と前後して名高きアムリッツァル事件が起つた。

アムリッツァルは、パンジャブの最も繁栄なる都市の一にして、スィク教徒の首都である。ローラット法案に対する反抗運動は、同市に於ても夙く既に行はれて居たが、デリー騒動の報一たび伝はるや、形勢は一層険悪となつた。官憲は事を未然に防ぐべく、同市に於ける運動の中心人物両名を、四月十日郡長官舎に召喚し、突如之を逮捕して自動車にのせ、何方とも知らず羅致し去つた。民衆は両名の行方不明となれるを知るや、諸処に集合して示威運動を開始した。一団の群衆は『国民銀行（ナショナル・バンク）』を襲ひ、支配人及び会計課長を殺し、貴重品を破壊し、而して火を放つて建物を焼いた。群衆の他の一団は、殆ど時を同じうして『隣合銀行（アライアンス・バンク）』を襲ひ、同じく支配人を殺し、建物を焼いた。数個の郵便局が襲撃され且掠奪された。一基督教書肆が散々に破壊し尽された。銃が放たれた。約四十名の印度人が殺された。而して夜に入りて暴動は一先づ鎮まつた。此夜約四十哩を隔つるジャルンダーから、応援軍隊が到着した。

明くれば四月十一日、群衆はまた次第に集まり来りて、諸処に軍隊との小衝突を見、十数人の負傷者を出だした。

夜に入りて郡長はデリーより到着せるダイヤー将軍に、一切の権力を委任した。将軍は直ちに仮借なき高圧手段を執つた。十二日には約五千の群衆に対し、一斉に軍隊をして発射せしめ実に五百名を殺し、約二千名を負傷せしめた。この虐殺事件の審問に際し、ダイヤー将軍が判事ランスに答へたる言は、真に痛快を極めて居る。曰く『若し予に一弾を発射する権利ありとすれば、百千発を発射するの権利ある道理。予の到達せる理論的結論は、法律を無視せる群衆を解散せねばならぬと言ふことであつた。而して之が為には何等中間の方法なし。たゞ力の一方法ありしのみ』と。

将軍の行動は後に英国議会の問題となつたが、上院は将軍の処置を正当とした。而して将軍の職を辞するに及び、其の功績に酬ゆるため、印度人より絞れる租税から、毎年約八千円の恩給を与へることになつた。さりながら印度人側は決して将軍の虐殺を是認せぬ。此事ありて以来、印度人の英吉利に対する怨恨・憤懣の情は、急激・強烈・迅速に昂まつた。

而して斯くの如き形勢に更に油を注げるものは、実に聯合国の対土条約である。初め英国首相ロイド・ジョージは印度に於て回教徒兵を徴募するに際し、世界の面前に於て戦争が如何に終結するにせよ、土耳古の回教宗主権を保全すべきことを、印度七千万の回教徒に向つて声明した。而して回教徒は彼の言に信頼したのだ。然るに此年八月に締結発表せられたる対土講和条約は、明白にロイド・ジョージ先年の声明に裏切れるものであつた。是に於て従来は寧ろ親英的なりし回教徒が、俄然として熾んなる排英運動を開始するに至つた。

是くの如くして印度の形勢は、日に日に険悪の度を加へて来た。パンジャブ州知事として、最も善く形勢の真実相を知悉するサー・マイケル・オドワイヤー曰く、『傭兵叛乱以後、政府の地位今日の如く弱く、その信用今日の如く地を払へるは無い。印度に於ける英国の安全点は、従来も決して大ではなかつたが、今や世界的不安と危険とが、殆

ど之を零点に低下するに至つた』と。

十一　モハンダース・カラムチャンド・ガンディ

最近に於ける叙上の運動に於て、其の中心指導者として記てる者は、実にモハンダース・カラムチャンド・ガンディ其人である。彼は明治二年十月、ラージコット小藩王の首相たりし清廉恪勤なる父の第三子と生れ、明治二十四年に帰国した。彼は印度に於て弁護士となり、三年の後、業終へて弁護士となり、明治二十四年に帰国した。彼は印度に於て弁護士を開業する積りであつたが、有名なる一印度商会の依頼に応じ、訴訟事件のために南阿ナタルに赴いた。

彼は南阿に於て其後の二十余年を、南阿に於ける苦力の味方としてあらゆる困難迫害と戦つた。彼は文字通りに師父としての尊敬と信愛とを、南阿に於ける憐むべき同胞から受けた。彼は真に同胞中の最も貧しき者と辛苦を共にした。裁判に附せられた時も、牢獄に投ぜられた時も、官憲が彼だけには特別の待遇を与へようとしたに拘らず、固辞して苦力と同様の取扱を甘受した。彼の弁護士としての収入は相応に多額なりしに拘らず、古への行者に等しき禁欲の生活を送りて、余れる全部を同胞の為の運動に費した。

一九一三年秋、南阿聯邦政府が印度人に取りて極めて不利なる移民条例を発布するや、ガンディは其の撤廃を南阿政府に求めた。彼は此の要求を徹底せしめる為に、労働者に向つて精神の力を以て之に抵抗し、以て当局の非を改めしむべきことを勧めた。老幼男女、悉く彼の一令の下に動いた。幾千の労働者及び其家族が、ナタルよりトランスヴールに進んで行つた。各地の労働者は一斉に罷業した。官憲は非常に驚愕して片端から印度人を捕へ、罷業中の鉱山を臨時の監獄として、日も照らさぬ坑内に数千の労働者を拘禁した。ガンディも亦然りしこと言ふ迄もない。而も此

報一度び印度に伝はるや、輿論の沸騰甚だしく、時の総督ハーディング卿までが、マドラスに於ける演説に於て、公然と南阿政府の非常手段を非難するに至つた。かくて南阿事件特別調査委員の任命となり、その結果該条例の修正を見るに至つた。

一九一四年、彼は印度に帰つて来た。而して人民の味方として其の活動を始めた。彼はサティヤ・グラハの主義を鼓吹した。サティヤは真理、グラハは把持を意味し、飽迄も真理に拠り、精神の力を以て邪悪と戦ふことを言ふ。之を翻訳して消極的抵抗 Passive Resistance とするが如きは、彼の精神を全然没却し去るものである。彼は印度人を以て奴隷とする、従つて印度人の人格を無視する英国の印度統治を以て、許す可からざる悪と主張する。而して、此の悪は暴力を以て之を倒すべきものでない。そは印度人が全然英吉利と悪を共にせざることによつて達せられねばならぬ。かくて彼は、『暴力を用ゐざる非協同運動』を起した。彼の主張は、一見何等新奇なるものがない。而もそは徹底して印度的である。彼が南阿に於て労働者の為に戦つた時も、彼の戦術は全然西欧労働者のそれと異なつて居た。彼は先づ真個の人間としての自覚を労働者の魂に植付け、之によつて彼等の現状の忍ぶ可からざる所以を知らしめ、而して之を脱出せんとの精神的勇気を鼓吹した。彼の高潔なる人格、その無私なる生活、火の如き熱心、棉の如き慈悲、而して其の驚嘆すべき組織力は、南阿の労働者を手足の如く動かすことを得せしめた。印度に帰れる彼は、実に同一の方法を以て同一の戦ひを初めたのだ。

試みに彼自身の言を引く――『予は南阿運動の歴史が当然印度に於て繰返さるべきを怪まぬ。若し然らざれば、それこそ予の意外とする所である。南阿に於ける運動は、全労働者一致の決議によつて始めたのだ。而も愈々開始するに当つて、牢獄に投ぜらるゝことを恐れざりし者は、僅に百五十人前後となつた。而して終には犠牲となることを甘

んぜる者、僅かに十六名の男女に過ぎざるに至つた。然るに此等十六名の決意に不可思議の力を現じた。全印度人は逆捲く浪の如く起つて彼等の蹤を追うた。敢て何等の組織ありしに非ず、何等宣伝を行へるに非ず、而も総計四万の同胞は、悉く獄に投ぜられるゝの覚悟を抱いた。而して彼等のうち一万は、実に牢獄の苦を嘗めた。其後のことは諸君能く之を知る。かくして同胞は其の求むるものを得た。吾等は献心犠牲の訓練によつて、無血の革命を成就したのだ。予は信ず、印度に於ても亦必ず然るべきことを』と。

洵に彼の言は過たなかつた。彼によつて宣伝せられたる非協同運動は、最初官憲が其愚を嗤へるに拘らず、真に江河を決するの勢を以て全印度に拡まり、深く印度人の魂に入込んだ。而して其の最も明瞭確実なる証拠は、一九二〇年十二月、ナグプールに開催せられたる印度国民会議に於ける非協同運動の決議其ものである。印度各地より選ばれたる議員等は、殆ど満場一致を以て、実に下の如き驚くべき事項を決議したのだ。

一、英国より受けたる称号を返付すること。
二、子弟を政府設立学校に学ばしめざること。
三、法律家は英国司法の為に執務せざること。
四、印度人間の係争は私立仲裁所に委すべきこと。
五、政府の公債に応募せざること。
六、英貨をボイコットすること。
七、警官及び兵士を初めとし、政府被傭者は悉く辞職すること。
八、如何なる形式に於ても、英吉利に納税せざること。

此の非常なる決議と相伴ひ、彼等は翌一九二一年初頭、英国王の名代としてデリーに於ける改革法実施後最初の印

度議会開院式に臨むことになつて居たコンノート殿下をボイコットすることをも決議した。而して之は最も徹底的に行はれ、コンノート殿下は、印度到る処に於て、真に堪え難き冷遇を受けた。

十二　非協同運動と印度の将来

ガンディに従へば、非協同運動は、之を外面的に国民に強制し得るものでない。そは国民の自覚に伴ひて、一段一段と着々行はるべきものである。而も此の運動は僅々数個月にして、驚くべき勢力を得て来た。そは国民の自覚の下に周匝に組織せられ、各県・各州・各市に支部を置き、連絡ある活動を行つて居る。多数の名士――詩人タゴールも亦其の例に洩れぬ――が、英国より与へられたる称号を返還した。高き地位に在りし人々が、職を棄てゝ此の運動に加はつた。幾万の学生が政府経営の学校を退いた。此の運動の為に投ぜられたる寄附金は、一九二一年七月末までに実に一千万ルピーの巨額に達した。

一九二一年十二月に開かる可き国民議会に於ては、若し英国が完全なる自治を与へざるに於ては、納税拒否の断行を国民に勧告することになつて居る。印度革命はかくして次第に真舞台に入る。一九二〇年以来、各地に行はれたる農民暴動、労働者罷業の頻発は、要するに来る可き大規模の印度騒乱の前駆である。

サー・ジョン・シーリー、其の名高き『英国膨脹論』に於て曰く、『若し印度に於て、微かなりとも共通の国民的感情が起り初めるならば、仮令積極的に外人を駆逐せんとの希望を抱かぬまでも、若し其の国土を維持する外人に助力を与ふるを恥とするに至らば、殆ど其日からわが印度帝国は無きものとなるであらう。吾等が伊太利に於て見たる如き国民運動が、万一印度にも起るならば、英国は墺太利ほどの抵抗も能くせずして直ちに其の勢力を失ふであらう』と。

彼の言は正しい。而して英吉利に取りて最も恐る可き印度の一により て、日に日に強くなりつゝあるのだ。吾等は詩人タゴールが、彼に就て語れる所を下に引きたい——

『彼は権力を欲せず、地位を欲せず、富を欲せず、名誉も欲せず。彼に全印度の帝座を捧げよ。彼は其上に坐する事を拒み、たゞ帝座を飾れる玉を売つて、之を貧者に施つであらう。彼に全亜米利加の富を与へよ。若し基金が悉く人類向上の為に費やし得るに非ずば、彼は之を受けないであらう。

『彼は常に唯だ与ふることにのみ心を労し、而して絶対に其の報ひを求めぬ。こは決して誇張でない。何故ならば予は能く彼を知つて居るから。

『彼は解脱の人である。若し人あり予の首を絞めるならば、予は泣いて助けを呼ぶであらう。されどガンディに於ては断じて言ふ、決して泣かぬ。彼は笑つて其絞首者に対するであらう。而して若し死すべくんば、同じく微笑しつゝ死ぬるであらう。

『彼の生活は小児の如く単純である。真理に対する彼の執着は不退転である。彼の愛は積極的且攻撃的である。この偉大なる人格が、新印度の建設に、至要の役割を努むべき運命を持つて居ることは、更めて言ふまでもない。』

印度にガンディに導かれて新しき時代に入るであらう。ガンディが徹底して印度的理想を掲げ而して印度的手段によつて、その実現の歩を進めつゝあることは、吾等に取りて深刻なる暗示を与へる。今や世界最大の革命家は、まがう可くもなくレニン及びガンディである。而して此等の両人ほど、特異なる対立をなせる性格は無い。予は更に他の機会に於て此等両者の対比によつて、露国及び印度に於ける革命の本質をも闡明し、之によつて来るべき世界革命の本質をも揣摩したいと思ふ。革命行程の印度に関しては、今は唯だ主として其の外面的発展を叙して筆を擱く。

第五　亜富汗斯坦及び亜富汗問題

一　ハビブラー王の暗殺

一九一九年二月二十日払暁、親英主義を以て名高かりし亜富汗王ハビブラー汗が、ラグマンの幕営に於て何者かの為に暗殺された。時は恰も巴里平和会議の開催中であり、且中東一帯の形勢転変極まりなき頃であつたから、ハビブラー王暗殺の飛電は、痛く世界を驚かした。而して其の真相に関して、幾多の揣摩臆測が行はれた。

亜富汗斯坦に関しては、三月初旬の議会に於て、名高き東洋通サー・リースが之に関して質問を試みたるに対し、時の教育会議総裁フィッシャーは、印度事務大臣に代つて下の如く答弁した。曰く『最近の報告によれば、故王の死後、直ちにジェララバードに於て即位を宣言せるナルズラー汗は、幾何くもなくして位を辞し、故王の第三子アマヌラー王位を継ぎ、現在はカブールに於ても、並にジェララバードに於ても格別不穏の形勢が無いらしい。故王暗殺に関聯して多数の嫌疑者が逮捕されたとの報告に接したが、犯罪の目的及び逮捕者の姓名は未だ之を詳にしない。アマヌラーとナズルラーとの関係、並に王長子イナヤットゥラーの両者に対する態度もまた不明である。最後に附言すべきは、英吉利はハビブラー王の不幸なる崩御により、真個の一友人を失つたと言ふことである。世界戦を通じて、故王の政策及び態度は、一貫して最も聯合国の為に忠実であつた』と。

其後に至り、英国及び印度の諸新聞は、故王暗殺の真相に就て、色々な記事を掲載した。其等多くの記事のうち、其年五月二十九日附で、在孟買『倫敦デーリー・クロニクル』通信員の発したる長文の通信は、特に世界の注目を惹

いた。この通信が如何なる程度まで、信を措くに足るかは疑問であるが、材料の出処は、一九一八年以来、亜富汗斯坦のジェララバードに駐在し、亜富汗の印度侵入開始当時印度に逃げ帰れる英国工兵将校マクラフリンの談話であり且この通信は、今日まで発表された記事のうち、事変目撃者の談話によれる唯一のものなる点に於て、少くとも之を紹介する価値がある。

マクラフリンの言によれば、国王暗殺の根本動機は、故王の親英主義に対する不満に在つた。若干の有力者は、世界戦なほ酣なりし頃、彼等が信仰上の宗教国たる土耳古を扶け、英国に宣戦して印度を侵略すべしと云ふ強硬なる主張を発表し、且之を遂行せんが為に一個強力なる団体を組織した。彼等をして茲に出でしめたるは、其の背後に独逸並に土耳古の熱心なる勧奨、又は助力ありしこと言ふまでもない。然るに彼等の計画を実現せんとするに当り、最も好ましからぬ障礙は、堅く親英主義を執つて動かざる故ハビブラー王であつた。是に於て此一団の排英主義者は、遂に国王暗殺の計画を立てた。

この過激なる陰謀団の主盟は、マクラフリンの語る所によれば、故王の弟ナズルラー及び故王の第三王子にして現に王位を継げるアマヌラーであり、親衛軍の有力なる軍人が、多く此の陰謀に与した。彼等の最初の申合せは、暗殺成功後はナズルラー王位を継承し、アマヌラーはカブール総督となり、当然起るべき事変後の騒乱に善処する手筈であつた。

是より先陰謀に加はれる親衛軍々人のうち、三名の将校は各々故王の王女を賜はるべき婚約が出来て居た。然るに如何なる理由ありてか、故王は容易に此の約束を実行しようと為なかつた。陰謀団の一味は、之を以て故王が彼等の陰謀を感知したものと推定した。かくて予期の準備、尚未だ十分ならずして急遽暗殺を行ふに決し、遂に凶行の目的を遂げた。

故王暗殺の目的を遂げた後、陰謀団は予ての手順に従ひ、アマヌラーは国都カブールに貴族を会合して父王の崩殂を告げ、且ナズルラーが王位を継承すべきを告げた。然るに貴族等は何故に王長子継位せずして、王弟即位するかと反問した。アマヌラーは何等の説明を与へなかつた。貴族等は、王長子が父王暗殺者に報復するの手段を講じつゝあるかと質問した。之に対してアマヌラーは王長子が何等の手段をも講じて居らぬことを告げた。之を聴きたる貴族等は、王長子は怯者なるが故に王位を継ぐに値せず、宜しくアマヌラー自ら即位すべしと主張した。かくしてアマヌラーは野心むらむらと起り、咄嗟の間に其意を決し、叔父ナズルラーとの約束を破つて、自ら国王たるべきことを宣言してしまつた。

一方カブールに於て、予定の献立が俄かに転変しつゝありし時、ジェララバードに駐屯中なりし故王に信服せる一団の兵士は、いたく故王の横死を悲み、自ら起つて暗殺者に復仇を加へんと決心し、一切の士官を放逐して『兵士会』を組織し、故王暗殺の現場に歩哨せる兵士を糺問して、その凶行者が亜富汗軍総司令官ナディル・シャーなるを確かめ、総司令官の一族を捕へて、之を極刑に処せんとした。

アマルラーは、国都に於て此変を聞き、急遽電話を以て『兵士会』と交渉し、先づ彼等の忠勇を称揚し、一切の捕縛者は之を裁判に附して厳刑に処すべきが故に、至急カブールに送致す可しと告げた。而も『兵士会』が此の要求に応じて、カブール軍隊の勢力圏内に護送し来るや、兵力を以て囚人を奪取し、直ちに之を釈放した。かくて軍司令官の一族は、大手を振つて国都に入るを得た。

アマヌラーは種々なる方法を以て軍隊の歓心を買ひ、能く彼等を懐柔するに成功した。かくて彼は確実に権力を掌握した。ナズルラーは遂に新王に対する服従を誓ひ、他の王族また之に倣つた。而してナズルラーは新王に敬意を表するため、ジェララバードからカブールに赴いたが、故王暗殺嫌疑者として直ちに捕へられて獄に投ぜられた。王長

子イナヤットゥラーも、父王の横死に処して機宜の手段を講ぜざりしとの罪名の下に、また監禁せらるゝに至つた。

国王暗殺は国家の一大事である。如何に中世的亜富汗斯坦に於てでも長く之を有耶無耶の間に放置するを許さぬ。かくて故王暗殺の現場に於て、故王護衛の任に当りし聯隊長が人身御供に上げられた。アマヌラー王は即位式挙行に際し、該聯隊長の罪跡は、証拠最も明白なりと宣告して、即坐に之を銃刑に処した。かくてハビブラー王の暗殺事件は、アマヌラーの王位獲得を以て一段落を告げた。

さてハビブラー王暗殺の真因が尚ほ五里霧中に在りし間に世界は更に亜富汗の印度侵入と云ふ報道に驚かされた。而して此の侵入の原因に就ても亦、揣摩百出の有様であつた。或は之を以て、新王が国内の紛糾を防ぐ為に、人心を外に転ぜしめんとする旧套手段なりと言ひ、或は英国が何事か為すあらんとして、其の外交的辣腕を揮つて試みたる反間苦肉の煽動に乗ぜられたるなりと言ひ、或はウィルソンに種蒔かれたる民族自決思想の一発現なりと言ひ、各人各様の臆測を試みた。而も吾等が既に述べたる所を真実とすれば、印度侵入は労農露西亜の煽動によると言ひ、各人各様の臆測を試みた。而も吾等が既に述べたる所を真実とすれば、印度侵入は国王暗殺の必然の結果であり、国王暗殺は実に印度侵入の為の必要なる序幕であつたのだ。かくて此年五月、亜富汗新王は印度侵入を実行した。印度西北境の諸部族も亦之に入込んで回教革命主義者の奮起を促し、アリ兄弟は之に応じて同志と共に奔走した。

是より先印度に於ては、ローラット法案に対する反抗、英国の対土政策に対する憤激から、排英の気勢全印度に漲り、印度教徒と回教徒と堅く提携して熾烈なる運動を開始し、パンジャブ地方に於ては、流血の惨事屢々繰返され、物情真に騒然たるものがあつた。亜富汗新王はこの事を熟知して居たが故に、印度の門は彼の為に容易に開かれることゝ信じて其軍を進めた。されど西北印度の動乱は、政府の断乎たる手段によつて一時鎮圧せられた。新王が印度国境に進軍せる時、印度政府は疾くも二十万の大軍を以て厳重に侵入に具へて居た。かくて亜富汗軍は、逃を以て労を

撃たれて敗退した。英軍の飛行機は国都カブール及びジェラバードの上空に飛び、爆弾を乱下して市民を脅した。

而して新王は和議を英国に乞はざるを得なかつた。

さり乍ら内外の形勢は、英国をして仮令戦争に勝利を得たとは言へ、従来の如き高圧態度を以て亜富汗に臨むことを不可能ならしめた。この敗戦に拘らず、亜富汗斯坦は英国によつて完全なる独立を承認せられるに至つた。一九〇七年の英露協約は当然無効となつた。亜富汗王は、印度政庁よりの補助金を失へる代り、対外交渉に関して全然英国の干渉を受けぬことゝなつた。前パンジャブ知事にして、英帝国主義の権化サー・マイケル・オドワイヤーが、英国政府の対亜政策を憤慨して、恰も勝敗地を代へたるが如しと言つたのも亦無理もない話である。

かくして亜富汗斯坦は、一九二一年春、労農露西亜と条約を結び、更に土耳古アンゴラ政府とも条約を結び、回教聯盟を実現して、中亜に於ける英国勢力掃蕩の画策に忙しい。この多く知られざる国民も、今や世界政局の舞台に一廉の役割を勤めることゝなつたのだ。

二　亜富汗斯坦及び亜富汗人

さて吾等は此の機会に於て、世人の殆ど顧みざる亜富汗斯坦の事情に就て、過去及び当来の亜富汗問題を領会するに必要なる範囲に於て、簡単なる叙述を試みたい。

亜富汗斯坦の地理的位置は、此の磽确なる山国をして、比類なき重大なる意義を有せしめる。北は露領トルキスタン、西は波斯、南はパミール高原と境を接し、英露亜細亜制覇の最後の舞台として、百年に亙る両国の角逐が間断なく此国を中心にして行はれて来た。面積は約二十四万五千方哩人口約五百万と推算されて居る。亜富汗斯坦の人民は普通アフガン人と総称されて居るが、これは決して正確なる用語でない。アフガン人とは、亜富

汗斯坦に住する諸民族の一つに与へられたる名称に外ならぬ。彼等は、恐らくセム人種に属し、現王朝は該民族より出で、人口の過半を占むる最も有力なる民族である。アフガン人に次いで勢力あるものは、もとシルダリア河の上流に住せる土耳古族より出たとせらるゝギルザイ人で、国内の商権を握つて居る。第三には、成吉思汗の侵入に際して入来れる蒙古種族の裔とせらるゝハザラ人がある。彼等は最も不羈放奔なる民であつて、常に深山の間に住み、政府の権力も彼等を束縛することが出来ぬ。以上の外、カブール及びチトラルの間に横はるカフィリスタンには、アーリヤ人種に属する多くの部落がある。彼等は多く回教を信ぜず、其の全く征服せられたるは近年のことである。カフィリスタンの名称は、不信者即ちカフィリの居処を意味する。

アフガン人が歴史的に現はれたのは、比較的新しいことであるが、当時彼等は今日の亜富汗斯坦の西境、スレイマン山中のゴル地方に住し、既に熱心なる回教徒であつた。一奴隷より起りてガズニ王朝を建設せる土耳古族の英雄サブクタギーンの子マームードは、第十一世紀初頭、其の数次の印度侵入にアフガン人を用ゐ、ラホール及びデリーを攻略せる時、回教弘布の目的を以て若干アフガン人を止めて帰つたと伝へられる。然るにマームードの子バーラムは事を以てゴルのアフガン王クトブッディンを殺したので、其弟アラムッディンは、兄の為に復仇戦を興してバーラムを破り、当時中亜の最も美しき都の一なりしガズニを灰燼に帰せしめ、亜富汗ゴル王朝の創設者となつた。其子シャハブッディンは、印度に侵入し、ラージプタナに回教国を建て、其他のアフガン諸族も亦続々印度に侵入して国々を建てた。其等の一なるロディ王朝は、第十五世紀に於てデリーを征服し、覇を西北印度に称へたが、一五二六年、モーガル帝国の建設者バベルの為に亡ぼされた。

アフガンの諸英雄が斯くの如く印度の沃野に運命を開拓しつゝありし間に、今日の亜富汗斯坦に止まるアフガン人及び其他の諸民族は、吾国の戦国時代に見るが如く、夫々首長を戴いて各地に割拠して居た。而して是の如き状態

は当然波斯勢力の東漸を招いた。

かゝる間に、アフガン人中のアブダリ族、及び土耳古人中のギルザイ族が、前者はヘラートを中心として、最も勢力を得るやうになつた。第十八世紀初頭以来、此等両族は、交々亜富汗斯坦に覇を称して来たが、名高き波斯王ナディル・シャーの為に征服された。幾もなくナディル・シャーの歿後、アフガン人を糾合して波斯勢力を掃蕩し、四度印度に侵入して掠奪を行ひ、其の死するまでにヘラートよりストレジ河、バクトリアより印度洋に至る広大なる国家を築き上げた。彼は自らアーメッド・シャー・ドゥラニと称し其国はドゥラニ王国と呼ばれる。シャーは君主の意味、ドゥニラは『時代の宝珠』の意味である。而して爾来アブダリ族は、ドゥラニ族と呼ばれるやうになつた。

然るにドゥラニ王国は、彼の死と共に崩潰した。多年の血腥き争闘の後、第三子マームード・シャーが、有為なる宰相ファテー汗の補佐によつて、最後の勝利を得たけれど、ファテー汗の声望を恐れて之を殺した為に、汗の十一人の子等が、直に復仇戦を起こし、マームード・シャーを斃してしまつた。

十一人の子等は亜富汗斯坦を彼等の間に分配し、シルダール（諸侯）と称して割拠したが、爾来三十年の間、彼等の間に絶えざる制覇の争ひが続けられた。彼等は、或は波斯と、或は露西亜と、或は英吉利と結んで、互に他を亡すべく、戦闘・陰謀・暗殺を事とした。而も最後の勝利はドスト・ムハムマッドの手に帰した。彼は其の才幹と胆略とを以て、終に全亜富汗斯坦を統一して、アミール（王）の位に即いた。

然るに亜富汗斯坦を挟んでの英露の角逐は、此頃に至りて次第に烈しきを加へて来た。而して英国は、其の勢力を確立する為に、一八三九年、所謂第一アフガン戦争を起し、アーメッド・シャーの弟シャー・シュージャーを援け、

ドスト・ムハムマッドを王位より逐ふた。然るにアフガン人の新王に対する反抗甚しく、終に一八四一年の大乱となり、英吉利は再びドスト・ムハムマッドを即位せしむるの止むなきに至つた。

一八六三年、ドスト・ムハムマッド死し、遺言によつて其子シェル・アリ位を継いだ。王長子アズファル汗の子アブドール・ラーマン汗、之を不服とし、兵を挙げて一度びシェル・アリをカブールより逐つたが、北境に事ありて出征中、シェル・アリの為にカブールを奪回せられ、逃れてブハラに赴き、次でタシュケンドに亡命して、露国カウフマン将軍の下に隠れた。露西亜政府は、その南下政策に利用すべく彼に毎年二万五千留の手当を与へることとした。

シェル・アリは、露国の南下に備ふるため英国と握手せんとした。而も英国の冷淡なる態度を憤り、却つて露国に結ばんとし、英国使節のカブールに来るを拒み、一八七八年、第二アフガン戦争の勃発となつた。シェル・アリは、ロバーツ将軍の率ゐたる英軍に敵し兼ねて北方に逃れ、翌年亡命中に死した。隠忍十年の長きに亘れるアブドゥル・ラーマンは、故国の騒乱を見て時到れりとなし、三千の兵を糾合してオキサス河を渡り、亜富汗斯坦に乗込んだ。アフガン人は雲集して彼の軍旗の下に起つた。而して一八八〇年、英国は遂に彼の主権を承認した。

三　英雄アブドゥル・ラーマン汗

アブドゥル・ラーマン汗は疑ひもなく一個の英雄であつた。彼は二十年間の治世の間に、封建割拠の亜富汗斯坦を統一ある専制軍国に造り上げた。彼以前のアミールは、要するにカブール王に過ぎず、有力なる封建諸侯の旗頭たるに過ぎなかつた。然るに彼は其の縦横の才略と、斗の如き胆とを以て、次第に有力なる諸侯を高圧又は懐柔し、終に全亜富汗斯坦に於てカブールの主権を脅威する一個の勢力だもなきに至らしめた。

彼は此の目的のために先づ、亜富汗常備軍の建設に全力を注いだ。彼は必要に応じて諸侯より兵士を徴集する従来

の封建軍制を根本より改め、自ら統帥し、而して自ら之を支給する常備軍の編制に従ひ、印度政庁より受けることゝなつた補助金は、全部之がために注ぎ込んだ。而してカブールに毎週大砲二門・小銃百七十五の製作能力ある兵器廠を建てた。而して其の軍隊の行動を迅速ならしむる為に、カブールより西北境、並にオキサス河に至る道路、ジェラバードよりバダクシャン及びカフィリスタンに至る道路を開いた。彼は斯くして築上げたる武力を背景として、武断専制の政治を敢行したのだ。

彼の性格及び政治を想察せしむる幾多の逸話が、吾等に伝へられてゐる。露軍長駆して国都カブールに入らんとするに際し、亜富汗軍が露軍の為に破られし時のことである。露軍長駆して国都カブールに入らんとすると云ふ風聞を蒔き歩いた一人の男が捕へられて彼の前に引出された。彼曰く『露軍追りつゝあると言ふか。よし〳〵此男を彼方の高塔の頂辺に連れて行け。そして露軍の来着を見届けさせろ。見届けるまで食物をやるな』と。かくて此男は、遂に高塔の上で餓死した。彼はまた盗賊を少くするために、物を盗める者は、其の手を截断すると云ふ法律を励行した。ダドゥと云ふ名高き強盗が捕へられた時、彼は海抜八千呎のラタバンド城の頂上に柱を立て、鉄籠の中にダドゥを入れて其柱に吊るし、之を餓死させた。而も是くの如き刑罰を励行せるが故に、国内の通行が漸く安全になつて来た。

アブドゥル・ラーマンは、英露両国に介在する自国の危険を明瞭に意識して居た。而して露国より来る危険は積極的であり、英国より来るものは、印度防衛の必要よりする消極的危険なるを知つて居た。故に彼は、心に英国を憎んで居たけれど、之と結んで露国の侵略に当るの策を取つた。彼は亜富汗斯坦を、大いなる湖に譬へ、自身を湖上の白鳥に譬へた。湖の此岸には、一頭の老虎が、目を輝かして待構へて居る。而して彼岸には、一群の餓狼が水辺に彷徨する。白鳥が一方の岸に近づいた時、老虎は其の前足を伸ばして羽をむしり取つた。他方の岸に近づけば、狼群は白鳥を寸裂して餌食とせんとした。かくて白鳥は、両岸の敵を免れるため、常に湖心に泛ばざるを得なかつた。

かくの如き政策によつて、彼は啻に狼虎の餌食たらざりしのみならず、却つて狼虎を反目嫉視せしめ、其間に在りて能く国家統一の大業を成就した。一九〇一年彼死して王位を継承したのが、吾等が最初に述べたるハビブラー汗である。

四

英露協約による亜富汗問題の一時的解決

亜富汗斯坦が、アブドゥル・ラーマン汗の鉄腕によつて、統一ある軍国組織を与へられたことは、餓狼に、夫々異れる影響を及ぼした。亜富汗斯坦は等しく英露を憎む。されど前者より来る脅威は消極的にして、後者よりのは積極的なるが故に、夷を以て夷を制する小国の常套手段より、親英政策を執つて居る。この関係が持続される限り、亜富汗斯坦が強国となつたことは、それだけ大なる障壁が露国南下の途上に築かれたものである。従つて英吉利は、アブドゥル・ラーマン汗の事業を喜び迎へた。而して其後を継げるハビブラー汗の心を攬り、父王の政策を守らしめんとした。

然るに露西亜は、当然亜富汗斯坦の強大を喜ばなかつた。その強くなればなるだけ、南下は困難となつて来る。固より露西亜は、アブドゥル・ラーマンが、軍国組織の実現に傾倒しつゝありし間に、亜富汗国境に於ける軍事的地位を強大にすべく努力して来た。そはトランス・カスピア鉄道の支線を、最も無遠慮に亜富汗国境クシュクに突進せしめ、且一旦風雲動けば、直に之をヘラートに延長すべく、必要なる鉄道材料を此地に準備した。而も今や露西亜は、之を以て満足出来なくなつた。蓋しトランス・カスピア鉄道は、欧羅巴に於ても亜細亜に於ても、直接に幹線との聯絡がない。かくて露西亜は、オレンブルグとタシュケンドとを結んで、西比利亜鉄道とトランス・カスピア鉄道とを聯絡した。これが露国南下政策のために、非常なる軍事的価値を有することは、何人の眼にも明瞭である。

英国は露国の進出の準備を見て、愈々亜富汗王を籠絡するの必要を感じた。かくて一九〇四年暮、サー・ルイス・デーン一行の使節が、印度政府からカブールに派遣された。ハビブラー汗の父王の条約を更新すること、五割を増加せる補助金を受くることに同意し、且補助金は国防費に用ふべきことを告げ、一九〇五年三月二十一日、所謂デーン条約が調印された。使節一行のカブールを去らんとする前夜、王は一行を晩餐に招待した。亜富汗王が異教徒と食を共にせるは、此時を以て嚆矢とすると言はれて居る。而して一九〇七年には、王は印度政府からの招待に応じて印度に赴き一面には至らざるなき歓待を受け、他面には強大なる陸海の武力を目撃させられて帰つた。爾来ハビブラー汗は、ラーグマンの野営に於て非命に斃れしまで、最も忠実なる英国の友であつた。

同じく一九〇七年、英露両国は、多年の角逐を暫く中止すべく、名高き英露協定を締結し亜富汗斯坦に関しては下の如く協定した。

一、英国政府は、亜富汗斯坦に於て、単に平和的旨意を以て、其の勢力を行使すべきことを約す。

二、露国は亜富汗斯坦を以て、露国の勢力範囲外に在ることを承認し、及び亜富汗斯坦に代表者を派遣せざることを約す。

三、一九〇五年三月一日カブールに於て調印を了せる条約に順み、英国は亜富汗斯坦の如何なる部分をも併合又は領有せざること、及び其の内政に干渉せざることを約す。但し亜富汗王に於て、前記条約により英国政府に与へたる約束を履行せざる時は此限に非ず。

四、辺境に駐在する露国及び亜富汗斯坦の官憲は、政治的性質を有せさる地方的問題に関し、之を協定せんがために、直接交渉することを得。

五、両国政府は、商業上機会均等の主義を維持することを宣明す。

叙上の協定事項によつて知らるゝ如く、露西亜は、該協約に於て、波斯に関しては、殆ど代償なしに英国に譲歩した。而も之によつて、亜富汗問題は、少くも一時解決を与へられ、以て世界戦に及んだのである。

第六　復興途上の波斯

『唯だマコーレーの史筆、ヴェレスチャギンの彩管のみ、能く此旧国の没落に伴へる急転の場面を、如実に描出することが出来るであらう。其の場面々々に於て、二個の強大なる而して文化高き基督教国と自称する国家が、真実と体面と礼節と而して法律とによって、緩急如意の役割を演じた。少くとも其の一国は、自国の政治的欲望を遂ぐるため、而して波斯をして到底革新の希望なからしむるため最も野蛮なる惨虐を敢てするに躊躇しなかった』――W・M・シャスター『波斯の絞首』第七頁。

『波斯国民は、巴里に於て、若し国の大小を問はず、万国これに加はりて、平等なる権利と資格とを享有するに非ずば、国際聯盟は、政治的並商業的帝国主義を蔽ひ隠す偽善の上衣に過ぎざることを指摘した。波斯が提出せる十箇条の要求は、一切国民の独立の必須条件である。その孰れの条項も、之を非議し又は之を保留するを許さぬ』――H・A・ギボンス『亜細亜の新地図』第三〇七頁。

一　現代波斯史の第一頁

現代波斯史の第一頁は、一八九〇年、一英国会社が波斯に於ける煙草専売権を獲得せる時に当り、国民の憤激、発して各地の暴動となり、遂に皇帝並に政府をして、全然国民の要求に屈服せしめた事件を以て始まる。

時の皇帝は、成吉思汗の後裔と称せる韃靼の一族より起り、一七九四年現王朝を創設して、太古イラン帝国以来の呼称たる『諸王の王（シャー・イン・シャー）』の尊号と、人民に対する絶対無限の権力とを継承せるカジャール家第四代の君主ナズィルッデ

インである。帝は、一八四八年即位以来、再度欧羅巴に漫遊し、夙に欧化主義を抱持して、種々制度の改革を企てゝ居た。さり乍ら国帑窮乏せる時に当つて試みたる、豪奢なる欧洲漫遊並に改革事業は、莫大の出費を要したるが為に必然外債の激増を招き、従つて其の債主たる英露両国に、各種の特権を賦与したるため、次第に内政干渉の口実を与ふるに至り且一方に於ては苛酷の収斂を行つたので、不平の声、漸く国内に昂まつて来た。

恰も此時に当つて一八九〇年、波斯皇帝は更に一英国会社に対し、毎年十五万磅の贈与、並に毎年純益の四分の一の配当を受けると云ふ条件の下に、五十年間波斯に於ける煙草栽培・製造・販売・並に輸出の全権利を賦与した。該会社は Imperial Tobacco Corporation なる名称の下に、六十五万磅の資本を以て営業を開始することとなり、皇帝への贈与を含む一切の支出を差引くも、一年の純益優に三十七万五千磅、即ち資本に対する五割以上の利益を収め得る見込であつた。

然るに国民は、波斯の最も重要なる産業が、一朝にして外人の独占に帰せんとするを見て、之を以て皇帝が私慾の為に、国土並に国民の権利を、外人に売るものとなした。かくて反抗の気勢忽ち全国に瀰漫し、国内の煙草商は悉く其店を閉ぢ、回教僧侶の指揮の下に、驚く可き一致団結を以て禁煙同盟を実行し、且各地に暴動の勃発を見るに至つた。而して国内不穏の形勢は、一八九一年一月四日のテーラン大暴動に於て、其の絶頂に達した。皇帝及び会社は、該約定の到底履行し難きを知り、種々交渉の結果、同年四月五日、皇帝は五十万磅の賠償金を提出して、煙草専売権を回収することに落着した。而も波斯の財産は、固より是くの如き金額を支払ふ余裕がなかつたので、如上の金額は波斯の関税を担保とし、Persia から借入れることゝなつた。

後にソールスベリ卿が英国議会に於て言明せる所によれば、該事件の背後には露国の陰謀伏在し、就中タブリスに

於ては明かに波斯人民の暴動を煽揚したらしく見える。蓋し波斯に於ける英露の角逐は、一朝一夕のことではない。従つて英国勢力の波斯に発展するを欲せざる露国が、該事件に際して、陰に人民並に僧侶を使嗾し、以て英国の利権獲得を妨げんとせることは、固より怪しむに足らぬ。唯だ吾等の銘記すべき一事は、仮令露国の煽動あるにしても、若し波斯人其のものに、国民意識の尚未だ亡びざるものあるに非ずんば、決して斯くの如き挙国一致の運動が起り得ぬと云ふことである。要するに該事件の終始は、近代波斯の難局を、極めて典型的に表現せる点に於て、最も吾等の注意を惹く。即ち此の事件は

一、専制君主の横暴に対する国民の反抗
二、外人の利権獲得に対する国民の憤激
三、波斯に於ける英露両国の確執
四、英露の圧迫に対する波斯の無力
五、極度の困難に陥れる波斯の財政状態

を、最も明白に暴露せるもの。現代波斯史の一切の葛藤は総じて如上諸点を反映せざるはない。

二　国民運動の勝利

既にして一八九六年五月、国民の怨府たりし皇帝は、キルマンの商人にして、革命党の一領袖たりしミルザ・レザの為に暗殺せられ、皇太子ムザッファルッディン、父帝の後を継いでカジャール家第五代の皇帝となつた。而も波斯国民は、依然たる専制君主を、新帝に於て見た。国土を以て自己の私有財産と思へる皇帝は、収斂と外債とによりて、豪奢栄華の生活を事とし、一方益々民心を離反せしめ、他方愈々外国勢力を国内に招致した。皇帝が、利権を担保と

して一八九九年より一九〇三年に至る間に、テーランの露国銀行より借入れたる負債は四百万磅を超え、而も其半は皇帝自身の奢侈の為に費消する所となつた。加ふるに前後三回（一九〇〇年・一九〇二年・一九〇三年）の欧洲漫遊は、最も多額の出費を要し、為に益々財政を困難ならしめた。而して此間に於ける英露の角逐は日に激烈を極め、両国をして争ふ多少の互譲により て波斯を処分するの利益なるを思はしめ、秘密裡に交渉の歩を進むるに至らしめた。

是くの如き時に当り露国に於ける革命運動は、遂に一九〇五年八月、露国皇帝をして専制政体に代ふるに立憲代議政体を以てするの詔勅を下さしめ、翌一九〇六年、第一期議会の召集を見るに至つた。この強隣に於ける民衆の勝利は、多年圧制に苦しみたる波斯国民に、深甚なる刺激を与へ、玆に所謂青年波斯党の指揮の下に立憲国民党を組織して、激烈なる憲政運動を開始し、之が為に暴動各地に起り、形勢俄かに険悪となつたので、皇帝は止むなく一九〇六年八月五日を以て取敢ず仮憲法を発布し、議会開設の詔勅を下し、直ちに議員の選挙を行ひ、十月七日、宮殿内に於て盛大なる開院式を挙ぐるに至つた。

此時に当り英露両国は、如何なる企図ありてか、波斯政府に向つて、改革を容易ならしむ為の費用四十万磅を、両国共同にて貸与す可しと提議した。第一回の波斯議会が、劈頭第一に討議したのは、実に此の英露借款の問題であつた。而して彼等は、之を以て国家を損ずること最も甚しきものとなし、全会一致を以て否決し去り、之に代ふる波斯国立銀行を起し、内債を以て必要なる経費に充つるの計画を立て、且従来賦与したる特権を英露銀行より回収するの方針を発表した。

かゝる間に、ムザッファルッディン帝は、一九〇七年一月四日、病を以て崩じ、皇嗣モハメッド・アリ帝位を襲うた。然るに新帝は、モルガン・シャスターに従へば、波斯歴代の皇帝中、最も陋劣悪虐なる君主であつて、初めより臣民を憎悪侮蔑し、且奸悪なる一露国人を私教師とせる因縁によつて、容易に露国政府の傀儡となり、私慾の為に露

国の後援を恃んで国民権利を蹂躙せる暴君であつた。従つて皇帝は、即位当初より直に議会と衝突した。

然るに此年八月三十一日、英露両国は露都に於て所謂英露協約を締結し、恣まゝに波斯に対する各自の勢力範囲を定め、九月四日、突如之をテーランに於て発表した。国民は、波斯地図が一朝にして其の色彩を異にせるを見て、驚愕し悲憤した。而して皇帝対議会の反目は、之によりて激甚を加へた。波斯に於ける立憲政治の樹立、波斯内政の改革を以て、自家に不利なるを認めたる英露両国は、此の対立を利用して暗々裡に皇帝並に之を囲む保守主義者を援助した。而して其の結果、一八〇九年六月二十三日のクーデタとなり、皇帝は、露国陸軍大臣リアコフをして、親衛コサック騎兵旅団を率ゐて議会を包囲せしめ、武力を以て之を解散し、且憲法を廃止するに至つた。

国民は皇帝の暴虐に憤激した。叛乱が到処に勃発した。而も争乱約一年の後、勝利は遂に国民党により帰した。一九〇六年七月十六日、露国公使館に蒙塵して、英露両国旗の下に保護せられたる皇帝は、国民党によりて廃位を宣せられ、皇嗣アーマッド・ミルザ十二歳の幼年を以て帝位を継ぎ、カジャール家の長老アザドゥルムルク摂政となり、直ちに議会を召集して、此年十一月其の開会を見るに至つた。而も新しき波斯は、一方憲政恢興に尽力せる国民党首領の間に意見の扞格あり、他方露国が廃帝の再立を図りて陰険なる干渉を試むるありて、種々なる困難に遭遇した。而して一九一一年に至り、露国は密かに廃帝を援けて波斯に侵入せしめ、英国と共に陰に陽に之を後援したが、遂に撃退せられて其意を果たさなかつた。

三　英露両国の波斯干渉

波斯は内外の難局に処しつゝ、着々国政革新の歩を進めた。彼等は司法内務の両省に仏蘭西人を傭聘し、憲兵制度改革の為に瑞典将校を傭聘した。而して彼等は、波斯振興の第一条件が、財政の整理に在るを知り、一九一一年、モ

ルガン・シャスター以下数名の米人を招聘した。シャスターは波斯復興に対する深甚なる同情を以て来任した。彼は先づ英露協約の根本的研究を試みて、波斯は其の内政に関し、決して英露の干渉を受く可きものに非ざることを明にし、進んで波斯財政に向つて徹底せる改革を企て、議会並に国民の非常なる信頼を得て、着々計画を実行せんとした。彼は、波斯の現状が、甚しく混沌疲弊せるに拘らず、若し不当なる外来の圧迫がないならば、決して再興を不可能とせぬことを見た。彼の観る所に従へば、波斯は四千万円の内国公債によつて、先づ対露公債を償却し、其の残額を地籍簿の調製・人口調査・道路修築・潅漑工事・探鉱費等に使用し、一方税制を整理し、他方産業の発達に努めるならば、何等の困難なくして、波斯の歳入は直に九千万円の増収を見ることが出来たのだ。

さり乍らシャスターの真摯なる努力は、必然英露の喜ばざりしところ。シャスターは露国の為に操縦されて、波斯の為には極めて不利なる、露国の為には不当に有利なる関税率を定めたる白耳義人ノースの施設に向つて、根本的改革を着手し、之が為に露国の激しき反抗に遭つた。次で新税法を励行せんが為に、納税を肯んぜざりし一皇帝の財産を没収するに及んで、露国は遂に兵力を以て干渉を敢てした。而して之と同時に、最後通牒を波斯政府に送り、シャスターを免職すること、向後外人を傭聘する場合は、予め英露公使の承諾を経べきこと、並に事件に際して派遣せる軍隊の費用を賠償すべきことを要求した。

波斯政府並に議会は、極力この横暴なる要求を拒絶するに努めた。而も無力如何ともす可からず、遂に全然屈服するの止むなきに至り、シャスターは在職僅か八箇月にして、恨を呑んで帰国せざるを得なかつた。

一九〇七年の英露協約は、これまで波斯政府に於て、正式に之を承認することを肯んじなかつたのであるが、英露両国は、此機に乗じて波斯を強迫し、一九一二年二月十八日、遂に政府をして承認を余儀なくせしめた。爾来波斯は全く英露の掌裡に翻弄され、彼等の意に適せざる政府は随時之を倒し、甚だしきは毎月内閣の更迭を見ることさへあ

つた。国民が血を以て獲得せる憲法は蹂躙せられ、議会は最早召集せられず、波斯は全く復興の希望を失へるかの如く見えた。

四　波斯国力疲弊の原因

財政の窮迫が、常に革命又は亡国の直接原因となつて居ることは、東西古今に共通である。波斯に於ける収税方法は、極めて原始的たる十分一税であつて、生産又は収獲高の一割を徴収するを以て原則とする。而も納税は現金のみを以てするのでない。地主及び農民は、小麦・大麦・米・乃至其他農産物を納めるのである。故に政府は、毎年の歳入に関して、啻に正確なる計算を行ひ得ざるのみならず、納付せられたる農産物の保存並に処分に、非常なる困難を感ずる。

波斯は徴税の目的を以て、全国を十八分区に分ち、各区に一名の収税長官がある。区は更に小区域に分たれ、各区域に同じく一名の収税官がある。該区劃は更に若干区劃に分たれ、各区は町村長である。さて各区の収税長官は、毎年一定額の現金並に農産物を徴収して之を中央政府に納めねばならぬ。この最後の収税係而も中央政府は、各区の財源に就て、何等精確なる知識を有せず、従つて収税長官が如何にして租税を徴収するかをも知らぬ。而して収税長官其人も亦各区の財源に関する知識なく、単に収税官に納付する金額並に農産物を受領するだけである。尤も収税長官及び収税官は、租税台帳（Kitabcha　小手帳の意味）を有つて居て、之によつて徴税を行ふのであるが、該台帳は調製以来久しく年代を経たるもの。当時は繁栄なりし村落にして、今は極めて衰微せるものあり、又は微々たりし村落にして、今は繁栄に赴けるものも少くない。而も租税台帳は依然として旧の如く、調製当

時の税額を各村に課する故に、必然人民の負担に、不当なる軽重の差を生ぜざるを得ぬ。

加ふるに租税台帳は極めて難解の書体を以て、小紙片の上に手写せるもの。之を読むには特殊の素養を必要とし、現にムスタウフィスと云ふ一階級のみ、能く其文字を解して居る。而して大蔵省には、ムスタウフィス局があつて、七乃至八名のムスタウフィスが各数区の税務監督の任に当つて居る。其の俸給の如きは、一箇月百五十円内外に過ぎないが、シャスターの言に従へば、在職数年にして、巨万の富を積むを常とする。

事情かくの如くなるが故に波斯政府は、其の歳入に関して精確なる知識を有せず、また其の租税が、如何に国民によりて徴収せられつつあるかを知らぬ。従つて各地の収税官は種々なる口実の下に徴収の困難を訴へて、政府の要求する定額を納めない。而も政府には、其の実否を糺明する手段がない。加ふるに波斯に於ては、財産隠匿又は虚偽の申立を罰すべき法文もないので、租税収納に関する人民、並に収税官の不正を取締ることが殆ど不可能となつて居た。

波斯に於ける租税以外の財源としては、関税が唯一のものである。其他郵便電信及び旅券下附による若干の収入はあるけれど、極めて少額にして言ふに足らぬ。而して波斯の関税制度は、ムザッファルッディン帝時代に、白耳義人ノースが、露国政府の傀儡となつて組織せるもの。その税率は不当に低く、而も列国の合意を得ざれば、之を改訂することが出来ないのだ。例へば一九〇九―一〇年度波斯輸出入額は、約一億四千六百四十万円であつて、之に対する関税総額は、約六百四十五万円、即ち四分五厘にも達しない。而して貿易額の過半を占むる露国貨物に対する税率は過当に低く、其主要輸入品なる砂糖に対して三分、石油に対しては実に五厘の従価税を課したるに過ぎぬ。

さり乍ら、波斯の貿易は年々順調に発展して来たから、若し之による収入が、悉く政府の手に入るならば、仮令ノースが露国の意を受けて制定せる税率が如何に低いにもせよ、猶且主要一財源として、波斯政府当面の急を救ふに足

る。然るに波斯の関税は、英露両国の借款に対する担保となつて居たので、毎年利子並に最低償還額を引去られた後には、僅々百十万円を剰すだけとなり、而も此の僅少なる残額のうちから、露国将校によつて組織せらるゝコサック騎兵旅団の経費を支出せねばならぬので、真に手に入るのは漸く六十万円内外に過ぎなかつた。

波斯の外債は、英露両国が利権獲得を目的として貸附けたるもの。数字の上では左まで巨額でないけれど、波斯之が為に国家の体面を汚すが如き義務を負はせられたのである。世界戦前に於ける波斯の外債は一九一三年の英国青書によれば英印借款約七百五十万円、英国銀行 Imperial Bank of Persia 借款約千二百五十万円、即ち英国に対する債務約二千万円、次に露国政府に対する公債約三千二百五十万留、露国銀行 Banque d'Escompte より借り入れたるもの約一千百一万円であつた。而して露国が、特に公債額面を留で表はしたのは、公債の利子並に元金支払は露貨を以てするの契約を強いた為であつて Banque d'Escompte は、其の両替率を定めると云ふ驚く可き権利を与へられたのだ。

かくて、英露両国の陰険悪辣なる干渉を絶滅せざる限り、波斯恢興は殆ど絶望であつたのだ。例へば前に挙げた親衛コサック騎兵旅団に就て之を見よ。一八八二年、ナズィルッディン帝時代に、露国陸軍大佐チャルコフスキによつて編制せられつゝありし人民の反抗に対し、皇帝が一身の護衛に備ふるに在つた。旅団の兵力は、千五百乃至千六百名を定員とし、其経費として毎月約五万四千円を、関税収入から支出することに定められたのだ。而して五万四千円の経常費は、固より定員に対して定められたので、定員以下の場合は、之に応じて費用を削減されることになつて居た。然るにコサック旅団の兵力は実際に於て千名を超えたこと無かつたに拘らず、露国士官は常に経費全額を支給せられ且毎年臨時費として十万乃至十三万円の支出を強要して居た。波斯の心あるものは、此等外国の傭兵が常に皇帝の圧制、露国の陰謀の為に利用せられ、国家の為に百害あつて一利なき

を知悉して居たけれど、若し之が廃止を実行すれば、必然露国の激怒を買ふべきが故に、また如何ともすべからざる状態にあつた。

五　世界戦中の波斯

形勢斯くの如き時、端なく世界戦が勃発した。波斯国民は英露両国が、強敵独逸のために敗られんことを心の底から希望した。殊に土耳古が参戦するに及んで、波斯の国論は此期に乗じて多年の恨を英露両国に晴らすべしと云ふに傾き、政府部内に於ても之に賛成する者あつたが、結局戦争に参加せざるを有利とする説勝利を占め、波斯政府は局外中立を中外に宣言した。

波斯の局外中立が、英露両国に取りて好都合なりしは言ふまでもない。而も両国は、当初より全然波斯の中立を無視した。実例を挙ぐれば波斯政府は、中立宣言後幾くもなく、露国に対して其の軍隊を波斯国境より撤退せんことを求めた。その理由とする所は、若し露国軍隊が波斯に駐屯するに於ては、波斯は露土両軍の戦場たるに至る可しと云ふに至つた。されど露西亜は、啻に此の正当なる理由に基ける正当なる要求を拒絶せるのみならず、却つて波斯駐屯軍を増員し、波斯領土を対土戦争の策源地とした。中欧諸国の領事並に国民は、悉く高架索に追放せられ、独逸の商館は没収された。而して土耳古軍は波斯が憂ひたる如く、其の東境を脅威せる露軍を掃蕩すべく、果してアゼルバイジャンに侵入した。かくて波斯の最も繁栄なる一州は、露土両軍の戦場となり、見るかげもなく荒らされた。同時に英国も亦、土耳古軍討伐を口実として、其の軍を波斯湾岸の諸港より上陸せしめ、西南波斯も亦之が為に兵火に苦しむことゝなつた。既して一九一五年、フサイン・ラウフ・ベイは、土耳古の大軍を率ゐて西部波斯に侵入し、各地の酋長を殺し、ケーレンド町を焼払つた。スンジャビス族の如きは、中立を守りて土耳古に味方せざりし理由を以て、

多数の老幼男女が虐殺された。

同盟国側も、波斯の中立を眼中に置かなかつた。而して国民の感情は日に〳〵排露反英に傾いて暴動が日に甚しくなつた。波斯の抗議は、毫末も顧みられなかつた。露国は、是くの如き形勢を見て、一九一五年の暮軍隊をテーランに進め、土耳古大使をテーラン郊外に逮捕し来た。露国は、是くの如き形勢を見て、一九一五年の暮軍隊をテーランに進め、土耳古大使をテーラン郊外に逮捕し常套の高圧手段を波斯に加へんとした。於是皇帝及び政府は、露国の高圧を免るべく、首都テーランを撤退し、土耳古国境に蒙塵せんとした。而して極力之を慫慂せるものは独逸公使であつた。彼は波斯皇帝及び政府を抱込んで、否応なしに波斯を同盟国側に参加せしめんと企てたのだ。英露両国は、薬の効き過ぎたるを見て、今更の如く狼狽し、急に両国公使をして、露国軍隊は決して首府占領の意図を有せずと保障せしめ、辛うじて波斯皇帝の独逸に奪はるるを防いだ。

かくの如くして波斯は次第に窮地に陥つた。波斯は両軍の戦場となり、何の得る所もなくして戦争の一切の悲惨を嘗めさせられた。町々は破壊せられ、人民は殺され、飢饉と財政の逼迫とに四苦八苦した。

に去就を決して戦争に参加することが、其の災厄を軽くする唯一の途なるを思ひ、遂に心ならずも聯合国側に参戦するに決し、一九一五年十二月、之を英露両国公使に提議した。両国公使は、波斯政府の提議を、夫々本国政府に伝達することを約束した。波斯は両国よりの回答を待つた。而して翌一九一六年八月一日待ちに待たる回答に接した。而も見よ、其の回答は、実に波斯に対する英露両国の最後通牒であつた。両国は、波斯政府に向つて、英露両軍の波斯占領を承知すべきこと、波斯に於て兵員を徴募し、北方に於ては露国将校これを指揮すること、波斯は、此の意外なる通告に対し、敢然その悪虐無道を斥全然英露両国に於て之を行ふべきことを要求した。而して波斯は、悲憤の涙を呑んで、暫らく英露両国の意の侭になるより外に、何の良策もなかつた。

窮すれば通ずとは、いみじき諺である。而して此の諺は、特に波斯の為に出来たかと思はれるほど、適切に波斯近時の国情に当てはまる。一九一六年八月の英露通牒によつて、最後の窮地に沈淪せる波斯は、恰も思ひも寄らざりし活路を得た。

六　復活せんとせる波斯

露国三月革命の直後に成立せる政府は、リヴオフ公爵の内閣である。其の中心人物は法相ケレンスキであつた。而して此の新内閣は革命の翌月、即ち四月九日を以て、露国は従来の侵略主義を放棄せることを宣言し、他国の領土を奪ひ、其民を奴隷とする旧来の政策を一拠して、民族自決の権利を基礎とする恒久的平和の確立に努力すべしと声明した。而して波斯に対する従来の態度を一変した。

波斯国民が扑舞して之を喜んだことは言ふまでもない。彼等は各地に『自由祭』及び『憲法祭』を催して、波斯復活の日到来せるを祝した。而して新に赴任せる露国官吏、また波斯国民と共に列席し、タブリスに於ける祝祭では、一露国将校が、実に下の如き演説をやつた。曰く『旧露国を怖れて、諸君は十一年間自由祭を行はなかつた。而も諸君の恐れたるものは無くなつた。吾等は平和を愛する。吾等も亦諸君と同じく、旧き毒蛇ツアーの為に蹂躙されて来たのだ。吾等と諸君とは、啻に善隣の民たるのみならず、また自由に於ける同胞でなければならぬ』と。而して国民運動の中心勢力たる青年波斯党は、国民を覚醒し奮起せしむ可く最も活躍し、国民に向つて下の要旨を飛檄した。

『同胞よ。吾等が翹望せる自由の日は遂に来た。此時に於て吾等は、久しく吾等の権利を蹂躙し来れる邪悪腐敗の官僚を懲罰せねばならぬ。同胞は、此等国民の敵、国民の叛逆者を放逐し、彼等の壟断せる仕事を、愛国心と勇気とに充てるイランの青年に委ねゝばならぬ。自己の地位を維持せんが為に、国家を外人に売る如き、陋劣なる閣僚を許

してはならぬ。叛逆を知らず、利己の為に国家を犠牲とする事なき青年に権利を与へよ。議員選挙の成敗は、懸りて同胞が自覚して賢明なる措置を執るや否やに在る。』

かくの如くにして、露国に擁立せられ、従つて露国の傀儡たりしスィルダール内閣倒れて、全波斯に漲らんとした。而して議会の成立となり、十一年間有名無実なりし憲法は復活し、議会は召集せられ、希望の光、一方露国に於ては七月ケレンスキの穏和社会党内閣の成立を見、次で十一月革命によつてレニン執権の下に労農露西亜の出現となつた。而して労農露西亜が、従来の資本的侵略主義を、徹底して否認せることは呶々を要せぬ。その対外政策を最も無遠慮に表明せるものは、此年十二月二十六日附政府官報を以て発せられたる命令である。曰く

『国民委員会は、無産労働者の国際的団結主義及び万国労働者の同胞主義を基礎とし、戦争並に帝国主義に対する抗争は、国際的規模を以てして勝利を得べしと思惟するが故に、国民委員会は、各国労働運動の極端なる国民無差別に対し、金銭及び其他出来得る限りの援助を与ふる必要を認む。而して其の露国に対する交戦国なると、同盟国なると、また中立国なるとは敢て問ふを要せず。』

国民委員会は、此の目的を以て、革命的国民無差別主義運動のために二百万ルーブルを支出し、之を外務委員会及び外国駐在代表者に処分せしむ』

かくて、翌一九一八年一月十四日、外相トロッキは、波斯政府に通牒して、英露協約を初めとし、波斯に対して各種の負担を課せる一切の条約を破棄し、ツアー政府が波斯より奪へる一切のものを還附し、固より波斯に駐屯せる露国軍隊を撤退せしむべきことを声明した。

かくの如くして波斯国民の為に、新しき自由なる生活が始まりさうになつた。然るに此年の春より、土耳古軍征討を口実として、英国軍隊が次第に波斯全土を占領し始めた。英国政府は、一九一八年三月十二日附通牒に於て、英国

は波斯より土耳古を掃蕩せる後には、直に之を撤退すべきことを約し、且戦争終結の後、波斯の崩潰せる経済的生活を改造することに助力すべしと提議した。かくて英軍は露軍の撤退せる後を追ふて、波斯全土を英国武力の下に置くに至つた。例へばカズギンに於ては、将に撤退せんとする露兵に、巨額の俸給を与へて英軍指揮の下に傭使せんとさへした。この驚くを知らぬ貪婪国は、露国が従来波斯に於て有せる一切の政治的並に経済的特権を、自国の手に収めんとしたのだ。憐むべき波斯国民よ、彼等の喜は果敢なき夢に終らんとした。旧露にも優りて陰険邪悪なる敵が、今や其の被り来りし偽善の面を脱棄て、彼等の前に現はれたのだ。

七　英国の為に亡び去らんとせる波斯

かゝる間に世界戦は、独逸の屈服により終り、講和会議が仏国巴里で開かれた。而して亜細亜諸国のうち、唯だ波斯一国のみが、局外中立国たりしと云ふ理由の下に、会議に招かれなかつたのだ。

而も波斯国民は、アリゴリ汗を首班とせる国民委員一行を巴里に送つた。一九一九年二月、アリゴリ汗は極めて正当なる理由の下に、波斯の会議参加を要求し、注意すべき覚書を会議に提出した。覚書は、両交戦団体の中立蹂躙によつて、波斯が蒙むれる甚大なる損害を明細に叙述し、一九一五年波斯よりせる聯合軍参加の提議を引照して、波斯を遇するに中立国を以てするの非を鳴して居る。事実波斯は、前後四年を超ゆる世界戦を通じて、所謂『交戦国』の或ものよりは、戦争に貢献すること遥に大に、且戦禍に苦しむことも亦遥に大であつたのだ。

波斯は遂に会議に列席することを得なかつた。而も波斯国民委員会は『巴里講和会議に対する波斯の要求』を各国全権に交附した。波斯は此の文書に於て、第十九世紀に、露土両国の侵略によりて強奪せられたる領土の還附を主張

し、戦時中に独露土三国より蒙むれる損害賠償を要求し、且政治的・司法的・経済的独立を確保する為に、左の九箇条の要求を提議して居る——

一、一九〇七年英露協約廃棄。
二、政治的及び軍事的性質を有する特権を外人に与ふるを禁ずる一九一〇年英露通牒の廃棄。
三、外人雇傭に際し、波斯は予め英露の承認を経べしとする一九一一年英露通牒の廃棄。
四、列強が波斯に於て、波斯臣民を保護すと云ふ権利の撤回。
五、波斯の内政に関し、一切の方法、並に一切の理由による外国干渉の廃止。
六、納税に関して、波斯在住の外人は、波斯人民と同一に取扱はるべきこと。
七、外国軍隊及び領事館護衛隊の撤退。
八、波斯の政治的・司法的・経済的独立に牴触する条約の改訂。
九、波斯の経済的利益に牴触する外人利権の改訂。
十、関税改革並に外国貨物輸入の自由。

叙上の要求は、波斯が其の独立を完全に維持するために、極めて正当且必要なる条件なるに拘らず、講和会議は一顧丐だも与へなかつた。而も一面に於て匪民が、斯くの如く自由と独立の為に奮闘しつゝありし時、他面に於て英国政府の暴力と黄金とは、波斯政府を威圧し籠絡して、此年八月九日、遂に新英波条約の調印を見るに至つた。

波斯国民の要求と、而して此の新英波条約と、求むる所と与へられたるものとの間に、何たる相違懸隔ぞ。蓋し新英波条約は、太陽の神ミトラの国波斯をして、落日の波斯たらしむるもの。条約は二種より成り、第一は政治的なもの にして、波斯の行政を補佐する官吏を英国より送ること、波斯軍隊を英国士官の手によりて改造し組織すること、内政

改革の目的を以て英国より借款すること、鉄道建設乃至其他の輸送機関改善に関して英国と協同すること等を規定した。第二は借款に関して関税を担保とし、期限二十箇年、利率七分を以て二百万磅の貸借関係を定めたるもの。是によつて英国は、波斯に於て軍事と財政を確実に掌中に収めた。而して曰く『飽迄も波斯の保全を念とし、其の独立を尊重す』と。而も外交と軍事と財政との実権を奪ひ去りて、また何の独立ぞ。当時巴里に在りし一波斯人、激悲して曰く『英国は黄金の鎖を以て吾等を縛つた、波斯復興多年の努力は、財政の独立を英国に売り、軍隊を英国士官の手に渡すことに終つた』と。然り、波斯は明かに事実上の独立を失つたのだ。

英国は、英波条約締結以来、着々と該条約を利用した。先づ従来は白耳義官吏によつて監督されて居た波斯の財政は、事実英国の監督に移された。一九二〇年一月、曽て英国大蔵次官たりしS・A・スミスが波斯政府総顧問に任命せられ、翌二月陸軍中佐J・J・H・ネーション、秘書G・G・クロッカー等と共にテーランに赴任した。三月には波斯内務省顧問として、イスパハン総領事ヘーグが任命された。

同じく一九二〇年一月以来、陸軍少将W・E・デイクソン以下七名の英国将校が、陸軍顧問として活動を始めた。二月には波斯憲兵組織のために、陸軍中佐スマイス以下四名の軍人が派遣された。而して三月に至り、英波軍事委員協議の結果、波斯陸軍の定員を左の如く定めた。即ち兵卒三万六千、憲兵一万二千、巡警八千、親衛哥薩克四千、合計六万である。波斯軍隊は、従来内務大臣に属して居たが、今度は軍務大臣に服属することゝなつた。四月に発表せられたる波斯陸軍の編制計画によれば、上の六万人を以て、歩兵中隊百九十八、騎兵中隊六十一、砲兵中隊十八、機関銃隊八、飛行隊六を造ることになつた。之に要する経費は一千五百万トマン（一トマンは約十志）と計上された。

波斯の各聯隊には、英国陸軍大佐一名、将校二名、及び下士四名が附けられる。各軍管区には英国将校指揮の下に立つ一個の模範聯隊が永続的に置かれる。戦時及び平時に於ける軍隊の戦闘能力に関し、軍務大臣に関して責任を負

ふ最高軍事顧問は波斯人であるが、一名の英人を顧問とする。参謀総長は英人でなければならぬ。参謀総長は英人でなければならぬ。かくして英国は、完全に波斯の武力を掌裡に握らんとした。

次に鉄道其他交通機関改善に関しては、一九二〇年二月、『波斯鉄道シンジケート』が、バグダードより裏海沿岸エンゼリに至る鉄道敷地の測量を始めた。而して測量完成の後、波斯政府は経費を該シンジケートより借款して自ら之を建設するか、又は該シンジケートに建設権を与へねばならぬ。

該シンジケートは、一九一一年に設立せられたるを拡張せるもの。ワルンに於て広大なる油田を開鑿しつゝある『波斯石油会社』、リンチ兄弟商会の事業を継承せる『波斯メソポタミア・コーポレーション』、『波斯帝国銀行』、『ストリック・スコット商会』、其他波斯に事業を営みつゝある若干商会の協同より成つて居る。而して英国の大機械会社、即ちヴィッチース、ピアソン、アームストロング等が、該シンジケートと相結んで居る。シンジケートの総裁は『英波石油会社』総裁サー・チャールス・グリーンウェーで、一九一一年に該シンジケートを創立せる人である。

右の外、波斯政府は、モハメラー・コラマバード線を北方に延長することを英国に許可した。一九〇七年の英露協約に従へば、英国が建設する鉄道はブルジルドを終点とし、是より北に進むを得なかつたのであるが、ツアー政府崩壊後、英国は波斯政府に迫り、ブルジルド以北に鉄道を延長することを承認せしめ、斯くしてバグダード・ハマダン若しくは其他適宜の地点に於て、バグダード・テーラン線と連絡せしむるの計画を樹てた。

如上両線、即ちバグダード・ハマダン・テーラン線、及びモハメラー・ブルジルド・ハマダン線は、波斯将来の発展に最も重大なる意義を有する。蓋し前者はテーランと波斯湾諸港との交通を極めて容易ならしめ、且之によつて豊饒なる中地中海と裏海とを結ぶもの。後者はテーラン・エンゼリ線により実に部波斯の発達を促すものである。

印度との連絡の為には、テーランよりメシエドに至る鉄道計画あり、而してメシエドよりバルチスタンに至る六百哩間は、既に自動車を通ずる道路が出来た。またブンデラバス・ケルマン間及びブシール・シラス間には、車輛を通ずる道路が修築された。テーラン・クム・イスパハン間の道路も、両三年間に自由に車輪を通じ得るように改築されることになつた。かくて波斯の商業は、最早高架索又は裏海を経由せず、直に地中海より、若くは波斯湾諸港を経て行はれるに至るであらう。

最後には関税改革がある。従前の関税は、露西亜が恣まゝに波斯を強要して定めたる、露西亜本位のものであつたのだが、之を改訂する為に、一九二〇年二月十六日、英波両国委員がテーランに会議を開いた。波斯側委員は大蔵大臣アクバール・ミルザ・サラマードーレー、商務大臣エミール汗、大蔵省局長サデク・ハースラート、税関総長白耳義人ハインセン、逓信総長白耳義人モクトル、大蔵省監察官英人ハート氏の諸氏、英吉利側委員はH・L・スミス、A・C・メウオッター、C・R・ラトキンス、T・M・エンスカフ、W・カーター・ウィラード少佐等であつた。委員会の商議は、三月中旬早くも終了し、其の作成せる関税改訂案は、直に波斯政府の認可を得て実施されることになつた。

波斯に於ける重要なる電信線の全部は、印度政府の印欧電信局か、又は英人の経営に成るの軌れかに属し、各所の電信局は悉く英人を局長として居る。波斯の最も重要なる商業道路は、英人の経営に成る前の『波斯運送会社』、今の『波斯・メソポタミア・コーポレーション』によつて支配されて居る。波斯の豊富なる油田は二千万磅の資本を擁する『英波石油会社』によつて開鑿されて居る。鉱山採掘の独占権も英人に握られて居る。総ての大商会は悉く英人の経営であり、曽て露国の商会たりしものも概ね英人の手に帰した。波斯の財政・軍事・交通・税関に於ける政治上の勢力と、経済的発展の全権とは、斯くして英国の手に帰せんとしたのだ。

新英波条約は甚だしく波斯国民主義者を憤激せしめた。西部波斯に於てはクチュク汗が民衆を糾合して反英運動を起し、東部波斯はホド汗指揮の下に反英軍組織せられ、形勢次第に危急を告げた。クチュク汗は、もと敬虔なる回教僧であつた。而も英国の波斯に加ふる暴虐を見るに及び、烈火の憤怒抑へ難く、遂に法衣を脱棄して剣を執つた。彼が山中に入りて若干の同志と結び波斯解放を標榜して人民を糾合し、討英軍を組織して英国に宣戦したのは一九一五年のことである。爾来前後実に六年、彼は屢々疾風の如く山を下りて英軍を襲ひ、多大の損害を加へたる後、また急遽軍を収めて山中に籠り、常に英吉利を悩まして来たのだ。今や新英波条約の締結に赫怒せるクチュク汗は、更に討英の剣を鋭くした。

八　労農露西亜によつて興らんとする波斯

かゝる時に当つて英吉利は、裏海の覇権を掌裡に収むべくエンゼリ港を策源地として盛んなる活動を始めて居た。英吉利は曩に裏海争覇戦に於て、赤軍の為に破られたるデニキン白軍艦隊の全部、その陸軍の一部並に軍需品をエンゼリに集注し、且エンゼリに防禦工事を施し、中東侵略の最も重大なる一拠点たらしめんとした。然るに労農赤軍は海陸にデニキン軍を撃破せる勢に乗じ、此年五月十八日朝、一挙にしてエンゼリを攻落し、遂に英軍を該地方より掃蕩し、クチュク汗を招致して、裏海沿岸の政権を掌握せしめた。而して波斯政府は当初英国に対する義理と遠慮からクチュク汗を遇するに叛逆者を以てしたが、今や彼を知事に任命して、却つて其意を迎へねばならなくなつた。

加ふるに、露国革命後に復活せる波斯議会は、憲法によつて賦与せられたる権能によつて、新英波条約に協賛を与ふることを拒み、其の無効を宣言した。一九〇六年十二月三十日に発布せられたる、波斯憲法第二部第二十四条は実に下の如く規定してある。曰く『条約及び規約の締結、臣民に対すると外国臣民に対するとを問はず、商業上・工業

上・農業上及び其他の特権賦与は、国家及び公益の為に之を祕密に附するを要するものを除き、可からず』と。而して波斯議会は満場一致を以て、この恥づべき条約を否決したのだ。

かくして英波条約は、理論の上に於て明白に無効に帰したのだ。当時（一九一九年八月十四日）エコー・ド・パリが『過去五年間、印度並に埃及の防波堤を築かんとして、英国が払へる努力のうち、最も重要なる成績を挙げたるもの』と批評せる此の条約も、甚だ覚束なきものとなつて来た。波斯国民主義者は、此機に乗じて国家を亡滅の危急より救ふべく活躍した。彼等は一面国民を覚醒して排英精神を熾烈ならしむると共に、他面軍隊を味方として実力を握るに努めた。彼等の勢力は次等に強くなつた。かくて一九二一年二月二十一日夜半、国民主義者と提携せるレザ汗将軍は、コサック軍の一隊を率ゐて、突如テーランを襲ひ、武力を以て優柔なる親英内閣を倒し新政府を組織した。而して新波斯政府は固より其の政綱宣言に於て英波条約の廃棄を宣言した。

此報英国に伝はるや、三月二十一日の下院に於て、之に関する質問が起つた。外相カーゾン卿答へて曰く『英波条約は、廃棄せられたるに非ざるも、テーランよりの報告によれば、波斯政府は之を会議に提出するの意思を有せずとのことである。従つて該条約は、無効に帰したるものと見ることが出来る』と。前節に詳説せる如く、英吉利の波斯搾取政策は、徹底且大規模のものである。而も英国が此の政策を強行するが為に、該条約が破棄された以上、武力を以て之を遂ぐる外に別途なくなつた。併し乍ら今に於て大なる武力を波斯に用ふるが如きは、英吉利の国情決して之を許さぬ。かくしてカーゾン卿の荘厳なる夢は、実現したと思ふ間もなく、あはれ水泡に帰せんとする。

英吉利の波斯政策蹉跌し、反英精神波斯に漲り来りし時、労農露西亜は、全力を挙げて波斯との握手に努めた。而して政変後幾くもなく、波斯政府と労農露西亜との間に、二月二十七日を以て、極めて注意すべき露波条約が、モスクワに於て締結せらるゝに至つた。条約の要領は、実に下の如くである。

一、労農政府は、旧露帝国が波斯に対して執れる侵略政策を放棄し、且旧露帝国の締結せる一切の条約を廃棄す。

一、労農政府は、旧露帝国が、亜細亜諸国民の同意なくして欧洲列強との間に、東洋諸国に関して侵略的条約を締結せる政策は、之を犯罪行為として絶対に弾劾す。従つて波斯に関して、第三国と締結せる一切の条約を廃棄す。

一、労農政府は、波斯に対する一切の債権を放棄す。

一、労農政府は、波斯に於ける治外法権を放棄す。

一、両締盟国は、一八八一年の両国々境を承認す。労農政府は、アストラバード沿岸アシュラダ其他諸島の使用権及び一八九三年波斯より旧露に割譲せるフィルザ並に其の附近地帯を波斯に還附す。但オール・ド・セラクス並に其の附近地帯は之を露領とす。

一、両締盟国は、両国領土内に於て、両国又は両国の同盟国に対する抗争を目的とする一切の団体又は結社又は個人の存在を許さず。

一、両締盟国は、両国領土内に、第三国の軍隊又は武力の存在を許さず。

一、若し第三国が、波斯に対して武力干渉を行ひ、又は波斯を反露軍事行動の根拠地に用ゐんとし、而して波斯が独力を以て之を防止し得ざる時は、労農露西亜は波斯国土次に於て、軍事行動に出づるの権利を有す。但し危険排除と共に、露国軍隊は、直に波斯国境より撤退すべし。

一、両締盟国は、条約調印の日より、自由に裏海を航行するの権利を平等に享有す。

一、両締盟国は、通商関係及び通信関係を再開す。而して之に関して両国代表者より成る特別委員会を設置し、直に通商条約並に郵便電信条約の改正に着手すべし。

かくの如きは、露波条約の精神である。それ労農露西亜は、世界の諸政府が無頼漢の巣窟として嫌棄するところ。而も一九一九年の而して英吉利政府は、所謂ジェントルマン諸君の組織するものとして諸国の拝跪礼讃するところ。英波条約と、この露波条約とを比較せよ。前者は名を正義に藉りて一個の国民を奴隷とするもの、後者は赤裸々に自国の正当なる必要を主張し、同時に他国をして真個独立の面目を保たしめんとするものである。然り、労農露西亜は、彼等の誠意を徹底せしむるため、多年露国の波斯掠奪機関たりし『波斯手形割引銀行』を波斯に与へ、該銀行が波斯に於て有する一切の動産不動産をも、併せて波斯に与へたのだ。

亡国の危機に瀕すること幾回、波斯は漸く復興の希望を抱くを得たのだ。波斯は、今を距る約四十前以前、ザイド・ジャマルッディンの熱烈なる提唱によつて、初めて長夜の惰眠より国民的に覚醒した。暴君ナズィルッディンを殺して、波斯革命の機運を激成せるミルザ・レザは、実に彼の弟子であつた。彼によつて点ぜられたる覚醒の炎は、更に日露戦争によつて油を注がれた。一九〇六年の波斯革命は、亜細亜日本の欧羅巴露西亜に対する戦勝に対する感激と同じく日露戦争が導火線となれる露国の憲法発布による刺戟とを因縁とせるものであつた。爾来春秋すでに十七。此間革命志士の苦心は、筆紙に尽し難きものありしは言ふ迄もない。今や英吉利の波斯政策蹉跌と労農露西亜の後援とによりて、僅かに復活の一路を見出したとは言へ、英吉利積年の勢力は、尚深く其根を波斯に張つて居る。而も大勢は決した。波斯の国歩、如何に艱難を極めようとも、歩々復興の途を進むであらう。何となれば興亜の機運は熟しつゝあるが故に、波斯の国運は、此の機運と共に登高するであらう。而して復興波斯――換言すれば波斯に於ける英国勢力の掃蕩が、亜細亜復興に対する意義は実に深甚である。

第七　労農露西亜の中東政策

一　労農露西亜の対外政策

亜細亜問題が、亜細亜復興の努力を意味するに至れる今日に於て、労農露西亜の亜細亜に対する政策、殊に露西亜と直接国境を接し、且従来国際的低気圧の中心たりし中東諸国に対する政策は、諸種の理由から、吾等の慎重なる研究を心要とする。

ボルシェヴキは、真個驚嘆に値する善戦健闘によつて、世界に於ける資本主義の掃蕩、社会主義の確立を志しつゝある。彼等の目指す第一の敵が、西欧諸国であることは言ふ迄もない。就中西欧資本主義の権化英国が、彼等の最も憎むところの敵であることは、レニン其人の言論文章によつて明瞭である。而も社会主義の西漸は、今日までのところ、見事に阻止されて来た。西欧諸国は、死力を尽して、露西亜以西に於ける一切の革命運動を、法律乃至軍事的に抑圧することに成功した。洪水の危険は、刻々と迫りつゝある。而し西欧諸国が必死の努力を以て築き上げたる防波堤を破ることは、現在のボルシェヴキ政府にとりて、決して容易のことでない。

かくしてボルシェヴキは、其の世界征服の立場から、当然鋒先を東方並に南方に向けた。露西亜の対外政策が、レニン執権以前に於て、既に全然新しき主義に立つたことは、一九一七年四月ルヴォフ公爵を首相とせる、三月革命直後の内閣宣言に現はれて居る。そは『自由を得たる露西亜は、他国民を支配するを欲せず、その伝来の立国権を奪ひ強力を以て外国領土を占領するを欲せず、其の期する所は、民族自決の権利を基礎として、永久的平和を確立するに

在り』と言明した。而してレニンは執権後に於て、此の主義は尽に変更せられざりしのみならず、一層高調されたことは無論である。

露西亜の此の新政策の第一の結果は、旧露帝国内に於ける諸回教民族の独立である。タルタリア・バシキリア・トルキスタン・ヒヴ・ブハラ等が、皆な自治を承認された。而して其等の一つバシキリアの有志が、叙上諸回教国聯盟の志を抱いて、各種の運動を行ひつゝあることは、吾等に告げた所である。第二の結果は、彼等が一九二一年春来国の際、波斯に関し英露其他諸国の間に結ばれたる一切の秘密条約を廃棄し、且つツアー政府が波斯より奪へる一切のものを還附すべしと声明したことである。第三の結果は、土耳古・印度其他の国民主義者に対して声援乃至援助を与へ初めたことである。

此等の諸勢力が、亜細亜不安を激成せる重大なる要素となれることは言を待たぬ。否現在に於て、亜細亜復興の最も重大なる外面的刺戟は、実に労農露西亜其ものより来る。世界戦尚未だ酣なりし頃、聯合諸国は人道と自由とを口実とし、民族自決・乃至独立等の誘惑的標榜を掲げて、能く亜細亜弱少民族を己れに加担せしめたるに拘らず、戦後に於ける彼等の態度は、深刻鮮明に其の標榜と懸隔せるが故に、今や到処真摯なる国民主義者の道徳的信頼を失ひ尽した。而して彼等は唯だボルシェヰキによつてのみ、大なる希望を鼓吹せられつゝある。

二　労農露西亜の東漸政策

ボルシェヰキの東漸政策は、明かに二個の目的を有する。其一はボルシェヰズム其のものゝ宣伝であり、其二は亜細亜に於ける欧羅巴資本国家の駆逐である。第二の目的に於て、ボルシェヰキと亜細亜とが、全然相一致することは

言ふ迄もない。共通の敵たる西欧列強と戦ふことに於て両者が握手することに何の不思議もない。但し第一の目的に至つては、二重の意味に於て、新亜細亜と相容れぬ。第一にはボルシェヰキの国家が、果して新しき社会の必然の形態であるか否かゞ、大なる疑問である。第二に、彼等の主義は、亜細亜に対して之を強ふべき、何等の精神的根拠を有して居らぬ。西欧に於ては、資本主義的産業組織を基礎とせる社会生活が、最早如何ともす可からざる窮極に達したるが故に、資本主義と等しく欧羅巴精神の所産たる社会主義による改造は、社会主義其のものゝ価値如何を論外として、兎にも角にも精神的根拠を有する。さり乍らボルシェヰキが自己の主義を亜細亜に強ふることは、之れを西欧に強ふると甚しく其の意味を異にする。今日亜細亜の努力は、其の正当なる権利の回収に集注せられ、未だ何等積極的創造のために健闘するに至らないけれど、亜細亜復興運動が、吾等の述べたる如く政治的であり且精神的である限り、亜細亜の魂と顕著に相異れる西欧精神の所産なる制度を、如実に踏襲したる社会生活を建設することは、覚め来れる亜細亜精神の断乎として斥くる所である。

ボルシェヰキは、当初亜細亜諸国民族をして、ソヴエト政府を樹立せしむべく努力した。彼等の最初の方針は、社会主義的国家の建設を条件として、英仏勢力掃蕩のために、其力を亜細亜諸民族に藉すに在つた。若し彼等が、飽迄も此の方針を固執したならば、英国の東洋通サー・F・ヤングハズバンドが言へる如く、亜細亜人の思想・性向が、彼等の主義と著しき懸隔あるが故に到底其功を収め難いことは確実である。ボルシェヰキは、次第に北間の消息を明かにして来た。故に彼等は、暫く第一の目的を控へて、専ら第二の目的に其力を注ぐに至つた。レニンは、一九二〇年春、モスクワに於て公然声明して、ボルシェヰズムを亜細亜諸国に宣伝するに当つては、彼等の心理に適応するが如く之を変更して説かねばならぬと言つた。而して事実彼等は、今や亜細亜各国の国情に応じて、巧みに宣伝を行つて居る。彼等は亜細亜諸国に対して、資本主義を倒せと云ふ如き愚なる説法を止めた。彼等は亜細亜諸国に於て、概

ね官僚が掠奪階級なるが故に、先づ之に対する反抗を煽り、次に国家的圧迫者たる西欧列強の勢力駆逐を説く。かくて今や革命露西亜と亜細亜隷属民族との結合は、日に堅きを加ふるに至つた。

三　労農露西亜と回教徒

労農露西亜は、英仏勢力顚覆の目的を以て、回教徒全般との提携を企てた。而して此の運動は土耳古に対する回教諸政治団体の代表者が、一九一九年七月、モスクワに於てボルシェヰキ代表者と会合せる時から、具体的なものとなつた。既に此時の会合に於て両者の間に提携の約束が結ばれ、八月七日エルゼルムに於ける土耳古・波斯・高架索・土耳機斯坦の国民主義者の会議に於て、赤露と相結んで『回教解放同盟』を組織すべしと決議された。而して八月下旬に至り、該同盟は露国政府外交部東方局回教課の斡旋によつて実際に設立せられその中央実行委員はモスクワに駐在し、東洋事務局をシヴスに置き、欧羅巴事務局を伯林に置いて運動に着手した。而して九月には第二回の回教・赤露聯合会議がシヴスに於て開催せられ、土耳古・アゼルバイジャン、及びフェイサル王治下の亜刺比亜の間に同盟を実現せしむべく努力す可きことを決議した。而して十二月には、クレムリンの外交部内に、露国内諸回教民族代表者を招致して、ボルシェヰキ政府と国内回教徒との提携を議した。

是くの如く露西亜は、一面に於て全回教運動を助成すると同時に他面に於て一々の回教国に対して提携を企てた。

四　労農露西亜と波斯

ボルシェヰキが波斯に対して其の力を注げることは、総ての点から見て極めて当然のことである。そは前述の如く一九一八年一月に於て、夙く既に波斯に対して明白に波斯に不利なる条約の廃棄と、波斯より旧露が奪へる一切の還

附とを声明し、波斯政府も亦此等の一切の条約の無効を宣言した。而も此頃に於てボルシェヴィキは回教の友なり、新回教なり』と言ふが如き宣伝を盛んに行つた。彼等は『マホメットはボルシェヴィキなり』とか、或は『ボルシェヴィキは回教の第二回対波通牒によつても知らるゝ如く、主として波斯国民の国民的感情を煽ることによつて、英国に対する敵愾心を鼓舞し、並に親英的官僚に対する反感を激成するに努むるに至つた。

今ボルシェヴィキの対波宣伝を例証する為に、第二回通牒と前後して、露西亜政府が波斯の『労働者及び農民』に与へたる檄文の数節を引く。該檄文は、冒頭に『英吉利の群盗及びツアー政府の手先共』が、波斯に向つて加へたる暴虐を力説し、次で『偉大なる露国革命』が、波斯の国民生活に新しき希望を鼓吹せるに拘らず、英吉利の為に再び波斯は圧抑に苦しまねばならぬことを説き、下の如く迄べて居る。曰く『かくて（露国革命と共に）新しき自由なる生活が始まるべく見えた。然るに此の年の春より、英国軍隊が次第に波斯全土を占領し初めた。英吉利人は、彼等が土耳古人を波斯より掃蕩せる後に、直に撤兵すべきことを約し、且英軍の行動によつて生ずる一切の損害を賠償すべしと約束した。一九一八年三月十二日附英国政府の通牒は、載せて同月十四日発行の波斯新聞バアブに在る。英国は、波斯の何人よりの依頼を受けないのに、戦争終了後には、波斯の崩潰せる経済的生活の改造に助力すべしと告げて居る。而も助力どころか、今や波斯国民を挙げて奴隷として仕舞つた。英国資本家は、仏米の資本家と協力し、世界的競争者たる独逸の帝国主義を倒し去れる後、今こそ全波斯帝国を掌裡に収むべき絶好の機会だと考へたのだ。かくて波斯は独立国の間より落伍し、国民には最早自由がなくなつた。何となれば、波斯の政治を行ふ官吏どもは、黄金を英吉利から貰つて其の手先となるからだ』と。

此の檄文以後、幾くもなく英波協約の締結によつて、波斯は『独立国の間より落伍』するに至つた。而して此の協

約は、正しく『黄金を英国より受けて其の手先となれる官吏』によつて締結されたものであつた。幸にして波斯の憲法は、是くの如き条約の締結は、議会の協賛を必要とすることを定めてある。而して露国革命後に復活せる波斯議会は、徹底して該条約を否定せるが故に、英国にして若し之を強制せんと欲せば、武力に訴ふるの外別策はない。而も今更波斯に向つて大兵を動かすが如きは、到底不可能なるが故に、流石のカーゾン卿も、竟に一先づ手を緩めざるを得ざるに至つた。

五　新露波協約

かくの如き事情は、必然波斯の排英的精神を激成せねば止まぬ。而して是れ実にボルシェヰキの乗ずる所である。彼等は次第に波斯との結合を堅くして来た。而して其の結果は、終に新しき露波協約の締結となつた。該協約は二十二箇条より成り、重要なる諸事項を議定して居る。

そは第五条に於て、（一）両国領土内に於て波斯又は露西亜に対し、或は両国の締盟国に対する抗争を目的とする一切の結社又は団体や軍隊の為に、動員又は募兵を許さざること、（二）相手国に対抗する目的を以て、且両国領土内に於て、是くの如き物を其領土内に置き、或は其領土を通じて運搬することを禁ずること、（三）其領土内に第三国の軍隊又は武力を存在せしめざることを定めて居る。

而して第六条に於て『若し第三国が武力干渉によりて不当なる政策を実現せんとし、或は波斯領土を露西亜に対する軍事行動の策源地となし、従つて国境脅威せらるゝ場合に際し、若し波斯にして其の危険を排除するに力足らざるときは、露西亜は正当防衛上、波斯領土内に於て必要なる軍事行動に出づるの権利を有す、但し危険排除と同時に露国軍隊は波斯国境より撤退す可し』と定めて居る。如上二個条の協約が、英吉利に備ふるためのものであることは、

火を見るよりも瞭かである。

第十九条乃至第二十一条は、通商関係並に遥信事務に関して、両国代表者より成る特別委員会を設け、直に通商条約並に郵便電信条約の改正に着手すべきことを定め、第十七条に於ては露波両国が協定調印の時より、自由に裏海を航行するの権利を平等に享有することを定め、且裏海に艦隊を置くの権利を波斯より奪へる一八二八年二月十日の露波平和条約は、其効力を失へることを声明して居る。

露西亜は此の条約に於て、彼等の誠意を徹底せしむるため、従来波斯が種々なる利権を担保として露西亜より借入たる借款全部に対する債権を放棄したるのみならず、多年波斯に於ける露国の経済的掠奪機関たりし『波斯手形割引銀行』を波斯に与へ、波斯国内に於て該銀行の所有にかゝる動産不動産の全部を無償にて譲渡した。

新露波協約は、一九一九年八月の英波協約が、表面には『飽迄も波斯の保全を念とし、其の独立を尊重す』と標榜しつゝ、而も財政と軍事との実権を奪はんとせるに比し、真に公明正大を極めて居る。マンチェスター・ガーディアン記者が、一九二一年四月一日発行週刊の時評欄に於て『吾等は是くの如き協約が、波斯並に自余の全東洋諸国に与ふる深甚なる感銘を念はざるを得ない。そは過去に於てなされし如く、将来に於て或る強国が、名目のみの東方独立国を、自己に隷属せしめんとする計画を甚しく困難にするであらう』と言つたのは、固より公平なる観察である。波斯は今や労農露西亜に於て、少くとも英国よりは遥かに信頼すべき所謂『友邦』を見出したのである。

六　労農露西亜と亜富汗斯坦

ボルシェヴキは、また亜富汗斯坦に対して、早くより之を籠絡するの計画を立てた。彼等は回教の解放者を標榜して先づヒヴ・ブハラの両汗国に自由を与へ、タシケントを中心として盛んに中亜の赤化に努めた。されど中亜諸国

は、決してボルシェヰキの共産主義を喜ぶものでない。農業と牧畜とを主たる産業とする彼等に向つて、土地の私有を直に廃止せよと云ふが如きは、到底その肯諾を得る所以でない。

亜富汗政治家イクバアル・アリ・シャーが、一九二〇年十一月十日、英国中央亜細亜協会に於て試みたる演説に拠れば、前亜富汗王ハビブラー汗は、ボルシェヰキの宣伝に於て、旧露の武力と異なる恐るべき侵略を見た。従つて彼にとりて、革命露西亜は旧露と異なる所なき敵であつた。故に彼は父王アブドゥル・ラーマンの努力せる、中亜回教同盟を、此の混沌期に於て実現すべく企てた。かくて陣中に於ける彼の非命の最後は、彼の政策を不便とするボルシェヰキの使嗾によるとさへ伝へられて居る。

常に亜富汗斯坦に於て見る継承に関する血腥き内乱の後、現亜富汗王アマヌラー汗が王位を獲得した。而して赤露政府の使者が、群を成してカブールの宮廷に入込めるに拘らず、王も亦彼等の差出せる手を握らなかつた。王が赤露を斥けるのは当然であつた。現にブハラの如き、一旦は独立を与へられたに拘らず、ボルシェヰキは其の中亜政策実現の必要から、種々なる陰謀によつて、此国を以前よりも窮地に陥れた。一九二〇年夏の如きも、彼等はブハラの同志に計画を授け八月二十九日朝、革命運動を起させ、暴動勃発と共に、迅速に赤軍騎兵をブハラに進めた。ブハラ市街に於て惨憺たる戦が行はれた後、市街は赤軍の手中に落ち、国王は残余の軍隊と共に南方に敗走した。而して此の憐れむべき君主は、其後亜富汗斯坦の首府カブールに亡命した。

さり乍ら亜富汗斯坦と露西亜との関係は、二つの理由から次第に緩和されて来た。第一の理由はボルシェヰキが短気なる主義の押売を差控へるに至つたことである。第二の理由は、土耳古の運命に対する憤激が、亜富汗人をして排英的精神に燃えしめたことである。かくて両国は倒英と云ふ共通の目的の為に次第に接近し来り、遂に露波協約と前後して、露亜協約の締結を見るに至つた。

露亜協約は、十個条並に補遺より成り、種々なる点に於て極めて注目に値する。その第七条に於て、露亜両国は『独立の原則に基き、且各国民の一般意思に従ひ東洋諸国の自由を承認す』と規定し、第八条に於て、第九条は、前世紀に於て亜富汗領たりし国境地方を還附すること、第十条は、両国の親善関係を緊密ならしむる為に、露国より金銀貨又は金銀塊に『ブハラ及びヒヴの確実なる独立及び自由を承認し、その統治の形式は全然両国民の欲する所に委す』と言明して居る。こは明白にボルシェヴィキが、当初の所謂赤化政策を改めたことを立証するものである。

第三条及び第四条は、公使館並に領事館設置に関する協定で、露国は亜富汗斯坦領土内の五個所に、亜富汗斯坦は露領内七個所（但し五個所は中央亜細亜）に、各領事館を設置することに定めた。

て一百万ルーブルを亜富汗斯坦に贈与すること、（二）クシュク・ヘラート・カンダハール・カブール間に電線を架設すること（三）露国は亜富汗斯坦の依頼に応じて専門技術家を援派することを定めた。

その中亜政策に於て、波斯に対して勝利を得たる露西亜は、亜富汗斯坦に対しても亦英国に勝つたのである。

八　中東に於ける新しき英露対抗

中央亜細亜一帯が、百年以来亜細亜に於ける英露両国の争点なりしことは、更めて言ふを須ゐぬ。露西亜は、所謂『波得大帝の遺詔』なるものを奉じて、驚く可き大胆と執拗とを以て南下政策を遂行して来た。而して最後の目的は印度進出に外ならなかつた。然るに英国は、カーゾン卿が明言せる如く、若し印度を失ふ時は一朝にして第三流国に

堕すべきが故に、死力を尽して露西亜の南下を阻止せねばならぬ。第十九世紀の政治外交史は、実に此一点を中心として描かれたのだ。

然るに露西亜帝国は亡んだ。その露骨なりし侵略政策も、亦之と共に中断した。英吉利は決して此の好機を逸しなかつた。そは西方の戦、最も酣なりし時に於て、尚且中亜経略に力を注ぐことを忘れなかつた。而して一時的成功を贏ち得た。さり乍らボルシェヴィキは、其実日露に愛るとも劣らざる英国の敵であつた。レニンは、聊かも包むところなく、英国を倒すことは世界に於ける資本主義の根城を覆へす所以であると声言した。而して英国の最も急所とする所は、印度其のものなるが故に、赤露は旧露と別個の意味に於て南下して来た。意味は如何やうにもあれ、英吉利にとりては同一の危険である。否、赤露の印度脅威は、旧露のそれよりも、一層危険なる性質を帯びて居る。故に形勢は更に復旧して、中亜を挿んで英露両国の対抗を再現した。

若し赤露が、当初の如く中亜に対して所謂『赤化』を固執したならば、中亜諸国は依然として北よりするボルシェヴィキと、南よりする英吉利とによりて、社会的乃至政治的に蹂躙せられねばならぬのである。而もボルシェヴィキが其の奉ずる社会主義の強要を中止し、主として政治的理由による中亜との聯合を企つるに至つて、形勢は新たに一変したと言はねばならぬ。而して此の新形勢は少くも現在のところ、亜細亜復興のために明白に有利である。然り、それが亜細亜の圧制者にとりて不利なるだけ、それだけ亜細亜其ものに有利である。

九　回教諸国聯盟問題

此の新形勢と聯関して、最後に吾等の看過すべからざる一事は、回教諸国聯盟問題である。既に一八六三年、亜富汗斯坦に於てドスト・ムハムマッド治世の時、全回教主義の最も熱烈なる宣伝者として名高きザイド・ジャマルッデ

インは、回教諸国に向つて極力政治的同盟を勧告し、是くらざる条件なることを力説した。彼は是くの如き理想を宣伝する為に、埃及・波斯・印度・土耳古を歴遊した。而して時の土耳古皇帝アブドゥル・ハミッドは、彼の為に一切の後援を惜まなかつた。

此種の運動に激成せられ、一九〇二年メッカに於て世界回教会議の開催が提議せらるゝに至つた。されど土耳古皇帝は、斯くの如き会議が、亜剌比亜人の勢力を増進すべきを恐れ、遂に種々なる手段を弄して之を阻止した。

此事ありて幾くもなく、所謂ツラン主義が提唱され始めた。そは亜細亜に於ける全ツラン人の糾合を目的とせるもの、同時に宗教的・文化的方面を高調し、土耳古の復興・土耳古文学の建設を力説した。即ち回教の説教は土耳古語を以てす可きこと、一切の外来語―主として亜剌比亜語を、土耳古より駆逐し、純乎として純なる『土耳古』を復活せしむべきことを熱心に主張した。此の思想は、その本質に於て、正しく同一のものに属する。されど斯くの如き主張は、オーソドックスの回教信仰と牴触せるが故に、全ツラン主義者は、全回教主義者と提携するの目的を以つて、次第に其主張を改めた。

此等の運動は、素朴であり且つ非現実的であつたに拘らず、その間接の効果は極めて大であつた。蓋し中亜の回教諸邦は、此等の運動によつて初めて民族的・政治的自覚を鼓吹せられ世界政局に対して必要なる注意を払ひ初め、従つて明確に英露両国より来る脅威を意識するに至つた。而して時を経るに従ひ、回教聯盟の観念が次第に有識者を動かし来り、基督教国の止まるを知らぬ侵略に当るため、全ツラン主義及び全回教主義の基礎の上に、何等かの形態に於て聯盟を試みんとする希望が、現実の問題として起つて来た。

此の希望の実現に対して現はれたる最初の具体案は、恐らく亜富汗王アブドゥル・ラーマンによつて提唱せられた

る亜富汗斯坦・波斯・ブハラの三国同盟であらう。その主目的は言ふまでもなく露西亜の南下に備ふるに在り、アドゥル・ラーマンは、全力を挙げて之れを成立せしめんとした。王は其志を遂げずして世を逝つた。彼の後を嗣げるハビブラー汗は、即位と同時に父王の遺志を実現するに努めた。而して現亜富汗王も亦中亜聯盟の計画者である。

亜富汗政治家の或者は、例へば前に挙げたるイクバアル・アリ・シャーの如きは、英国後援の下に、自国を盟主とする中亜回教聯盟を画策し、公然之を英国の公衆に訴へた。而も旧露西亜帝国崩潰後、英国が中亜に於て敢てせる侵略的行動は、中亜諸民族の魂ある指導者をして、甚だしく憤激せしめた。加ふるに土耳古に対する英国の態度は、全世界の回教徒をして、激しき敵意を抱かしむるに至つた。現に印度に於ては、多数の回教徒が、英国治下に生くるを欲せずと公言して、続々国境を超えて亜富汗斯坦に移住しつゝある。故に英国を後援とする回教聯盟は、到底成立すべくもない。且現亜富汗王は、英国に対して強大なる敵意を有して居る。一九一九年、印度パンジャブに頻発せる暴動に対して、王が少なからぬ援助を与へたと云ふことは、英国政治家の等しく信ずる所である。故に英国側よりするも、亜富汗の勢力を加ふる如き聯盟の成立に助力を与へぬであらう。

かかる時に際して、波斯及び亜富汗斯坦が、労農露西亜と条約を結ぶに至りしことは、回教聯盟の前途に対して、まがふ可くもなく一道の光明を投じたるものである。ボルシェヰキは、今や国内の回教民族とも領会を得て居る。而して土耳古国民主義とボルシェヰキとの間にも、前記露波条約及露亜条約と同様の条約が結ばれた。故に露西亜の後援の下に、諸回教民族が何等かの形態に於て、聯合若くは提携するに至るべきことは必ずしも不可能でなくなつた。吾等は此種の回教運動が近き将来の世界政局に於て、重大なる役割を勤む可きことを確信する。然り、若し斯くの如き聯盟が成立するならば、そは疑ひもなく亜細亜復興の先駆となるであらう。かく考へる時、吾等は今更の如く、ボルシェヰキが世界に与へつゝある深刻偉大なる刺戟に驚かざるを得ぬ。

第八　青年土耳古党の五十年

一　青年土耳古党の父シナッスィ・エフェンディ

近代土耳古に於ける革命の機運は、第十九世紀初頭帝位に登れる英邁なる君主、マームード二世其人によつて促成された。当時の土耳古は、頽勢既に著しく、外は濠太利の為にダニューブ左岸を奪はれ、露西亜の為に黒海北岸を奪はれて居た。而して内は権臣威を振ひ、行政・財政共に紊乱し、各地の大守は半独立の姿となり、加ふるにイェニチェリ軍隊の跋扈、最も甚しくなつて来た（註一）。

マームード二世は、断乎たる覚悟を以て、国運を恢復せんと決心した。彼はアルバニア太守を誅戮して、威を地方官に示した。横暴なるイェニチェリ軍を解散して、命に服せざる数千を屠つた。而して欧羅巴軍人を聘して、新たに軍隊を編成し、欧羅巴式訓練を之に与へ、自ら西欧の軍装を着け、好んで仏蘭西の兵書を読み、屢々軍隊に親臨して士気を鼓舞した。彼は、是くの如くにして、先づ皇帝の権力を確立し、進んで国運の挽回に心身を労した。さり乍ら帝の雄図は、希臘の独立・埃及叛乱等の続出によつて、竟に挫折せざるを得なかつた。

而も此事ありて以来、土耳古の教養ある士人にして、或は西欧の書を繙くもの、或は親しく西欧諸国に遊ぶもの、漸く多きを加へて来た。而して之と同時に、彼等の眠れる国民意識が、次第に覚醒されて来た。土耳古の弱きに乗ずる外国の干渉を憤つた。彼等は、土耳古を亡国の悲運より救ふべく、改革の急務を切実に感じ初めた。

この国民的目覚は、イブラヒム・シナッスィの国語改革運動に於て、最初に具体的の相を取つた（註二）。シナッスィの目的とせる所は、土耳古語をアラビア及び波斯語より独立せしめ、純乎なる土耳古国民文学を創造するに在つた。彼は此の目的の為に一八五九年及び一八六一年、二個の機関紙を発行して、熱烈に其の主張を宣伝した。此の宣伝は、覚醒せる国民意識の琴線に触れたるが故に、忽ちにして多数の同志を得た。而して此の運動こそ初めは漠然と『青年土耳古運動』の名を以て呼ばれ、後に一個儼然たる政治的団体、即ち『青年土耳古党』となれるものである。

是くの如く、青年土耳古運動は、其の初めて世に現はるゝや、一個の文化運動であつた。さり乍ら、シナッスィは既に其の機関紙に於て、文学的論文と共に政治的論文を発表し、政治的改革の急務をも力説して居た。而して此の政治的傾向は、ケマール・ベイ、ズィア・パシャ、及び埃及王子ファズィル・ムスタファ・パシャ等の有力なる政治家が、該運動の熱心なる参加者となるに及んで、頓に顕著になつて来た。同時に、当初の文学的色彩は次第に薄らぎ、一八七〇年代には、既に一個の政治的改革運動となり、其の最も有為なる首領を、ミドハト・パシャに於て見出だして居た。彼等は、思想の泉を西欧殊に仏蘭西に汲みたる自由主義者として、宮廷専制政治に反抗して、立憲政治の建設を唱へた。而も彼等は、同時に最も真摯なる国民主義者であつた。彼等は、範を西欧に取つて、立憲政治を実現することが土耳古復興の唯一路なること、従て悲憤措く能はざる外国の侵迫を撃退する唯一路なることを信じたのだ。彼等は、往々にして単なる西欧の崇拝者なりしかの如く哂はれて居る。さり乍ら、彼等の運動は、其の源をシナッスィの強烈なる土耳古的精神に発し、之によつて振作せられたる国民的自覚が、国家の悲運に激して政治的改革運動となれるもの。その西欧に学ばんとせるは、武器を敵に取つて逆まに敵と戦はんとせる愛国の至情に出づ。表面の成敗を浅薄に観察して、冷評を彼等に加ふるが如きは、国士無限の苦衷に対して、甚だしく敬意を欠くものである（註三）

（註一）イェニチェリ Jenicheri は『新軍』の意味。一三三〇年に創設された土耳古の常備軍。当初は征服せる基督教徒の青年中より毎年約一千名を徴発して厳格なる軍事的訓練を施した。後には回教徒も亦之に編入せられ種々なる特権を与えられた。第十八世紀後半に至り、イェニチェリは甚だ有力となり、次第に跋扈して遂には恣まに皇帝を廃立するに至った。マームード二世は、一八二六年、故らに彼等を激して叛乱を起さしめ、数千人を屠りて其の解散を断行したのだ。

（註二）Ibrahim Schinassi Efendi は、一八二六年君府に生れ、長じて仏蘭西巴里に留学し、政治経済の諸学を修めて帰国し後に大蔵大臣に任ぜられた。されど余りに改革運動に専心したるため、アブドゥル・アズィズ帝の欣ばざる所となりて職を退き、一八六四年、脳病に罹り、三度び巴里に赴いた。一八六七年召還せられて、スミルナ太守に任ぜられたが、幾くもなくして之を辞し、一八六九年、巴里に赴きて療養中、一八七一年九月、遂に客死した。

（註三）本篇中に屢々現るるエフェンディ、パシャ、ベイ等の称号に就て、簡単なる説明を加へて置く。**Effendi** は紳士・主人・並に王族を意味する土耳古語にして、英語のミスター又は独語のヘルと等しく、広く官吏学者の敬称として用いられる。但し多くの場合、吾国の『先生』又は『師』と言う敬称に該当し、学者・詩人・其他教養高き人士に対して姓名の後に之を附する。**Pasha** は土耳古語・波斯語にて本来は君主・王族の意味。王族並に文武の高官に与えらるる称号。**Bey** は固と県 **Sanjak** 知事のこと。パシャの子、少佐以上の軍人、富豪等に与えらるる称号である。

二　ミドハト・パシャの皇帝廃位断行

さて土耳古の頽勢は、年毎に甚しくなつた。一八七四年にはヘルゼゴヰナに、翌七五年にはボスニアに叛乱起り、領内基督教民を鼎沸せしめた。而して之に対する土耳古の高圧政策は、セルビア・モンテネグロ両国民を激昂せしめ土耳古に向つて宣戦せしむるに至つた。両国は之を破ることを得たが、之によつて土耳古は、干渉の口実を列強に与へた。

時の皇帝は淫佚奢侈、而して凡庸無能なるアブドゥル・アズィズであつた。皇帝は、頑冥不霊なる君主側の保守主

議者に擁せられて、一切の改革を憎悪し拒否した。彼帝位に在る間、土耳古の改革は行はれず、国運の恢復は望まべくもない。青年土耳古党は、其の改革の目的を遂ぐるため、先づ皇帝を廃するの必要を見た。而して此の廃帝運動は、青年土耳古党の指導者、絶倫の才幹と高潔なる人格とによつて、最も重きを政界になせるミドハト・パシャ金剛の決意によつて迅雷の如く断行された。

彼は、一八二二年、君府に生れた。判事の職にありし其父は、熱心なる改革主義者であつた。而して他日其子を土耳古改革の為に役立たしむるため、政治家たるべき教育と訓練とを与へた。彼の政治的生活は、二十二歳の時に始まつた。G・F・バーキック、彼を評して曰く『彼は、偉大なる才幹と、広大なる同情と、純一なる愛国心とに加ふるに、土耳古高官に最も稀なる、絶対の廉潔を兼ね有した。彼の職を去る時は、之に就ける時と等しく貧しかつた』と（註一）。是くの如き彼の性格は、官界に於ける彼の栄達を速かならしめた。ルメリア及びブルガリアの暴動を見事に鎮静せる功によつて、一八六〇年には、夙くも大臣に任ぜられ、パシャの称号を与へられた。彼は其の政治的先輩にして、同じく改革主義者なりしアリ・パシャ、フォード・パシャ等と共に、政務の刷新を図つたが、一八七一年アリ・パシャ死し、其後を継いで首相となれるマームード・ネジムは、頑冥なる保守主義者なりしを以て、彼は皇帝に強諫してマームードを黜け、自ら代つて首相に任ぜられた。然るに彼の改革主義を憎める君側の守旧派は、極力彼の排擯に努めた。皇帝は、彼等の運動に動かされ、僅かに三個月の後、彼を罷免してマームードを首相に任じた。ミドハト・パシャは、政府に在りて改革を行ふことの到底不可能なるを見た。彼は、再び大臣の職に就かずと声明し、堅く期する所ありて野に下つた。

野に下れる彼は、求めずして青年土耳古党の首領と仰がれた。彼は土耳古党を指導しつゝ、其の諸友と共に、改革の具体案に苦心した。かゝる間に、土耳古の内憂外患は、次第に危急を加へた。青年土耳古党は、声を大にして改革

の急務を唱へた。而して回教の教師団（ウレーマア）並に学徒団（ソファ）も、亦熱心なる改革賛同者となつた（註二）。殊に年若き学徒等は、屢々熱狂的示威運動を行つた。一八七六年五月十日、学徒の一団は、皇長子エスフ・イゼディンを途に要し、宮廷に帰りて父帝にマームードの辞職を求めよと迫るに至つた。マームードは斯くして罷められた。而してミドハト・パシャと好かりし進歩主義者メーメッド・ルシディ首相となつた。此等の出来事は、益々皇帝を不人望に陥らしめ、今や上下の間に廃位を求める声が高くなつた。

皇帝廃位の要望、改革主義者の間に止み難くなれるを見て、ミドハト・パシャは、死を以て自ら其の任に当るに決した。彼は、何人にも謀らず、唯だ陸相フサイン・アギニ一人を味方とし、一切の手筈を二人で極めた。一八七六年八月二十九日夜、二人はボスフォラスの対岸に在るフサイン・アギニの別荘で、夜の更くるのを待つた。真夜中を過ぎて、激しく雨が降り出した。二人は唯だ一人の僕を従へ、闇に紛れて軽舟を出だし、予め牒し置きたる君府の地点に漕付けた。其処には、馬車が待つて居る筈だつたのに、其姿が見えぬ。従僕が之を探し出して連れ来るまで、彼等は陰謀発覚の懸念に襲はれ乍ら、覆盆の如き雨に濡れそぼちて待たねばならなかつた。馬車は間違つた場所に彼等を待つて居たのである。

予ての手筈に従ひ、ミドハト・パシャは、直ちに馬車を陸軍省に駆つた。フサイン・アギニはドルマ・バクチェ軍営に疾駆し、一個聯隊の兵を率ひて宮城に到り、音も立てず之を包囲した。彼は城内に入りて宮内大臣と会見し、皇帝に退位を請へと求めた。此の寝耳に水の奏請は、皇帝をして驚愕措く能はざらしめた。而も固より容易に退位を肯んじなかつた。フサイン・アギニは遂に自ら皇帝の面前に到り、抵抗の到底不可能なるを説きて、退位に同意せしめた。而して皇帝逮捕が、見事に成功せることを、ミドハト・パシャに知らすべく、合図の小銃を放つた。

一方ミドハト・パシャは、濡鼠の如くになつて陸軍省に到り、漸く司令部を説服して、一隊の兵を広場に整列せし

め、フサイン・アギニの合図を、一刻千秋の思ひして待つた。若し軍隊の中に彼に敵意を有する者あれば、彼は直ちに其命を失はねばならぬ。危きこと真に風前の燈火である。黎明に近く、合図の銃声を聴いた。軍隊は一言も不平を唱へなかつた。彼は更に軍隊に向ひ、土耳古国法に従ひ、皇室の男性最年長者、帝甥ムラード親王、帝位を継ぐべきが故に、親王邸に赴きて、之を陸軍省に迎へ来れと命じた。軍隊は歓呼して命令に従つた。かくて一八七六年八月三十日、旧帝は廃せられ、而して新帝が即位した（註三）。

（註一）Encyclopaedia Britannica 第十一版所載。

（註二）茲に『教師団』と言うは Ulema のことである。ウレーマアは、学者を意味するアラビア語で、回教国に於て、此の階級が至大の勢力を有するは言うまでもない。『学徒』と言うは者・宗教々師全体の呼称である。回教律法に通ずる神学 Softa のこと。ウレーマアたる可く学びつつある青年神学生である。其の青春の熱情によって、屢々政治的運動に加はり政府の一脅威となって居る。彼等は、独り此時のみならず、

（註三）廃帝断行の顛末は、Sir Edwin Pears : Life of Abdul Hamid に引用せられたる一八八八年二月号 Nineteenth Century 所載 Sir Henry Eliot の文に拠る。

三　ミドハト・パシャの悲劇的最期

新帝ムラードは、夙くより精神に異状あり、且暴酒の故を以て、真摯なる回教徒の喜ばざる所となつて居た。改革党は、当初より彼の弟アブドゥル・ハミッドを即位せしめ度いと望んで居たが、教師団が法律によつて固く最年長男子継承説を執つたので、ムラードが帝位に登ることゝなつたのだ。然るに即位以来幾くもなく、帝の病状次第に重く、遂に発狂状態に陥つたので、アブドゥル・ハミッドが、愈々帝位を継ぐことゝなつた。而して新帝は、ミドハト・パ

シャの勧告に従ひ、憲法の編纂を命じ、同年十二月二十二日、ミドハト・パシャを首相に任じ、翌二十三日、新憲法を発布した。これが名高き一八七六年の土耳古憲法であつて、其の要点は左の如くである。

土耳古帝国の総ての人民は、宗教の如何を問はず、一様にオトマンと呼ばれ、全く同等の権利義務を有する。議会は元老院及び衆議院の両院より成り、毎年一回十一月一日に開き、翌年三月一日に閉ぢる。元老院議員及び議長は、皇帝之を勅選し、任期は終身である。其の資格は、大臣・総督・聯隊長・大判事・陸海軍将官にして其職を退ける四十歳以上の男子たるを要し、衆議院議員は、満三十歳以上の男子にして、土耳古語を解し破産・禁治産の宣告を受けず、全国の男子五万に対し一名の割合を以て、一定の税額を納むる満二十一歳以上の男子の選挙によつて選出せられ、其の任期は四年である。法律案及び予算案は内閣之を議会に提出し、両院の協賛を経て、皇帝の裁可を得て、参事院之を起草することゝなつた。

青年土耳古党の目的は、此の憲法発布によつて、成就の第一段を踏んだかの如く見えた。さり乍ら、新帝アブドゥル・ハミッドは、表面改革に賛成し、而して賛成を装ふことによつて、容易に帝位に登るを得たが、実は廃帝よりも恐るべき改革の憎悪者であつた。彼は憲法による帝権の制限を欲しなかつた。而して、夫れにも増して、ミドハト・パシャの声望を嫉んだ。彼は密かに守旧派の勢力を糾合し、憲法発布後幾くもなく、突如ミドハト・パシャを斥けた。彼は固より憲法をも廃止せんと欲したのであるが、一旦発布して直ちに之を廃止しては、人民の激昂を招くべきが故に、暫く放置して機を待つことゝした。かくて土耳古最初の議会は、翌一八七七年三月開会せられ、同六月無事に閉会したが、理由を述べずに中止されてしまつた。

爾来、アブドゥル・ハミッドは、全力を挙げて青年土耳古党の剿絶を企てた。彼は近衛兵を増して宮中の警戒を厳にし、極度に言論出版を抑圧し、盛に祕密探偵を放ちて、危険人物の動静を監視した。彼は最もミドハト・パシャを恐れた。ミドハトは廃帝アブドゥル・アズィズを弑逆せりと云ふ根も無き罪名の下に捕へられ、一度び死刑を宣告されたが、此無道なる処置は、列強の激しき反感を招けるため皇帝は死刑を取消して、終身流刑に処すべきを宣告し、之を中部アラビアの一邑タイフに護送した。而して一八八三年七月、此の愛国者は、皇帝の密かに遣はせる暗殺者のために、六十一歳を以て、配所に非命の最期を遂げた。一旦埋葬に附せられたる彼の死骸は、再び掘出され、其首を切りて箱詰となし、箱の上には仏蘭西語にて『日本製象牙細工』と貼札して、遥かに皇帝の許に送られた。

四　臥薪嘗胆の三十年

アブドゥル・ハミッドの極端なる圧迫は、青年土耳古党を雌伏せしめた。其の領袖は、多く国外に亡命した。而も彼等は、決して初志を翻さなかつた。一八九〇年代に至り、仏国巴里に集れる青年党の亡命志士は、ミドハト・パシャの遺志を継いで故国の為に戦ふべく、一個の団体を組織し、巴里及び瑞西ジュネーヴを中心として、国外に在る志士の団結を企て、両市に機関紙を発行して、主張の宣伝に努めた（註一）。当時両機関紙上に発表せられたる言論は、極めて穏健なるものなりしを以て、欧羅巴の公衆は、多大の同情を彼等に注いだ。初め彼等は、ムラード・ベイを推して首領としたが、後には彼は同志を裏切り、結社の祕密をアブドゥル・ハミッド帝に告げたるがため、彼等の運動は少なからず阻止された。而も彼に代つて団体を率ゐたるアーメッド・リザ・ベイは其の真摯なる努力により、能く続凹せる難局に処し、着々団体の発展を遂げしめた。この団体が取りも直さず『オトマン統一進歩協会』である。

彼等は、皇帝が八方に配置せる密偵の目を潜り、一切の困難と戦ひて、熱心なる宣伝を行ひ、東欧・小亜・及び埃及に於て多数の同志を得た。党勢の拡張と共に、彼等の主張は、次第に戦闘的となつて来た。此頃に至りて、党内の言論は、巴里及びジュネーヴに於ける実行委員をして、憂を抱かしめたるほど積極的となつた。是に於て、一進歩協会は、一九〇二年、具体的政綱を協定するの目的を以て、巴里に会議を開き、諸方の代表者四十七名の出席を得た。この会議に於て、下の四大綱領が決議された。

一、法律の範囲内に於て、現帝室に対する忠誠を宣言すること。

二、回教々義の信奉者間に、近世の進歩的文化を弘布すること、並に平等観念に基き、他宗教を擁護すること。

三、回教徒なると非回教徒たるを問はず、全土耳古臣民の間に政治的協調を高めること。

四、政治の基礎として、一八七六年に発布せられたる憲法を採用すること。

此の会議に出席せる代表者中には、土耳古人あり、アラビア人あり、希臘人あり、猶太人あり、アルバニア人あり、アルメニア人ありて、各々異なれる利害関係を有せるが故に、激しき論争が行はれた。さり乍らアブドゥル・ハミッドの政治に対する不満は、総てに共通であり、且専制政治を倒すと云ふ目的に於て一致した為に、更に角にも叙上の決議に達するを得た。而も其後に至り、夫々の民族が、各自の運動を始め、アルメニア人は『革命同盟』を組織し、マケドニアには『ブルガリヤ国内団』の組織を見るに至り、青年土耳古党は、漸くトルコ人のみの団体たるべき傾向を生じて来た。

既にしてマケドニアに於ける基督教徒の反皇帝運動は、次第に激しくなつて、暴動の頻発を見るに至つた。土耳古政府は、之に対して苛酷なる圧迫を加へたが、形勢は益々悪化するのみであつた。英仏伊三国は、基督教民保護を名として、先づ国際憲兵をマケドニアに配置し、其の処分案を協議するに至つた。青年土耳古党は、外国勢力の侵迫を

憤つたが、同時に此事によりて、政府の威力行はれざるに乗じ、故国に接壌せるマケドニアに於て、改革の宣伝に従ふ便宜を得た。

一九〇五年に至り、マケドニアの秕政改革を目的として、一団の同志が『自由協会』を組織し本部をサロニカに置いて、盛んなる活動を開始した。この団体は、青年土耳古党と、其の根本目的を同じくせるが故に、両者の間に提携の議起り、一九〇六年、自由協会は統一進歩協会に併合し、爾来サロニカに青年土耳古党中央本部を設け、改革運動の中心を此地に置くことになつた。而して此時より、彼等の運動は、頓に実行的となつた。

（註一）巴里に於て発行せられたるは日刊『相談 Meshvert』、アーメッド・リザ・ベィ之が主筆たり。ジュネーヴのは毎月二回雑誌『新月 Hilal』、リール・ガネム之が主筆たり。ガネムは、後に巴里に於て日刊『青年土耳古 La jeune Turquie』を発行した。

五　青年土耳古党の組織

吾等は、茲に青年土耳古党の組織、並に其の運動方法に就て述べねばならぬ。青年土耳古党は皇帝の最も油断なき警戒の下に、密偵の目をくらましつゝ活動せるが故に、秘密が第一のモットオであつた。それは巴里に三名より成る評議会、サロニカに十名より成る評議会を置いた。議員は、秘密投票によりて選ばれ、且屢々之を代へた。而して党の秘密顧問機関として、抽籤によつて就任する六名の委員を設け、一切の運動に関して之に諮問する事になつた。党員は、此頃に至りて、マケドニアのみで一万五千人、土耳古全体で八万人に達したが、各百五十人を以て一団とした。各団には、二名の幹事を置き、一名はサロニカの評議員と接触を保ち、団の行動を指揮するもの。他の一名は、之を監視して、其の裏切を防ぐ為に置かれた。而して各団は、五人よりなる班に分たれ、党員は唯班を同じくす

る四名の同志を知るのみで、其他は何人が党員であるかを知らない。

会員の召集は、必ず口頭を以て行はれ、決して文書を用ゐぬ。而して此の伝達には、合の場所は、能ふ限り人里離れし地を選び、屢々森林中に開かれ、会員は悉く覆面して出席する。言を発することを許されない。新たに入党するものは、極めて厳格なる手続を経ねばならぬ。て、或集合所に連れ行かれ、党の目的及び会員の義務を打明けられ、秘密を厳守すべきこと、ことを誓ひて、初めて党員となる。

宣誓式は森厳悽愴を極める。党員は、コランの上に置かれたる拳銃と剣との前に立ち、入党総て党の為に献げ、党の命令あれば、其の兄弟を殺すことをも辞すべからざる旨を言渡され、然る後に下をなさねばならぬ——

『一滴の血、わが肉体に残らん限り、吾は国民と自由と真理との為に戦はん。アラーとマホメットの名に於て、吾これを誓ふ』。

党員は、収入の二分を党費として納め、何時にても家族・事業・友人を棄てゝ、召集に応ずるの覚悟を有たねばならぬ。集められたる党費は、他の寄附金と共に、主として武器・弾薬の購入に費やされ、且革命に際して生命を失うことあるべき同志の遺族扶助金として積立てられた。

党の敵、並に裏切者に対しては、党内の秘密裁判機関に於て、事件を審査した上、必要の場合には死刑を宣告する。敵とは党員又は党其ものに対し、其の活動を阻止する迫害を加へる者を謂ひ、裏切者とは、党の秘密を官憲に密告し、又は運動計画を阻害する者を謂ふ。而して死刑の執行は、此の目的の為に設けられたる暗殺団これに当る。是の如き組織の下に、青年土耳古党は其の党員に向つて、下の如き行動に出づべく準備せんことを求めた。一、官憲の行動に対

し、武器を以て抵抗すること。二、政治的並に経済的罷業によつて、武器を用ゐざる抵抗を行ふこと。三、納税を拒むこと。四、軍隊に宣伝して、革命勃発の際に、人民の敵に立たしめざること。五、全般的暴動の準備に努むること。

叙上の諸計画のうち、青年土耳古党が、最も力を注ぎたるは、実にマケドニア軍隊の誘致であつた。蓋し土耳古政府は君府の親衛軍には特に高給を与へ、衣食共に優遇し、且兵卒の士官進級制度を設け、其の忠誠を買ふに努めて居たが、地方軍隊は全く之と事情を異にし、財政の困難、官吏の腐敗等によつて、給料の支払常に遅滞し、被服食料の給与、また不充分なりしため、不平は毎も絶えなかつた。是くの如き将士の不平は、青年党の乗ずる所となつた。彼等は予期せるよりも容易に且迅速に、軍隊を味方とすることが出来た。改革主義は燎原の火の如く軍隊に拡まつた。一九〇七年暮までに、サロニカ及びモナスティルに駐屯せる第三軍団の全部は、青年党に加盟して忠誠を誓ひ、アドリアノープルに在る第二軍団は、明かに青年党の運動に賛同の意を表し、小亜ニルゼルム駐屯軍団の将士、また彼等と行動を共にすべきを誓ふに至つた。

かくして此年十二月、青年土耳古党は、第二回総会を巴里に開催し、下の三個条を協定した。第一、アブドゥル・ハミッド帝の廃位、第二、現在政治の徹底的変革。第三、一八七六年憲法の確立。

此の協定は、第一回の失れに比し、著しく積極的となつて居る。そは明白に、近き将来に於ける革命を暗示せるものである。固より党内には、穏健説を主張する者があつた。巴里及びジュネーヴ支部の党員は、多く穏健派であつたが、マケドニア及び土耳古本部の党員は、既に軍隊を後援とし、力によつて憲法を皇帝の手より奪取すべく、堅き決心を抱いて居た。而して只管此の目的の為に準備した。

六　青年土耳古党の勝利

青年土耳古党は、準備既に成れりと信じた。彼等は、何等か突発の事件あらば、之に乗じて蹶起すべく、満を持して待構へた。されど事件は容易に起らない。かくて彼等は、自ら進んで事を挙げねばならぬと悟り、一九〇八年八月三十一日、皇帝の即位記念日を以て、一斉に起つべく計画した。然るに其後の事情は、彼等をして是よりも早く事を決行せしむるに至つた。

是より先、皇帝の密偵として、多数の部下と共にサロニカに駐屯せるナズィム・ベイは、マケドニア及びアドリアノープルの兵営に於て、若干の将校及び兵士を逮捕せしめ、特別委員をサロニカに急派して、事件の審査に従はしめた。審査の進行につれて、形勢は次第に明かになつて来た。皇帝は、其の報告に驚倒し、直ちに第二特別委員一行を急派し、断乎たる処置を執るべく準備した。

モナスティル兵営の一年少士官、ニアズィ・ベイ少佐は、最早狐疑すべき時でないと思つた。逡巡躊躇する間に、皇帝をして事に備ふるの準備をなさしめるならば、青年土耳古党は、遂に蹶起の機会を失ふべきを憂へた。かくて彼は、身を殺して革命の狼火たるべく決心した。一九〇八年七月三日、彼は下の書翰を義弟に宛てゝ書いた。

『僕は神の冥助の下に、一時間以内に出発せねばならぬ。だから僕は吾志せる計画を君に告げ、僕斃れたる後は慎重迅速に之を実行することを頼んで置く。千言万語、竟に無益だ。君は僕の行動が何の為なるかを知る。僕は為すなくして生きるより、寧ろ死を択ぶ。だから僕は生命を投出してくれた二百の部下に、モーゼル銃を荷はせて、其の先頭に立つて死にゝ行くのだ。妻のことは神様に任せて置く。其他のことは、僕の死か、国家の安全かあるのみだ』。

かくてニアズィ・ベイは二百の決死隊を率ゐ、レスナ山上に革命の旗を樹て、憲法復興を宣言した。彼は啻に其の

生命を失はざりしのみならず、兵士の来り投ずるもの相次ぎ、日ならずして数千を算するに至つた。皇帝から『一切の価を払つてニアズィ及び部下の将卒を捕へよ』と電命せられしシェムシ・パシャ将軍は、七月七日、却つて部下の一将校に射殺された。マケドニアの全軍隊は、革命に左袒した。十三日には、マケドニア監軍参謀にして、夙くより青年党の有力なる幹部たりしエンゼル・ベイ少佐が、サロニカを脱してレスナに来り、ニアズィ・ベイと行動を共にした。而して此日彼等は、各国領事に宣言書を送致して、革命の因縁及び目的を説明し、同時に皇帝に打電して、廿六日までに憲法回復の詔勅出でざる時は、革命軍は直ちに宮城を衝くべしと迫つた。七月廿二日に至り、ニアズィ・ベイは、何等の抵抗を受けずして、モナスティル市を占領し、第三軍団司令官オスマン・パシャ元帥を虜とした。皇帝は八方に打電して、叛乱鎮定の為に、軍隊をマケドニアに進むべしと命令した。而して何人も之に応じなかつた。

内閣会議は、八月二十三日夜、民意に従つて憲法を復興することに決した。二十六日に至り、無数の民衆、宮門に群集し、口々に憲法復興を絶叫した。皇帝は、止むなく、翌二十七日、憲法遵守の宣誓式を行ひ、サイド・パシャ以下の閣僚悉く辞職し、キアミル・パシャ首相に任ぜられて新内閣を組織することになつた。全土耳古は、歓喜の声に満ちた。革命の功勲者エンゼル・ベイは、此日サロニカの自由街に於て、熱狂せる民衆に向ひ、名高き下の演説をした。曰く『専制政治は今日を以て終つた。吾等総て兄弟である。トルコ人・ブルガリア人・ギリシャ人・セルビア人・ルマニア人・回教徒・猶太教徒の間には、最早何等の障壁もない。同じく青天白日の下吾等は一様にオトマンたるの誇りを有する』と。

是くの如くにして無血革命が成就された。絶えて久かりし議会は、十二月十七日を以て開かれることゝなつた。青年土耳古党は、執政を旧時代の政治家にして進歩主義なる者に任せ、其の背後にありて彼等を操縦せんとした。然るに首相キアミル・パシャは、閣員の多くが、青年党の傀儡に過ぎざることを喜ばず、彼等の掣肘を脱すべく、内閣改

造を企て、先づ陸相アリ・リザを他に転ぜんとし、茲に忽ち内閣の分裂を生じ、恰も開会せる議会より猛烈なる攻撃を受け、遂に辞職するの止むなきに至つた。於是ヒルミ・パシャ首相となり、アリ・リザ及び前内閣大臣の或者と共に新内閣を組織し、愈々青年党の代表内閣となつた。

かゝる間に、土耳古帝国内の基督教国民は、革命の変乱を好機として離叛を企て、ブルガリアは独立を宣言し、ボスニア・ヘルゼゴヴィナは墺太利に併合し、同時にクリート島も希臘に併合を宣言するなど、国事多端を極め、国威宣揚・利権回収を標榜せる青年党の主義を裏切れる事件続発せるため、青年党の反対者等は、其責を青年党の無能に嫁し荐りに非難の声を放つた。

巧慧機敏なる皇帝は、此の形成を見て、巧みに守旧派並に僧侶階級を糾合し、財を散じて『回教同盟』を組織せしめ、新政に不平なる親衛軍を煽動して、青年党に対する反感敵意を抱かしめた。かくて一九〇九年四月十三日、皇帝の手先に教唆せられたる約二個大隊の近衛軍は、突如兵営を出でゝ、議事堂及び電信局を包囲し、議会を強迫して内閣顚覆運動に同意せしめ、更に皇帝に奏請する所あらんとして宮城に向つた。皇帝は欣然として彼等を迎へ、其罪は問はざる旨を告げ、翌日軍を解きて兵営に帰らしめた。ヒルミ・パシャは、即日職を辞した。皇帝はテゥフィク・パシャに新内閣組織を命じ、且飽迄も憲法を遵守すべき旨を人民に布告した。

青年土耳古党の領袖は、悉く退京してサロニカに走り、憲法危しと叫んで再挙を図つた。軍隊は、一斉に彼等と共に憲法擁護の為に戦ふべきことを誓つた。かくて四月二十一日、マームード・シェフケト・パシャは、マケドニア諸軍団及び義勇軍を率ゐて君府に進軍し、日ならずして之を包囲した。二十四日払暁、革命軍は、テファノより君府に進入し、反革命軍と戦つて、悉く之を降し、翌二十五日、宮城を占領し、皇帝を虜とした。皇帝は、過日の政変と全然関係なきことを弁明した。革命軍は、固より耳を藉すべくもない。廿七日早朝より開かれたる

上下両院議員の秘密会議は、皇帝を廃し、皇弟レシッド・エフェンディを即位せしむることを決議し、その如く断行した。レシッド・エフェンディは即ちムハマッド五世である。同時にテゥフィク内閣倒れ、ヒルミ・パシャ再び新内閣を組織することゝなつた。廃帝アブドゥル・ハミッドは、翌二十八日午前二時闇路をサロニカに送られた。三十年に亙る青年土耳古党の長き戦ひは、遂に勝利を以て報ひられ、土耳古憲政史は、茲に一段落を告げた。

（註）前節及本節は、主として Angus Hamilton : Problems of the Middle East, The Story of the Young Turks Party 及 Sir Edwin Pears : Abdul Hamid 第十二章及び第十三章に拠った。

七　青年土耳古党に対する理由なき非難

憲法政治は、兎にも角にも、確立された。新帝ムハマッド五世は、温厚無力なる君主なりしが故に、土耳古帝国の実権は、青年土耳古党の実行機関、統一進歩協会の掌裡に帰した（註一）。而して此時より今日に至る彼等の政策並に施政は実に深甚無限の教訓を、吾等に与へるものである。

之を事実に就て観れば、青年土耳古党治下の土耳古は、依然として百年来の衰退を続けて行つた。欧羅巴に於ては君府と之に接壌する小部分との外、其の領土の全部を失ひ、阿弗利加に於ては伊太利の為にトリポリを強奪せられ、加ふるに亜細亜土耳古の諸民族を離叛せしめた。国民は毫も進歩せず、財政の窮乏は甚しきを加へ、行政の腐敗も亦改まらなかつた。而して最後に、彼等が試みたる乾坤一擲の大賭博も、独逸の惨敗によつて見事に外づれた。平和会議に際して、米国の星旗が巴里の天に翻つたのは、土耳古の弦月既に欧羅巴の空に沈めるを示す黙示の如く見えた。而して青年土耳古党は、土耳古の悲運に対する全責任を負はされた。世界の輿論は、土耳古亡国の罪を、挙げて彼等の無能と失策とに帰した。固より吾等と雖も、青年土耳古党を瑕なき玉と信ずるものでない。又は牽強附会して彼等

を弁護せんとするものでもない。唯だ吾等は、故意に黒く塗られたる彼等の顔を見るに忍びないに過ぎない。彼等の真個の面目を明かにせねばならぬ。

吾等の固く信ずる所によれば、土耳古革命をして、有意義なる効果を挙げ得ざらしめたる数々の原因のうち、最も重大なるものは、実に欧羅巴の新土耳古に対する悪意其ものである。波斯革命が、利己貪婪の英露両国によつて、無慚に蹂躙された如く、土耳古革命も、また欧洲列強の為に蹂躙されたのだ。一言にして尽せば、列強は土耳古が革命によつて強大となることを、恐れ且憎んだのだ。露西亜と墺太利は、第一に土耳古革命の成功が、自国の革命党、並に自国内の諸民族に及ぼす影響を恐れた。英吉利もまた、土耳古の恢興を恐れた。若し青年土耳古党の宿願、君府進出及びサロニカ進出の希望を、水泡に帰せしむべきことを恐れたならば、埃及とサイプラスとを失はねばならぬかも知れぬ。青年党が見事に政治的成功を遂げるならば、印度及び其他の領土に、自治運動乃至独立運動を激成するかも知れぬ（註二）。此憂慮は、仏蘭西も等しく之を抱ける所である。仏蘭西は、アルジェリ・テュニズィに及ぼす新土耳古の感化を恐れ、且従来近東基督教民の保護者として、亜細亜土耳古に占め来りし特殊の地位を失ふことをも恐れた。かくて列強は、直接又は間接に、土耳古に憲政行はれ、責任政府樹立せられ、而して国運の挽回せらるゝを妨げた。墺太利がボ・ヘ二州の併合を宣言した時、列強は何の抗議をも提出しなかつた。伊太利が、宣戦もせずにトリポリ劫掠の非道を敢てせる時も、列強は唯だ土耳古の弱められるゝことを喜んだ。再度のバルカン戦争に際しても、列強は種々なる口実の下に、土耳古を弱めることに協力した。而して一方世界戦に向つて、土耳古は憲政に適せず、青年党は空想家にして、政治的能力なしと宣伝し、其の信用を失はしむることに努めたのだ。

青年土耳古党の事業を至難ならしめたる、第二の重大なる原因は、バルカン諸邦の離叛であつた。バルカン諸邦は

一度びはエンゼル少佐の演説に有頂天となつたが、幾くもなく復た国民運動・分離運動に没頭し初めた。而して目前の利益に魂を奪はれたる欧洲列強は、互に利害関係あるバルカン諸民族を煽動又は後援して、土耳古帝国と事を構へしめ、一方青年土耳古党を窮地に陥るゝと共に、他方彼等自身の破滅を招ける、世界戦の種を蒔きつゝあつた。

第三に青年土耳古党を困惑せしめたるは、帝国の民衆が、多年の専制政治の下に、全く政治的訓練を欠いて居たことであつた。土耳古帝国の人民は、実に宗教を異にし、言語を異にせる、雑多なる要素より成つて居る。是等異分子の一『統一』と『進歩』とは、青年党の最も愛着せる主義ではあつたけれど、彼等の間に築かれたる障壁は、到底一朝にして取去らるべくもなかつた。加ふるに彼等は、立憲政治に対して何等の理解もなき無智の民なりしが故に、立憲政治と専制政治との間に、何の相違あるかさへも知らなかつたのだ。従つて青年土耳古党は、民衆の後援を期待すること、又は適当に民論を喚起することも出来なかつた。

叙上の諸原因より来れる種々なる内治外交の紛糾は、断じて青年党の罪でない。如何なる政治家が其局に当つても必ず遭遇すべき難関である。故に吾等は、此等の点に於て、啻に彼等を責めざるのみならず、無限の同情を彼等の為に注ぐ。青年土耳古党に対する真個の批判は、此等の難局に際して加へられねばならぬ。而も此点に関し、仮令吾等は深甚なる敬意と同情とを、彼等の心事と努力とに対して払ふとは言へ、其の実際政策に対しては幾多の遺憾を感ぜざるを得ぬ。

（註一）新帝は、廃帝アブドゥル・ハミッドの即位と同時に、一宮殿内に監禁された。彼は皇嗣を中心として、自己に対する陰謀を企てる者を怖れたのだ。かくて先帝在位三十余年の間、後宮と少数の宮内官以外、何人を近付けることも許されず、何時其の生命を奪はれるかも知れぬ懸念の下に、戦々兢々たる生活を送つて来た。従つて新帝は、慈愛に富める温良な老人ではあつたが、革命後の難局に処して、土耳古を統治すべき素養を有せず、人民からは『イラーデ』器械と呼ばれて居た。イラーデは勅令のことである。守旧派は、一度新帝を擁立して、青年党を抑へんと企てたが、此の陰謀は直ちに圧迫

され、首謀者十三名は悉く死刑に処せられた。其の一人は実に皇婿であった。帝は、親ら内相タラート・パシャの前に跪き、皇婿の為に特赦を哀願した。而もタラートは、断乎として之を斥け、数日の後、絞刑に処せられた皇婿の憐れなる姿は、公衆の前に曝され、土耳古帝国に向って統一進歩協会の威力を示す実証となった。

（註二）或は下の如く反問する者あらん。曰く『英国は多年土耳古保全を主義とし、露国の君府進出を阻止すべく、土耳古の強大を欲したりしに非ずや』と。されど英国は、一九〇三年五月五日に、時の外相ランスダウン及びエレンバラー卿の声明によりて、君府政策を根本より一変して居る（Jäger : Persien und Persische Frage 第三頁）。一九一六年四月廿七日土耳古外相ハリール・ベイは下の如く演説した。曰く『英国は、独逸の屈服を以て根本政策となし、之が為に土耳古を犠牲として露西亜と結ばんとした。曾て英国は、露国の君府進出を以て、印度を脅威するものとなし、土耳古保全を根本政策として、吾等と親善なる関係を結ばんとした。然れども一度び東洋の新興国日本と同盟し、之により露国より来る印度の危険を除き得たると同時に、英国は最早印度に顧慮する必要を見なくなった』と（Schäfer : Entwicklung der Bagdadbahnpolitik 第五六頁）

八　青年土耳古党の政策に対する批判

青年土耳古党の根本政策は、雑多を極むる帝国の人民全体を『土耳古化』することに由つて、土耳古帝国の統一を実現するに在つた。彼等の『統一』の原理は、実に土耳古主義其ものであつた。こは、原則としては、毫も非難すべき理由を見ない。覚醒せる土耳古精神から、是くの如き政策が生れることは、最も自然であると言はねばならぬ。唯だ不幸にして、彼等は余りに性急であり、余りに単純無策であつた。

土耳古主義を基礎として、国民的生活を有効且迅速に建設し得る為の根本条件は、トルコ民族が、土耳古帝国内の諸民族中、最も多数に、最も活動的に、最も文化的なる要素であることでなければならぬ。此の条件さへ確実であれ

ば、帝国の性急なる土耳古化も、決して不可能とせぬ。

トルコ人は、数に於ては固より帝国内に第一位を占めて居た。バルカン戦争以前に於て、一民族としては、言ふ迄もなく最大多数であり、約二百五十万、亜細亜土耳古に於て約七百五十万を算せるが故に、全人口の約四割に当る（註二）。此等のトルコ人は、之を二つの階級に分ち得る。一は、主として亜細亜土耳古に於てアナトリアに住する農民であり、最も剛健なる分子であるが、第十九世紀を通じて頻発せる戦争に徴発せられ、多く優秀なる男子を失つた。他は、地主・官吏・将校等を含む治者階級であるが、概ね無為怠惰にして、特権によつて栄え来れる亡国的分子である。帝国内に於て、実際に要位を占めて居た者は、トルコ人以外の民族であつた。陸軍に於てはアルバニア人・クルド人・スィルカスィア人が、トルコ人よりも多くの有為なる将校を出して居た。宗教・教育・行政の方面に於ても、アラビア人・アルバニア人・若しくは基督教民であつたが、実際事に当れる次位の官吏は、決して帝国内に於ける最も文化高き民族でもなく、最も活動力ある要素でもなかつたのだ。唯だ夫れトルコ人は、土耳古帝国の一切の民族に比して、遥に優越せる天賦と素質とを具へて居ることは、真実なる土耳古研究者の等しく確認する所なるが故に、之を適当に指導訓練すれば、疑もなく帝国の堅固なる中枢たり得るであろう。青年土耳古党は、先づ心を此点に注ぐべきであつた。然るに彼らは、在るが侭のトルコ人を基礎として慌しく土耳古主義を確立せんとした為に、其の志業は蹉跌せざるを得なかつた。

旧専制政治時代の異民族統治は、無為放任主義であつた。固より不正あり腐敗あり、而して賄賂公行して居たが、人種的反感は殆ど無かつた。アルバニア・クルディスタン・メソポタミア・アラビア等は、此の放任政策によつて土耳古の領土として残れるもの。旧土耳古は、長い間、決して権威を以て彼等に臨むことなく、土耳古官吏は、名目の実は各部族の酋長が、夫々の地方を統御して居た。旧政府は、謀略を以て彼等を誘ひ、好餌を

以て懐柔し、其故に事なきを得て来た。

然るに青年土耳古党は、前後の事情、内外の形態を顧みず、真向より其の理想を振翳した。古統一を直ちに断行し、アルバニア・アラビアに与へられたりし自治権を撤発し、全国一様に租税兵役の義務を課し、中央政府の権力を、帝国の隅々に普く行渡らせようとした。而して其の結果は、忽ちアルバニア・メソポタミア・アラビアに於ける叛乱を激成し、巨額の経費と数千の生命とを失ひて、而も何の得る所もなかった。此の性急なる政策の失敗に対しては、彼等飽迄も其責を任ふべくある。

青年土耳古党は、一面に於て是くの如く急進的であり、且余りに急進的なりしが故に失敗せるに拘らず、他の最も重大なる方面に於て、極めて妥協的態度に出た。彼等は専制政治の下に特権を享有せる亡国官僚階級に対しては、殆ど一指を染めなかつた。革命精神を徹底せしめんと欲せば、彼等は必ず此の階級を掃蕩しなければならなかつたのだ。一九〇九年の反動革命は、最も明白に、権力を旧官僚に持続せしむるの危険を彼等に悟らしめた。かくて彼等は、全力を挙げて軍隊を支配するに努めた。さり乍ら文官階級に対しては、曾に何事をも為さゞりしのみならず、寧ろ之と妥協した。彼等の執れる政策は、旧時代の官僚をして、其侭新しき憲法政治の実際に当らしめ、彼等自身は、裏面に在りて之を操縦し監視するに在つた。吾等は何故に青年土耳古党が、先帝廃位の時、従来の祕密結社の覆面を脱棄て、公々然一個の政党として現われ、旧官僚階級を一掃して、自ら責任ある政治的地位に立たざりしかを怪しむ。かくすることに由つて、彼等は少なくとも革命の精神を、一般国民の間に、或る程度まで鼓吹し得たであらう。而して少くとも彼等が欲せるトルコ人の覚醒に、幾分かの役に立ち得たらう。吾等は、事の茲に出でざりしを、極めて遺憾とする。或は青年土耳古党員は、長く国外に放浪せるが為に故国の政情に暗かりしと言ひ、或は多く年少者にして政務の実際に通ぜざりしと言ひ、彼等の妥協を以て止むなきに出でたるが如く唱へる。さり乍

ら、孰れの国に於ても、革命が練達せる老政治家共によつて成された例はない。

青年土耳古党は、表面責任ある地位には立たなかつたが、其の理想を実現する為には、革命後の政局を、専制的に指導せねばならぬことを知つて居た。青年党の実行機関『統一進歩協会』は君府に本部を設け、有ゆる都会に党員を配置した。君府には約四十名の領袖蟠居し、秘密に会合して計画を討議し、党員に命じて必要なる行動を執らしめる。彼等は固より内閣及び議会に於て必要なる椅子を占めては居たが、而も依然たる一個の秘密結社として、背後に隠れて政治を左右するの手段を採つたのだ。而して斯くの如き手段によつて、能く内閣と議会とを支配した。彼等の命令を奉ぜざる宰相・大臣は罷められ又は殺された。いま彼等の威圧政治の最も鮮かな実例を下に述べる。

一九一二年七月、青年土耳古党は、内政外交共に失敗を重ねたりとの故を以て、政権を反対党たる聯合自由党に渡さねばならなくなつた。その結果としてキアミル・パシャを中心とせる内閣が組織された。此内閣は、不幸なるバルカン戦争の当路者として、一九一三年一月、列強の勧告によりアドリアノープルをブルガリアに譲歩することを承認した。隠忍六個月、虎視眈々として機を覗へる統一進歩協会は、直ちに之に乗じて起つた。彼等は、土耳古第二の聖都ア市を失ふは、土国其者を失ふ第一歩だと呼号して民衆を激昂せしめた。而して一月二十六日、三名の領袖タラート、エンヴェル、及びジェマルが、自ら先頭に立ち、二百名の部下を糾合して、恰も閣議中なりし内閣に殺到した。ナズィム・パシャは、驚々たる怒号を耳にし、何事ならんと玄関に立出で、喧騒せる群衆を見、片手に煙草を持ち、片手を衣嚢に入れたまゝ、笑つて彼等に向ひ、『小供達！　一体何の為に騒ぐのだ矢釜しくて邪魔になるじやないか』と言ひも終らず、群衆の中より放てる一弾に射られ、其場に絶命した。群衆は更に会議室に乱入し、銃口を八十歳の老宰相に擬し、即座に職を辞せしめた。かくてマームード・シェフケト・パシャ内閣の出現となつたが、幾くもなくサイド・ハリムを首相とし、三名の青年党首領相次で入閣し、タラートは内相、

エンヴェルは陸相、ジェマルは海相となつた。土耳古を率ゐて世界戦に参加したのは、即ち三領袖を中心とせる此内閣であつた。

(註) F. C. Endres : Die Türkei 第一六一頁に拠れば、バルカン戦前に於ける帝国内の民族数は下の如し

欧羅巴土耳古	トルコ人	二、五〇〇、〇〇〇
	希臘人	一、五〇〇、〇〇〇
	アルバニア人	一、〇〇〇、〇〇〇
	ブルガリア人	七〇〇、〇〇〇
	セルビア人	七〇〇、〇〇〇
	猶太人	一九〇、〇〇〇
	アルメニア人	一五〇、〇〇〇
	ルマニア人	一〇〇、〇〇〇
	非トルコ人合計	三四〇、〇〇〇
	総計	六、八四〇、〇〇〇
亜細亜土耳古	トルコ人	七五、〇〇〇、〇〇〇
	シリヤ及アラビア人	五、〇〇〇、〇〇〇
	クルド人	一、二五〇、〇〇〇
	アルメニア人	一、七〇〇、〇〇〇
	希臘人	一、〇〇〇、〇〇〇
	猶太人	三〇〇、〇〇〇
	其他	四〇〇、〇〇〇
	非トルコ人合計	一〇、六〇〇、〇〇〇
	総計	一八、一〇〇、〇〇〇

即ち欧羅巴土耳古に於て両者の比例は一に対する一・七四であり、亜細亜土耳古に於ては一に対する一・

四であり、両者を併せれば一に対する一・五となる。

九　青年土耳古党の三領袖

一九一三年に赴任し、一九一六年二月米国が世界戦に参加するまで、米国大使として君府に駐剳せるヘンリー・モルゲンソーは、其の親しく交際し且交渉せる統一進歩協会三領袖の人物に就て、極めて興味ある描写を発表して居る。吾等は、モルゲンソーの叙述に基いて、彼等の性格を紹介したい。何となれば、彼等を良く知ることが、取りもタラート・パシャは、もと郵便集配人であつたが、後にアドリアノープルの電信技手となり、それから青年党に加盟して偉大なる才幹を発揮したのである。彼は、内相に就職して、土耳古帝国の最大権力者となれるに拘らず、君府の貧民町に在る古き木造の家に住み、家具は皆粗末であり、壁には二三の刷画を懸け、床には古びたる敷物を布き、其の生活は実に質素簡単を極めて居た。居室の一隅に在る卓上には、曾て生計の資たりし電信機を安置し、自ら電鑰を握つて僚友に打電するのが、彼の楽しみの一つであつた。

彼は、内閣に居らぬ時は、必ず統一進歩協会本部の机を占め、自ら党務を処理して居た。そして暇さへあれば、青年党の乱暴者と一緒に、時を過ごすのを常とした。その頑丈な骨格、巨大な背、岩のやうな腕節は彼の強固なる意思を示し、事を論ずる場合には、屹度肩を聳かし、普通人の二倍もある偉大なる拳固を、根の生へたやうに卓上に置くのが癖であつた。モルゲンソー曰く『今でもタラートの事を回想する時、先づ念頭に浮ぶのは、あの哄笑や、面白い話に声を放つて興ずることや、室に入り来る時のどつしりした歩武や、其の他彼の獰猛・果敢・無慈悲などでなく、実に彼の生命と性質とを具体化したやうな、彼の巨大なる拳固である』と。彼は、『今迄とても、誰かゞ土耳古を治

めて来たのだ。吾々に治められぬ道理はない』と公言して、何の憚かる所もなく内相の椅子に坐り、其の思ふが侭に政治を行つた。

タラートと興味ある対照をなす者は、エンゲル・パシャである。彼は、君府の最も閑静な貴族町に住し、宏大壮麗を極めたる邸宅に住み、内親王を夫人として、豪奢なる生活を営み、人々をして其の擁せる巨富の出処を怪しませて居た。タラートが、近づき難き威厳を備へたる体格風貌の所有者なるに反し、エンゲルは、瀟洒なる風采と、婦人の如き端麗なる容貌との持主であつた。而してタラートが、何の装飾もなき部屋で、ブルガリアの遊牧民を偲ばしめるやうな土耳古帽に灰色の寝衣着で、無造作に来客と会見して居間の、一方の壁にナポレオンの肖像、他方にフリードリヒ大王の肖像を掲げ、その真中に坐つて来客と会見して居た。

而もエンゲルは、如何なる場合にも沈着と冷静とを失はぬ豪胆を有し、自己の将来又は生命を賭して冒険するに躊躇せざる果断を有し、常に危機を間一髪に脱して、革命指導の役目を、最も見事に勤めて来た。彼は独逸に学び、独逸帝と相識り、而して独逸の心酔者であつた。彼は陸相に就任すると共に、前陸相ナズィムに心を寄せたる将校二百六十八名を一挙に罷免し、青年党員及び独逸人を以て之を補充し、陸軍々制の大改革に着手した。エンゲルの断行には、流石のタラートさえも驚き、軍隊の反抗を恐れて忠告したが、エンゲルは耳を藉さなかつた。

エンゲルは、独帝の傀儡と見られたほど、独逸と密接なる関係を有し、軍事使節を独逸より招聘し、土耳古陸軍に独逸的訓練を与へんとした。タラートも亦之に賛成したのであるが、タラートの心事は、自らエンゲルと異なり、軍事使節に伴ふ多大の危険を熟知しつゝ、而も必要なる間だけ之を利用する肚であつた。彼は、此事に就て、売国者として彼等を難詰せる国民の一代表者に対し、『吾等は、土耳古が自給し得る力を獲得するまで、国家改造・国家防禦

の一助として独逸を利用するに過ぎぬ。一たび土耳古が自立自給し得る日来らば、一昼夜も待たずに独逸と手を切るだけだ』と答へて居る。

最後にジェマル・パシャは、モルゲンソーによって厄介なマルク・アントニーと批評されて居る。戊総督として辛辣なる腕を揮ひ、容赦なく反対者を迫害して、殆ど恐怖時代を現出せしめた。而も非常な独逸嫌ひで毫も独逸人を憎む情を隠さず、彼等の面前で罵倒を浴せて居た。真黒の頭髪と鬚髯とが、蒼白な顔と対応して、深刻なる印象を人に与へる。黒く人を射る眼は、鋭敏電光の如く、一物から一物へと、一切を直ちに透視する如く思はせる。握手するときは、万力の如き強い力で、相手の手を握りしめ、隼の如き眼で、相手の顔を見つめる。彼は、その容貌が示す如く、満々たる精力と、異常なる洞察力と、殺戮を茶飯事とする獰猛とを兼備して居た。モルゲンソーは、余程ジェマルが嫌ひであつたとみえ、下の如く述べている。曰く『三領袖のうち他の二人は、厭ふべき性質を持つて居た。タラートには、素朴な俠気と天真の善性とがあつたし、エンヴェルには、勇気と挙止の典雅とが有つた。然るにジェマルには、善い性質と云ふべき何ものもない』と。

以上三領袖の外、当時警視総監たりしペドリ・ベイも、亦有力なる党員の一人であつた。彼はタラートの親友であり、最も必要なる股肱の一人であり、而して猛烈なる国権主義者であつた。彼は外国と外国人とを憎んだ。彼の最も憤慨に堪えないのは、外国大使が、土耳古の内政に干渉することであつた。彼に従へば、土耳古人以外の者は、誰彼の別なく嫌ひであり、土耳古人の数々の物語のうちから、青年党領袖の面目を彷彿せしむべき若干を、上に引用した。彼の物語は、外交官の筆としては、極めて卒直淡白であり、必要な謹慎を守る外、自由に感想を発表し、腹蔵なく論評を試みて居る。彼の紹介によつて、吾等は青年党の領袖並に青年党其者に就いて多く学び得た。

青年党の領袖が、悉く独逸の手先なるかに伝へられしことは、明白に虚偽である。陸相エンヴェル・パシャを除く外彼等は寧ろ攘夷思想の持主であり、独逸と提携せるは、之を利用する為なりしことは、タラートの言、最も善く之を立証する。エンヴェル其人でさへ、世界戦参加後に、モルゲンソーに向ひ、『土耳古が独逸の恩になつているなどゝ、其様な馬鹿な話があるものか。独逸こそ土耳古の恩を着て居るんだ』と傲語して居た。

三領袖の個人的特質は、直ちに青年土耳古党の本質を示すかに見える。その西欧民主的一面を代表するものはエンヴェルである。土耳古主義的一面を代表するものはタラートである。而して其の武断専制政策を代表するものはジェマルである。

（註）本節の記事は Henry Morgenthau が、英国雑誌 Land and Water 並に米国雑誌 World's Work に発表せる読物によった。此の長篇は、後に合本して The Secret of Bosphorus 及び Ambassador Morgenthau's Story の題名の下に、英米両国に於て出版された。石川海軍中佐之を訳し『土耳古に於ける独逸外交秘史』の題名を以て、水交社から出版されて居る。

十　世界戦と青年土耳古党

土耳古が同盟国側に立ちて世界戦に参加したのは、必至の勢であつた。一九一三年、タラート・パシャが青年土耳古党を率ゐて、土耳古の実権を握つた時、彼は土耳古並に自己の立場の甚しく困難なるを知悉して居た。欧洲列国は土耳古の衰退を希つて居る。国家の財政は紊乱を極めて居る。陸海軍は崩壊の状態に在る。国内の政敵は絶えず彼等の顛覆を企てゝ居る。而して列強は、タラートを以て無頼の冒険者と目し、其の運命は決して長くないと思つて居た。斯くの如き間に処して、其の陸海軍を改造し、財政を整理し、産業を開拓し、兼て四方よりの侵略蚕食を防ぐ為

には、強国との提携を必要とした。而して土耳古は、如是提携者として独逸を撰んだ。モルゲンソーの言へる如く、事玆に至る『一切の成行は、最も簡単明瞭であり、且避く可からざるもの』であつた（註一）。従つて土耳古が、独逸の与国として世界戦に参加するに至れる『一切の成行』も同様に明瞭且不可避のものであつた。

さて世界戦は、文字通りに土耳古を興亡の危機に立たしめた。従つて一切の宣伝乃至運動に優りて、切実深刻に国民の心を動かした。少くともトルコ人は、此の非常なる危機に於て、曾て見ざりしほど、強く且深く国民的に覚醒せられた。而して此の覚醒は、明確なる土耳古主義の相を取り、国民的理想としての大土耳古主義を生んだ（註二）。而して此の新しき土耳古主義は、曾て青年土耳古党の先輩が、其の西欧放浪の間に、西欧思想の流れより汲取れる国民主義に非ず、実に土耳古精神の奥に潜める、ツランの魂の泉より湧出でたるものである。青年土耳古党の領袖は今正に自覚せるトルコ人の精神を背景として、幾度びか蹉跌せる土耳古主義を、此の機会に於て実行せんとした。

彼等は、主義実現の第一歩として、一九一四年十月一日、先づ治外法権の撤廃を列国に通牒した。死活の戦ひに従ひつゝありし列国は、土耳古の好意を得る必要のために、渋々ながら承認した。次で彼等は町名標・電車標・看板・其他一切の掲示に、一切仏語を使用すべからずと命令し、次で独逸語の使用並に希臘語の使用を厳禁し、更に外国会社に向つて簿記に土耳古語を用ふべきことさへ命令した。

彼等は、土耳古の経済的生活を改善すべく、純然たる土耳古の資本を以て、商業会社・通運会社を設立した。『独逸銀行』及び『帝国オットマン銀行』に代るべき、土耳古国民銀行の設立を計画した。戦後に於て、鉱山の国有を断行するの準備をなした。独逸のバクダード鉄道を無視して小亜に鉄道を敷設することをも計画した。独逸の武器と金と、独逸の門を護らせつゝ、青年土耳古党は、着々其の欲する所を進まんとしたのだ。『若し統一進歩協会が、独逸と手を切るならば、世界戦に勝てる土耳古に対し、独逸は一指を加へざるに至るべきことは、総ての公

平なる目撃者にとりて、極めて明瞭であつた』（註三）。

さて戦局は幾転変した。而して最後に同盟軍の惨敗を以て終局した。巴里平和条約は、其の国民の請求することあるべき一切の権利・利益・及び特権にして、本条約に其の規定を設けざるものに関し、同盟及び聯合国が、土耳古及びブルガリアに於て、独逸国又は其の国民の為すことあるべき、一切の協定を認諾すべきことを約す』と。かくて聯合諸国は、土耳古を彼等の俎上に載せ、思ふが侭に之を料理した。而して其の結果は、即ち一九二〇年八月のセーヴル条約として発表された。この条約によつて、君府は土耳古帝国の首府として、皇帝は此処に止まることを許されたが、土耳古の領土は、アナトリアの東南山地に限局せられ、海峡両岸は列強の管理に帰し、欧羅巴土耳古の大部分並に亜細亜土耳古中スミルナ附近一帯は、希臘の領有に帰し、アルメニア及びクルディスタンは独立し、パレスティナ・メソポタミア・アラビアは、英国勢力下に立つことゝなつた。

さり乍ら、土耳古問題は、決して此の条約の批准と共に解決されたのではない。タラート、エンヴェルは、既に敗軍の将相として其姿を隠したが、青年土耳古党の精神は、断じて地を払ふが如き薄弱なるものでなかつた。彼等は、仮令戦争に全敗せりとは言へ、頑強に聯合諸国に反抗し、列強の傀儡たる君府政府は、毫も政令を国内に行ふの威望がない。而して吾等は、国家悲運のどん底にありて、何巨戦勝聯合国を敵とし、最後まで善戦健闘を続けんとする彼等の意気を想ふ時、青年土耳古党が土耳古人に与へたる深甚の感化を認めざるを得ぬ。其の一切の表面の失敗に拘らず斯くの如き万難不屈の国民的精神の奮興は、之を青年土耳古党五十年の苦衷に帰せざるを得ず。

さて、タラート、エンヴェル没落の後、青年土耳古党の精神を代表し、土耳古帝国の為めに同志を糾合して蹶起せるものは、ムスタファ・ケマール・パシャ其人である。彼は、休戦直後、アンゴラに拠りて、アナトリア全土に亙る政府

を組織し、シリアの残兵を収め、更に新兵を募りて、約六万の兵を徴募し、多数の露国人並に独逸人将校を用ひ、砲及び砲弾に欠乏せるも、勘なからざる小銃及び弾薬を蓄積し、聯合国願使の下に在る君府政府を否定して、堂々聯合国に挑戦した。

一九一九年秋に至り、彼の勢力愈々強く、アンゴラに国民議会を召集し、正式に内治外交に関する政綱を声明した。アンゴラ政府の外交政策は、一九一八年十月三十日の対聯合国休戦条約当時、聯合国の占領に帰せざりし地方は悉く之を土耳古帝国領土として持続せんとするに在る。彼等は、一方労農露西亜と提携し、多方希臘軍の無力に乗じ汎く回教諸国を連衡し、以て土耳古帝国の遺業を擁立すべく、今現に其戦ひに従ひつゝある。欧羅巴に沈める土耳古の弦月は、其影尚ほ淡はけれど、既に再び小亜の天に輝き初めたのだ。吾等は、至深の関心を以て、此の新月を仰ぎ哀心の同情を以て、其の盈満を待つ。

（註一）独逸は、列強中に於て、従来土耳古の片土をも侵さざる唯一の国であった。加うるに君府駐剳独逸大使ワンゲンハイム男は、フランクフルター・ツァイトゥンク記者にして在土三十年土耳古公私の事情に精通せるパウル・ヴイス、及びスミナルに生れ生涯を殆ど土耳古で送り且エンゞルの親友なる大使館附武官ヒューマンの両人を股肱とし、極力独土の親善を図った。而してタラート及びエンゞルは、危険ではあるが最も有力なる後援者を彼に於て見出だしたのだ。

（註二）Tekin Alp : Türkismus und Pantürkismus 第一頁。

（註三）Sturmer : The Two War Years in Constantinople 第一五九頁。

第九　埃及に於ける国民運動の勝利

一　急転直下の埃及近代史

埃及に於ける国民運動は、取りも直さず埃及人が、彼等を縛る英吉利の鉄鎖を寸断せんとする運動である。故に埃及の国民運動を理解する為には、先づ明瞭に英吉利の埃及に対する政治関係を知らねばならぬ。

埃及近代史は、真個急転直下の歴史である。サイド・パシャが、一八五四年より一八六五年まで、第四代ケディーヴとして君臨せる当時の埃及は、総ての東方諸国の内にて、疑ふべくもなく最も繁栄せる国土であつた。国民は平和の裡に農耕をいそしんだ。租税は現在の四分の一にも当らぬほど軽微であつた。一ピアスター（約十銭）の労銀が、能く一家を支へるに足りたほど、総ての物価が至廉であつた。道路修築、潅漑工事、乃至其他の欧羅巴物質文明の移植が着々行なはれた。而して米国南北戦争は、棉花を主要農産とする埃及に、全く予期せざりし幸運を齎らし、其輸出額は、僅々二年間に於て二倍、価格に於て実に三倍するに至つた。かくて埃及の国運は、順調に発展しつゝあつた。

然るに埃及の国歩は、一八六三年イスマイル・パシャの襲位と共に、俄然其の方向を転じた。外燦然と輝きつゝ、内一切の腐敗堕落を蔵せるナポレオン三世治下の、爛熟せる仏蘭西文化に其魂を奪はれたるイスマイルは、全力を挙げて之が模倣に努めた。而して其の底止する所なき虚栄と豪奢とは、直ちに内帑の窮迫を招き、遂に外国に於て盛ん

に高利の金を借入れた。イスマイル即位後五年、即ち一八六八年までに借入れた金額が、既に二千五百五十万磅の巨額に達し、其の利率は表面七分乃至一割二分乃至二割五分と云ふ驚く可き高利であつたが、実際は一割二分乃至二割五分であつた。

而も埃及は土耳古の属邦なるが故に、イスマイルは君府の承認なくして埃及の歳入を担保とすることが出来ぬ。故に彼の借款は、埃及の公債に非ずして個人イスマイルの借金であつた。その利息が極めて高率たりし理由も、亦実に茲に存する。然るに一八七〇年に至り、豪奢の費用に窮せるイスマイルは、埃及の土地を担保とし、一割三分の高率を以て更に七百万磅の借款を行つた。於是土耳古政府は、債権者の主体を代表する国として英吉利政府に対し、予め土耳古皇帝の裁可なくしては、埃及の歳入に関係を及ぼすべき借款に応ぜざらんことを求めた。

さり乍ら此時に於て、英吉利は土耳古の正当なる要求に耳を傾けるには、既に余りに多額の金をイスマイルに貸して居た。加ふるにイスマイルは、巨額の賄賂を土耳古宮廷に贈り、一八七三年更に三千二百万磅の新借款を行ふの勅許を得たるのみならず、埃及に於ける一切の資源を、自由に処理するの権利を賦与せられた。而して時の君府駐剳英国大使サー・ヘンリー・エリオットは土耳古政府に下の如く督促した。曰く『イスマイルに賦与せられたる内政上の完全なる自由は、イスマイルが、其の治下の国土に於ける驚く可き富源を、十分開発するために要する費用を、外国市場に於て之を求むるの自由を与へられざるに於ては、竟に空文に等し』と。

かくて従来はイスマイル個人の負債たりしもの、今や一朝にして埃及の国債となつた。君主一己の放埒なる奢侈の費用が、忽ちにして埃及国民の負担となつた。而して事茲に至りしは、仮令英吉利の使嗾に出でたるに非ざりしにせよ少くも英吉利は之を助長したのである。埃及人が、此時既に英吉利を憎み初めたのは、固より当然のことである。

爾来埃及の財政は、年々紊乱の度を加へ、窮乏に次ぐに窮乏を以てし、竟に国家的破産に瀕するに至り、一八七七年『欧羅巴債権者の利益を擁護する目的』を以て、英仏両国によつて謂はゆる『二重監督』が確立されるに至つた。

二　英国の埃及占領

埃及の愛国者は、底止する所なき外国勢力の侵入を憤つた。欧羅巴諸国、殊に英仏両国が、黄金の鎖を以て埃及を縛るを見るは、彼等の忍び難き所であつた。外人は埃及の要路に採用せられ、偉大なる勢力を揮ひ初めた。埃及の富源は外国の事業家・投機師・仕事師の劫掠に委せられた。イスマイルの計画せる広汎なる各種の事業は、要するに英仏資本家に最も有利なる投資の機会を与ふるに終つた。是等の総てに対する弾劾が一八八一年に至り、アーメッド・アラビ・パシャによつて指揮せられ、軍隊を以て主体とせる国民運動として現はれた。

埃及に於て、軍隊が国民権利並に自由の戦士として、革命運動の中心勢力となりしことは、極めて当然の論理である。サー・キリアム・グレゴリー曾て論ずらく、『東洋に於ては、政治運動の主体は、常に軍人である。彼等のみが能く其の目的を遂行すべき統一と勇気とを有する。其他の人民は、殆ど不平さへも漏らし得ずに、毛を剪られ肉にせらるゝ羊の如くである』と。埃及の場合に於て、彼の言は実に二重の意味に於て真実であつた。第一には、埃及の一切の其他の機関は、軍隊のみが政治運動を起こすべき実力を有せるが故に。第二には埃及の一切の機関を立てる唯一のものなりしが故に。

されどアラビと其軍隊とを主動者とせる此の国民運動は、英吉利の武力干渉によつて見事に鎮圧された。英吉利は此の干渉に際し、其の唯一の目的が『ケディーヴの権力を恢復するに在る』と声明した。而して時の首相グラッドストンは、一八八二年八月十日、下院に於て下の如く述べて居る。曰く『諸君若し予に向つて、英国は永久に埃及を占領するの意図ありや否やと問はるるならば、予は之に対して答へて宜しい、世界に於ける一切の事物のうち、これこ

そ吾等の為さゞる所のことである。そは英国政府の一切の主義に背馳し、吾等が欧羅巴に与へたる誓言に違背し且欧羅巴其ものゝ所期に戻る』と。

さり乍ら英吉利は、一旦出した軍隊を、容易に埃及から撤退しようとしなかつた。而して其理由は、首相グラッドストンに従へば、『ケディーヴの権力を鞏固なる基礎の上に再建し、且つ埃及国民全階級の幸福を将来に準備するため』であつた。而して一八八三年一月三日、外相グランヴィル卿は、埃及駐屯英軍に関して下の如く声明した。曰く『英吉利政府は、埃及の国情、並にケディーヴの権力維持に関する適法の組織が、之を許すに至らば、直ちに軍隊を撤退するの意向を有す』と。而して此年八月九日、グラッドストンも亦下院に於て、いつも乍らの美文宝典的弁舌を揮ひ、英吉利は秋毫も埃及を併呑するの意なきを断言して曰く『吾人は之に似通ふ又は之に近き一切のことに反対之を期待せしむる虞れある一切の言葉遣ひに反対する。吾等は英吉利の利害の為に之に反対する場合に最も厳粛なる態度を以て世界に与へたる特殊にして厳粛なる誓言の為に之に反対する』と。

爾来三十年、英吉利は常に此の『厳粛なる』声明を繰返して来た。ダッファリン卿、チャールス・ディルタ、ダービー卿、ソールスベリー卿、クローマー卿、エドワード・グレー、而してエルドン・ゴースト、一人として英国が永く埃及に駐まるの意なく、且つ夢にも埃及を保護国とする意志なきことを声明せざりしはない。而して英吉利が心ならずも、埃及に軍隊を駐め、埃及の内政に干渉するのは、埃及人は能く自ら救ふ力なく、従つて国民的独立の祝福を享有せしむる前に、予め之に自治的訓練を与てやらねばならぬからだと主張し来つた。英国政府自身の言を藉れば、英吉利は『埃及に於て、正義と自由と公安との主義が、鞏固なる基礎の上に確立せらるるまで』埃及を指導してやると云ふのだ。

英吉利政府は、上述の如き大慈大悲の心を以て、埃及改革の具体案を立てるために、一八八二年九月、ダッファリン卿を埃及に派遣した。而して翌一八八三年二月六日附の卿の報告に基き、新埃及政府を組織する統治法を制定した。

三　クローマー卿の埃及統治

該統治法によれば、埃及は表面依然としてケディーヴ之を統治する土耳古の一自治州であり、ケディーヴは土耳古皇帝の主権を承認し、且つ年々貢租を献ずること旧の如くである。土耳古国旗は、相変らずカイロに翻り、埃及の対外関係は、土耳古との条約によつて定められることも、従前の如くである。而して欧米諸国が治外法権を享有したことは言ふまでもない。また該統治法によつて、一切の権能が、名目だけは、内閣及び二個の会議に集注されることになつた。二個の会議のうち、立法参事会は三十名の議員より成り、うち十六名は地方会議より選出せられ、十四名はケディーヴ之を任命し、内閣を補佐して法律を制定し、悪法を改廃することを以て其の任務とされた。一切の法律命令は、制定発布に先ちて、之を該参事会に諮詢すべく、該参事会は立法並に行政上の事項に関して政府に建議し得べく参事会を経ての請願に関して、内閣の考慮又は答弁を求め得べく、予算並に各省経費に関して審議又は建言し得べく大臣に対して其の知らんと欲する事項に関して、陳述又は説明を求め得べしとせられたが、而も何等積極的権能を与へられなかつた。

この立法参事会の外に、各県会より二名、各都市官庁より二名、総計四十六名の被選議員より成る委員会がある。六名の内閣大臣と、上記の立法参事会と、此の委員会とが、相合して玆に国民議会を組織し、少くも二年に一回召集せらるることゝなつた。議会は、参事会と同じく討論・批評・建議の権を与へられた。而も其実質に於て、両者共に

ケディーヴ及び内閣の諮問機関に過ぎざりしは言ふ迄もない。ただ地方に於ては、間接選挙による県会が設けられ、中央よりは少しく大なる自治を享有することゝなつた。

英吉利は『同情ある忠告と助力』とを有効に与へて、以て埃及改革に画竜点睛すべく、行政の一切の方面に亙りて『欧人顧問』を置くことに定めた。而して此等の顧問は、絶対に埃及法律の支配の外に立ち、唯だカイロ駐剳英国総領事――即ち実質に於て埃及総督――の監督を受け、且之に対してのみ責任を負ふものである。而して一八八三年、最初に英国総領事としてカイロに赴任し、四半世紀の長期に亙りて事実埃及を統治するものは、サー・ベアリング、後の名高きクローマー卿其人である。

クローマー卿の埃及統治は、植民政策の模範的なるものとして、全世界の賞讃を受けた。大隈侯すら、邦訳『最近埃及』に序して、此著は『偉大なる経世的教訓に充てり』と言ひ、卿の人物を推称して『実にアングロ・サクソン民族の精華にして其光栄ある代表者なり』と書いて居る。吾等当面の目的は、卿の埃及に於ける事業を批判することに非ざるを以て、事実の巨細に亙る検討は、之を他の機会に譲る。ただ夫れクローマー卿施政以前の埃及が、法律なく秩序なく、生命財産の安全なく、無智蒙昧の野蛮国なりしと云ふこと、又は近代埃及の物質的発達が、全くクローマー卿の善政に負ふと云ふこと、又は英吉利の干渉なくば埃及は破産せりと云ふこと、英国の埃及財政管理が最も正直且成功なりしと云ふこと、総て此の吹聴――而して之を事実として承認するが為にクローマー卿の功績が讃美せらるる此等の吹聴――は、ブラントの『埃及占領祕史』乃至ロートスタインの『埃及の頽廃』を一読せる者に取りては容易に首肯し難きところである。さり乍ら、仮に数百歩を譲りて、埃及はクローマー卿の下に非常なる物質的進歩を遂げたりとせよ、而して其の幸福は全く之をクローマー卿即ち英吉利に負ふとせよ、而も一事の最も確実なるは、総て其等の物質的進歩に拘らず、埃及国民は、常に英吉利に対して反感を抱き、而して其の反感は年と共に激しさを加へ

来れることである。

一九〇四年、クローマー卿は、二十年に亙る長き埃及統治の後、埃及は最早英吉利に悦服せるものと自負し、実に下の如く述べて居る。曰く『埃及に於て、従来治者と被治者とを結べる唯一の絆は、一面には優越なる武力に対する信頼、他面には武力の強行が生める恐怖に外ならなかつた。今や吾等は此の旧き絆に代ふるに、新しきそれを以てせねばならぬ。而してその新しき絆とは埃及人民多数の満足、並に治者の好意に対する信仰から成らねばならぬ。此点に於て予は過去二十年の行動が、吾等の欲する結果を生めりと断言するに躊躇せぬ』と。かくて埃及より英国軍隊を撤退するも差支なきことを以てした。而も最も深刻なる皮肉は、クローマー卿が埃及の平穏を斯くの如く世界に吹聴しつゝありし其時に於て、久しく潜める国民運動が俄然として其頭を擡げ初めたることである。

四　埃及国民運動の狼火

復興せる埃及国民運動の狼火は、実に思ひも寄らぬ所から挙げられた。一九〇五年十二月五日アレキサンドリアに於て、一希臘人が乾酪の売買のことから埃及人と相争ひ、遂に小刀を以て之を殺害した。其後三日、一珈琲店に於てまた希臘人との間に争論を生じ、一埃及人は希臘人の短銃によつて街上に斃された。此時既に四方より集まれる埃及人は、此光景に激怒し、矢庭に居合せた欧羅巴人二十三名を袋叩きにして重軽傷を負はせた。其報一度び伝はるや、市街の各所に群衆の集合を見た。而して口々に『耶蘇信者を殺せ』と叫喚しつつ、欧洲人の邸宅店舗に向つて押寄せた。此暴動は、大事に至らずして鎮圧されたが、数日の後ポート・サイドにも同様の暴動が起つた。

此等の暴動が、人心を険悪にしつゝありし時、之に向つて更に油を注いだのは、名高きデンシャワイ事件である。

一九〇六年六月十三日、五名の英人がデンシャワイ村へ鳩猟に出かけた。彼等の放てる銃弾は、埃及人の打穀台に火を発せしめ、且一農夫の婦を負傷させた。村民は棒を持つて居ただけであるが、英人側は多勢に無勢で三人まで負傷し、うち一人は搬送の途中、激しき日射のために弱り果て、其夜遂に落命した。村民は殺人及び騒擾罪を以て検挙せられ、四名は村民環視の中に絞刑に処せられ、二名は終身懲役に、二名は十五年、三名は一年の懲役に、而して六名は五十の笞刑に処せられた。この苛酷を極めたる刑罰――英本国に於てさへ下院の問題となれる此の暴虐――は、言ふ迄もなく埃及人の憤慨を激成せずば止まなかつた。

果然『埃及を外人の支配と劫掠とより解放せよ』との叫びが、此時から公然絶叫され初めた。而して埃及は其の解放運動の指揮者として、年若きムスタファ・カメル・パシャを見出だした。彼は多く世に知られざりし一青年であつたが、デンシャワイ事件に際しての彼の言動、火の如き雄弁と、恐怖を知らざる大胆なる行動とは、忽ちにして人民渇仰の的となつた。

ムスタファ・カメル・パシャの活動によつて、僅か二年を経ずして、一個の有力なる国民党が生れ出でた。十種に近き言論機関が設けられた。都会に於ては、到るところ、英軍撤退と憲法発布とを要望する示威運動が行はれ初めた。そは真に迅速なる発展であつた。有名無実なりし国民議会すら、一九〇七年三月四日、最も強硬に憲法制定と真個の議会開設とを要望することを決議するに至つた。

クローマー卿の不機嫌は、思ふだに滑稽でもあり、また気の毒でもある。卿が埃及より提出せる最後の二報告に於て、平素の勿体振りを忘れたかの如く、散々な罵倒を国民主義者に浴びせかけて居るのも、また人情の自然であらう。固より卿は癇癪を起してばかり居たのではない、全力を挙げて此の運動を阻止せんと努めたのである。而して特

に力を所謂穏健主義者の買収懐柔に注いだが、竟に大勢を如何ともし難かつた。卿の所謂『新しき絆』は、埃及と英吉利とを結ぶべくもなかつた。かくて卿は、二年以前の一切の自負自慢を叩き毀わされて、一九〇七年五月六日、従来の『旧き絆』を一層強くすべく、本国政府に向つて軍隊の増派を求めた。而して其夏健康を害せりとの故を以て職を辞し、カイロ劇場に於ける袂別演説に於て、国民主義者に対する捨科白を残して故国に帰つた。

五　首相ブートロス・パシャの暗殺

クローマー卿に次で埃及総領事となれるはサー・エルドン・ゴーストである。氏は、就任早々英吉利の埃及占領は埃及人を支配せんが為に非ず、唯だ如何に自ら治むべきかを教へんが為なりと声明した。然らば吾等をして、英吉利が如何なる方法を以て、埃及人に自治の訓練を与へて来たかを検討せしめよ。而して果して埃及人の要求が、不当なる忘恩に出でたるか、若しくは英吉利の声明が、常套の偽善なるかを判断せしめよ。

事実が明白に立証する如く、英国治下の埃及人は、真個の政治を行ふべき一切の機会を奪はれて最も注目を要する一事は、クローマー卿在職中に、二個の分立せる統治機関が、いつともなく出来上がつたことである。その一はケディーヴと其の諸諮詢機関であり、その一は総領事と各省の欧米顧問とより成る一団である。後者は、表面の機能は、単に行政命令を発し得るに過ぎぬものであるが事実に於ては唯だ英国外務省に対してのみ責任を負へる埃及の全権者であつた。一切の重大なる問題は、此の一団により て決せられた。而して彼等の決議は名目は建議として閣議に提出されるのであるが、事実埃及内閣は惟命これ奉ずる外に途なかつた。埃及官吏は全然度外視せられ、彼等が何を議するかさへ窺知し得なかつた。かくては千百年を経ても、埃及人が自治を学得する道理がない。従つて埃及国民主義者が、新領事一片の声明によつて懐柔される道

理がない。故にゴーストは、若干の行政改革によつて、国民主義者の温和分子を籠絡せんとし、会の権限を若干拡張せる新法律を発布した。而も是くの如き糊塗弥縫は、最早何等の効果なかりしほど、埃及国民は覚めて居た。

時しもあれ土耳古に於ては、青年土耳古党が一挙にして革命を遂行した。この成功が、埃及人に深甚なる影響を与へたことは言を俟たぬ。不幸にして最も有為なる指導者ムスタファ・カメル・パシャは、此年二月三十四歳を以て夭折し、之が為に国民党内に内訌を生じ、従来カメルの人格によつて引付けられて居た多数の党員を失ふに至つたが、而も幾くもなくして其勢を挽回し、今や土耳古革命に刺戟せられて、一層旺んなる活動を開始するに至り、到るところ集会乃至示威運動の頻発を見、其の機関新聞は、埃及の隅々まで行きわたり初めた。加ふるに政府は、恰も此時に当り、名高き回教の最高学府アズハル大学の教科に干渉を試みて、学生一万二千の総同盟休校を招き、慌てゝ警察力の威圧を之に加へたりしため、一層事態を険悪ならしめ、遂に政府側の譲歩を以て局を結んだが、此の出来事のために、従来政治運動に超然たりし学者並に学生を、一朝にして国民主義者たらしむるに至つた。而して回教国土に於て此等の学者並に学生が、如何に民衆の間に勢力を有するかは更めて言ふまでもない。

懐柔の到底無効なるを知るや、ゴーストは茲に高圧政策を執り初めた。氏は先づ国民党の機関新聞雑誌を、片ツ端から禁止し停止した。而して之に執筆せる国民主義者を続々刑罰に処した。而も運動は最早尋常一様の手段を以て阻止すべくもない。それは歩々具体的目標に向つて進んで行つた。一九〇九年九月十四日、英吉利の埃及占領第二十七回記念日に於ては、国民党の一団が、時の英首相アスキス氏に宛てゝ下の電報を発するに至つた。

『今日茲に集合せる六千名の埃及人は、全会一致を以て埃及占領に対する強硬なる抗議を閣下に伝へ、且英国政府の厳粛なる誓言に信頼して、即日埃及より撤退すべきことを要求す。且英吉利が吾人の友情を贏ち得るは、吾人

の同情と援助とを失ふに比して、英吉利の名誉のために有利なることを附言す』。

形勢斯の如きに当りスエズ運河事件が現はれた。事件の要領は、運河会社より四百万磅の報償を得て、特許期限は一九六八年十一月までゞあつて、満了までには尚ほ六十年を更に四十年間延長せんとするに在る。而も現在の期限は一九一〇年二月二十日、白昼カイロの街頭に於て、年若き埃及の化学者イプラヒム・ワルダニの余して居るのに、何を苦しんで埃及政府は是くの如き早急なる商議を行はんとするか。国民党は激しく之を攻撃した。而して国民議会も亦之を否定し去つた。かくの如き国民激昂の只中に、埃及を英吉利に売らんとせる時の首相ブートロス・パシャは一九一〇年二月二十日、白昼カイロの街頭に於て、年若き埃及の化学者イプラヒム・ワルダニの為に、短銃を以て暗殺された。英吉利の機関新聞『埃及ガゼット』は翌二十一日の紙上に『とう〳〵埃及も印度の真似を始めた』と云ふ書出しで、出来事の経緯を報道した。然り、とう〳〵埃及は印度に倣つたのだ。而も是れ常に高正政策の必然の所産なることを知らねばならぬ。

此の事件に於て、法廷にワルダニを弁護せる者が、数年前デンシャワイ事件の裁判に、最も無慈悲なる検事として埃及人の深怨を買へるヘルバヰ・ベイであつたことは、事件をして真に戯曲的ならしめた。彼はデンシャワイ事件以後、翻然其非を改めて国民党に投じ、最も熱心なる愛国者として活動して来たが、今や非常なる雄弁を揮つてワルダニの弁護に当つたのだ。而して弁護効なく死刑と決するや、彼はワルダニに向つて下の如く告げた。この袂別の辞は、十年後の今日に於て、尚且埃及国民主義者を流涕感歎せしむるものである。

『勇しき心、確乎たる足取りをもて死に進め。死は拒むこと出来ぬ。そは今日君を見舞はずとも、明日は来るであらう。行け、吾児よ。時世のため、又は感情の為に曲げられざる、荘厳なる審判を行ひ給ふ神の御許に行け。行け、吾児よ。吾等の眼、常に君の為に泣く。人間の審判が君に宣告せる死こそ却つて埃及国民及び埃及国に与ふる偉大なる教訓として、君の生命其ものよりも貴くあるぞ。行け、人間の慈悲な

きを恨まされ。神の慈悲こそ無辺なるぞ。さらば吾児よ。さらば、さらば』。

六　世界戦中の英埃関係

キチナー・エルドン・ゴースト在職四年、其間埃及の形勢は次第に悪化し、ゴーストは色々な非難の裡に職を去り、キチナー将軍其後を継いだ。英吉利が将軍を任命したのは、明々白々に、高圧政策の断行によつて、国民運動を抑へ付けるためであつた。而してキチナー将軍の名は、疑ひもなく或る程度まで埃及国民を威服させた。将軍は表面の安静によつて、将軍は共に埃及の政情が左まで険悪に非ざることを言明して居る。而して此機に乗じて新統治法を制定し、従来の立法参事会と国民議会と合体して一立法議会を組織し、定員八十九名のうち、六十六名は間接選挙によつて之を選出し、十七名の内閣大臣を加へたのである。この改革は本質に於て何ものをも埃及に齎らさぬ。新立法議会は、依然として諮問機関たるに止つた。

而も新統治法による立法議会議員選挙の結果は、キチナー将軍を其の独断の夢より呼び覚ますに十分であつた。議員の殆ど全部は、国民主義者であつた。而して彼等は、曾て文相並に法相たり、且其の人物はクローマー卿の推称を博せるサアド・パシャ・ザグルルに於て、最も有為なる首領を見出した。其の全開期中、新立法議会は、徹頭徹尾政府弾劾の態度に出で、一切の議会に於て、峻烈なる非難を英吉利の埃及政策に加へた。キチナー将軍は、埃及の平静が、内に物凄き動乱を蔵せる表面の平静に過ぎざることを、初めて明かに知ることを得た。

世界戦は、実に是くの如き時に勃発したのである。埃及は法理の上に於て、無論土耳古帝国の一部であり、土耳古皇帝は、埃及軍隊の指揮を握つて居た。而も独逸が、早晩土耳古を起たしめ神聖戦争の布告によつて、全回教徒を動

かさんとの企図を有せることは、之を察知するに難くなかつた。かゝる場合に於ける埃及の去就は、英吉利にとりて真個重大なる関心事である。殊に時の埃及君王アッバス・ヒルミ・パシャは、隠れなき親土兼親独主義者なりしを以て、英吉利の憂慮は一層大ならざるを得ぬ。かくて英吉利は、一九一四年八月四日の対独宣戦と同時に、直ちに埃及政府を強迫し、夙く既に翌々六月を以て、埃及首相フサイン・ルシド・パシャをして、殆ど対独宣戦に等しき宣言を発せしめた。

英吉利の此の行動は、説明するまでもなく違法である。埃及は、土耳古との条約により、土耳古皇帝を通じてのみ第三国と和戦し得るのである。故に英国の行動は、埃及を強制して土耳古に叛かしめたものである。英吉利は之に関しては一言の説明を与へなかつた。而も此の事実は、其後三個月にして、英土国交の断絶せる時に明白になつた。即ち本来ならば、英土開戦と同時に、英吉利と埃及とも、忽ち交戦状態に入れるものである。されど条約の如きは固より英吉利の蹂躙して顧みざりしところ、埃及は唯だ英吉利の欲する侭に動く外、別途なかつた。

当時副王アッバス・ヒルミ・パシャは君府に居つた。而して世界戦を利用し、独逸によつて自国の恢興を図らんとした。而して此事が、英吉利に向つて、願つてもなき口実を与へた。英吉利は、十一月先づ埃及に戒厳令を布き、十二月十八日、突然埃及を以て英吉利の保護国とすることを宣言し、翌十九日アッバス・ヒルミ・パシャを位より逐ひフサイン・カメル・パシャを擁立して、之にサルタンの称号を用ひしめた。かくて埃及は、名実共に英吉利の保護国となつた。戦争終結以前に、決して領土的変化を行はざること、戦後に於て、列国の同意を以て之を行ふべきことが聯合国間の約束であつたに拘らず、英吉利は之をも蹂躙したのである。

七　世界戦後に於ける独立運動

大戦中に於ける英吉利の埃及政策は、徹底せる武断高圧を以て一貫した。戦争の一切の重荷は英吉利独り之を負ひ決して『埃及国民の援助を求むることなし』と約束せるに拘らず、際限なく重き負担を彼等に課した。戦時を通じて立法議会の開会を禁じた。常軌を逸せる苛酷なる手段を以て言論集会を取締つた。遠慮会釈もなく農民より食糧を徴発し、且彼等を徴集して強制労働に服せしめた。かくて国民主義者は、殆ど手も足も出ぬ状態に置かれたが、而も此間に反英精神が次第に深く、強く、而して汎くなつて行つた。

正義人道を看板にせる聯合諸国の声明、殊にロイド・ジョージ、アスキス、ウィルソン等が高調せる小国民の権利民族自決の主張が、埃及国民主義者の最も喜ぶ所となつて、彼等は世界戦終結と共に完全なる埃及独立を叫ぶやうになつた。一九一八年十一月十三日、即ち休戦の翌々日埃及国民党の諸領袖相会し、公式に英吉利に向つて、保護権の撤回、埃及の完全なる独立の承認を求めた。英国最高委員サー・レヂナルド・ウィンゲートは、之に対して予は埃及の将来に関する本国政府の意向を知らずと答へた。故に埃及首相ルシド・パシャは、然らば之に関して英国政府と協議すべく、埃及代表者の渡英を許可せられたしと求めた。此の要求は即座に拒絶せられ、ルシド・パシャは直ちに辞職した。次でサアド・パシャ・ザグルルは、ロイド・ジョージ、クレマンソオ、オルランド、ウィルソン四氏に宛て、彼等の標榜せる高貴なる原則を、埃及にも適用せんことを以てしたが、竟に何等の返答にも接しなかつた。

英吉利が極力阻止に努めたに拘らず、国民党の領袖は、平和会議開催と同時に、先づ一切の列国講和使節に宛て、独立党のプログラムを印刷せる大部の覚書を送つた。

該覚書は、近代埃及の進歩を力説し、英吉利三十年の占領が埃及に与へたる貢献を叙すると共に、英吉利が屢々繰返せる埃及永久占領の意なしとの宣言を引来りて其の撤退を求め、殊に外人統治が国民の道徳的・知識的発達に及ぼす悪影響を高調し、世界戦中に埃及が聯合諸国に貢献せる功績を細叙し、国民の同意なくして保護国たるを宣言せる英吉利の違法不当を詰り、完全なる独立の承認を要求して居る。而して埃及は、其負へる債務を必ず果すべきこと、埃及に於ける外人は、現に享有せる権利を保障せらるべきことを述べて居る。最後には、埃及委員が国民代表として巴里に赴くことを、肇まゝに拒絶せる英国の横暴を激しく攻撃して居る。

英吉利政府が埃及委員に旅券下附を拒絶せることは、全埃及の非常なる激昂を招いた。加ふるに英吉利が将に発布せんとしつゝありし埃及改革案――埃及司法顧問サー・キリアム・ブラウェートの起草にかゝるもの――の内容が、全国国民の所期を無視せる事を探知するに及んで、激昂は更に甚しきを加へた。国民党の指揮によつて、埃及各地に独立運動支部が設けられ、久しく抑圧せられし集会が、再び到るところに開かれ、自由を求むる痛切なる叫びが、全埃及に昂まつた。此時に当りて、埃及国民の決意極めて堅く、不穏の形勢顕著なりしに拘らず、英吉利は其の武力を恃んで之を蔑視し、独立運動は要するに不平政治家の煽動によるものと考へて居た。而して一九一九年三月六日、英国軍司令官はザグルル以下九名を召喚して、秩序を紊乱し、官憲の事務を阻害するが如き行動に出づ可らずと厳命した。此の出来事は、忽ち四方に著聞し、一層人心を険悪にした。而して国民委員は、翌七日、英吉利の戒告に対して抗議を発した。官憲は之を以て命令を蹂躙せるものとなし、翌八日、ザグルル以下三名の最も有力なる国民委員を逮捕して、密かに之をカセルニル兵営に監禁し、翌早朝之をモールタ島に向つて送致し、島内の牢獄に投じた。此事ありて数日、全埃及は動乱の巷と化したのである。

吾等は、今一九一九年三・四両月に亙れる、埃及動乱の経過を細叙する遑がない。英吉利は、此の非常なる動乱に

よつて初めて事態の真に容易ならざるを知り、三月二十二日、急遽『東方の強者』アレンビー将軍を、埃及に派遣した。而して将軍に命ずるに埃及特別最高委員として『文武の全事項に亙り最高権を行使すること、法律並に秩序を回復するために必要且適当と思惟する一切の手段を講ずること、確実公平なる基礎に立ちて、埃及に対する英吉利国王の保護権を維持するに必要なる一切の事件を処理すること』を以てした。三月二十五日、将軍はカイロに到着した。

此時動乱は稍々下火になつて居たが、同盟罷業が全国を風靡し初めて居た。埃及国民は、積極的叛乱の手段を執つたのだ。鉄道及び電車従業員、カイロの道路掃除夫及び撒水夫は、皆な業を休んだ。小学より大学に至るまで、学生は校門を潜らなかつた。弁護士及び判事が業に就かぬために、裁判事務を行ひ得なくなつた。各省の官吏すら、獄中の国民委員に対する同情の表示として皆な欠勤した。

アレンビー将軍は、尋常の手段を以て其の重任を果たし難きを見た。於是四月七日、モールタ島に監禁せる四名の委員を釈放し、与ふるに行動の自由を以てすべきことを宣言した。この宣言は非常なる効果があつた。カイロよりスウダンに至るまで、埃及は国民的勝利を祝ふ歓呼の声に充ちた。されど国民は直ちに歓喜の夢より覚め、数日ならずして暴動及び罷業が、また各地に行はれ初めた。政府の官吏は、四月九日に組織されたルシディ内閣に対し、公式に国民委員を承認すること、並に英国の保護権を承認すべからざることを要求した。四月二十一日、ルシディ・パシャは双方の板挟みとなつて辞職した。アレンビー将軍は、翌二十二日、免職を以て威嚇して、欠勤中の官吏を強制的に出勤せしめた。其他の罷業は、戒厳令の鉄鞭を以て、表面之を鎮圧するに成功した。而も強烈なる国民主義の精神は、今や埃及国民の魂に底深く根を下ろした。彼等は万難を排して、英国の羈絆を脱すべく決意した。

ルシディ内閣辞職後四週間にして、アレンビー将軍は、漸くモハメット・サイド・パシャをして新内閣を組織せし

めた。此の内閣は八個月継続したが、国民主義の澎湃たる勢に対して、全く無効なる英吉利の防波堤であつた。英吉利の埃及支配は、確実に没落に近づいたのだ。

この事実は、英吉利其ものも、嫌々ながら之を承認せざるを得なかつた。即ち一九一九年五月十五日、政府が議会に於てミルナー卿以下の委員を埃及に派遣すべきことを報告せる時、英吉利は到底従来の武断一徹を以て埃及を統治するの不可能を告白せるものである。アレンビー将軍はミルナー卿の来埃は、埃及の真の幸福を図るためなることを説いて、民心の慰撫に努めた。されど埃及人は之に耳を藉さなかつた。而して之も無理もない事であつた。何となれば、英吉利本国に於ては、アレンビー将軍の言と全く背馳する言論が、盛んに行はれて居たからである。例へば将軍が埃及人に向つてミルナー委員の性質に関する訓示を発したのは、十一月十二日であるが、同月十七日の本国下院に於ては、バルファア氏が実に下の如く演説して居る。曰く『英吉利の至高権は、埃及に儼存して居る。而して此の至高権を確保し続けんとする。埃及の内外を問はず、何人も英国政府の此の根本政策を誤解してはならぬ』と。

埃及国民党の領袖は、ミルナー委員の畢竟為すなきを知つた。彼等はミルナー卿一行の来着に先ち、国民を説いて団体的にも個人的にも、絶対に該委員一行の交渉に応ぜざることを決意せしめた。このボイコットは、委員一行は手を空しうして英吉利に帰らねばならなかつた。而して一行の埃及及滞在三個月を通じて、最も組織的に励行された。

八　恥づ可き内なる鎖を断てる埃及

先是国民党首領にして埃及国民委員長に選ばれたるサイド・パシャ・ザグルルは、英国の譲歩によりて渡仏を許され、委員一行と巴里に在つた。彼等は、平和会議に列席することを拒絶されたが、而も巴里に於て種々画策するところあつた。英吉利政府は、窮余の策としてザグルルを倫敦に招き、ミルナー委員と折衝せしめんとした。ザグルルは

此招待に応じ、一九二〇年七月英国に来り、七八両月に亙りて屢々ミルナー卿と会見して隔意なく意見を交換した。此の会見は非常に有意義のものであつた。ミルナー卿は、埃及に於ける国民主義の到底根絶すべからざるを知り、且英吉利の埃及政策を根本より改めねばならぬことを知つた。而してカーゾン卿と協議して、下の要領を以て埃及時局を収拾せんとした。

一、英吉利は埃及に対する保護権を撤回し、埃及の独立を承認し、外敵に対して其の保全を保障す可し。之に対して埃及はナイル河流域に於ける英吉利の特権を承認し、戦時に於ては埃及領土に於て、一切の便宜を英吉利に与ふ可し。

二、英吉利は駐埃軍隊を撤退し、唯だスエズ運河地帯に二千乃至三千の兵員を収容する一兵営を設く可し。

三、埃及は英国政府と背馳せざる限り、自由に対外関係を結ぶを得。埃及は自己の外交代表者を任命するを得。但し当分の内、単に埃及と商業的利害関係を有する諸国に対してのみに限り、其他の諸国に対しては英国代表者が埃及の為に行動す。

四、治外法権は、若し列強の同意を得ば、之を廃止すべし。但し国債委員の事務を行ふべき英人顧問制度は、財政顧問と共に之を廃止すべし。

五、現在の各国務省に於ける英人顧問と共に之を廃止すべし。但し国債委員の事務を行ふべき英人官吏を任命すること。財政顧問制度は、財政府に属すべし。

六、英人官吏にして職に止まる者は、今後直接埃及政府に属すべし。

十一月初旬、埃及国民委員四名は、上記妥協案を齎してカイロに帰り、之を国民に発表した。多数の埃及人は、此の妥協案に賛意を表した。但し徹底独立主義者は、之に反対して完全なる独立を要求した。サアド・パシャ・ザグルルの功績を嫉める一群の政治家も亦之を非難した。また英国の後援の下に、事業の繁栄を続け来れる資本家も之を喜

ばなかつた。されど埃及国民委員は極力国民に説いて、埃及は先づ此の条件付の独立を獲得した上で、更に真個の完全なる独立を実現する準備にかかることの有利なるを主張し、国論亦漸く之に傾いて来た。

翻つて英吉利の政界を見るに、英国政治家の意見は截然両派に分れた。一はミルナー案を以て機宜を得たる解決策とするもの、他は飽迄も之を非とし、是くの如きは大英帝国分裂の第一歩なりとするものである。而して後者の主張勢力を得て、折角の妥協案も政府の容るゝ所とならず、為にミルナー卿は一九二一年一月植民大臣の職を辞し、武断主義者チャーチルが其後を襲ふた。氏が埃及独立に反対の意見を有することは、固より想像に難くない。果然アレンビー将軍は、一九二一年二月二十九日附を以て一書を埃及王に送り、『英国政府はミルナー卿の建言を審議し、保護関係は両国にとりて不満足なることを知れるも、未だ決定的解決案を得るに至らず。故に王の代表者として此点に就て更に商議を重ねんことを欲す』と云ふ意味を告げた。

この事が埃及国民を再び激昂せしめたことは、言ふ迄もない。之が為にテューフィク・パシャ・ネジム内閣は辞職するに至り、三月十六日アドリ・パシャ・イエゲン内閣之に代つた。而して新内閣は、英国の新提議に就て商議すべく、当時巴里に在りて運動中なりしサアド・パシャ・ザグルに打電して其の帰国を求めた。ザグルは、此の招電に応じて巴里を出発し、四月四日にアレキサンドリアに上陸し、翌五日午後カイロに帰着した。埃及国民は、満腔の感謝と熱誠とを以て、此の自由の戦士を歓迎した。

やがて政府とザグルとの間に、対英交渉に対する商議が開始された。アドリの主張する所は埃及は独立承認及び保護権撤回の二項のみを確定条件とし、其他に就ては白紙を以て英国と交渉すべく、而して交渉委員は政府これを任命すべしと云ふに在つた。然るにザグルは、ミルナー案の実現を最小限度の要求として、埃及は其獲得せんと欲する所を明確に立案して交渉せざるべからずとなし、且此の交渉に関しては、彼自身が国民によつて選出された真個の

埃及代表者なるが故に、委員選任も彼之を行ふを至当とすることを力説した。かくて両者の間に激しき論争行はれたが、アレンビー将軍を後援とせるアドリ内閣は、遂にザグルルの主張を無視し、ルシディ・パシャ以下五名の対英交渉委員を任命した。

埃及国民は内閣の処置を憤つた。英吉利がザグルルに対して如何に口汚き罵倒を繰返すにせよ彼は埃及の最も勇敢なる戦士であり、従つて最も大なる国民的信頼を荷うて居る。彼の努力なくして、埃及の国民運動を今日まで発達せしむること不可能なりしは、英吉利さへも認めて居る。故に国民がアドリ内閣に憤るのは当然である。而して此の憤激は、遂にカイロ、アレキサンドリアに於ける五月下旬の大暴動となつて現はれた。

暴動は、英軍の出動によつて鎮圧された。七月に至り、英国援護の下に、交渉委員の選任行はれ、アドリ・パシャ自ら委員長となり、七月十一日、一行は倫敦に到着し、直ちに外相カーゾン卿と会商することゝなつた。英国は、埃及独立の条件として、専にスエズ運河地帯のみならず、カイロ及びアレキサンドリアに駐兵せしむること、在埃及外人保護権を英国に与ふること等を要求し、埃及委員は大体ミルナー案に拠つて、英国側の提議を斥け、前後四個月に亙り、幾度か折衝を重ねたけれど、交渉遂に不調に終り、十一月二十日、アドリ・パシャ一行は帰埃の途に就いた。

アドリ・パシャは十二月六日カイロに帰着した。此日ザグルル・パシャは、宣言書を発して、英国の政府を痛撃して国民に向つて、埃及独立のために、全力を尽すべきことを求めた。かくて埃及は、又もや暴動騒乱の巷となつた。各地に於て、人民と軍隊及び警官との衝突繰返され、夥しき死傷者を出だした。アレンビー将軍は、ザグルルに厳命して、政治運動に加はることを禁じた。而もザグルルは、固より命令に従はうともせぬ。次で十二月二十三日、ザグルルはスエズより錫蘭に護送された。錫蘭は、実に埃及国民運動の父アラビ・パシャ流謫の地である。

騒動は、武力を以て之を抑圧することも出来よう。ザグルルは、千里の外に之を放逐することも出来よう。されど埃及の形勢は、最早単なる強力の暴圧を以て如何ともす可からざるものとなつた。ミルナー卿が、其の報告に表白せる如く、埃及に於ける『国民主義の精神は、之を根絶することと不可能』となつたのだ。アドリ・パシャは、帰着の翌翌八日、首相の職を辞した。後継内閣の首相に擬せられし、サルワード・パシャは、英国にして彼の提出せる条件を容れざる限り、職に就くこと能はずとして、其の慫慂に応じなかつた。

是くの如き形勢は、遂にアレンビー将軍をして、埃及問題に就き、直接英国政府と協議すべく、（一九二二年）二月倫敦に赴くの止むなきに至らしめた。而して協議の結果、英国政府は、二月二十八日、白書を以て、英国は埃及に対する保護権を放棄し、その独立を承認すべきことを声明し、三月十六日、此の声明に従ひ、埃及の独立を宣言するに至つた。固より英国は、独立承認の条件として埃及をして種々なる要求に従はしめんとするであらう。外電は、単に『従来英国総領事に対して事実上責任を負へる埃及内閣は、今後議会に対して、政治上の責任を負ふこと、閣員は英国顧問の進言に従ふの要なきこと』を伝へるのみで、詳細は尚ほ吾等に知られて居ない。さり乍ら、恐らく英国の条件は、アドリ・パシャに対して為せると殆ど同一にして、若干譲歩せる程度のものであらう。そは決してザグルルの如き、徹底せる国民主義者を満足せしめはしないだらう。而も此の独立宣言が、埃及国民運動の勝利の第一歩であることは、疑ふべくもない。

流謫のナポレオン、初めてセント・ヘレナの知事と会せる時、語に力を籠めて告げて曰く『世界に於て最も重要なる国は埃及だ』と。埃及が、大英帝国世界政策の上に占むる重要なる地位はナポレオンの言を俟たず、何人も之を知る。英吉利が、全く之を失ふことは、二重の意味で堪へ難くあらう。何となれば、そは一面に於て、世界制覇の至要の一支点を失ふと同時に、他面に於て印度・南阿等に、恐る可き影響を与えるが故である。さり乍ら時は既に来た。

ザクルル以下、国民主義者の理想、存分に実現せらるべきことは、竟に時間の問題にして、断じて可能不可能の問題でない。吾友ポール・リシャル氏、曾て『印度の為に』と題する小著に序して曰く

『世界戦は、万国を審判し、旧き負債を清算し、新しき運命を準備しつゝ、隷属の民に向つて、彼等若し資格あらば、彼等の鉄鎖を寸断すべき機会を与へた。内なる鎖は恥づべくある。外なる鎖は痛ましくある。而も最初に之を寸断する者は、縛らるゝこと、最も苛酷なりし者である。露西亜既に之を断つた。印度之に次ぐであらう。埃及も亦之に次がんと。然り、埃及は既に『恥づべき内なる鎖』を寸断した。彼等は、早かれ晩かれ、完全絶対に『痛ましき外なる鎖』をも断つであらう。』

附記　本篇は主として下の資料に拠った。

H. J. Carman: England and the Egyptian Problem (Political Science Quarterly, Volume XXXV, No 1.)

Du Perron: L'Egypte et le Protectorat britannique (Revue Politique et Parlementaire, Tome 319. No. 319. Juin 1921.)

Die nationalistische Bewegung in Egypten vor und nach dem Kriege (Koloniale Rundschau, Jahrgang 1920. Heft 4.)

Rothstein: Egypt's Ruin.

W. B. Worsfold: Future of Egypt.

H. A. Gibbons: New Map of Europe.

第十　欧羅巴治下の回教民族

一　序　論

第十九世紀後半に於ける、交通機関の急速なる発達は、欧洲諸国と未開国土との距離を、著しく短縮し、之に伴ひて植民的活動の全運動は、根本的変化を見るに至つた。蓋し従前の植民的発展は、原則として、通商貿易による利益を主眼とし、従つて商業上の根拠地、又は商船碇泊地の獲得を以て満足して居た。然るに交通機関の発達に伴へる、本国と未開国土との近接は、単に沿海地方に於ける経済的発展を以て足れりとせず、深く内地に入りて本国資本を放下し、以て新事業を開拓せんとするに至つた。然るに斯くの如き地方に於て、完全に事業を経営する為には、整然たる秩序の樹立、完全なる法律の制定、近代的産業生活の採用、乃至労働者供給の確実等、種々なる条件を必要とするは言を俟たぬ。而して此等の条件を満足せしめんが為には、該地方を占領して、其住民の上に政治的権力を確立せねばならぬ。従つて植民的発展は、俄然として政治的並に軍事的性質を帯ぶるに至つた。

然るに斯くの如くにして獲得せる植民地の土民は、其の社会組織に於て、其の生活方法に於て、其の宗教的並に人類は共通なる物性を有すと云ふ主理論（ラショナリズム）を根柢とするものにして、植民地を以て母国の延長と認め、母国の制度文物を移して、之を治下の土民に採用せしめんとするものである。然れども全然文化の伝統を異にし、且文

題となつた。而して一見最善の方策なるが如くにして、実は欧洲諸国が概ね失敗に終れるものを、同化政策とする。

織的発達に於て、母国々民との間に甚だしき懸隔あるが故に、之に対する施政方針は、植民政治に於ける重大なる問

化の程度を異にする民族に向つて、直ちに母国の制度文物を移植し、俄に其の生活状態に対しては寧ろ非干渉主義を採り、土民社会の改良に向つて施設する所甚だ僅少なりしに拘すが如きは、決して、植民政治の好成績を挙ぐる所以でない。例へば英国の如き、固と経済的発展を以て植民の本旨となし、土民の生活状態に対しては寧ろ非干渉主義を採り、土民社会の改良に向つて施設する所甚だ僅少なりしに拘らず、印度に於ける経験は、その企てたる僅少の改革すら、尚且予期せざりし不幸なる結果を招いた。即ち英国は、印度に向つて契約の公平厳正なる取扱、控訴院の組織、都市に於ける代議政治、陪審制度等を施行した。然るに厳格なる契約の履行は、多数の農民負債者をして、貪慾なる金貸業者の犠牲たらしめ、之が為に或は奴隷となり、或は産を失ふもの、頻々として控訴を好むの風を長ぜしめ、無頼なる土民代言人の之に乗じて私曲を逞しうするもの多きに至り、一般土民をして却つて法律の効力を疑ふに至らしめた。都市に於ける代議制度の許可は、固と英国が其の必要を認め、且如何なる危険をも伴はざる可きを確信し、土民の幸福を増進する目的を以て採用せるものなりしに拘らず、英国統治の反対者をして、英国政府は印度社会の腐敗を奨励せんが為に之を施行せるものに非ずやとの非難を放たしむるに至つた（註一）。

而して斯くの如き同化政策は、植民地の土民が回教徒たる場合に於て、最も大なる困難に遭遇した。其の絶好適例は、アルジェリーに於ける仏蘭西の植民政治である。仏蘭西のアルジェリーに臨むや、英国の印度に臨めると著しく其の態度を異にし、初めよりアルジェリーを目するに仏蘭西の一部を以てし、総て母国の制度の下に土民を統治せんと企てた。而して其の結果は、徒らに土民回教徒の反感を挑発し、宗教的信仰の脅迫者として、並に社会組織の破壊者として、猛烈なる敵意を抱かしむるに終つた。これ一は仏国の同化政策が急激に失したりしによると雖も、一は回教徒が他の未開又は半開種族に比して、共通の信仰を基礎とせる強固なる団結力と、宗教的自尊心より来る猛烈なる

排他的精神とを有するによるものにして、植民政策上特に考慮を要する点である。

今日日本の領土内には回教徒がない。之を以て回教に関する研究は、全然等閑に附せられている。さり乍ら、日本と最も密接なる関係を有する支那に在りては、回教徒の総数三千万を下らざるべく、孫逸仙の如きも、今後の支那研究者は、決して支那に於ける回教徒の勢力を等閑すべからざるを力説して居る。而して日本が現に盛んに経済的発展を遂げつゝある南洋諸島は、米領比律賓を除き、土民の約九割は回教を奉じ、更に支那に次で将来日本と最も親密なる関係を結ばざる可からざる印度に於ては、回教徒の総数実に六千万を超えて居る。加之日本の国際的関係は、今後益々複雑を加ふべく、従つて土耳古・波斯等の回教諸国も、亦日本の考慮中に入り来るべく、之と共に従来風馬牛の観ありし土耳古問題・波斯問題は、日本将来の政策と重大なる関係を生ずるに至るであらう。回教の研究、決して忽諸に附してはならぬ。

本論文の目的は、主として植民地に於ける回教徒の現勢を叙述し、植民政策上に於ける回教徒の政治的並に経済的意義に関する一般概念を与へ、且回教植民地に対する文化的観察を略述するに在りて、各方面に関する詳細なる記述は、之を他日の研究に譲る。

（註一）Paul Reinsch: Colonial Administration, Chap. I.

二　回教現勢一班

世界に於ける回教徒の総数は、精確なる統計を不可能とする事情あるが故に、未だ学者の間に定説がない。試みに最も典拠たるべき数種の統計を列挙すれば左の如し。

Hubert Jansen, Verbreitung des Islams ……二五九・六八〇・六七二人
S. M. Zwemer, Missionary Review of the World……一九六・四九一・八四二人
Allgemeine Missionszeitschrift 1902 ……一七五・二九〇・〇〇〇人
H. Wichman, In Justus Perthes' Atlas, 1903 ……二四〇・〇〇〇・〇〇〇人
William Curtis, Syria and Palestine, 1903……三〇〇・〇〇〇・〇〇〇人
The Mohammedan World of To-day (Cairo Conference, 1907) ……二三二・九六六・一七〇人
Martin Hartmann, Der Islam, 1909……二二三・九八五・七八〇人

而して如上の相違は、主として支那及びスウタンに於ける回教信者の算定が、人によつて甚だしく大小あるに基くものにして、自余の諸国又は諸地方の信者に関する統計は概ね大差ない。支那に於ける回教徒の総数に就ては、欧米の学者皆な之を過少に測算するの傾がある。例へば上述諸統計中、最も精確に近しとせらるるハルトマンの算定に従へば、支那に於ける回教徒は約二千三百三十三万二千人なりと雖、多年支那各省を跋渉して親しく視察調査を遂げたる日本回教徒川村乙麿氏の如きは、支那回教徒は、断じて四千万を下らずと測定して居る（註一）。要するに世界に於ける回教徒総数は、少くも二億五千万を下らずと信ずる。而して回教分布の現勢は、亜細亜大陸に於ける約一億七千万を第一とし、阿弗利加大陸之に次いで約六千万の信者を有し、欧羅巴大陸に於ては、土耳古及び欧羅巴露西亜の回教徒約千二百万に達する。両米大陸に於ける回教徒は、如上三大陸の移住民に限られ、其数五万を出でざるべく、濠洲及び太洋洲に於ても、約二万の回教徒を算するに過ぎぬ。

固と回教には、通常の意義に於ける国家的思想を欠如して居る。若し一定の空間的領域が、回教的国家なるものは存在するを得ぬ。即ち全世界は

悉く回教々団の領域にして、此の領域を獲得するためには戦争を必要とする。何となれば非回教徒は、自ら進んで回教に帰依する者を除けば、概ね回教徒の支配を受くるを肯んぜず、又は其の国土を彼等に捧ぐるを欲せざるが故である。されば一切の非回教的国家団体に対する回教々団の法律的関係は、唯だ一の戦争あるのみだ。此の戦争は所謂神聖戦争 Jihad にして、全地を挙げて回教に帰依するまで継続せらる可きものである。故に回教は、今日と雖も尚ほ世界を分つに『回教の地 Dar al-Islam』及び『戦争の地 Dar al-harb』の二つとして居る。

回教徒は、斯くの如くにして、回教紀元第八年（西紀六三〇年）教祖ムハムマッドが全世界に向つて回教帰依の宣言を発してより、四方に向つて『神聖戦争』を挑み、回教紀元二九五年（西紀九〇七年）其の全盛時に於ては、回教団の領域は西班牙・摩洛哥・アルジェリー・チュニズィ・トリポリ・埃及・シリア・亜拉比亜・波斯・土耳機斯坦・阿富汗斯坦・バルチスタン及び裏海沿岸の諸地方に及び、真に全地を挙げて『回教の地 Dar al-Islam』たらしむるの勢を示したが、其後回教々団は其の統一を失ひて次第に衰退し、今世紀初頭に於ては、全回教徒の首長たる土耳古皇帝が僅かに欧亜土耳古及び亜拉比亜の一部に君臨して約千六百万の回教徒を統一せると、波斯皇帝が約九百万の回教徒を統一せると、及び阿富汗斯坦・摩洛哥等に於て半ば独立せる教団を組織せる他、大多数の回教徒は悉く異教徒の配下に属するに至つた。而して回教徒が此等の諸国に分立するは、前述の如く回教本来の精神に非ず、事実の為に強迫せられて教団に境界を設くるの止むなきに至れるに過ぎぬ。今試みに世界戦以前に於ける回教徒の政治的分布を表示すれば下の如し（註二）。

（一）基督教国に隷属し又は保護せらるゝ回教徒

地名	人員
英領 八四、二四一	阿弗利加（埃及、蘇丹を含む） 千人 二〇、六〇七
	亜細亜 千人 六五、六五四
仏領 二〇、二五八	阿弗利加 千人 一八、八〇三
	亜細亜 千人 一、四五五
旧独領亜弗利加	千人 二、五七三
伊、西、白領阿弗利加	千人 二、五七三
リベリア	千人 六〇〇
米領比律賓	千人 三〇〇
蘭領東印度諸島	千人 三三、〇〇〇
欧亜露西亜	千人 八、四二〇
其他歌洲諸国（主として巴爾幹諸国）	千人 一、三六〇
濠洲及び亜米利加	千人 六六
通計	千人 一五五、五六五

（二）同上以外の回教徒

項目	地名	人員
基督教以外の諸国に属する回教徒	アビシニア	千人 八、〇〇〇
	支那	千人 三〇、〇〇〇
	暹羅	千人 一、〇〇〇
	計	千人 三九、〇〇〇
旧土耳古領に属する回教徒	欧羅巴	千人 二九五
	亜細亜	千人 一一、一九〇
	阿弗利加	千人 九九六
	計	千人 一三、四八一
土耳古以外の回教徒	摩洛哥	千人 七、八四〇
	独立亜拉比亜諸国	千人 三、五〇〇
	阿富汗斯坦	千人 四、三七〇
	波斯	千人 八、八〇〇
	計	千人 二四、五一〇

如上の統計が示す如く、全回教徒の六分の五は、実は非回教徒によつて支配せられ、就中欧洲諸国に隷属し、又は其の保護の下に在るもの約一億五千三百万を算する。之を以て今日世界に於ける植民地住民の過半は回教徒なるを知り得るであらう。これ回教徒が、植民政策上に於て重大なる問題を形成する所以である。

（註一）雑誌『新日本』大正四年五月号。

（註二）統計は主として Martin Hartmann, Der Islam 及び S. M. Zwemer, The Muslim World に拠る。

三　回教に於ける信仰と法律及政治との関係

回教に於て、宗教と法律及び政治とが、極めて密接に結合せらるゝことは、植民政策上に於ける回教徒の意義をして、一層重大ならしむるものである。

先づ之を政治的に観察すれば、回教徒が非回教徒の君主を奉戴することは、回教本来の精神と相容れざるもの。回教は前述の如く、全地を『戦争の地 Dar al-harb』及び『回教の地 Dar al-Islam』に両分し、且つ『戦争の地』は早晩『回教の地』と化し、究極に於て全世界は悉く回教を奉ずべきことを根本の原則とする。現に今日に於ても『神聖戦争 Jihad』は如何なる『戦争の地』に対しても之を宣言し得るや否やが、回教神学者間の一論点たるの事実は、此の問題に対する多数神学者の解釈、殊に印度に於ける回教神学者の解釈は、回教の信仰が自由に行はれ、且回教の規定が遵奉せられ、回教徒の生命財産が好意を以て保護せらるゝ地域は、之を『回教の地』と認め、『神聖戦争』は該地域に於て禁止すべしと言ふにある。然れども斯くの如きは已むなき事情のために強要せられたる妥協的解釈にして、哈蘭の名高き一節に於て、全回教徒に向つて下されたるアラーの命令を徹底せしむる所以でない。其の一節に曰く『アラー及び最後審判を信ぜざる者と戦へ、彼等のうち聖経を有する者が自らの手を以て恭しく贖罪金 Dschizja を捧ぐるまで戦へ』と（註一）。茲に『聖経を有する者』とは、猶太教徒及び基督教徒を指すものにして、彼等は天啓の経典を有するものとして、自余の多神教徒に対して特別の地位を占め、多神教徒の場合に於ては、若し改宗を拒めば其の生命を屠られ、婦人及び幼児は奴隷とせられたけれど、猶太教徒及び基督教徒は、仮令改宗せざるも、一定額の租税を回教々団の代表者に納め、且此の義務を尽す間は、生命・自由・財産を維持することを得た。されば印度を『回教の地』と認むるが如きは、一時の便宜に出でたるものにして、アラー及び其の予言者の精神でない。故にマクドナルドの如きも、『印度回教徒が神聖戦争の好機を与へられたる場合に於て、此の解釈が果して有効なりや否やは疑問に属す』と述べて居る（註二）。

信仰と政治と相結ぶこと斯くの如き回教徒が、異教徒の支配を喜ばざるは言を俟たぬ。されば前世記に於て、欧洲列強の植民的発展が回教徒の国土に及ぶや、常に甚だしき抵抗を受けた。而して回教諸国の政治的独立が、或は脅威せられ、或は強奪せらるゝに及んで、之に対する抵抗叛乱、全世紀に亙つて屢々繰返された。世人の熟知する如く、回教徒は、メッカ巡礼を以て最も重要なる宗教的義務の一とする。各国より遠路聖地に詣づる回教徒は、彼等が等しく不幸なる運命に襲はれたのを相語つて、憤激し慷慨した。彼等は世界に於ける全回教国土が、漸次異教徒の為に蠶食せられつゝあるを知つた。斯くの如くにして、彼等は、各自の国土に於て欧洲列強の侵略と戦へるのみならず、今や既に今日の所謂汎回教運動の端緒を見るに至つた。而して此の運動の導火線たりしものは、メッカの一回教神学者によつて書かれたる亜拉比亜語の小冊子『回教を奉ずる一切の国王並に国民に告ぐ』であつた。

汎回教運動が、回教諸国に於て如何なる程度まで組織的に発達しつゝあるかは、之を確知し難き事情あるけれど、現に埃及に於て六種、其他諸国に於て約十種の機関新聞又は雑誌を発行し、カイロを中心として盛んに主義の伝道に努め、倫敦・巴里・ジュネーヴ及び北米合衆国等『汎回教協会』を設立し、専ら回教徒の糾合に努めつゝある。先年和蘭東印度政庁は、汎回教運動の東印度諸島に伝播せんことを恐れて、厳に該運動機関刊行物の輸入を禁止したけれど、現に種々なる手段の下に盛んに密輸せられつゝある（註三）。汎回教主義は、クローマー卿が定義せる如く、第一にはスルタンに対する忠誠を高調し、第二に基督教に対する反抗戦闘の精神を力説し、第三には回教信仰の改革を主張し、如上の目的の為に世界に於ける全回教徒を一致団結せしめんとするものである。一九〇五年三月、カイロ発行の一機関新聞に掲げられたる論文は、汎回教主義者の反欧羅巴思想を最も赤裸々に表白せるものにして、彼等が欧洲列強に対して、政治的に宗教的に激しき反感敵意を抱けることを示して居る。該論文は『印度人及び埃及人に告ぐ』

と題し、筆を極めて印度埃及に於ける英国の『暴虐無道』を難じ、結ぶに下の言を以てした。曰く『一致団結するもの能く勝利を得べし、来つて吾等と心を一にし力を一にせよ、今は是れ圧制に呻吟する印度が、同じく暴虐に号哭する埃及と相結ぶべき秋に非ずや』と。而して信仰上に於ける汎回教主義の進歩的態度は、有名な阿富汗王の宣言、最も能く之を表明して居る。曰く『吾れ一言にして吾が満腔の希望を汝等印度の回教徒に告げん。曰く、知識を得よ、知識を得よ。同胞よ無智に安んずる勿れ、又は己れの無智を知らずして安んずる勿れ。或は曰はん、回教は近代の哲学と風する馬牛なりと。又曰はん、欧洲の科学は罪悪に過ぎずと。吾は彼等の徒に非ず。然れども科学は表面にして宗教は根柢なることを忘れざれ。心情を浄めて、然る後に頭脳を鍛えよ。或は単に心情を浄むるに満足すれども、斯くの如きは誤れり』と。要するに汎回教運動の前途は容易に逆睹し難きものあるけれど、その植民地内に多数の回教徒を包有する欧洲諸国に取りて、重大なる一問題たるを失はない。

而して回教に於て信仰と法律とが不可避の関係を有することも、亦植民政策上に於て回教が特殊の考慮を要する所以である。蓋し近代諸国に在りては、宗教と法律との間に厳然たる区別を劃するを以て原則とする。然るに回教徒に於ては、信仰と法律との間に、何等根本的の区別を存すること無い。アブー・バクル・アブデッサラム・イブン・コアイブ曰く、『回教徒に取りては、俗人法と宗教法との間に区別なし。何となれば両者等しく哈蘭及びムハムマッドの言行を根本典拠とするが故なり。回教徒は両者を以て当然人智の同一部門に属するものとなし、両者の間に何等本質的の相違を認めざるなり。人若し回教徒が祈禱の儀式と、販売の手続との間に、何等の区別を劃せずして、同一態度の下に之を取扱ふ事情を考究せんと欲せば、回教々典を繙いて容易に此間の消息を知り得べし。羅馬法に準拠せる欧洲の立法が、宗俗二法の間に截然たる区別を劃するは、回教徒に取りて不可解のことに属す』と（註四）。而してム

ハムマッド・ベン・ラハルが『回教の真理は一切を包有す』と言へるも、亦実に此の意味に外ならぬ（註五）。斯くの如くなるが故に、若し欧洲諸国が、強いて新たなる法律の下に植民地に於ける回教徒を律せんとする時は、甚だしき反抗を受くるを常とする。何となれば、此事は彼等の固執する信仰を脅すものなるが故である。されば欧洲諸国にして其の植民地に於ける回教徒に対し、或は之を撲滅せんとし、或は之を高圧せんとし、或は之を同化せんと努めたるものは、何れも失敗に終らざるなく、遂に今日の放任主義又は共働政策を採るに至つた。共働政策とは、彼等の自尊心を傷けて其の抗争を受けることを避ける為に、回教の信仰習慣を尊重して、所謂基督教主義を強いることなく、専ら経済的開発によつて相提携し、之によつて利益を得んとすることと是である。吾等は以下節を更めて欧洲諸国の回教植民地に就いて述べる。

（註一）哈蘭第九章第二十九節。

（註二）D. B. Macdonald : Development of Muslim Theology, Jurisprudence and Constitutional Theory, pp. 56-57.

（註三）S. M. Zwemer : The Muslim World, p. 181.

（註四）Abu Bakr Abdessalam ben Choaib : De l'Assimilation des Indigènes Musulmans de l'Algérie aux Français Congres International tenu a Paris en 1900, t. II, p. 146.

（註五）Muhammad ben Rahal : Questions Diplomatiques et Coloniales, p. 542.

四　回教植民地に於ける統治上の困難

前節に略述せる如き事情の下に、回教徒の征服に、欧洲諸国に取りて至難の事業であつた。基督教国が、回教徒多数を占むる植民地内に於て試みたる総ての経営は、概ね彼等の敵愾心を挑発し、動もすれば彼等を駆つて宗教的狂熱に奔らしめ、異教徒に対する反抗憎悪の念を激成して、従来彼等の間に行はれし多年の嫉視争闘を忘れて一致団結の

行動に出でしめ、屢々一般的叛乱を惹起するに至つた。

例へば地中海に面する北部阿弗利加一帯の地、即ち所謂小阿弗利加は、今日に於て最も有力なる回教の一中心にして、適当なる刺激と指導とを与へるならば、一個の堅実なる国家を建設す可しと云ふは、第十六世紀の交、西班牙及び葡萄牙の発展が、土民の宗教的反抗を挑発せるに因る。而して回教が斯くの如き強固なる地盤を小亜弗利加に確立せるは、等しく承認する所である。而して摩洛哥が一五四四年に於て一独立国を建設せるも、亦西葡両国の侵略が、従来族闘を事とせる摩洛哥の諸部族をして、一致協力せしめたる結果であつた。第十九世紀に至りて、仏蘭西がアルジェリーを経略せる時に於ても、アルジェリーの殆ど総ての部落が、数世紀来激烈なる族闘を事として居たに拘はらず、悉く一致して仏蘭西に抵抗を試みた。一八三〇年、仏国は軍艦七十五隻、兵卒三万七千五百人を派してアルジェリーを攻略したが、之を全く仏領とする為には、実に四年の歳月を費した。且此の仏国植民地の建設は、之によつて、何等直接の圧迫を蒙むらざる部族の反抗心をも惹起したので、仏国は之が為に其欲せざりし遠隔の地方までをも征服せざるを得ざるに至つた。而して其後に於てもアルジェリー回教徒は、不断に叛乱を起して反抗を持続し、アルジェリーは仏国陸軍の演習地たるの観を呈した。

和蘭政府もまた東印度諸島中、最も激しく和蘭の支配に抗したのは、南洋回教の中心たる爪哇回教徒にして、異教徒に従属するよりは、寧ろ死するを以て勝れりとし、所謂『神聖戦争』の名に於て頑強なる抵抗を試みた。一八二五年より一八三〇年に亙れる爪哇戦争は、其の最も激烈なりしものである。爪哇以外の諸島に於ても、回教徒は固より和蘭の支配を喜ばず、起つて之と戦つた。西スマトラのパドリス戦争、ボルネオのバンジャルマシン戦争及びアッチェ戦争の如き、皆宗教的熱狂その根柢をなせるもの、其の反抗頗る永く、且猛烈を極めた。而して和蘭の権力已に確立せられたる後に於ても、回教徒は、之を以て決して恒久的のものとなさず、

唯抵抗を持続し得ざる為の一時的譲歩に過ぎずと信ずる。此点に関して、先年在スマトラ一基督教宣教師によつて為されたる報告は、極めて興味ある資料である。曰く『吾人は、往々にして全回教世界が、見えざる糸にて結合せられ居るが如く感ぜざるを得ざることあり。例へば、先頃のアルメニア人虐殺は、スマトラ回教徒に大なる自負心を鼓吹せり。教徒に及ぼさずば止まざるなり。彼等は基督教徒に向つて曰く「汝等今にしてスルタンの勢威、如何に大なるかを知り得たらん、スルタンは遠からずスマトラを自由の国土たらしむべし。其時吾等は、今土耳古人がアルメニア人に向つて為せることを、汝等基督教徒に向つて為さん」と。而して此の報道の伝はるや、将に改宗して洗礼を受けんとしつゝありし若干の回教徒は、基督教に入ることを断念せり』と（註一）。

回教徒は、異教徒の侵入を以て、常に彼等の政治的独立の脅迫と認むるのみに非ず、また宗教上の迫害者として之を憎悪する。故に異教徒の接近が、何等政治的意味を帯びざる時と雖も、之を黙視するを以て宗教的罪悪とする。ドゥテ曰く、『摩洛哥人が欧羅巴人に対して今尚抱きつゝある敵愾心は、政治上より来ると云ふよりは、寧ろ宗教上より来るものなり。彼等の反抗心の由つて来る所は、国民的感情に非ずして、寧ろ宗教的感情なり、即ち彼等は其の信仰の維持を以て絶対的義務と感じ、アラーの宗教が、外人によつて汚瀆せらるゝことを恐れ且憎むものなり』と（註二）。

加ふるに回教徒は、その回教を奉ずるの故を以て、一切の他の人類よりも優越し、神慮によつて彼等を主宰するの使命を負ふと信じて居る。スヌーク・ウルグロンジュ教授曰く『回教に帰依せる土民は、其の改宗の年月が数百年の久しきに亙る者も、或は数年に過ぎざる者も、又衷心より之を奉ずる者も、或は表面の信者に過ぎざる者も、又戒律を遵奉する者も、或は之を等閑に附する者も、又曾て信奉せる偶像崇拝を脱却せる者も、或は尚未だ全く之を放棄せ

さる者も、一旦回教に帰依せる以上は、其の回教徒たるの故を以て、世界に於ける人類中、最も優越せる人民なりと信ずるに至る。回教の理想は、信者の精神を把握し、一首長の下に全回教徒を統一するに存す。未だ回教に帰依せざる民族を、改宗・征服・亡滅等の手段によつて統一せんとする単純にして矜高なる観念は、普く回教徒の間に蔓延せり』と（註三）。

斯くの如き信仰は、異教徒に対する回教徒の団結を容易ならしむるものにして、欧洲の一国が回教徒領域の一地点に於て企つる行動は、直接利害を感ずる該地点のみに止まらず、全領域に於ける教徒の反抗を激成するに至り、従つて之が平定を困難ならしめる。且異教徒に対する戦争は回教の宗教的義務にして、何人も之を拒むことを得ない。異教徒に対する積極的挑戦の場合に於ては、此の義務は日々の祈祷又は断食の如く厳格なるものに非ずと雖も、異教徒側よりする侵略に応戦するに当つては、此の義務は絶対的のものにして、婦女子と雖も之を負担するを原則とする。これ欧洲政治家が、回教徒の反感を激成して『神聖戦争』を惹起せざらんが為に、彼等に対して妥協的植民政策を布くに至りし所以である。ギヨー曰く、『神聖戦争は、阿弗利加北部の欧洲植民地に対する一個の脅威にして、之を蔑視し又は度外視するは、極めて無謀なりと言はざる可からず』と（註四）。

回教徒の征服は、如上の至難なる事情あるに拘はらず、欧洲諸国は次第に彼等を圧倒して其の支配権を確立し、世界に於ける全回教徒の約三分の二は、今や欧洲諸国に隷属し、又は其の保護の下に立つに至つた。而して同教領土に侵入の初期に於ては、各国専ら武力を以て之を威圧するに努めたが、一旦之を征服してよりは、主として同化政策を採つた。然るに此事が却つて回教徒の政治的並に宗教的反感を挑発し、不断の叛乱を惹起するに至り、茲に漸く其非を悟りて、彼等に許すに信仰の自由を以てし、其の風俗習慣を維持せしめ、彼等の矜高を利用して之を懐柔するの策に出たので、両者の関係稍々円滑となり、次第に統治の困難を減ずるに至つた。斯くの如き懐柔政策の典型的なるは

最近に於けるアルジェリー及びチュニスに対する仏蘭西の植民政治にして、曾に回教徒の信仰に干渉せざるのみならず、其の風俗風慣を尊重し、彼等と交はるに対等の礼を以てし、人才を彼等の間より登用して要路の官吏に任じ、且彼等を挙げて植民地軍隊を組織し、辺境の防備に当らしめて居る。

埃及に於ける英国統治も、初めは回教徒の基督教化を企てゝ成らず、次で宗教問題に対して全く没交渉の態度に出で、更に近来に至つては回教徒の歓心を得るに非ずば、植民的発展を困難とするより、積極的に彼等に向つて好意を表明しつゝある。下に引用する在埃及基督教宣教師の不平は、埃及に於ける英国政府の対回教徒政策を示すもの。曰く『政府は回教徒の利益に対して特別なる好意を表し、且基督教を犠牲にして迄も回教の迷信に不当なる敬意を払ふ。裁判所が回教の律法に従つて日曜を休日とせずして金曜に閉ぢるが如き、又はメッカ巡礼のカラヴァンが国王の身代りになる駕籠を奉じてカイロを着発するに当りて、英国軍隊及び土民軍隊が之を送迎するが如き、皆甚だしく基督教を無視するの行動となす。殊にカルトゥムに建設せられたるゴルドン将軍記念学校に於ては、哈蘭を教科書として用ひ、絶えて基督教聖書を用ひず、且金曜日を以て休日とせり』（註五）。而して西部阿弗利加に於ても、回教徒多数を占むる植民地に於ては、英国政府は、埃及に於ける同一の態度を以て彼等に対し、或は官費を以て回教会堂を修繕し、回教徒の風習に従つて之に割礼を施すなど、専ら彼等の敵愾心を慰撫するに努めている。

今日の回教徒は、一面に於て異教徒の圧迫に抵抗して起つ可き充分なる勢力を欠き、他面に於て欧洲諸国は彼等の宗教に好意を表するの態度を採り居れるが故に、少くとも表面は甘んじて異教徒の下に属し、其の支配を認容しつゝある。加ふるに回教徒は、悉く宗教的講社に属し、講社の首長は講中に対して絶対の権威を有する。故に統治者は常に回教徒中の敬虔なる修行者及び諸講者の首長に対して敬意を表し、其の生活の安全を保障し、亦彼等が布施又は供物の名目の下に講中より金品を徴集することを許容し、之によつて最も有効に平和を維持しつゝある。蓋し此等の修

行者並に首長は、平和なる状態に於て利益を享有しつゝあるが故に、勝算なき叛乱に与みして、却つて自己及び信者に不利を来すが如き愚を避けんと努めつゝあるのである。

斯くの如く一旦征服せられたる回教徒は、適当なる方法を以てすれば、之を支配することも却つて他の人民より容易なるが如しと雖も、彼等の服従は決して衷心より出でたるものに非ざるを知らねばならぬ。即ち各宗教的講社及び其の首長の勢力を利用し得る間は、統治甚だ容易なりしと雖も、彼等の忠実は決して絶対に信頼し得べきものでない。若し有為なる野心家が、種々なる動機によつて教徒を煽動すれば、如何なる事変の突発せざるを保し難い。故に仏国前内相アノトーは曾て仏領スウダン及びアルジェリーに於ける回教徒の危険性に就て国民に警告して曰く、『屢々撃破せられて、而も決して沮喪せざる此等の被征服者は、表面に平穏を装へども、実は不断に危険なる不平の焔を心裡に燃やしつゝあり。回教の諸講社は、今は適当なる指導を欠くが故に、暫く無事なりと雖も、他日の叛乱に備ふる彼等の精神的爆発薬は、鄭重に保存せられつゝあり』と。されればモランの如きも『回教徒の領土に在りては、暴動及び叛乱の門戸は、常に開放せらる』と述べて居る（註六）。

（註一）S. M. Zwemer, Ibid., p. 102.

（註二）M. Morand : De l'Importance de l'Islamisme pour la Colonisation Européenne, Bibliotheque Coloniale Internationale, Compte Rendu. 1909, p. 437.

（註三）Snouck-Hurgronje : Bibliothèque Coloniale Internationale, Compte Rendu. 1909, pp. 460—461.

（註四）Villot : Moeurs, Coutumes et Institutions des Indigènes de l'Algérie, p. 482.

（註五）S. M. Zwemer, Ibid., p. 104.

（註六）M. Morand, Ibid., p. 443.

次に経済的見地より観察するに、回教地方に於ける植民事業は、回教に於ける信仰と法律との特異なる関係より、種々なる制限を受くるを常とする。植民の経済的目的は、之を生産の方面より言へば、本国資本の新投下、本国生産物の販路拡張、原料の廉価購買等に存し、之を分配の方面より言へば、主として人口の過剰を節制し、之より胚胎する諸種の弊害を除去するに存する。然るに今日回教徒の多数を占める地方は、或は気候風土の関係より、或は人口密度の稠密より、概ね欧洲民族の居住に適せぬ。従つて過剰人口を移植する目的に対しては、一般に大なる利益を与へざるが故に、欧洲諸国の回教地方に於ける植民地建設は、主として本国資本の新用途、及び本国生産物の新販路を得るを以て満足しなければならぬ。

五　経済的見地より観たる回教植民地

第一に、回教地方は不動産に対する投資に適せぬ。これ一般学者の承認する所にして、其の原因は回教の法律に於て所有権の移転を登記せざるに在る。故に甲が乙の所有地を購買したりとせんに、後日乙が該土地の所有権を主張する場合、甲は之に対抗すべき法律上の保障を有しない。従つて其間に詐欺の行はるゝこと絶えずして、不動産の売買極めて危険である。加ふるに回教の複雑なる相続法は、回教徒の不動産をして甚だしく不確実に陥らしめる。蓋し回教に於ては、相続者の範囲極めて広い。試みに列挙すれば（一）配偶者、（二）父母、（三）子女、（四）男孫及び其子孫、（五）女孫、（六）祖父及び其父祖、（七）祖母、（八）姉妹、（九）兄弟の子及び其男子孫、（十）父の兄弟、（十一）父の兄弟の子及び其男子孫、（十二）解放せられたる奴隷の保護者は、皆一定の歩合に従つて遺産を分配される。而して分配の歩合も亦甚だしく繁雑にして、殊に相続者多数の場合に於ては、相続権の割合が最も複雑を極むる上に、各相続者の所得は極めて少額となる。故に斯くの如き場合に於ては、相続者は財産の分配に与かるこ

とを断念し、共有財産として之を据置くを常とする。而して此の共有財産は、時を経るに従つて更に複雑紛糾を加へ遂に共有者各自の権利を決定すること不可能となるに至る。ブイヤンヌ曰く『回教の財産共有制度は、回教の相続法が複雑を極むることに起因する。相続者が適法の分配を受くることは、至大の困難と巨額の費用とを要す。故にアルジェリー土民の如き、財産の分配を確定するもの極めて稀にして、其の不動産は概ね乱雑なる共有財産の状態に在りて不動産の状態、斯くの如く不確実なるが故に、動もすれば破産に陥るが如き訴訟を見ること尠なからず』と（註一）。

斯くの如き回教相続法は、多くの学者によつて非難せらるゝ所なりと雖も、モランの如きは種々なる理由を列挙して、該法が決して世人の称する如く悪法に非ざるを主張して居る。氏はアルジェリー法律学校長にして、最も小阿弗利加に於ける回教の事情に精通する学者なるを以て、其言は特に傾聴に価する。いま其説の大要を下に述べる。

第一に、回教法律が規定する相続人の数は、之を近世欧羅巴の法律、殊に仏国の法律が規定する相続人の数に比して、決して著しく多数なりと云ふを得ない。回教法律が規定せざる者あると同時に仏蘭西法が相続者と規定するものにして、回教法律の之を認めざるものもある。且回教の一派にては、父系の親族なき時に限りて、母族の親族も相続者たり得とせられる。故に実際に於て相続者の数は、法文に於て見るが如く多数ではない。次に仏蘭西法に於ては、生存せる配偶者は、唯だ財産の収益権のみを相続し、其他の者が財産を相続する。斯の如きは財産分配上困難を惹起するものなるが、回教法律に於ては、生存せる配偶者も、亦他者と同じ財産所有権を相続する。第三にチュニスに於ては、財産共有の実例甚だ僅少にして、仮令これあるも決してアルジェリー回教徒は、其相続法に由来する財産共有制度に対して、未だ曾て不平を訴ふるものあるを聴かぬ。殊に農民及び遊牧民に在りては、

財産共有制度を採用し且之を維持するは、彼等の生活状態に適合せるが故に外ならぬ。蓋し彼等に等しき不毛の地方に定住又は転住し、其の日用器具の如きも頗る幼稚にして、且資本を有せざるが故に、力を交換し、且共同して節倹の生活を行ふに非ずは、其の生命を保つことが出来ない。即ち彼等は財産非ざれば生存の途なきものである。

モランは、如上の説明によりて、回教の相続法が、少くとも小阿弗利加に於ては、全然之を非とすべきものとなし、且適当の方法を以て一方土民の権利を保護し、他方欧洲資本家に有利な規定を設けて、完全なる取引を行はしむる事は、固より容易に非ずと雖もまた決して不可能に非ずとなし、一八九七年二月十日に発布せられたるアルジェリーに於ける土地所有権に関する仏国政府の法律を以て、此の障礙の解決が絶望に非ざるを示す証拠なりとして居る（註二）。

但し回教の相続法は、もと亜拉比亜の習慣を基礎とし、ムハムマッドが多少進歩せる自己の社会的見解より之に若干の改訂を加へて制定せるものなるが故に、回教に帰依する以前に於て既に社会的発達の一定高度に達せる人民に対しては、此の不完全なる原始的相続法の適用を困難ならしむること言を俟たぬ。故に蘭領東印度諸島中、爪哇の如く回教渡来以前既に印度文明の輸入せられたる地方に於ては、回教法律を適用して習慣法の効力を認めない。また西部スマトラの馬来人は、純然たる回教徒と雖も、今尚ほ主婦相続制度を維持して居る。されど此の制度は次第に勢を失ひ、早晩回教法律の相続法が行はるゝに至るであらう。

相続に次いで回教徒の経済的生活を阻礙するものは、一切の利子附貸金及び一切の保険契約を賭博と看做して之を禁止する回教法律である。こは回教徒の商工業的発展を阻害せることは極めて大である。さり乍ら回教徒が商工業界

に活動し初めるに及んで、彼等は法律と牴触する事なくして、而も禁止せられたる契約を行ひ得べき適法の遁路を発見して居る。殊に蘭領爪哇の回教徒は、回教渡来以前より支那人・欧羅巴人・及び少数土民の貪婪なる金貸業者に苦しめられ、貸主に対する憎悪軽蔑の念頗る強く、改宗以後に於ては回教法律の之を禁止するあるが故に、一層厳重に此障礙を打破せしむるに至つた。今や土地抵当銀行は政府補助の下に創設せられて盛んに業務を発展せしめ、又凶年に際しては食料及び種子を有せざるものに対して、之を供給せんが為に設けられたる町村倉庫は、軽微の利子を附して土民に貸附を行ひつゝある。而して此倉庫の業務担任者、並に之によりて便宜を得つゝある借主が共に土民なることは、大勢の趨く所を示すものである。

次に生産品に対する市場としては、回教国は現在に於て種々なる原因よりする制限を受けて居る。而して其の主因は回教徒の購買力が大ならざるに在る。回教徒の生活程度は到処年々多少の向上を見ると雖も 概して極めて遅々たるを免れぬ。欧羅巴人と接触する回教徒は、次第に新しき嗜好、新しき習慣に感染しつゝあるは事実であるが、此等の新しき欲望を満足し得るの状態に達するまでには、尚ほ幾多の年月を要するであらう。何となれば、之が為には彼等が新しき財源を得るの必要ある故である。彼等は其富を自己の勤労に依頼せずして、之を神に祈願する。蓋し彼等の屢々蒙りたる天災、即ち洪水・熱風・蟲害等の頻発、及び天候の異常なる現象は、彼等の堅実なる労働心を喪失せしめ、人力の遂に成すなきを信ずるに至らしめたるもの。加ふるに彼等の宗教は、信者に向つて節制寡欲を力説し、一切の含酒精分飲料・豚肉・脂肪・煙草等の消費品を禁止する。故にモランの如きも、輸出貿易上に於て多大の希望を回教国土に嘱する能はずと言つて居る（註三）。

（註一）Pouyanne : Rapport sur l'Application du Système Torrens en Algérie et en Tunisie, pp. 42—43.

（註二）M. Morand : Ibid., pp. 446-447.

（註三）　M. Morand : Ibid.,　p. 450

六　文化的見地より観たる回教植民地

吾等は更に進んで文化的見地より回教植民地の意義を研究する。此点に関して第一に起る問題は、欧羅巴文明を回教徒の間に扶植し得るや否やと云ふことである。若し回教徒多数を占むる植民地に於て、此問題に対して、然りと答へることが出来よう。屢々引用せるスヌーク・ウルグロンジュ教授の報告に曰く、爪哇に於て、回教徒は欧洲人到来以前に於て、未だ該島固有の文明を破壊するに充分なる年月を有せざりしを以て、欧洲人の渡来は、一方に於て回教の教化を妨ぐると同時に、他方土民の発展に新たなる路を開拓した。若し欧洲諸国にして其の勢力を賢明に使用したらんには、彼等の大多数は欧洲思想を吸収し得る能力を有することは疑ふ可からざる事実であると（註一）。

然れども、回教の教化、既に徹底して行はれたる国土に於ては、其の欧洲化、又は基督教化は極めて困難の事に属する。例へば之をアルジェリーに見よ。夫れ仏蘭西は植民政策に於て同化主義を奉ぜる模範的国家と称せらる。而もアルジェリーの回教徒は、今尚ほ仏国文明と接触し来れるに拘はらず、回教の信仰及び法律に対する愛着心は依然として旧の如く、その風俗習慣、家族制度、乃至生活状態に於て何等の変化を見ぬ。一九〇六年の人口調査に拠れば、アルジェリー回教徒の総数四、四一〇、八〇六三人の中、仏国に帰化せる回教徒は僅かに四十人に過ぎず、一八六五年乃至一九〇六年に亙る四十年間に於ける此等帰化民の数は、僅に一三六一人を算するのみである。而して回教徒と基督教との結婚に至りては、其数更に寥々たるものにして、一九〇六年の統計に拠れば、回教徒の欧洲婦人と結婚せるもの僅かに二組に過ぎない。

仏国官憲は、土民の遊牧生活を向上せしめんが為に大いに尽力する所あつた。植民地政府は特に家屋を建築して村落を形成し、茲に土民を定住せしめんとしたが、尽く失敗に終つた。蓋し彼等は家屋内に蟄居するよりは、自由なる天幕生活を愛する。官吏に採用せられて、多年仏国官吏と同様の生活を送れる土民官吏すら、一旦退職すれば年来の文明的生活を放棄して、再び天幕生活に復帰するもの多い。

回教徒をして斯くの如く保守的たらしむるものは、既に屢々述べたる如く、信仰と法律とが混一せらるゝが故である。若し回教徒が其の法律習慣に従はんか、これ即ち自己の宗教を棄つるものにして、背信者を以て遇せらるゝに至る。従つて彼等を基督教に改宗せしむるが如きは、至難中の至難事である。ドゥ・カストリー曰く『回教国土内に於て基督教宣教師が回教徒に対して採るべき行動は唯だ一事あり、彼等をして回教徒たらしめ置く事これなり』と（註二）。

彼等は回教を以て基督教よりも高尚優越なるものと確信する。而して彼等の欧洲国民と接触するや、其の欠点のみを観得し、その基督文明を観察するや、主として之に伴ふ罪悪を見る。故に彼等は益々回教の優越に対する確信を強くする。ムハムマッド・ベン・ラハール曰く、『欧洲の社会制度より生ずる悲惨、風俗の腐敗を見るものは、回教と基督教との優劣に就て、判断に惑ふことなかる可し。吾人は回教が、基督教よりも高尚優越なるものと確信す。基督教は、何ものを以てしても動かし難き信仰上の支柱を欠く、避難所又は安全なる休息所たるを信ずるものなり。基督教は、何んぞ能く回教に当るを得んや』と（註三）。かくの如くにして、欧洲の教育を受け、基督教に就いて多く学びたる者が、却つて益々之を非難し且敵視するの奇観を呈する。故にドゥテ曰く『最も教育を受けたるもの、最も吾人と遠ざかる』と。

如上の扞格は、回教徒の社会状態及び経済的欲望の程度が、欧洲諸国のそれと甚だしき懸隔あるに因る。蓋し人間の思想・傾向・志欲は、遺伝及び境遇に支配せらるゝものなるが如に、彼等の境遇が今日の如くなる限り、彼等の信

仰も依然として旧の如くならざるを得ぬ。他日彼等が今日の境遇を脱するの利益を感ずるの時は、態が改造せられ、新しき経済的欲望を生ずるの時にして、其の信仰も亦之に順応して進化するに至るであらう。

現に今日に於て、経済上の利害関係は、アルジェリーに於ける回教労働者と白人労働者とを著しく接近せしめつゝある。各都市に於ける土民労働者は、漸次白人労働者と同一の生活を営むに至り、且労働者階級に在りては、土民と白人との間に、盛んに非正式なれど事実上の結婚行はれ、両者の間に親密なる交際が成立して居る。これ両者の経済的生活の近似せるによるもの。而して外国貿易に従事する回教徒の如きも、その営業上の必要より、無益なる回教法律の規定を省みざるもの多きに至つた。

夫れ猶太教は、其の本質に於て最も回教と類似せるものにして、等しく近代文明と相容れざる信仰を教ふるものである。而してその宗教に対する執着心に於ても、猶太人は決して回教徒に劣るものでない。而も彼等は一面に於て能く近代文明と同化し、近代社会に於ける活動に於て、決して其の宗教に累はるることなく、社会の各方面に於て顕著なる地位を占むるに当りても、其の信仰は何等の妨害を与へない。これ猶太教に於て、宗教及び道徳が、政治及び法律と分化せる（又は分化を余儀なくせられたる）によるものにして、若し同様の分化が回教内にも行はれ得るとすれば、回教徒の生活は次第に新面目を呈するに至るであらう。

斯くの如き分化は、固より或程度まで、若しくは教徒の或範囲に限りて、晩かれ早かれ行はれるであらう。たゞ回教は、典型的なる律法教として、人間行為の微細なる点に亙りて規定を設け、此の規定を以て、絶対無謬の神法と目するが故に、之より脱離することは、回教徒に取りて至難の業と言はねばならぬ。但し斯くの如き制度は、当然彼等の生活に甚だしき不便を来すを以て、既に回教紀元第二世紀以来、一切の律法を二大部門に分類するの傾向を生じた。一は即ち儀礼、家族及び相続法、並に信仰上の諸規定にして、狭義に於ける宗教的律法に属し、他は即ち一般的法律

である。若し回教々団が其正当なる発達を遂げたりとせば、此等二大部門の分化も比較的完全に行はれたりしならんも、回教諸国の衰退と共に、回教の進取的精神が停滞・退歩・又は化石したるより、中世紀の律法が今日まで継承せらるゝに至つたのである。

回教徒はドゥテが言へる如く、一方に於ては基督教に対する反抗心より、益々保守的に傾く勢あると同時に、他方にては生活の必要に迫られて、仮令全然幾世紀間に亙れる律法に対する愛着心を放棄せざるにもせよ、少くも近代文明の同化に障碍たる繁冗なる羈絆を脱却せんと努めつゝあることも亦事実である。斯くの如き努力の実例は、之を土耳古に於ける回教の有力者は、一切の宗教的障碍を排除して、近代的生活に同化せんとする抑や可からざる希望を抱くに至つた。彼等は外国の強制又は圧迫を待たずして、全然自己の精力によつて現代文明と並行せんと腐心し、回教の信仰を失ふことなくして時代精神に合致せんことを努め、欧洲諸国と対等の地位に至らんことを以て理想とするに至つた。所謂青年土耳古党は、実に此の新精神の政治的発現に外ならぬ。

唯だ茲に最も矛盾せる一事は、欧羅巴諸国が口に各自植民地内に於ける回教徒の文明化を理想とすると称しつゝ、実は彼等の真の向上発展を欲せざること是れである。例へば土耳古に於ける青年土耳古党の成就せる政治的革命は、回教の前途に対して重大なる意義を有するものにして、若し之を適宜に遂行し成功せしむれば、此の旧き回教帝国は新たなる生命を得来るべく、而して其の影響は世界に於ける全回教徒に及んだに相違ない。然るに斯くの如きは、其の領土内に多数の回教徒を有する欧洲諸国の最も喜ばざる所なりしを以て、彼等は一切の方法を講じて土耳古の進歩を阻害し、伊土戦争・巴爾幹戦争によりて、此の老帝国を疲弊せしめた。されば回教徒が欧洲諸国に対し衷心激しき反感を抱くは、決して異とするに足らぬ。試みに名高きバグダードの長アブドル・ハックの『欧羅巴に対する回教の最後通牒』を読め。其の一節に曰く『欧人よ、基督教を奉ずるの故を以て、基督教徒は、其の土地の如何を問はず、唯基督教

吾等の眼には一切の名誉を失へるものと映ずることを知れ。自余の教徒は吾等に向つて殆ど暴慢なる態度に出でざるに、独り基督教のみは常に最も酷烈なる敵として吾等の前に現はれたり、汝は吾等を難ずるに、其の文明に背くの故を以てす。然り、吾等は汝等の文明に背く、死に至るまで之に背く。何となれば汝等我等をして背かざるを得ざらしむるが故なり。されど汝等銘記せよ。何れの日にか必ず報復は汝等の上に加へられん。吾等汝等の族を見るのみにして、心即ち傷む』と（註四）。而して是れ実に覚醒せる多数の回教徒が、等しく抱く所の敵愾心である。これ多数の回教徒を其領土内に包含する欧洲諸国が、不断に危険と憂慮とを感じつゝある所以である。而して此の危険より脱するの途は、真に彼等の幸福を図るの一事あるのみである。圧迫又は表面の籠絡は、決して彼等の心を得る所以でない。

吾人は此の論文を結ぶに、ハルトマンの言を以てする。曰く

『仏国人は、阿弗利加に於て、回教が今尚盛んに伝播しつゝあることを愁訴す。而して之に対する最も有効なる防禦は、回教の伝道者を殺戮して之に殉教者の血を流さしむることに非ず、また基督教の伝道者と称して実は最も我慾に富める教会の宗教業者を続派することにも非ず、唯征服者たる全仏蘭西人が、能く自己を訓練し、一切の点に於て土人よりも優越せることを行為に於て現はし、新しき道徳的並に経済的生活の模範を彼等に垂れ、且真に彼等の福祉を念とする善良なる教師たることを期するに在り』と（註五）。

（註一）Snouck-Hurgronje: Ibid., p. 468.

（註二）De Casteries: L'Islam, p. 213.

（註三）Muhammad ben Rahal, Ibid., p. 541.

（註四）Der Christliche Orient, IV., S. 145 所載に拠る。

（註五）Martin Harmann: Der Islam, ss. 178-179.

第十一　復興亜細亜の前衛たるべき回教聯盟

一　ポールグレーヴの警告

名高き英吉利の史家サー・フランシス・ポールグレーヴの第二子に生れ、ジェスイト派伝道師として、多年印度・シリア・アラビアに住し、後更に外交官として埃及・小亜細亜に駐在し、最も回教徒の事情に精通せるW・G・ポールグレーヴは、一八七二年倫敦に於て発行せる『東方問題論集』の中に、既に回教に関して下の如き警告を発して居る——

『回教は、現在に於ても、尚一個巨大なる勢力である。そは自ら保守するの活力に充ち、且進取の余力を存して居る。団結せる回教勢力との闘争は、真に生死の戦であらう。東方回教国民は、彼等の敵西方基督教国の、多方面の実力と技倆とを領得した。この領得は、当初こそ尊敬と恐怖との因となり、崇拝の念をも喚起したが、今や一変して敵意に充ちたる嫌忌となり、明らさまの憎悪となつて来た』（註一）。

恰も彼と時を同じくせる回教研究者ボスワース・スミスも、また彼と想ひを同じくして居た。彼は一八七四年『英国王立学会』に於て試みたる名高き講演『モハメッド及びモハメッド教』の中に、随処回教の生命尚未だ亡びざるを力説し、印度・波斯・アラビアに於て回教復興の形勢あることを指摘したる後、下の如く述べて居る。曰く『予が初め回教復興の力に関する叙上諸節を草せる時、予は吾言が、恰も此時に当り、啻に予が言及せる印度・波斯・アラビアに於てのみならず、土耳古帝国の亜細亜領に於ても、最も切実に立証せられつゝありし事実を知らなかつた。後に

至りて、予はポールグレーブ氏の最も興味ある「東方問題論集」を手にし、回教復興の形勢を自証する事実と、並に其の主なる兆候に関する明確なる記述を見出だした。』と（註二）。

さり乍ら叙上の警告は、白人世界制覇の思想、最も高潮に達し、迷信の魅力を以て欧羅巴を支配せる時代、而して回教の政治的勢力は、表面底止せざる勢を以て衰退しつゝありし時代に発せられたるもの。殊高自負の欧羅巴は、彼等の言を以て、唯だ朽人の愛に過ぎずとした。之を反対に就て観れば、爾来回教の政治的勢力は、秋の入日の如く速かに沈んで行つた。世界史の転期たるべき世界戦勃発当時に於て、辛うじて独立を保てる回教国は、僅に土耳古・波斯・亜富汗斯坦の三に過ぎず、世界に於ける回教徒の大多数は、既に欧羅巴に隷属して居た。而して世界戦は此等残余の三国をも、悉く亡国の危地に陥れんとし、全回教徒を挙げて白人治下に立たしめんとした。然るに、此の表面の全敗の裡に、回教復興の力が、物凄く動き初めて来た。今日に於ては仮令先見者の炯眼なくとも、回教勢力の昂潮を観得するに難くない。ポールグレーヴが怖れたる『団結せる回教勢力』は、四十年後の今日に至つて、漸く其の全面目を露呈せんとするのだ。西はモロッコより、東は印度に至る回教徒の現状を見る時、吾等は恰も底知れぬ深淵を俯瞰する如き、名状し難き物凄さを感ずる。

団結せる回教勢力、これを激成せる直接原因は、言ふ迄もなく世界戦其ものである。さり乍ら何事も準備なくして成るはない。或は全回教主義の名に於て、或は全土耳古主義の名に於て、或は全回教主義の名に於て、宗教的・文化的・而して政治的なる神怪の姿を、欧羅巴の前に隠現出没せしめたる回教の諸運動は、取りも直さず今日の前駆であつた。而も少数先見者を除く外、一般欧羅巴は、此等の諸運動を以て、到底実現し難き夢想と蔑視して来た。然るに今日に至りて空想として顧みられざりし回教徒多年の努力が、回教諸国聯盟の相に於て、当来国際政局の、至大の一勢力たるべき可能を生じた。此の回教聯盟を度外して、来るべき世界変局の正しき想察は不可能である。

回教は、典型的なる律法教として、信者の一切の内面的並に外面的生活を支配する。故に回教と道徳と法律とは、尚未だ分化を遂げて居ない。従つて回教徒に在りては、宗教と政治とは不可分であり、国家は即ち教団である。故に回教諸国の復興が、必然回教其ものゝ宗教的復活に待つことは、因縁最も明白である。かくして吾等は、近代回教復興の跡を溯り、其の真個の源泉を、ワハーブ、ミルザ・アリ・ムハムマッド、サヌッスイ等の偉大なる改革者の魂に求めねばならぬ。

（註一）W. G. Palgrave : Essays on Eastern Questions 第一二七頁。
（註二）Bosworth Smith : Mohammed and Mohammedanism 第二七〇頁。

二　回教復興の泉となれる三つの魂

回教諸国が、悉く白人の前に雌伏して以来、欧羅巴は、回教の戦闘的精神、曽て有せる焔々たる信仰が、既に地を払つたと考へた。或は斯く考へることによつて安心せんとした。而も回教が、表面最も悲境に沈淪せる時、その揺籃たりし砂漠の裡から、再び熱烈なる信仰の炎が燃え立つた。此の回教改革者は、取りも直さずムハムマッド・イブン・アブドゥル・ワハーブ其人である。彼及び彼の信者によつて、全回教世界が、其眠りより覚まされ初めた。このワハーブ運動によつて、実に回教の大リヴァイヴァルが起されたのだ。

ワハーブは、一七〇三年、アラビアの中部、未だ曽て他国の羈絆の下に立たざる、自由奔放の国ナジドの一邑、ハウタに生れし砂漠の児である。砂漠と云ふ言葉は、常に吾等をして堪え難き焦熱地獄を想像せしめる。さり乍ら、親しくアラビア砂漠を旅せるシュプレンガーは、其の不朽の大著の中に、感興に充ちたる筆致を以て、砂漠の爽快を讃美して居る。彼に従へば、砂漠の空気は清く澄み、其の天は常に朗かであり、入る息、出づる息に、人は生命の漲る

を覚える。彼は秀麗双びなきアルプス山中に生れたるに拘らず、故国アルプスの山気すら、尚且アラなる空気に及ばずと言つて居る（註一）。

ワーハブは、是くの如き砂漠の裡に生れ、少年の頃、其父に伴はれてアラビア各地を巡礼し、稍々長じてメヂナに止まりて回教神学を修めたる後、回教の腐敗堕落を革新し、回教を原始の純一に復らしむるの覚悟を以て、故郷に帰りて伝道を始めた。彼は第一に、独一のアラーに対する絶対の帰依を力説し、神人間の一切の仲介者を排し、教祖其人の仲介をさへ斥けた。第二に、コラン及びスンナの私の解釈を排した。第三に、純一なる信仰を蔽へる一切の儀礼を禁じ、説教によりて帰依せざる異教徒に宣戦すべきことを高調した。第四に、剣かコランかの鉄則を確立し、一切の妥協を拒否した。

さり乍ら、ワーハブも亦故郷に容れられざる予言者として、家族と共にハウタを去らねばならなかつた。彼は妻子を引連れて砂漠の邑々を伝道し廻つた。失意放浪幾年の後、齢四十三歳の頃ナジドの一邑ダライヤの長者ムハムマッド・イブン・サウドの帰依を受け、其女を之に娶はすに及び、ワーハブは初めて勝利の曙光を見るを得た。ワーハブに帰依せるサウドは、新しき信仰に勇み立ち、所謂ワーハブ世襲王国を建設し、新王国の武力を以て、盛んに新信仰を宣伝した。彼の後継者は一八〇三年、回教の両聖都メッカ及びメヂナを襲ひ、メッカの聖殿並にメヂナに在る教祖の墳墓を蹂躙し、以て回教徒が本原の神を忘れて、此等第二義のものに執着するを覚醒せんとさへした。この一事はワーハブ教徒の革命的精神が、如何に徹底深刻なるかを、最も明瞭に物語る。

かくて約半世紀の間に、ワーハブ国は全アラビアに稜威を振ひ、世界の回教徒を震撼したが、一八一二年に至り、埃及のモハメッド・アリ・パシャが、英人の援助を得て、其の勝利の歩みを阻止して仕舞つた。ワーハブ国の政治的

発展は、之と共に止まつたけれど、其の精神的感化は爾来益々広汎なる範囲に亙り、殊に一八二一年サイド・アーマッドの出現によつて、印度教教徒の間に、確乎たる根を下し、その覚醒の根本的動因となつた。

アラビアに於けるワハーブの改革に次で、波斯に於ては、一八四四年、ミルザ・アリ・ムハムマッドが、天啓によつて新信仰を唱道した。彼は此時僅かに二十五歳の青年であつたが、自らバーブと称し（註二）、公然回教僧侶の堕落を痛撃せるのみならず、ムハムマッドの神使なること並にコランの天啓なることを承認しつゝも、同時に其の絶対性を否定した。天啓は究極的のものに非ず、時代と共に一層深遠なる真理、一層適切なる律法が、神より人間に啓示せらるべきことを主張して、此の勇敢なる青年は、正統回教の根城に戦を挑んだ。

彼は故郷シーラーズに於て、熱心なる弟子を得た。弟子の或者は北波斯に伝道して多数の帰依者を得た。官憲は峻厳なる迫害を、此の新信仰の上に加へた。バーブは遂にシーラーズに於て捕へられ、次でギランの獄に移された。信者は力を以て此の迫害と戦ふべく数度の大乱を起した。官憲は、バーブをギランよりタブリスに護送し、一八五〇年七月九日、同市回教寺院前の広場で公衆の面前に之を銃殺した。次で一八五二年には、重立ちたる信者三十名を捕へテーランに於て之を酷刑に処した。さり乍ら、是の如き迫害は、他の総ての場合に於けると同じく、決して思想信仰を克服し得る所以でない。そは営に油を火に注いで天に沖せしむるに畢る。バーブ教も亦首唱者の死後バハー・ウラーと呼ばるゝミルザ・フサイン・アリ、及び其子アブドゥル・バハーと呼ばるゝアッバス・エッフェンディによりて次第に波斯及び小亜の回教徒を支配し、絶えざる迫害の下に、驚く可き勢を以て帰依者の数を増して行つた。ヴレンティン・チロルは、一九〇三年、波斯に於けるバーブ教の伝播に就て、下の如く述べて居る。曰く『総ての大都会に於て、シーラーズ及びエジプトに於て、イスファハン及びタブリスに於て、並に首府に於てさへも、人民の一切の階級

の裡に、官吏及び軍人の中に、商人及び工人の中に、並に最下層の人々の中に、彼等の帰依者が見出される。村落の人民の中にも、殊にイスファハン・クム・カシャン附近の村々に全コラサンに於て彼等は多数の帰依者を得て居る。信頼すべき権威者の推算によれば、全信徒数は百五十万、即ち波斯人口の約二割に達する』と（註三）。

ワハーブ及びバーブと相並ぶ他の一人の改革は、一七八七年アルジェリーに生れたるスィディ・ムハムマッド・ベン・アリ・アス・サヌッスィである。彼は、若くして、当時北阿弗利加回教の中心なりしモロッコの美しき都フェーズに在るカリウム学院に学び、七年を此処に修業した。彼は其間、比類なき刻苦勉学と、清浄禁欲の生活とを以て学友に敬服されて居た。然るに学院を出てから、北の温順なりし学徒が、恰もワハーブと同じく、純正回教の復興を唱へ一切の煩瑣なる神学の無価値、回教に纏綿せる種々なる儀礼の無用を力説し、教祖時代の純一に復帰せよと叫び出した。彼は、モロッコの回教徒から、異端者として激しく排斥せられ、一八二九年アルジェリーに帰り、ラカトに於て子弟を教へたが、幾くもなく塾を閉ぢて北阿弗利加遍歴の旅に出た。彼は、道々その純正回教を説きつゝ、埃及カイロに至り、名高きアズハル大学に入らんとした。然るに彼の信仰は、またカイロ神学者の非難憎悪を蒙り、為に長く足を駐むることを得ずして更に去つてメッカに赴き、茲に有名なる神学者にして、モロッコに大なる勢力を有せるカドリア教団の首長スィディ・マッド・イブン・イドリス・ウル・ファースィの弟子となつた。彼等は互に心霊の扉を開き合つた。而して其の信仰が、正しく同一のものなるを知り、互に相識るを得たることを歓喜した。

此年、師弟打連れて、ヤマン地方へ伝道の旅に出た。師は不幸旅中に病を獲て世を逝つた。而して臨終の間際に、其の信者等に向ひ、己れ世を逝れる後は、新に得たる愛弟子を仰いで師主とせよと遺言した。然るにメッカの回教学者は、また彼の信仰を喜ばず、種々なる迫害を加へ初めた。かくて一八三八年、彼は遂にメッカを去るに決した。而

して彼は此時、欧羅巴の感化を受けたる一切の文明地方より退き、専ら純乎として純なる砂漠の児等に、伝道を試みるに決した。

この決心を抱いて、彼はサハラ砂漠の中に入込んだ。而してサハラの沃地に住む諸部族に向つて熱心に伝道した。彼の熱誠は、非常なる成功を以て報いられた。彼は遊牧アラビア人及び黒人の間に、回教の如何なる他の教団も有せざる多数の帰依者を得て、所謂サヌッスィ教団を創立した。而して回教に於ては、宗俗両権が本質的に一なるが故にワハーブの場合と同じく、サヌッスィも亦、啻に教主としてのみならず、実に君主として仰がるゝに至つた。

純正回教の恢興を生命とせる彼が、その教団の組織を戦闘的にしたことは、剣かコランかの精神よりして、聊かも異とするに足らぬ。彼は其信者を、神の戦士として訓練した。彼は信者に向つて、煙草を禁じ、砂糖をさへ禁じ、黄金珠玉の装飾を禁じ、徹底せる禁欲剛健の生活を要求した。而して唯神の為に揮ふ剣の装飾としてのみ、黄金と珠玉とを用ふることを許した。彼が諸方に設けたる支部の位置は、実に欧羅巴の軍人と商人とを驚嘆せしむる軍事的並に経済的価値を有して居る。

一八五九年彼死して、其子ムハムマッド・ウル・マーディ十四歳にして其後を継いだ。此頃に於てサヌッスィ教団の支部は、シレナイカに三十八、トリポリに十八を算し、其他北阿一帯に散布して居た。マーディは、父を辱めざる賢児であつた。彼は色々の誘惑を斥け、父の志業を確守して、専ら砂漠の民、並に中阿の黒人に伝道し、必要なる個処に支部を増設して行つた。而して此等の支部は、啻に宗教的支配の中心たるのみならず、次第に政治的支配の中心ともなつて来た。かくして一九〇二年彼世を逝るまで、サヌッスィ教団は、最早一個の国家に等しき団体となつた。而して彼の諸子は、当時尚幼弱なりしを以て、従弟サイド・アーマッド後を嗣ぎ、以て今日に及んで居る（註四）。

（註一）Sprenger : Das Leben und die Lehre des Mohamad 第三巻序文第八頁。

（註二）Bab は真智に至る「門」を意味す。

（註三）Valentine Chirol : The Middle Eastern Question 第一一三頁。

（註四）サヌツスイ教団に関しては、サハラ砂漠横断者として名高きフオーブス夫人が、一八二一年五月十八日英国中央亜細亜協会に於て試みたる講演 The Senussi as a Factor of North African Development に挨る（Journal of the Central Asian Society 第八巻第四冊）。

三　全回教主義及び全ツラン主義

偉大なる改革者によつて喚起せられたる回教のリヴイヴルは、明白に精神的並に政治的の両面を具へて居た。回教改革者の心を打てる最も重大なる事実は、実に回教の政治的微力であり、而して髪くなき欧羅巴の侵略であつた。叙上のリヴイヴルが、回教諸国を震撼したのは、第十九世紀の中葉であり、而して此の時期こそは、西欧諸国が漸くナポレオン戦争の創痍より癒えて、盛んに回教諸国の侵略を企てた時であつた。かくて回教徒の精神には、精神的革新と政治的解放の要求が、堅確に相結んで、欧羅巴の侵略に対抗せんとした。固より当時に於ける西欧の軍事的並に物質的優越は、到底回教徒の敵でなかつた。されど、回教の指導者は、必ず其志を遂げねば止まぬ覚悟を以て、遼遠なる目的の為に努力し初めた。

回教徒は、欧羅巴の知識によつて征服された。而して今や其敵の知識を学んで、之を斃すの準備に取かゝつた。彼等は欧羅巴の宣伝を憎む。反欧の団結を固くする為に、新聞を彼等に学んだ。バーナード・テムプルが言へる如く、カイロ発行の新聞が、バグダード・テーラン・ペシャワールに行亙り、君府発行の新聞が、モハメラー・ケルベラー・ポートサイドで読まれて居る。また回教徒は基督教を侮蔑し、カルカッタ発行の新聞が、バスラ・ボムベイで読まれ、カルカッタ発行の新聞が、モハメラー・ケルベラー・ポートサイドで読まれて居る。而も伝道の方法を彼等に学んだ。シリアに生れたる一基督教徒アミーン・リハニは、欧米に向つて下の如き警

告を与へて居る。曰く『回教は、欧羅巴の接壌地に於て失へるものを、之を得る方法は、正しく基督教の伝道に則れるものである。欧羅巴は、いつかは己れに叛逆せでは止まぬ回教徒を、軍人に仕立て上げて居るのだ』と（註一）。

回教徒の準備は、極めて隠密の間に行はれたるが故に、外部よりの察知は至難であつた。而も回教徒内に結社せられたる大小幾多の教団は、教訓・鍛練・改宗と云ふ精神的武器を以て、不断に戦ひを続けて来た。彼等は、回教を白人の政治的支配より解放する為には、先づ信者の精神的革新を行ひ、之によつて解放戦並に戦後の建設に必要なる真個の力を養はねばならぬことを知つて居る。彼等は、欧羅巴の力と、彼等自身の弱点とを知悉するが故に、尚早なる軽挙妄動の危険を知る。彼等は、機運の次第に熟しつゝあるを確信し乍ら、徐々に、冷静に、沈着に、偉大なる力を蓄へ、見事なる自制を以て、時到らざるに事を挙げんとする一切の誘惑を抑止して来た。これ実に反欧精神が、爾く強烈を加へて来たに拘らず、過去二十年間の甚しき圧迫に対して、唯だ部分的反抗を見るに過ぎざりし所以であり且世界戦に於て、土耳古の『神聖戦』に参加せざりし所以である。

さり乍ら、回教内に躍動し来れる如上の精神は、曾に内面的準備のみならず、同時に外面的運動として現はれずには居なかつた。而して其等の諸運動のうち、最も重要なりしは、言ふ迄もなく全回教主義及び全ツラン主義の運動である。

全回教主義は、文字の示す如く、世界に於ける全回教徒を一致団結せしめんとするもの。其の実際運動の導火線となれるは、第十九世紀中葉メッカの一回教神学者の筆になれるアラビア語の小冊子『回教を奉ずる一切の国王並に国民に告ぐ』であると言はれて居る。而して此の運動は、波斯国民主義の父として名高きサイド・ジャマルッディンの最も熱烈なる宣伝によつて、俄然として其頭を擡げて来た。彼は、回教諸国に向つて、極力一致団結を勧請し、是の如

き一致が、回教興隆の最初の条件なることを力説した。彼は全回教主義の理想を実現すべく、印度・波斯・土耳古・埃及の諸国を歴遊宣伝した。而して当時の土耳古皇帝アブドゥル・ハミッドは、彼の為に有らゆる後援を惜まなかつた。彼は、波斯国民に向つて、世界に於ける唯だ二つの回教独立国が互に相反目するの非なるを告げ、宗派的感情を去りて提携すべしと勧めた。かゝる機運に激成せられ、一九〇二年、メッカに於て世界回教会議の開催が提議せらるるに至つた。但し此の提議は、アラビア人の勢力増進を恐れたる土帝アブドゥル・ハミッドの為に阻止せられて、竟に実現を見なかつた。

此事ありて幾くもなく、所謂全ツラン主義が唱へられ初めた。それは亜細亜に於けるツラン民族全体の糾合を目的とせるもの。その唱道の当初に於ては、主として文化的方面を高調し、土耳古語の復興、土耳古文学建設を力説して居た。彼等は、回教の説教は、土耳古語を以てなすべきこと、一切の外来語を土耳古語より駆逐すべきこと、純乎として純なる『ツラン』を復興すべきことを熱心に主張した。而も是くの如き主張は、種々なる点に於て、回教内の他の運動と牴触せるが故に、全ツラン主義宣伝者は、全回教主義と提携するの目的を以て、次第に其の主義を改めて行つた。

此等の主義は、其の性質に於て、同時に宗教的・文化的・民族的のものであり、当初は素朴なる非実際運動なりしに拘らず、其の間接の効果は、極めて大なるものがあつた。何となれば、亜細亜回教諸民族は、此等の運動によりて初めて民族的自覚を喚起せられ、世界政局に対して必要なる注意を払ふに至り、従つて明確に英露両国より来る脅威を意識するに至つたからである。而して欧羅巴の飽くを知らぬ侵略に対し、叙上両主義の根柢の上に、何等かの形態に於て、回教諸国の聯盟を試みんとの希望を生ずるに至り、運動は頓に現実的となり、同時に著しく政治的色彩を濃くして来た。

（註一）L. Stoddard : The Rising Tide of Color 第六一頁の引用に拠る。

回教聯盟の最初の具体案は、亜富汗王アブドゥル・ラーマン汗によつて提唱せられたる亜富汗斯坦・波斯・ブハラの三国同盟である。其の主たる目的は、言ふ迄もなく露西亜の南下に備ふるに存し、従つて防禦的性質のものであり加盟三国は同盟に於て平等の地位を保有し、一国が他を指導すると言ふが如きものでなかつた。王は、全力を挙げて此の三国同盟の成立を画策した。彼は目前（まのあたり）ヒヴの滅亡を見、ブハラの没落を見た。露西亜の波斯に対する横暴を見た。また其のパンジデーに於ける陰謀を目撃した。王は、明白に自国の危険を意識せざるを得なかつたのだ。

当時露西亜の政策は、南下途上に横はる中亜回教諸邦を、徐々に且確実に亡ぼすことを目的として居た。而して三個の方法を以て、此の目的を遂げんとした。第一は武力を以てする公然の征服である。第二は同盟の名の下に若干回教諸邦を、徐々に且確実に亡ぼすことである。第三は回教諸邦と英吉利との間に、紛糾の種を蒔き、之に乗じて漁夫の利を占めることである。一八七五年、カウフマン将軍が、シュヴロフ伯爵の手を経て、当時の駐英露国公使に宛てたる書翰は、露西亜の回教政策を物語る。即ち将軍は、該書翰に於て、欧羅巴真個の敵は回教其者に外ならぬことを述べ、亜富汗斯坦及び中亜回教諸邦は、速かに之を英露両国の間に、適宜分割するに如かざることを、暗に提議して居る。怜悧なるアブドゥル・ラーマン汗が、回教同盟を画策して、露国の侵略に備へんとしたのは毫も怪しむに足らぬ。されど王は、其の拮据せる同盟の実現を見ずして世を逝つた。彼の後を嗣げるハビブラー王も、亦父と志を同じくして居たが其の成立の為に、積極的計画を樹てはしなかつた。今日に於ても、亜富汗政治家の或者は、アブドゥル・ラーマン汗の遺志を継いで、カブールを中心とせる中亜回教聯盟の実現に努力しつゝある（註一）。

四　回教徒の政治的覚醒

亜富汗の回教同盟運動と相並び、而も更に有意義なるものは、全土耳古主義運動である。そは前節に述べたる全ツ

ラン主義を母として生れたるもの。吾国の賀茂真淵にも比ぶべきズィヤ・ベイの国学復興運動が一カに初めて一個の結社を生める頃、全ツラン主義は、土耳古語と土耳古文明とを、外来の影響より解放せんとせし文化運動であつた。然るに一九一二―一三年のバルカン戦争は、心ある土耳古人をして、国家の悲運に泣かしめ、同時に国運恢興に対する情熱を抱かしめた。而して全ツラン主義に覚醒せられたる魂は、茲に全土耳古主義の政治的理想を生むに至つた。かくて全ツラン主義の詩人ズィア・ゴェク・アルプは、下の如く歌つた―

わがアッチラ、わが成吉思汗、わが民族の栄誉を輝かす此等英雄の姿は、悪意と侮辱とに蔽はれて、歴史の無味なる頁の上に現はる。

而も洵に彼等の偉大は、アレキサンダー又はケーザルに譲らず
歴史には蔽はれて現はれざれど、吾心は民族の祖オーグス汗を知る
彼は其の一切の栄誉と偉大とを以て、今ま吾こゝろに生きてあり
吾を動かし、吾を激まし、而して吾を歌はしむるはオーグス汗
土耳古人の祖国は、土耳古に非ず、土耳機斯坦に非ず
そは広大なる永遠の国土、ツランなり（註二）

斯くの如くにして回教を奉ずる全土耳古民族の政治的統一が、明白なる青年土耳古党の政策となつた。タラート・パシャを首相とし、エンベル・パシャ及びジェマル・パシャを陸海両相とせる青年土耳古党政府は、此の理想を実現する為に、一切の援助を該運動に与へた。土耳古民族は広大なる地域に散在し、其間に何等の政治的聯絡がない。而も彼等を統一する時は、列強と伍し得る強大なる国家として、全回教復興の中心勢力たるを得べく、埃及・モロッコ・チュニスのアラビア人・波斯人・亜富汗人等も、初めて完全なる独立を享有し、其の団結せる回教勢力は、能く

欧羅巴を圧倒するに足ると云ふのが、取りも直さず彼等の志であつた（註三）。土耳古が世界戦に参加せるも、亦之によつて乾坤一擲の大賭博を試みんとしたのだ。されば宣戦の翌日、土耳古政府の発布せる宣言の中に、下の如き一節を見る。曰く『吾等の世界戦参加は、土耳古の国民的理想の擁護の為である。吾等の理想は、吾等を導いて、敵国露西亜を倒し、之によつて土耳古民族の全支族を包容し統一する帝国の自然の国境を築かしめずば止まぬ』と。かくして世界戦に参加せる土耳古は、全世界の回教徒に向つて、『神聖戦』に参加せよと宣告した。

この宣布は、独逸が期待せる如き効果を見なかつた。さりとて断じて聯合国側が吹聴せる如き無効のものではなかつた。事実此の宣布ありし為に、世界の回教徒は、政治的に深刻なる反省を与へられた。各国の回教指導者は、時未だ到らずと信じた為に、土耳古の宣布に応じなかつたけれど、之によつて喚起せられたる回教全般の覚醒が、今後の世界政局に非常なる役割を勤むべきことは、事物の真相に徹し得る人の、決して看過せぬところである。のみならず此の宣布は、各国回教徒の間に、聯合国殊に英国をして寒心せしめたる各種の陰謀騒乱を惹起した。

（註一）**Ikbal Ali Shah : The Federation of the Central Asian States under the Kabul Government** (Journal of the Central Asian Society 第八巻第一冊所載)。

（註二）**Tekin Alp : Türkismus und Pantürkismus** 第一五―一六頁。

（註三）**Tekin Alp** : 同上第七三―七四頁。一九一七年六月発行 **Round Table** 第二十七号所載論文 **Turkey, Russia and Islam** 参照。

Future 及び同年十二月発行第二十九号所載論文 **Turkey : A Past and a**

五　回教聯盟出現の可能

土耳古が参戦すると否とに拘らず、又は『神聖戦』を宣布すると否とに拘らず、世界戦は、白人治下の回教徒に向つて、活躍の機会を与へたものである。

一九一五年暮、曽て吾が外国語学校印度語講師にして、英国の為に吾国より遂にはれたる熱烈火の如き印度回教徒バラカトゥラーは、印度革命家マヘーンドラ・プラタプと共に、独逸人及び土耳古人より成れる一団の使節を伴ひ、亜富汗の首府カブールに到着した。彼等は土耳古皇帝の、『神聖戦』布告を携へ、前亜富汗王ハビブラーを汗を起たしむる目的を以て来れるもの。事成るの日は、西北印度を亜富汗斯坦に割譲すべしと提議した。王は此の提議に対し、若し十万の狂土軍を、亜富汗国境に送らば、或は之に応ぜんと答へたと伝へられる。独逸将校は、交渉はかばかしからざるを憤り、翌一九一六年カブールを去つたが、土耳古及び印度の革命家は、尚ほカブールに止まり、此処を策源地として第二の運動に着手した。此の運動は、其の密書が黄色の絹布に認められたる理由によつて、『絹布密書陰謀』と呼ばれ、目的とする所は、回教の全勢力を結合して、印度に於ける英国の顛覆に用ゐんとするに在つた。彼等は、此の運動を有力ならしむる為に、全回教徒の尊敬を繋げるメッカの首長を味方に入れんとし、印度の声望ある回教徒を派遣して熱心に説かしめた。然るにメッカ首長は、彼等の誘致を肯んざりしのみならず、一九一六年夏土耳古に対して独立の旗を挙げたりしため、此の計画は一頓挫を来たした。加ふるに絹布密書が偶然の出来事から印度官憲の手に入つたので、英国は大事に至らざる前に、此の運動を鎮圧するを得た（註一）。

露西亜に於ける回教徒のうち、パトゥム附近のアヂャール族は、一九一五年初、土耳古に味方して起つたが、露軍の為に鎮圧された。翌一九一六年夏には、土耳機斯坦の回教徒が、稍々大規模の暴動を起して、ツァー政府を苦しめた。さり乍ら中亜に於ける露国の武力、小亜に於ける英軍の勝利は、回教諸民族の聯絡ある運動を阻止し、殊に一九一七年五月のバグダード陥落、同年十二月エルサレム占領は、回教徒を威圧するに与つて力あつた。

然るに露国革命は、亜細亜回教徒に非常なる活躍の途を拓いた。幾度か蹉跌せる回教徒の聯盟が、露国革命を導火とし、労農露西亜を後援として、漸く可能の曙光を見得るに至つたのだ。

露西亜革命の結果として、旧露帝国内の諸回教民族が、所謂『民族自決の権利』に基いて、革命直後に於ける露国の混沌は、個人・団体・民族に向つて、自衛の本能を喚起せずに居なかつた。国家の如何に決着するかは、当時に於て殆ど不明なりしが故に、人々は自ら護るの途を講ぜねばならぬ。かくて露国回教徒も、亦自衛の策を樹つるの必要を痛感した。彼等は、この千載一遇の好機に於て彼等の地歩を確立すべく努力した。かくて革命の翌月、即ち一九一七年四月、バクーに於て高架索全回教徒会議、オレンブルグに於て婦人回教徒会議、五月にはモスクワに全露回教徒会議、八月にはカザンに回教徒軍事会議を開催して、向後の方針を凝議し、且モスクワの全露回教徒会議は、露国回教民族の統一と組織とを実現するの目的を以て、全露回教徒評議会を組織し、実行員を任命した。かくて旧露帝国内の回教徒はタータリア・バスキリア・キルギジア・トルキスタン・ヒヴ・ブハラ・クリミア等の自治回教国を建設し、互に統一聯絡を取りて、将来の発展を図ることゝなつた（註二）。

既にして露国革命の進渉は、労農露西亜の建設となつた。而して労農露西亜は、回教徒の勢力を利用するの政策を取りたるが故に、両者の関係が、次第に密接の度を加へて行つた。労農露西亜当初の政策は、回教諸国を赤化するに在つたが、後には単に政治的に彼と相結んで、共同の敵英仏に当るの方針に改めた。この政策変更以来、両者の提携は、容易に進捗し、一九一八年、労農政府は、旧露内回教諸国の代表者をクレムリン宮城内の外交部に招いて、円満なる結合を成就したのみならず、此事が旧露内回教徒と、旧露外回教徒との提携を誘致するに至つた。

この提携は、一九一八年七月、聯合国の対土政策に憤激せる回教諸国代表者が、モスクワで労農政府代表者と会合した時から、具体的のものとなつた。翌八月には、トルコ・土耳古・波斯・高架索・土耳機斯坦の国民主義者が、エンゼルムに会議を開き、労農露西亜と相結んで『回教解放同盟』を組織すべしと決議した。而して同月下旬、該同盟は、労農

政府外交部東方局回教課の斡旋によつて、実際に設立せられ、中央実行委員をモスクワに置き、シヴスに一名の東洋委員、伯林に一名の欧羅巴委員を駐在せしめ、露人にして回教を奉ずる一名が、該同盟代表者として、労農政府に入ることとなつた。次で一九一九年九月には、シヴスに於て第二回回教・赤露聯合会議開かれ土耳古・アゼルバイジャン・及びアラビアの間に、同盟を実現すべく努力すべしと決議し、両者の結合は次第に堅くなつた。

斯くの如き回教との結合は、一九二一年、労農露西亜と土耳古・波斯・亜富汗斯坦三国との間に、夫々条約の締結を見るに及んで、遂に重大なる世界政策的意義を有するに至つた。此等の三条約は、特殊の点に於て相違はあるけれど、根本に横たはる共通の原則を有して居る。そは、叙上三国が従来強力を以て調印せしめられたる一切の条約の廃棄を声明した。そは東方諸国民の独立運動を承認しその権利を確認した。即ち露土条約に於ては、第四条に於て『両締盟国は、東洋諸国民の国民的自由獲得の為の運動と、露国労働階級の新社会制度建設の為の運動とは、多大の接触点あるを認め、此等諸国民の独立自由の権利、並に其の欲する所に従つて政体を定むるの権利を確認す』と明記し、露亜条約に於ては、第七条に『両締盟国は、独立の原則に基き、且両国民の一般意志に従ひ、東方諸国の独立を承認す』と定め、更に第八条に於て『本条約第七条の確証として、両締盟国は、ブハラ及びヒヴ両国民の独立を承認し、其の政体は全然国民の意思に任ず』と声明して居る。而して労農露西亜は、ツァー政府が叙上三国より奪へるものを、何の惜気もなく還附した。

不幸にして予は未だ其の内容を詳かにせぬけれど、此年四月二十五日、亜富汗斯坦と土耳古アンゴラ政府との間にも、モスクワに於て条約締結せられ、その前文に於て、東洋全体の将来の福祉が条約の重大なる目的なることを叙し第五条に於ては、土耳古政府は五個年間陸軍将校を亜富汗斯坦に貸すことを定めたとの事である。而して又土波両国間にも、亦同様の条約が結ばれたと伝へられた（註三）。

総て是等の形勢は、団結せる回教勢力の出現が、日に迫りつゝあることを物語る。労農露西亜の指導の下に、西は埃及より、東は印度に至る回教徒が、相結んで欧羅巴に当らんとする機運が、漸く動いて来た。復興亜細亜の前衛たるべき回教聯盟が、その怖るべき姿を現すべきことは、最早万一の僥倖に非ず、寧ろ理由ある期待となつた。

（註一） Sir Michael O'Dwyer: The Mohammedans of India and India's Mohammedan Neighbours (Journal of Central Asian Society, Volume VIII, Part 4).

（註二） 一九一七年十二月発行 Round Table 第二十九号所載論文 Turkey, Russia and Islam.

（註三） Sir Michael O'Dwyer 同上。

第十二　メソポタミア問題の意義

一　メソポタミア

メソポタミア問題は、戦後の英国中東政策に於て、極めて重大なる地位を占めて居る。その何故に然るかを闡明するのが、本篇の目的である。

メソポタミアは、アナトリア高原より波斯湾頭に向つて、南々東に走れる一帯の狭長なる低地であつて、チグリス・オイフラテス両河の流域である。そは第一に中欧並に南欧より南亜細亜に至る最短距離の陸路なる点に於て、商業的並に政治的意義を有して居る。第二にはメソポタミア自身が、其の埋蔵する豊富なる鉱物によつて、偉大なる経済的価値を有する。鉱産の首位に在るは、言ふ迄もなく石油であつて、波斯国境の山麓随処に豊富なる油田を有し、またチグリス低地内にも、バグダードの東北にも、並にオイフラテス中流低地にも之を産する。そは所謂『波斯・メソポタミア油田地域』の西半を形成するもので、世界戦前既に英独露三国の争奪点であつた。

メソポタミアの南部及び中部に住する民族は主としてアラビア人、東北部に住するはクルド人である。アラビア人は、沿河地方及び都会に居住するものを除けば、概ね遊牧を事とし、各部落の酋長によつて統御されて居る。世界戦前に於ては土耳古占領であつたけれど、土耳古官吏は名目のみの支配者に過ぎなかつた。クルド人はアラビア人よりも慓悍な民族で、土耳古政府はメソポタミア地方を制御する為に、常にクルド軍隊を利用して居た。両者ともに回教徒であるが、前者はスンニ派に、後者はシア派に属する。人口は総てを合せて戦前約百五十万と算定されて居た。

二　英国のメソポタミア占領

一九一四年八月、英国の対独宣戦により世界戦が本舞台に入るや、十一月五日英土両国の国交断絶となつた。当初英国の中東政策は、第一には波斯湾頭の油田を確守し、第二には独土同盟軍が、双河地方を南下して、埃及印度間の海路に側面進出を行ふの危険を阻止するに存し、此の目的の為に一隊の軍をバスラに派したが、要するに消極的態度を執つて居た。然るにバスラは早く既に優勢なる土耳古軍の為に脅威する所となり、英国は援軍を続派せねばならなかつた。而して英国の態度は、此時より一変して攻勢に出で、其の増援軍を以てバスラ県全部を占領するに決し、七月末にはチグリス・オイフラテス両河に沿ひ、バスラを距る百哩の地帯に進出した。攻勢は更に続けられ、此年の秋には、チグリス河を遡りてクテラマラに達し、次に一挙バグダードを陥れんとしたが、此の計画は見事に失敗して、所謂タウンシェンド軍の降服に終つた。

其後メソポタミアに於ける英軍は、暫く鳴を鎮めて居たが、翌一九一六年十二月に至り、モード将軍の下に再び攻撃を開始し、一九一七年三月十一日、遂にバグダードを占領して居た。而してオイフラテス河畔では、アルグ・ケマルまで進出した。且一方土軍が東アナトリアより波斯を脅威せるに対抗するため、マーシャル将軍は、一九一八年には、マーシャル将軍の下に屢々土耳古軍を破り、休戦当時までにチグリス河畔の土軍主力を捕虜とし、モスルを中旬には、裏海沿岸の両港レシト及びエンゼリを経て通路に軍隊を派し、六月八万方哩の地を占領したのである。

かくて英国は、休戦以前に於て、既にモスル県・バグダード県・バスラ県を合せたる所謂メソポタミア全部、約十

三　メソポタミア統治の困難

英国は、軍隊を以てメソポタミアを占領したが、其の統治は決して容易なるものでなかつた。土耳古国民主義者の排英宣伝、アラビア人の大亜刺比亜主義運動、全般に漲る宗教的反感、乃至戦争の為に生じたる経済的変動が原因となつて、メソポタミアの形勢は紛糾せざるを得ない。且英国は、財政的事情より、到底大軍を永くメソポタミアに駐屯させることが出来ぬ。そは一九一八年十一月より一九二〇年六月に至る間に、メソポタミア駐屯軍を二十二万より約九万に減じ、アラビア人の地方的反乱に対しても、軍事的乃至政治的理由から、従前の如く峻厳なる政策を取り難くなつた。殊にオイフラテス河畔の頑強なるアラビア酋長ディレッゾルが、公然英国の統治を拒否し、而も英軍は之を鎮圧することなくして、次第に該地方より撤退したるに加へて、トランス・カスピア及び高架索方面の英軍も亦撤退したるを以て、アラビア人は英軍を以て恐るゝに足らずとなし、漸く之を軽んずるに至つた。而して是くの如き思想は、一九二〇年夏、英国守備隊が赤露軍の攻撃によりてエンゼリ及びレシトを退いてから、一層強くなつて来た。

かくてアラビア人は、言ふに足らざる軍隊を以て後援とせる、新来の征服者によつて支配されて居ると考へ初めた。彼等は自ら能く此の羈絆を脱し得べきを信じ、唯だ機会の到来を待つ。一九二〇年七月にはオイフラテス河畔の一都会ルメイタに叛乱が起つた。而して之を放置したが為に、七月末には各地の暴動が一斉に起つたのである。

此等の暴動は幸にして大事に至らなかつたが、今後英国が国際聯盟によって委任せられたる此地全体を立派に統治して行くことは、如何なる点から考へても非常なる難事である。第一にメソポタミアは、十八万方哩に亙る地域であつて、朝鮮を除ける日本の面積よりも大きい。次には交通機関が両河沿岸の外は殆どない。最後にアラビア人は日に排英的精神を強めて来る。而も有効なる統治に最も必要なる大軍は、英国戦後財政の到底其の経費を負担し得る所で

ない。故に英国内に於て、如何にしてメソポタミア統治の実を挙げて、最大なる利益を此より収む可きかが、政治家の頭を悩ます問題とならざるを得ぬ。

之に対して、或はバスラ県だけを確実に英国のものとせよと唱へる者がある。或は土耳古政府の故智に倣ひ、クルド人を懐柔してアラビア人に当らしめよと唱へる者もある。而して多数の新聞は、英国政府はメソポタミア問題の解決を誤り、従つて解決し難きものとしたと嘆いて居る。そんなに厄介ならば、戦時の占領は別問題として、戦後に躍起となつて委任統治を引受け、仏蘭西と激しく反目嫉視するにも及ばぬ筈であるが、英吉利は如何に厄介でも之を自国の勢力範囲に置かねばならぬ理由がある。

四　英国は何故にメソポタミアに執着するか

英国は先づメソポタミアの石油を必要とする。列国は世界戦の経験によつて重油・揮発油・機械油として石油の必要を痛感した。英国の例に見るも、一九一三年の消費額は約四億八千八百万ガロンであつたが、一九一九年には実に六億七千万ガロンに達した。故に各国は、今や孜々として、或は石油脈の探査に苦心し、油田の争奪に熱中しつゝある。然るにメソポタミアには、既に述べたる如く、極めて豊富なる油田がある。

メソポタミア油田は、一九〇五年『独逸銀行』によつて派遣せられたる探検隊の報告が、其の価値を力説するに拘らず、未だ列国に大なる刺戟を与へなかつたが、英国の波斯に於ける石油会社が偉大なる成功を収むるに及んで、初めて世界の注意を喚起し、メソポタミア油田が、其の広さに於て、其の産額に於て、並に其の品質に於て、他国より出だす石油の最優等品と角逐し得るを知るに至つた。蓋し波斯メソポタミアの境上に在る石油地帯は、延長実に二千吉米に及び、地球上他に比類を見ざるもの。そのうち千七百吉米は波斯に、三百吉米はメソポタミアに属する。英国

は如何にしても之を自己の掌裡に収めねばならぬ。而も石油を熱望するは独り英国のみでない。かくてサン・レモ会議に於て締結せられたる有名なる英仏石油協定に於て、英国は仏蘭西にもメソポタミアの石油を分配することを約した。即ち英国が政府事業としてメソポタミア油田を開発する時には、原油産額の二割五分を、時価を以て仏国に譲渡すること、若し英国私立会社が開発する時は、英国政府は該会社百分二十五の持分を、仏国の支配下に置くことを定めたのである。

次にメソポタミアは、世界に於ける最も有望なる棉花生産地たる可き条件を具備して居る。近年世界に於ける棉花の欠亡は甚しく、而も需要は益々増進するを以て、供給之に伴はぬ。故に英国の如きは殊に棉花の不足を感じ、其の大規模なる紡績業は、戦前既に短縮するの止むなきに至つた。然るにメソポタミアは、現在に於て、潅漑宜しきを得ざるが為に、荒廃に帰して居るけれども、適当なる工事を施せば、豊富なる農産を獲得し得べきことは、ウィルコックスの実地踏査によりて明白に証明されて居る。彼の発表によれば、双河の低地は約二千万ポンドの経費を投じて百四十万ヘクタールの耕地を得べく、之よりして毎年百五十万噸の穀類と、百万包の棉花とを得べしとのことである。故に英国は、自国紡績会社のために豊富なる棉花原料を供給すべく、世界戦開始以来、意をメソポタミアの永久領有に注いで来たのだ。

最後にメソポタミアは、軍事的に印度保全のために必要である。若し此地が他国の領有に帰する時は、明白に印度の脅威となる。加ふるに赤露の南下に対して、英国が之を阻止せんとせば必ずメソポタミアを根拠とせねばならぬ。此等の諸理由が、英国をしてメソポタミアに執着せしむる所以であり、且メソポタミア問題が重大なる意義を有する所以である。

第十三　バグダード鉄道政策の発展

シェーファーの著「バグダード鉄道政策の発展 Schäfer: Entwicklung der Bagdadbahnpolitik」は、前章に於てバグダード政策の発展に関する年表を掲げ、後章に於て之が解説及び評論を試みたるもの。叙述極めて簡潔明瞭にして、能く独逸東漸政策の史的発展並に其の重大なる意義を闡明せる点に於て、革命欧羅巴と復興亜細亜との前駆をなせる世界戦の重要原因たりし該問題に関する好著の一たるを失はぬ。其の大意を訳して之を紹介する所以である。後章史論の部に於て之を数節に分ちたるは、バグダード政策の推移を政治的に区劃して数期に分ち、各期を以て一節とせるものにして、予が仮に設けたるものである。

一　年　表

一　英国陸上通路計画の前駆

一六〇〇年　東印度会社創立せらる。先是一五八一年、英国は土耳古近東商会を設立せしが、今や東印度会社の創立せらるゝに及び、当時覇を海上に称せし葡萄牙と競争せんが為に、アレッポ・波斯湾を経由して印度に達する通商路を開かんとせり。之を英国に於ける陸上通路計画の前駆となす。

一六一二年　東印度会社は波斯王アッバスの許可を得て波斯湾沿岸ゴムブルン（一六二二年以来ベンデラバスと改称す）に一支店を設置す。

一六二二年　葡領ホルムス島を占領して之を破壊す。該島は、一五一五年葡萄牙人アルブクェルケの占領する所に

して、爾来葡萄牙人は之を印度に於ける貿易の根拠地となせるものなり。而して今や該島の対岸に位するベンデラバスは、波斯湾に於ける英国貿易の根拠地となれり。

一七五九年　ベンデラバスに於ける東印度会社支店は仏国人の為に破壊せられたるを以て、会社は更に其支店をプシールに移し、爾来此地を以て波斯湾に於ける英国貿易の中心点となせり。

一七八二年　英人ジョン・サリヴァン、小亜細亜・メソポタミアを経由し、チグリス河を渡りて印度に到る旅行をなし、英国に於ける陸上通路思想を復興せしめたり。

一七九八年　英人はオマーン王より再びベンデラバスに一支店を設置するの権利を得たり。

一八二〇年　英国はクワイトを占領せんとせしも、土人の反抗に遭ひて失敗せり。

一八二六年―二八年　露国波斯と戦つて之を破るに及び、英国は漸く印度に対する露の威圧を感ず。

一八二八年―二九年　露土戦争。普魯西ミュッフリング将軍、調停の労を取る。

二　英国バグダード鉄道政策

一八二九年　印度監督庁はピーコックをして英国政府にシリヤ・メソポタミア陸路を開拓し、ならしむるの計画を建議せしめたり。是れ即ち露国の印度政策に備ふるものにして、実に英国に於けるバグダード鉄道政策の濫觴となす。

一八三〇―三二年（一七八九―一八七二年）は、恰も埃及に於ては蘇士運河開鑿問題の喧しかりし時に当り、パレスティナに旅行し、ダマスクスよりパルミラの砂漠を越えてオイフラート河畔アナーに到り、更に河を下りてバスラよりブシールに達し、波斯君府を経て倫敦に帰り、英国政府に向つて、シリア、メソポタミアを経由し、汽船によりてオイフラート河を下り、以て印度に達する陸路を開拓すべきことを建議せ

り。

一八三一―三二年　ヘンリー・ブロッス・リンチ（一八〇七―七三年）、印度政府の嘱託を受けて波斯湾に到る通商路を踏査す。

一八三四年　君府駐剳英国公使は、土耳古皇帝マームード二世より、二隻の汽船を以てオイフラート河を航行するの許可を得たり。有名なる英国東方政策の大家デキッド・アークハート（一八〇五―七七年）は、露国の南下に対して土耳古保全論を唱道す。而して露国はバスラに於て一軍港を建設するの計画を策す。

一八三五―三七年　チェスニー大佐は更に其の計画を実査せんが為に、英国並に印度政府より経済上の補助を得てリンチ大尉、エーンスワース及び其他の同行者と共に探検の途に上り、オロンテス河口スェディーよりアレッポを経てオイフラート河畔ビレヂック（ヰリアム港）に達し、汽船二隻に搭乗してオイフラート河を下りバスラに到着し、帰路はゾバイルより砂漠を横ぎり、パルミラを経てバイルート港に出でて英国に帰り、英国政府に向つて、バリスよりオイフラート河を下りて波斯湾に至る汽船航路を開き、更にバリスよりアレッポを経由してスェディーに至る鉄道線路を敷設すべきことを建議せり。独逸の経済学者フリードリッヒ・リストは深く此の探検に留意し、英国はシリア及びバスラを領有するの野心あるを警告せり。

一八三五―三九年　モルトケ、土耳古陸軍の教官となる。

一八三八年　印度の秘鑰たる亜富汗斯坦のヘラート占領に関して英露の衝突あり。此年モルトケはビレヂックに於てチェスニー探検の跡を発見せり。

一八三八―四二年　亜富汗戦争中、英国は波斯湾の北部なるチャラック島を占領して波斯を威嚇せり。

一八三八―三九年　ヘンリー・ブロッス・リンチ、更にチグリス河の上流地方を探検す。而してモルトケも亦同地

方を踏査せり。

一八三九年　アデン英領となる。

一八四〇―四一年　英国領事館保護の目的を以てバグダード附近に英国砲艦を常置す。リンチはバグダード及び波斯湾間の定期航路を開始せり。

一八四四―五五年　英国東方学者にして且政治家たりしローリンソン（一八一〇―九五年）は、一八四四年より一八四九年まで英国領事として、一八五一年より一八五五年まで総領事としてバグダードに駐在せり。彼は露国に対する印度防禦の基本としてアレキサンドレット、コルナ、ヘラート、カンダハル線を劃し、少くもアレキサンドレット・エル・アラップ河畔）間は鉄道によりて連結するの要あるを力説せり。而して英国保守党は此のコルナ（シャット・エル・アラップ河畔）計画を以て其の東方政策の党是となせり。

一八四七年　エルゼルムに於ける土耳古・波斯条約に於て、波斯は英国の援助により、シャット・エル・アラップ河の東岸、特にモハムメラー市を土耳古より割取したり。

一八五〇年　チェスニー、クワイトを終点とするオイフラート流域鉄道を計画す。

一八五三―五六年　クリミア戦争。英国、土耳古を援く。

一八五四年　紅海のカマラン諸島及び亜剌比亜海のクリア・ムリア諸島英領に帰す。

一八五七年　蘇士運河開鑿が仏国監督の下に行はるゝに及び、英国は之と対抗するの必要より、先にチェスニーによりて建議せられ、今また英印鉄道計画者アンドルーにより提議せられたる鉄道案を復旧し、アレキサンドレット又はスェディーより、バリス、アナー、ヒットを経由してバグダード、バスラに至る鉄道の敷設を企図するに至れり。於是英国政府は再びチェスニーを派遣してサージョン・マックネールと共に該鉄道の適当なる起点を踏査せ

しめたり。チェスニー即ち土耳古政府より鉄道敷設権を獲得し、茲に『オイフラート流域鉄道会社』を創立せり。然るに一方に於て英国技師ロバート・スティヴンソン（一八〇三―五九年）は、君府（スクタリ）イズミッド、セヴリヒッサル、アクセライ、オイフラート流域、バグダード、バスラ、波斯、バルチスタン、カルカッタを連結せる一大鉄道線路計画を発表し、ナポレオン三世、英国政治家及びニネヴ探検家レーヤード等の推奨を受けたり。されど此等のバグダード鉄道計画は、英仏両国の反目嫉視を招きて遂に実現を見るに至らざりき。

之と時を同じうして（一八五六―五七年）英国は波斯と戦端を開き、一時ブシール、モハムメラー、及びチャラック島を占領せり。

一八五七年　アデン附近のペリム島英領となる。

一八五七―五八年　印度に於て大叛乱あり。

一八五八年　東印度会社廃止せられ、英国は中東に於ける最も重要なる政治的並に商業的機関を失ふに至れり。

一八六〇年　リンチ会社は、更に『オイフラート流域汽船会社』を創立す。

一八六一年　バーライン諸島英国保護の下に置かる。

一八六二年　チェスニー再び君府に於て其の計画せる鉄道敷設権を獲得せしも、英国政府は其の鉄道線に向つて担保を与ふることを拒絶せり。

一八六三年　独逸地理学者ハイリッヒ・ベルグハウス、土耳古政府に向つて君府を以てバグダード鉄道の起点とするの必要を説く。

『英仏オットマン銀行』創立せらる。

倫敦印度省内に『印度欧羅巴電信局』設置せられ、波斯政府と条約を結び、爾後十箇年以内にカシャン、イェズド

キルマン、バームを経由して印度とテーランとを結び、更にイスファハン、シラーズを経てテーラン・印度と聯絡する電信線を架設することとなれり。

一八六八年　英国鉄道技師ラタムは、アレキサンドレットよりアレッポ、ビレヂック、ニシビン、モッスル、バグダードを経てバスラに至るチグリス流域鉄道を計画す。

一八六九年　蘇士運河開通。

一八七〇年　英国の印度欧羅巴電信会社は、波斯よりタブリス、ジェルファ（オデッサ、伯林、エムデン）を経由してテーランと倫敦とを聯絡する電線の架設権を得たり。

一八七一年　土耳古皇帝アブドゥル・アジズ、勅令を以てハイダル・パシャを起点とし亜細亜土耳古に鉄道を敷設すべきを命ず。

一八七二年　墺国鉄道技師ヰルヘルム・ブレッセル（一八二四―一九〇二年）土耳古の鉄道顧問となる。彼はハイダル・パシャより、イズミッド、アンゴラ、シヴス、ディアルバクル、モッスル、バグダードを経てバスラに至る鉄道、並に地中海及び黒海に達する支線を敷設すべきことを勧奨せり。

男爵ユリウス・ド・ロイテルは、波斯政府より裏海より波斯湾に至る鉄道の敷設権を得たりしも、一八七四年に至り政治上の理由より之を抛棄せり。

一八七三年　ハイダル・パシャよりイズミッドまで鉄道開通す。此年バイルート駐在墺匈国総領事ユリウス・ツヰ

ーディネック・フォン・ズューデンホルストは土耳古政府に向つてアレキサンドレット、ビレヂック、ハラン、ラセライン、ニシビン、モッスル、バグダード、バスラ線の敷設を勧告せり。現バグダード鉄道の中部は大体に於て此の計画と同一なりとす。

一八七五年　蘇士運河、英国の手に帰す。

土耳古皇帝アブドゥル・アジズは土国政府の手を以て君府・バグダード鉄道を敷設せんとせしも、国庫窮乏の為に失敗に終れり。

一八七五―七六年　露国、土耳機斯坦のフェルガナスを占領す。

一八七六年　ビスマルク、埃及占領をヂスレーリに勧む。

モハムメラー、英国援助の下に波斯の手を離る。

亜剌比亜海のソコトラ島英領となる。

ギクトリア女王、印度女皇となる。

一八七七年　セシル・ローヅは、パレスティナ、オイフラート流域、サイプラス島、及びクリート島を英領とすべきことを主張す。

一八七七―七八年　露土戦争。

一八七八年　ビスマルクは伯林会議に於て英国と共に露国南下政策の防止を策す。

サイプラス島英領となる。

匈牙利軍人クラプカ、英仏資本団の後援の下にハイダル・パシャ、イズミッド線をバグダードまで完成せしむべき計画を立つ。

一八七八―七九年　阿弗利加探検家カメロン（一八四四―一九四年）、ヂスレーリの嘱託により適当なる鉄道敷設地実査のためシリア及びメソポタミアに旅行す。

一八八〇年　英国の最も偉大なる東方政治家ヂスレーリ職を辞し、翌年世を逝る。彼の後継者グラッドストンは帝国主義を排し、殊に東方政策に於て消極主義を採れり。カメロンは其の実地踏査に基づきて、トリポリ、ホムス、アレッポ、ウルファ、ニシビン、モッスル、チグリス河右岸、サマラ、バグダード、ハワイツェ、ベンデル・ディレネ、ブシール、カラチ線を以て最も適当なる鉄道線路となし、英国は将来の発展のため、必ず之が敷設に着手すべきを力説せしも、グラッドストンは之を採用せず、遂に英国の為に絶好の機会を逸し去れり。

此年土耳古政府は、ハイダル・パシャ、イズミッド鉄道を一英国会社に貸与し、且土耳古工部大臣ハッサン・フェーミ・パシャは該会社に向つて、該線路を延長し、アレッポを経由し、オイフラート河左岸を通過してバグダードに至る線路の敷設を図りたるも、会社は之に応ぜざりき。

一八八二年　伯林銀行家ブライヒレーデル、極力君府・オイフラート河流域・バグダード間の鉄道敷設権獲得に努む。

埃及英国の手に帰す。蓋しビスマルクは埃及を英国に興へて英国のバグダード鉄道計画を転向せしめんとせるものなり。而してセシル・ローズは翌年英国をして南阿弗利加に着目せしめたり。

一八八二―八三年　カザレットはトリポリ、ホムス、アレッポ、オイフラート流域、バグダード、バスラ線を計画し、鉄道沿線に露国より移住せる猶太人を住せしめんと画策せり。

一八八三―八五年　ヘラート問題より英露の国交危殆に瀕す。ビスマルクは露国と『再保証条約』を締結し、露国の阿富汗斯坦及び波斯に於ける自由行動を容認し、且印度問題より英露の開戦を見る場合には、露国に財政上の援助

を与ふべきを密約したり。然れども英国は既に埃及並にバグダード鉄道計画を起すことなかりき。

一八八三―九五年　フォン・デル・ゴルツ（一八四三―一九一六年）土耳古の陸軍顧問となる。

三　独逸のバグダード鉄道政策

一八八八年　キルヘルム二世即位。八月十二日、維納・君府間の鉄道始めて開通す。十月四日、独逸銀行（総裁ゲオルグ・フオン・シーメンス）を主導とせる一独逸財団は、土耳古政府に交渉してイズミッドに至る既設鉄道を買収せり。蓋し此の交渉は既に前年に於てウェルテンブルグ合同銀行の代表者フォン・カウラによつて開始せられたるものなり。而して当時に在りては、英独両国共に此鉄道が他日国際間の重大なる問題となるべき事を予想せざりしなり。

波斯皇帝、カルン河を万国に公開す。翌年リンチ会社、英国政府の援助を得て同河に航路を開く。

此年、メルバーンに到る亜拉比亜南岸英領となる。

一八八八―九一年　サー・ヘンリー・ドラムモンド・ウォルフ（一八三〇―一九〇八年）波斯駐剳公使として、大いに英国の勢力を張る。

一八八九年　三月二十三日、アナトリア鉄道株式会社創立せらる。独逸近東汽船会社また此年を以て創立せらる。

キルヘルム二世、第一回の君府訪問を試む。

チェスニー探検隊の一人なりし英国探検隊エーンスワース（一八〇七―九六年）貿易上に於けるカルン河の意義を力説す。

此年露西亜の一シンヂケートは、波斯政府と交渉し、裏海沿岸レシトよりテーランを経て亜剌比亜海岸チャハバー

ルに至る波斯縦断鉄道の敷設権獲得に努力せしが、露国政府は該鉄道が波斯に於ける英国の商業的発展を助長すべきを虞れて却つて之を阻止せり。

同じく此年ユリウス・ド・ロイテル男爵は、波斯政府より『波斯帝国銀行』創立の権利を得たり。

一八八九―九一年　仏国人コタールはサムスンを起点とし、シヴス、ディアルベクル、バグダードを経てバスラに至る鉄道を計画す。

一八九〇年　ビスマルク辞職す。独露再保証条約廃棄せらる。英独の間にサンジバール、ヘリゴランド交換協約成る。独土通商締結。此年、アナトリア鉄道会社、第一回の公債八千万法を独仏英及び其他の諸国に募集す。倫敦に於ける応募額百万磅。

一八九一年　カプスト伯、露国の援助を得て先のガザレット案トリポリ・バグダード・バスラ線を主張す。

一八九二年　イズミッド・アンゴラ線落成す。

露国、東北アナトリア鉄道会社は最初計画せるアンゴラ・シヴス・カルブート・ディアルベクル・モッスル線を変更して、新たにエスキシェヒル・コニア線の敷設権を獲得す。会社は此年第二回公債を募集す。

一八九三年　アナトリア鉄道会社、露国の援助を得て先のガザレット案トリポリ・バグダード・バスラ線を主張す。

一八九五年　英国首相ソールスベリ卿、密かに独逸皇帝に向つて土耳古を英独両国間に分割せんことを提議せしも成らず。

一八九七年　希土戦争。ティルピッツ海相となる。前外相マーシャル・フォン・ビーベルスタイン（一八四二―一九一二年）此年大使として君府に赴任し、一九一二年まで大いに外交的手腕を揮ふ。此年ブシールに初めて独逸領事館を設く。

一八九八年　ビスマルク死す。独逸第一海軍拡張案、議会を通過す。十月より十一月に亙りて独逸皇帝第二回の東方旅行を試み、ダマスクスに於て『土耳古皇帝陛下を教主とする全世界の回教徒は、永久に朕の友情に信頼せよ』との有名なる電報を土帝に発す。

英国、バスラに領事館を置く。ファショダの勢力権に関し、英仏の間に激烈なる紛議を醸し、将に国交の断絶を見んとするに至れり。

独逸の純然たる経済的発展の努力が、同時に独逸の海軍政策並にバグダード鉄道政策の動機となり、英国の嫉視する所となれり。

一八九九―一九〇二年　南部トランスヴール戦争。

一八九九―一九〇七年　波斯湾に於ける英露の激烈なる競争は、独逸をして勢力を波斯に扶植するの機会を与へたり。

一八九九―一九〇五年　カーゾン卿印度総督となる。カーゾンは所謂『カイロ・カルカッタ政策』の主唱者なり。

一八九九年　独逸パレスティナ銀行創立せらる。英国政府はクワイトの酋長と交渉し、英国の承認を得ずして他国と条約を締結せざることを約せしむ。

アナトリア鉄道会社、ハイダル・パシャ築港権を獲得す。独逸帝国銀行とオットマン銀行との間に、バグダード鉄道共同計画の契約成る。アナトリア鉄道会社、バグダード鉄道沿線の経済的並に学術的事情調査の為に視察員を派す。十二月二十三日、ツィーニ・パシャとゲオルグ・フォン・シーメンスとの間にコニア・バグダード・バスラ線の敷設に関する仮契約締結せらる。

一八九九―一九〇〇年　露国政府、波斯縦貫鉄道を画策し、裏海沿岸アルヤットよりレシトを経てテーランに至り

更にテーランより一はイスファハン・シラーズを経て波斯湾岸ブシールに達する両線を計画せしが、研究の結果後者を以て政治的並に学術的に至当なりと決せり。

一九〇一年　エドワード七世即位。此年濠洲企業家ダルシー、殆ど波斯全土に亙りて六箇年間の石油採取権を同国政府より獲得せり。而してモハムメラー港の東北なるアブワズ附近の石油田を以て就中有望となす。露国商船が初めて波斯湾に航せるも此年なりとす。

一九〇二年　ハイダル・パシャの築港竣工す。此年日英同盟締結せられ、英国は土耳古を以て印度の前哨となすの要なきに至れり。

一九〇三年　三月五日、土独両国間にバグダード鉄道契約調印せられ、独逸はコニアよりエレグリ、アダナ、オスマニエ、テル・ハベッシェ、ジェラブルス、ハラン、ニシビン、モッスル、サマダ、バグダード、ケルベラー、ゾバイルを経由してバスラに至る線路、並にゾバイルより分岐して波斯湾岸カディマに至る支線の敷設権を正式に獲得せり。於是バグダード鉄道会社の創立となり、財政上の割当は、独逸資本団（独逸帝国銀行）四〇パーセント、仏国資本団（オットマン銀行）三〇パーセント、墺匈国、瑞西、以太利、土耳古二〇パーセント、アナトリア鉄道会社一〇パーセントの割合に決し、二十七名より成る理事会組織せられ、グキンネル其の総裁となる。一九一四年末に於て、営業資本として払込まれたる株式資本六六〇、〇〇〇土耳古磅（土耳古磅は約一八、五馬克に当る）、建設資本として受けたる国庫補助七、〇五二、五四六土耳古磅、コニアよりの鉄道延長は一九一五年末に於て支線を併せて一一一〇吉米。而してアナトリア鉄道会社の場合には、土耳古政府は営業線路各一吉米に対して一定の収入額を保障するの制度なりしが、バグダード鉄道会社の場合には、保障金額を国債証書の形式を以て土耳古政府より提供することとなれ

り。此年英国にてはランスダウン卿が、議会に於て、英国は波斯湾に於て優越権を確保せざる可からずと声明するあり、また印度総督カーゾン卿が波斯湾に示威航行を試むるありき。而してカーゾン卿は波斯湾を呼ぶに『印度の海上境界』の名を以てしたり。

此年英国の阿弗利加政治家ハーリー・ジョンストンは国法上の目的より、独逸の政治家パウル・ロールバッハは経済上並に軍事上の目的より、北海と波斯湾とを連絡する鉄道を主張せり。

一九〇四年　コニア、ブルグルル間の鉄道落成す。英仏協商成る。

一九〇五年　三月キルヘルム二世、突如モロッコのタンジールに上陸し、モロッコの独立と主権とを保護すべき宣言を発し、為に独仏の衝突を来し、翌年アルジェスラス会議の開催を見るに至れり。

一九〇六年　独逸東方鉄道会社創立せらる。漢堡・亜米利加汽船会社、新に亜拉比亜・波斯航路を開始す。

アナトリア鉄道会社、メルシナ・アダナ鉄道の財政監督を引受くることとなる。

一九〇七年　コニア原野の潅漑工事に関して土耳古政府とアナトリア鉄道会社との間に契約成る。英露両帝レヴールに会見し、英露仏の間に所謂『三国協商』成る。

協約成り、波斯に於ける英露の勢力範囲を劃定し、英露仏の間に所謂『三国協商』成る。

一九〇八年　ブルグルルよりヘリフに到るバグダード鉄道の延長に関する附加協約成る。英露両帝レヴールに会見す。爾来露国は東亜及び波斯の進出を転じて君府南下を目標とするに至れり。青年土耳古党の革命起る。東方政治家エルンスト・イェック、来るべき独・墺・土聯合を説く。バグダードに独逸領事館を置く。

一九〇九年　英波石油会社創立せらる。トリポリ、ホムス、バグダード、バスラ間の鉄道敷設権獲得に関して、英仏両国の間に倫敦調書成る。

一九一〇年　アナトリア鉄道会社、メルシナ・アダナ鉄道会社の営業を引受く。

英国エドワード七世崩御。

キダーレン・ウェヒター外相となり、一九一二年まで在職す。

独露両帝ポッツダムに会見し、波斯及びバグダード鉄道問題に関して露独の間に協約成る。

覚書の実行を断念す。

此年英国のキルコックは、バグダードよりエルガジム、パルミラ、ホムスを経てトリポリに至る鉄道、又はダマスクス、バイルート間の鉄道敷設権を主張せしも失敗に終れり。

一九一一年　ヘリフ・バグダード間の線路延長、並にトブラッカレ・アレキサンドレッタの築港を委托せらる。バグダード鉄道会社、バグダード・バスラ・波斯湾線の敷設権、バスラの築港権、及び波斯湾岸に築くべき一港の築港権を拋棄す。バグダード・バスラ間の鉄道落成す。露独の間に協約成り、露国は独逸のバグダード・ハニキン線の出資をなして国際経営となす。此年ブルグルル・ウルキドン・ハニキン線を敷設する場合に異議を唱へざることに合意す。維納駐剳英国大使サー・カートライト『土耳古問題は英独衝突の中心点たる可し』と声明す。

一九一一―一二年　トリポリ戦争。

一九一二年　倫敦に本店を有する『東方銀行』バグダードに支店を設く。

バグダード鉄道建設材料の輸送請負を目的とする『東方河上運輸協会』の創立、並に英・独・土共同の一大汽船会社創立準備に関して、独逸帝国銀行及びリンチ会社との協約成る。

ドラーク・イェニジェ線、アダナ・マムレ線、ラージェ・アレッポ・ジェラブルス線、線落成す。

一九一二―一三年　巴爾幹戦争。

一九一二―一五年　男爵フォン・ワンゲンハイム君府駐剳独逸大使に任ぜらる。

一九一三年　英国（波斯帝国銀行）は、波斯政府よりモハムメラー・コレマバード間、ス・キルマン間、ベンデラバス・シラーズ間の鉄道敷設権を得て、モハムメラー・ディズフル間（南波斯の石油田を通過す）より工事に着手することとなる。同時に露国『手形割引銀行』もまた西北波斯に於ける鉄道敷設権を得たり。

コニア原野の灌漑工事、並にトブラッカレ・アレキサンドレット間の鉄道落成す。独逸はニアに対する請求を拒絶す。リマン・フォン・ザンデルス、土耳古軍事顧問として君府に赴任す。

一九一三―一四年　フィッシャー卿の主唱により英国は南波斯石油田視察調査のため委員を派遣す。

一九一四年　二月十五日、亜細亜土耳古に於ける鉄道に関して独仏間に協約成る。英国政府、英波石油会社の財政を監督す。

独逸帝国銀行、バグダードに支店を置く。

六月十五日、メソポタミア及びバグダード鉄道に関して英独の間に協約成り、英国はバグダードに対する持分参加を抛棄し、関税政策監督のため該線の理事会に二名の代表者を派遣することとなり、シャット・エル・アラップ河を広深することを条件として、将来バスラを以てバグダード鉄道の終点たらしむることとし、バスラ南方の航行を自由とし、バスラ築港に就ては其の持分参加を独逸六〇パーセント、英国四〇パーセントと定め、バスラ・ク

ワイト間の線路は英国の承認を得たる場合に国際線として敷設することゝなり、チグリス河航行に関する持分参加は英国五〇パーセント、独逸和蘭各二五パーセントと定めたり。

此年八月一日世界戦の勃発あり、十月二十八日土耳古も亦独逸側として参戦せしが、十月二十一日、バスラは英国の為に占領せられたり。此年バグダード・サマラ間の鉄道落成す。

二　バグダード政策発達史論

一　英国のバグダード鉄道政策史

バグダード鉄道政策の発展は、之を政治的に前後両期に劃するを得る。第一期は即ち英国が印度保全の必要より之を企図せる時代にして、一八三〇年より一八八〇年に至る五十年間、第二期は即ち独逸が其の東漸政策の手設として之が遂行に拮据せる時代である。

英国のバグダード鉄道政策は第十九世紀前半に至りて、鋒鋩漸く鋭きを加へ来れる、露西亜の印度南下政策に備へんがため、印度保全を目的として唱道せられたるものにして、蘇士運河政策と最も密接なる関係を有して居る。蓋し印度保全は、一八三〇年以来、英国対外政策の根本方針にして、之が為に先づ印度に到る海路又は陸路、能ふべくんば海陸両路の支配権を英国の掌中に収めなければならぬ。而して最も明瞭に其の必要を認めて、盛んに之を力説せる者は、陸軍大佐フランシス・チェスニー其人である。彼は曾にシリア・メソポタミアを経て印度に通ずる陸路開拓の必要を高調せるのみに非ず、其の有名なるオイフラート流域探検に先だち、一八三〇年十月二十日、既に一書を時の君府駐剳英国公使サー・ロバート・ゴルドンに与へて、蘇士運河開鑿の急務なるを説いて居る。これレセップスが、

彼を以て『蘇士運河の父』と呼びたる所以であつて、実に英国に於けるバグダード鉄道政策並に蘇士運河政策の父と称することが出来る。而して独逸の偉大なる経済学者にして、兼て独逸世界帝国並にバグダード鉄道政策の父フリードリッヒ・リストも、また一八三五年に於て、『英国はナイル河畔、ナイフラート河畔、並に波斯湾岸の地を、挙げて其の領土とするに至る可し』と論じ、小亜縦断通路の重大なる意義に就て、独逸国民に警告した。

英国のバグダード鉄道政策並に蘇士運河政策は、露国の南下に対する印度防備の必要より来れるものなるが故に、第十九世紀に於ける露国の中央亜細亜経略史を劃する三大時期、即ち一八三八年のヘラート事件、一八六七年の土耳機斯坦略取、一八八四―八五年の亜富汗問題と、其の歩調を一にして来た。而して中亜に於ける此等の事件が、其の都度露土戦争（一八二八―二九年・一八五三―五六年・一八七七―七八年）の後に発生したることは、露国の対印政策が、常に君府進出頓挫の結果として勃興し来りしことを知り得る。されば英国は、蘇士を経由して印度に達する海路、又はバグダードを経由する陸路の支配権を握るか、然らずんば側面より露国を脅威する強国と同盟を結ばざる限り、印度防備の必要より土耳古保全を唱へざるを得なかつたのだ。是れ実にヂスレーリ当時に於ける英国政策の根本方針であつた。

当時英国に於ては、一方にチェスニーの如く、蘇士問題並にバグダード問題を以て英国百年の大計となし、其の解決の急務なるを力説するものありしに拘はらず、一般政界は斯くの如き積極的改策の遂行に拮据することなく、単に消極的に土耳古保全を以て外交の信条として居た。而して此の方針は、ヂスレーリの達見は、海陸両路の支配権が、印度保全の為に欠く可からざる要件なるを知悉して居たけれども、而も尚バグダード及び蘇士問題を同位に置くことをせず、蘇士運河問題を以て当面の重大問題となし、バグダード鉄道政策は、該問題解決の後に徐ろに着手すべきものと考へた。グラッドストンに至りては、所謂『小英国主

義者』として、ヂスレーリの帝国主義に反対し、就中東方政策に於て飽迄も消極主義を取りしを以て、国が既に蘇士運河の開鑿を竣へたる後に於てすら、尚且オイフラート鉄道に対して利息保障を与ふることされど時の印度事務大臣サー・スタッフォード・ノースコートを委員長とせる一委員会は、アンドルー・ローリンソン及び其他の識者の賛成を得てチェスニー案を可決し、一八七二年七月二十七日の議会に於て、印度陸路連結が、蘇士運河と相並んで極めて重大なる価値を有する故に、英国政府は、万難を排して其の実現に努むべきことを主張した。

既にして一八七四年、ヂスレーリが『外交を主とし内治を従とする』の方針を以て首相となり、巧妙なる政策を以て、蘇士運河及び埃及を、英国の掌裡に収め、ギクトリア女王は印度女帝となり、露国の君府南下、一頓挫を来たせるに及び、今や彼の下に蔵相たるノースコート年来の主張を採用し、印度事務大臣ソールスベリ卿の賛成を得て、一八七八年冬、有名なる阿弗利加探検家カメロンをメソポタミアに派遣し、適当なる鉄道線路の踏査に従はしめた。カメロンは其の実地踏査に基きて、一八八〇年、十個の線路を設計し、就中トリポリ、ホムス、アレッポ、ウルファ、ニシビン、モッスル、チグリス河右岸、サマラ、バグダード、ハワイツェ、ブンデルディレネ、ブシールより更にカラチに至る線路を敷設すべしと主張した。彼は『世界の如何なる地域に於ても、印度と地中海とを連結する鉄道に優りて、政治的並に商業的に重大なる効果を有する鉄道なし』と力説し、且ヂスレーリ内閣に対して非常なる希望を抱き、探検旅行の結果を発表せる著作『将来の大道』を結ぶに、下の言を以てした。曰く『ビーコンスフィールド卿並にソールスベリ卿は、能く英国将来の大道たる印度・地中海鉄道の急設に努力すべし』と。而して彼の著書の表紙には一個の鉄道列車を描き、機関車には『印度皇帝』と記し、其の車輛には『ブシール』と書いて居る。

ヂスレーリは、バグダード鉄道案の実行に関して、熟実に考慮し且熱心に画策したが、一八八〇年首相の職を退き、

翌年世を逝るに及んで、英国の将来並にバグダード鉄道の将来は、再びグラッドストンによつて決せらるべき運命となつた。

然るにグラッドストンは、重大なる対外政策に対して極めて無能なる、英国自由主義の絶好なる代表者であつた。彼はオスカー・シュミッツ（註一）が言へる如く、ヂスレーリの計画せる一切を破毀するの意図を以て首相の任に就いた。当時露国の印度政策は、殆んど英露両国をして干戈を交へしめんとせるに至りしに拘はらず、土耳古工部大臣ハッサン・フェーミ・パシャが、ハイダル・パシャ・イズミッド鉄道を延長し、オイフラート左岸を経由してバグダードに到る鉄道を計画せしに拘はらず、彼の外交は全然消極的に出で、其の『勝れたる無能無策』は、近東に於ける英国の勢力を失墜せしめた。当時英国は、偏へに蘇士運河の改修に腐心し、且該運河を過重して、印度防備の十分なる墻壁なりと信じて居た。露都駐劄英国公使サー・ロバート・モリアが、君府駐劄英国公使サー・キリアム・ホワイトに与へたる書翰は、恰も当時のものにして、即ち一八八五年十二月二十七日の日附である。曰く『吾人は全スラブ主義をして其の力を欧羅巴に伸張せしむるを利益とすべきか、将又之を亜細亜に伸張せしむるを利益とすべきか。……希くば最も重大なる吾人終局の目的は印度に在ることを忘るゝ勿れ。偏へに欧羅巴の出来事に没頭するは、亜細亜に於ける活動の自由を失う所以なり』と（註二）。されど此の剴切なる警告も、畢竟無効であつた。蓋し当時の英国対東外交をして爾く微温的ならしめたる一因は、英国に於ける最も有為なる人才が、阿弗利加に於て——活動しつゝありしを以て、英人の視聴をして『ケープ・カイロ』政策に向はしめ、従つて『カイロ・印度』政策を閑却せしめたるに在る。

（註一） Oskar A. H. Schmitz: Die Kunst der Politik 第三六一頁。

（註二） H. Sutherland Edwards: Sir William White 第二三六頁。

二　独逸のバグダード鉄道計画

斯くの如くにして、英吉利はグラッドストン内閣の下に印度に達する陸路を掌握すべき最後の好機を逸し去つた。

バグダード鉄道問題の閑却は、英国の非常なる失策にして、ヘリゴランドの売却と共に、十九世紀に於ける英国外交の二大失敗である。英国の弱点、就中東方に於ける英国の弱点は、実に主として此の失敗に起因する。

英国がバグダード鉄道の意義を軽視せることは、独逸をして忠を成さしむる所以となつた。若し英国にして熱心なる競争者たりしならんには、一八八八年に於ける独逸の偉大なる獲得は不可能であつたらう。蓋し当時の独逸は、資本に於て豊かならず、艦隊は殆ど言ふに足らず、世界政策の無台に、漸く新参者として現はれた時であつた。然るにビスマルクの巧妙なる外交は、英国をして埃及を領せしめ、之によつて蘇士運河を過重して陸上通路を軽視せしむるに至り、独逸をして自由にバグダード鉄道政策に着手するを得せしめた。而してビスマルクは斯くの如く印度政策と埃及政策とを結ぶことによつて、同時にまた独逸の為に植民的発展の路を開拓した。

次に英国は、曾に印度政策に対するバグダード鉄道の意義を軽視せるのみならず、また独逸世界政策に対する価値をも軽視した。これ英国の敢てせる第二の失策である。当時英国は、独逸がバグダードを経由して波斯湾に出で、以て英国の死活に関する利益を脅すが如きは、到底不可能のことゝ考へた。而して此の島国的驕慢は、後にヘリゴランド問題の時に際しても、亦明かに英国を誤つて居る。されば一八九〇年頃に於て、英国は曾に独逸のバグダード鉄道政策を妨げざりしのみに非ず、実に経済上の援助すら与へた。即ち一八九〇年アナトリア鉄道会社が、第一回公債八千万法を募集するや、英国は百万磅を引受けて居る。一八九〇年独逸宰相カプリギが『独露再保証条約』の継続を廃して好意を英国に示せることは、今尚吾人の記憶に存する所である。されば英国は、近東に於ける独逸の発展を以て露国の印度政策を掣肘する所以なりとし（註一）、殊に一八八八年に敷設権を得たるイズミッド・アンゴラ線が、アブ

ドゥル・ハミッドの懇請によりて東北アナトリアに延長せられんとせしが如きも、また反露的性質を帯びたるものなりしを以て、英国は一層独逸の鉄道計画を承認するに傾いた。

英国がバグダード鉄道政策の意義を軽視せることは、独逸のために好都合なりしは言を俟たぬ。而も独逸の東漸政策をして、其の勢を得せしむる為には、斯くの如き消極的動因以外に、更に独逸自身に英国の弱点を利用して東方発展に旺向せしむべき、積極的動因あるを要する。而して斯くの如き積極的動因たりしものは、実にゲオルグ・フォン・シーメンス其人である。

シーメンスは、其の高邁なる識見を以て、東方の発展が新興独逸の為に、政治上並に経済上非常なる意義を有することを明瞭に観破した。フリードリッヒ大王が準備せる所のもの、フリードリッヒ・リスト、キルヘルム・ロッシェル、ハインリッヒ・フォン・ガーゲン、カール・ロードベルトゥス、フェルディナンド・ラッサル、パウル・ドゥ・ラガルデ、レオポルド・フォン・ランケの諸先覚が予期せる所のもの、而してビスマルクが独墺同盟により て無意識に其道を拓ける所のものをば、恰も東方政策が悲観の淵に瀕せんとせる時に当りて、吾がゲオルグ・フォン・シーメンスは、アナトリア鉄道の創設並にバグダート鉄道の準備によつて、其の実現を見るに至らしめた。是れ実に『アントワープ・バスラ』を連結する新世界通路の根柢となるもの、吾人は今日に至つて始めて其の重大なる全意義を明白に知り得たのである。而して独逸の植民政策、従つて独逸の新東方政策が、職業的政治家にによらずして『一門外漢』によつて其道を拓かれたることは、特に注意を要することである。加ふるにシーメンスが、其の危険なる事業より生ずる収益如何を問ふことなくして、新独逸の東方政策の為に資本を投ぜる一事は、彼と時を同じくせる英国のセシル・ローズと共に、カピタリスムスを初めて大規模の政治的目的のために運用するの先例を開けるもの、独逸銀行界に向つて国家的観念を鼓吹せること甚大なるものがある。

ビスマルクが、独逸バグダード鉄道政策に対して、積極的に貢献する所ありしや否やは、一日に至るまで何等之に関する定説がない。然れどもビスマルクは、一八九二年に於て下の言をなせることがある。曰く『予は露国の君府占領が何故に独逸に取りて危険なるかを了解する能はず。君府を領有する露国が、独逸に取りて危険ならざるは、猶ほ聖彼得堡、ワルシャウ、オデッサを領有する露国の何等危険ならざるが如し。万一露国が君府を占領せんと欲するとするも、予は独逸の立場より何等の妨害を加へんと思はず。予一個の見地よりすれば、従令露国が君府を獲得して其脚をオデッサより黒海に伸ばすも、独逸に対する危険の程度は今日と増減する所なし』と。此言に拠つて判断すれば、ビスマルクは独逸国民経済の将来が、切実に君府の運命と聯関せることを認めず、且又独逸バグダード政策は、例令露独衝突の危険を冒しても全力を集注して之が実現を期するの必要あることを知らざりしもの。さればビスマルクの印度政策、即ち露国の中東進出を慫慂せる政策は、今日に於ても亦独逸対印度政策の根本であるけれど、彼の君府政策に至りては、明かに浅慮短見の謗を免れぬ。されば吾人はバグダード鉄道政策の発展に対する十九世紀最大の政治家ギスレーリ及びビスマルクの意義に就て下の如く言ひ得る。曰く、ギスレーリの隠退及び死去によりて英国バグダード政策は瓦解したが、ビスマルクの隠退及び死去は、何等の影響をも独逸バグダード政策に及ぼさなかつたと。

バグダード鉄道政策はハイダル・パシャ・コニア間のアナトリア鉄道落成までは、何等重大なる政治的又は経済的困難なくして進捗した。一八九三年二月十五日に締結せられたる協約に於て、アナトリア鉄道が将来バグダードまで延長せらるべき性質を有せることは、明白に看取するを得たるに拘はらず、英国に於ては、此計画が自国に対して企てられたものと思惟せず、独逸公衆も亦バグダード鉄道計画の意義を充分に領会しなかつた。而して露国もまた、アナトリア鉄道が東北アナトリアに延長せられざる限り、此の計画に於て何等の危険を感ずる

ことなく、且適当なる鉄道政策によつて達せらるべきとに気付かなかつた。蓋し露国は一八八九年以来、裏海沿岸ンシトよりテーランを経由して印度洋沿岸チャハバールに達する鉄道敷設権問題に、至大なる利害関係を感じ、また一八九一年西比利亜鉄道の敷設に着手してより、其の外交上の注意を極東に傾倒せるを以て、露国有力者は、暫く近東問題を放置したのである。

仏国もまた、独逸の鉄道計画に対して、何等公式の抗議を試むることなかつた。これ一は独逸が『近東の仏蘭西』と称せらるゝシリアに向つて指を染めざりしにも由る。加ふるに当時仏国は、蘇丹に於て英国と衝突したるの傾向を呈し、一八本来独逸に対して露国と締結せる二国同盟の鋒先を転じて英国に向け、独逸とは却つて接近するの九四年二月四日・三月十五日、独逸と協商してカルメンの境界を議定し、更に独逸と提携して、英日コンゴー国と締結せる借地契約に抗議し、一八九七年七月二十三日トーゴーの北境に関して独逸と協商した。而して一八九五年には、独露仏の三国提携して、日本の遼東半島併合に抗議し、之を清国に還附せしめた。

此時に当りて英国は、欧羅巴に於て孤立の地位に陥り、其の国際的位置が反英的大陸同盟の組織によりて脅威せらるゝの危険を感ずるに至つた。於是英国最大の問題は、斯くの如き大陸同盟の出現を妨ぐることでなければならぬ。而して英国が其の東方政策を以て、露独両国を反目せしむるの用に供せんとしたるは実に此時を以て嚆矢とする。かくて一八九五年六月、ソールスベリ卿再び英国の首相の職に就くや、ヂスレーリの意味に於ける印度保全の根本問題となし、個人的提案として土耳古分割を独逸皇帝に提議した（註二）。然れども独逸皇帝は、一面に於て土耳古保全を以て、独逸富強のために、政治上並に経済上最も重大なる条件なるを認め、且他面に於て斯くの如き分割は、必然露国と無用の衝突を招く可きを認めて、其の提議を拒絶した。されど英国は露独を反目せしめんとする根本主義を捨てず、翌一八九六年ソールスベリ卿は、アルメニア人虐殺問題を機として露国に接近せんとし『今や吾人は

君府に対して利害関係を感ずること前日の如くならず、英国東方の門戸は埃及・蘇士にあり。故に若し露国にして埃及及に於ける吾人の主張を承認せば、吾人は決して露国が君府に拠らんとするを妨げざる可し』と声明した（註三）。然れども露国は当時力を極東進出に注げる時にして、独墺の背面攻撃を恐れたる際であつたから、露国も亦英国の誘致に応じなかつた。かくして英国は東方問題に於て孤立するに至つた。

如上の政治的状態が、独逸バグダード鉄道政策の進捗に有利なりしに加ふるに、種々なる事件の発生が、該政策の前途に横はれる政治的障碍を排して、益々東漸政策を進捗するに便ならしめた。今其の最も重大なる事件を挙ぐれば下の如し。

一、一八九七年の希土戦争
二、一八九八年のファショダ事件
三、一八九五年以来のオットマン銀行の経営困難
四、一八九八年露国の旅順口占領
五、一八九九―一九〇二年の巴爾幹戦争
六、一八九九年以来の露国の波斯湾進出策

即ち此等の事情は（一）土耳古に対する独逸の信用を増し、独逸をして土耳古が自国の提携者として全然無能力者ならざるを認めしめ、（二）英仏の反目は独仏資本家の接近を促がし、（三）英露の反目は独逸をして両国間のバランスたる地位に立たしめ、従つて英露の孰れよりもバグダード鉄道政策の発展に対して妨害を受けざらしめた。以下之に就て聊か詳説を試みよう。

一八九七年の希土戦争に於ける土耳古の勝利は、何等積極的利益を土耳古に齎らすことなかつたけれど、廃残の老

衰国と思惟せられたる土耳古が、意外なる抵抗力を発揮せることは、土耳古復興に対する独逸の信用を増し、独逸は此機を逸することなく大いに親善の実を土耳古に示した。されば外相フォン・ビューローは、此の意味に於て、一八九七年の冬、帝国議会に於て『独逸は断じて土耳古に対する積極的圧迫に参加せず』と声明した（註四）。而して当時独逸大使として君府に派遣せられたるも亦此時である。

次に一八九八年のファショダ事件は、時の仏国外相デルカッセが、熱心なる親英論者なりしに拘はらず、仏国の輿論をして、甚だしく排英論に傾かしめた。彼等曰く、仏国最後の敵は英国である。吾等は、英国と戦はんが為に、独逸との復仇戦を断念しなければならぬ。蓋し露国は全力を極東に傾倒しつゝあるが故に、今にして独逸と復仇戦を開始するも、吾人は露国より充分なる援助を期待することが出来ぬ。況んや二国同盟は、防禦の場合に於ける相互援助を主とするものなるに於てをや。吾人は寧ろ英国と戦はんが為に独逸と接近するを可とすると。斯くの如き事情の下に、バグダード鉄道計画に関して、独逸帝国銀行と、オットマン銀行との間に開始せられたる交渉は、順調に進捗した。当時の事情を顧みるに、仏国オットマン銀行は、一八九四年トランスヴール金鉱株を買収し、其の低落の為に巨額の損失を招きたが、而も曽て之に圧迫を加ふることはなかつた。仏国政府は、此交渉を奨励することは、一八九五年には、殆ど破産の厄に遭はんとした。於是オットマン銀行は、土耳古経済界に於ける従来の地位、就中鉄道問題に於ける地位を保たんがため、一八九七年冬より独逸帝国銀行に向つて交渉を開始した。独逸帝国銀行は是より先、英国『スミルナ・アイディン』鉄道会社に接近せんとして其意を果さなかつたが、今やオットマン銀行の提議あるに及んで直に之に応じ、一八九九年五月、独逸帝国銀行と仏国『スミルナ・カッサバ』鉄道会社代表者としてのオットマン銀行との間に、バグダード鉄道計画の共同経営、並にアナトリア鉄道会社及びスミルナ・カッサバ鉄道会社

社の監査役会に於ける共同責任に関する契約成るに至つた。

次に一八九八年、露国が旅順口を租借するに及んで、英国は露国に対して反目するあり、於是ソールスベリ卿は、一ョダ事件によりて仏国と感情の齟齬あり、他面に於て露国と反目するあり、於是ソールスベリ卿は、一家の武器として独逸を利用せんとし、就中独逸をして露国の敵たらしめんと画策した。一八九八年五月十三日、植民大臣チェムバレンは、其の演説に於て公言して曰く、『大英国は露国に対して宣戦し得たりしならん。同盟国なくしては大なる打撃を露国に与ふるを得ざる可し』と。是れ英独同盟の意見を洩らしたものでないか。而も独逸は、英国の爪牙たるの愚を学ぶことなく、却つて英露間に於ける自国の地位を利用し、其の海軍拡張によつて世界政策に於ける自己の地位を確立し、且東方政策を充実せしめた。

一八九八年、バグダード鉄道政策発展史上、極めて重要なる年である。独逸は最も大胆に英国の危険なる孤立的地位を利用して、東漸政策の基礎を確立した。即ち独逸が大海軍の建設によつて、英国海上権を脅威すべく、海軍条例を発布したのは此年四月十日である。而してキルヘルム二世が、君府より聖地を巡回し、ダマスクスに於て『全世界の回教徒は、永久に朕の友情に信頼せよ』との有名なる演説を試み、以て独土提携の根底を固めたるも、亦実に此年十・十一月の交に属する。されば一八九八年は、真に世界史的に深甚なる意義を有するものである。何となれば、単り独逸が此年を以て海陸共に覇を英国と争ふの大政策を樹立せるのみならず、米国も亦此年西班牙に勝つて太平洋に活動するの新時期を開き、印度洋上に於ける英独争覇戦、並に太平洋上に於ける日米争覇戦の端緒は、共に此年を以て開かれたるが故である。

斯くの如くにして独逸が其の『伯林・バグダード』政策の基礎を確立したる時に当り、英国に於ては新任印度総督カーゾン卿が、所謂『カイロ・カルカッタ』政策を高唱し、之によつて独逸の東漸政策に対抗するの策を立てた。

『英国にして印度を失はば、直ちに其の世界的帝国たるの地位を失ふべし』とは、カーゾン卿の根本主張にして、其の『カイロ・カルカッタ』政策は、此の主張に基くものである。而して彼は此の政策の第一歩として、一八九九年一月二十三日、クワイトの酋長と談判し、同地を間接に英国保護の下に置いた。クワイトは、既にチェスニーが其のバグダード鉄道計画の終点として指定せるところである。されば若し英国にして、飽迄も此の政策の実現に努め、独逸対抗の歩武を進めたりしならんには、形勢容易に逆睹し難きものありしならんも、恰も此時に当りて、英国は一面に於て南阿戦争の起るあり、他面に於て露国の印度政策が其の鋒鋩を鋭くするありしが故に、力を反独政策の励行に尽し得ざる情態に陥つて居た。

露国は、既に一八三四年に於て、パスラを以て露国軍港たらしめようとしたが、此頃に至りて其の波斯湾進出政策は頓に勢を加へ、或は砲艦を波斯湾に派遣し、或はオデッサ・波斯湾間に直接汽船航路を開始し、ベンデラバス又はチャハバールを以て『印度の浦塩斯徳』たらしめずんばは止まざるの勢を示した。形勢既に斯くの如くなりしを以て、英国は寧ろ独逸と握手して露国を牽制せんと欲し、曾に独逸の東方政策に対して積極的妨害を試むる能はざりしのみならず、却つて之に由つて露国の南下を抑止せんとし、露独の反目を醸さんことを切望した。然れども独逸は、ビスマルク以来の根本主義を奉じ、英露の孰れをも敵とすることなく、両国に対して等しく親善なる関係を持続するに努めつゝ、一方に於て其の鉄道計画に関して着々土耳古政府と交渉を進め、一八九九年十二月二十三日、土耳古商部大臣工部大臣ツィニ・パシャとゲオルグ・フォン・シーメンスとの間に、バグダード鉄道敷設に関する協約の締結を見た。於是総領事ステムリッヒ、及びカップ、マッケンゼン、ハビッシュの三技師を調査員として線路の踏査を終へたる後、一九〇二年一月二十一日アナトリア鉄道会社は、許可せられたる鉄道敷設を目的として、一会社を創立するの権利を与へられた。

先是一九〇一年シーメンス死し、フォン・グキンネル之に代つたが、一九〇二年一月三十日日英同盟の締結あり、英国は再び東方問題に力を注ぎ得べき状態となったので、彼は英国の嫉視を避けんが為に、バグダード鉄道に対する必要なる担保を作るために土耳古関税引上に同意し、（二）バグダード鉄道完成の後、若し此線によるを以て蘇士を経由するよりも迅速且安全なるを確かめたる場合に、印度郵便物の往復を本線に托することを約し、（三）クワイト築港並に同地に土耳古税関を設置するに同意するに於ては、英国の持分参加を仏国と同じく資本の三〇パーセントとし、且会社の理事会に八名の代表者を出し得べきことを提議した。然るに此の問題の未だ決せざるに先だち、一九〇三年三月五日、土独両国側の間に本協約の締結を見、四月十三日、バグダード鉄道会社は英国の参加なくして設立せられた。

（註一）Fürst Trubetzkoi : Russland als Grossmacht 第一六頁

（註二）Herre : Weltpolitik und Weltkatastrophe 第三八頁。

（註三）Bitterauf : Die deutsche Politik und die Entstehung des Krieges 第七七頁。

（註四）Reventlow : Deutschlands auswärtige Politik 1888—1913.

三　英国の対独政策

如上の事情によつて、独逸のバグダード鉄道政策は順調に発展したが、幾くもなくして英国の対独態度俄然として一変し、之が為に独りバグダード鉄道政策のみならず、一般欧羅巴政策の変動を見るに至つた。而して英国の態度かくの如く豹変したのは、其の近因を波斯湾問題に発したけれども、最後の原因が印度問題に在りしは言を俟たぬ。蓋し英国は、痛切にバグダード鉄道の将来に対して不安を感じ、茲に反独政策の励行となり、英独の反目顕著なるに至つたのである。

而して反独的態度が極めて鮮明となれるは、一九〇三年五月五日、英国外相ランスダウンが、波斯湾に於ける英国のモンロー主義を声明して、『波斯湾は印度国境の一部として見らるべきものなり』と公言せる時に在る。而して同日エレンバラー卿が『予は波斯湾沿岸に他国武器庫の建設せらるゝを見るよりは、寧ろ君府が露国の手に帰せんことを欲す』と演説したのは、英国が如上の反独的態度に伴ひて、其の多年の君府政策をも一変せることを示すものである。第十九世紀を通じて、土耳古保全の政策を持し来れる英国は、今や多年の方針を一変し、君府を露国の手に委ねて、之に由て『印度並に英国海上権』を脅威せんとする独逸の東進に当らしめんとするに至つたのである。『君府は長く土耳古のものなるべきか、又は印度は長く英領たるべきか、換言すれば露国は如何なる方面に向つて不凍港を得んと努むべき乎』と云ふ重大問題を解決すべき世界史の一新時期は、実に一九〇三年五月五日を以て始まつたと云ふことが出来る。而して君府問題に対しては、英露利害を共にし、印度問題に対しては、独露互に提携し得べき形勢を現じて来た。

於是英国は、当然独逸を孤立の窮境に陥るゝの策を講じ、日本との同盟によつて、仮令土耳古を犠牲にするも印度の安全を期し得るに及んで、露国をして其の多年の宿志たる君府南下政策を復活せしめ、以て独露の間を割かんとした。土耳古外相ハリール・ベーは、一九一六年四月二十七日に試みたる有名なる演説に於て曰く『英国は独逸の屈服を以て根本政策となし、之が為に吾が土耳古を犠牲として露国と結ばんとせり。曾て英国は露国の君府進出を以て印度を危険ならしむるものなりとなし、土耳古保全を根本政策として吾人と親善なる関係を保たんとせり。然れども東洋の新興国日本と同盟し、之によつて露国より来る危険を除くことを得たるが故に、英国は最早土耳古に顧慮するの要なきに至れり』と。

英国は一方、君府争奪に対して露独の離間を試むると同時に、他方ファショダ事件以来仏国との間に久しく蟠り居

たる感情の齟齬を融和せんと苦心し、茲に一九〇三年エドワード七世の巴里訪問となり、翌一九〇四年四月八日、両国の間に所謂親睦協商の成立を告げ、英国はモロッコに於ける仏国の優越権を承認して、以て英仏両国の関係を親善に向はしむるを得た。

バグダード鉄道政策は、斯くの如き英国の態度によりて、政治上並に経済上の困難に遭遇し、従来順調に進捗しつゝありし鉄道事業も一頓挫を来たし、一九〇四年より一九一〇年に至るまで、其工事は著しく遅滞した。さればバグダード鉄道の完成は、前途遼遠の感ありて、一九〇八年冬に至りても、時の土耳古商部大臣は実に下の言をなせる程であつた。曰く『バグダード鉄道は、政府が必要なる財源を得たる時に敷設せらるべきものなるが故に、其の完成の期限は、今日に於て知ることを得ざるなり』と。

而してバグダード鉄道政策の難局は、一九〇九年英仏両国の案出せるバグダード鉄道対抗策によつて、其の頂点に達した。即ちピション、ポール・カンボン、及びサー・エドワード・グレーは、協議の上トリポリ、ハムス、バグダードを経由してバスラに至り、地中海より波斯湾に貫く鉄道敷設権を土耳古政府に要求するに決した。而して翌一九一〇年、英仏実業家の間に協定成り、該案は如上英仏政治家の賛成を得て、在君府英仏両国大使によりて土耳古政府に提出せらるゝ運びに至つたが、独逸大使の運動其功を奏し、遂に此案を堕胎せしむるに至つた。

四　バグダード鉄道政策と世界戦

然るに一九一〇年五月七日、英国に於ては、如何なる手段を以てしても独逸を屈服せしめずんば止まずとせるエドワード七世の崩御するあり、而して独逸に於ては、一九一〇年六月二十八日、外交上の圧迫より脱するを以て対外政策の方針としたるキダーレン・ウェヒターの外相に任命せらるゝありて、バグダード政策の形勢は再び一変するに至つた。

独逸は、ビスマルク時代及び、一九〇〇年当時に於ける如く、英露両国のバランスによつてのみ、能く政治的行動の自由を得られる。さればキダーレン・ウェヒタールは、先づ露国と接近するの政策を取り、一九一一年八月十一日、露独協商の成立を告ぐるに至つた。露独協商の主たる内容は、露国は独逸のバグダード鉄道政策に対して続行し来れる反対を撤回し、且独逸はバグダード鉄道とを、各自支線によりて波斯国境ハニキンに於て聯絡せしむべしと云ふに在る。されば独逸は此の協商によりて、バグダード鉄道に反対し来れる英仏露三国の歩調を破り、少くも土耳古問題に対して、三国協商の一角を破れるものである。而して露国が独逸と斯くの如き協商を結ぶに至りては、容易に其真相を知り難い。何となれば、露国がバグダード鉄道を承認するは、即ち君府南下を断念するを意味するが故である。果して然りとすれば、独逸は英国によりて自家に向けられたる鋭鋒を逆まに英国に向つて向けたるものと言ひ得る。然れども露国が果して君府を放棄して再び印度南下の策を取り、而して他日此の政策の実現に際して、独逸の援助を得んことを企図して、独逸と協商せるものなるや否やは疑問である。但し当面の動機としては、露国は先に英国と結べる波斯に関する協商の不充分なるを感じ、バグダード鉄道を承認する代償として、波斯に対する英露協約の露国に関する方面を承認せしめ、且バグダード鉄道がアゼルバイジャン方面に戦略上の支線を敷設するの虞を除かんとせるに在りしは疑ふことが出来ぬ。

独露協商によりて露国の反対を除去せる独逸は、全速力を以て総ての計画を進捗せしめ、従来の既得権によりて、バグダードよりバスラを経て波斯湾頭に達する線路を独力経営せんとした。茲より此間に、伊土戦争に次ぐに巴爾幹戦争の破裂を以てしたので、実際に於ては何等著しき進捗を見なかつたが、既に第一の難関たる露国との反目を除き得た為に、英仏に対する態度も頓に強硬となり、フランクフルター・ツァイトゥンクの如きは、『若し英国にして自

らメソポタミア地方より退去せずんば、吾れ之を放遂す可し」とさへ言ふに至つた。従つて此の協商が、英仏の不満を誘起せるは当然のことであつて、フレーザーの如きは、之を以て『波斯に関して英露協約が開きたる戸を、英国に対して閉ざせるものである』と論じた。かくして英仏並に仏独の間に、バグダード鉄道に関して頻繁なる交渉あつたが、一九一四年に至り、独仏協商の成立に次ぐに独英協商の成立を以てし、従来バグダード鉄道の進路に横はれる三個の難関は悉く巧みに除去せられ、ヘンニングをして、『今やバグダード鉄道は凡ゆる障得を排除し得たるが故に、恰も暴風雨の後に快晴の空を見たるが如く、此の大規模の交通計画は、将来益々有望なる発展を遂ぐるや必せり』と言はしむるに至つた。

独仏協商は、一九一三年末より仏国政府、土国蔵相ジャヴッド・ベー、及び独逸政府との間に交渉開始せられ、一九一四年二月十五日正式に成立せるもの、其の主たる内容は、独逸は仏国がシリア及びアルメニアに於ける鉄道経営に関して土耳古政府より得たる利権を承認し、仏国は従来オットマン銀行の手によりて引受けたるバグダード鉄道の利権株を悉く独逸帝国銀行に売却し、該鉄道の参加権を絶対に放棄したことに在る。独逸は之によりて始めて該鉄道に対する単独支配権を確保し、向後意の如く其の経営を行ひ得るに至つたのである。

是より先英国は、バグダード鉄道を波斯湾頭に延長するは、クワイト方面よりオマン地方に至る波斯湾一帯に於ける英国の利権を毀損するものなるが故に、若し該鉄道が波斯湾に延長せらるゝ時は、其の管理権を英国政府に交附すべきを主張し、爾来英独土三国の間に再三再四交渉を重ねたる後、一九一四年六月十五日に至り、サー・グレーとリヒノフスキー伯との間に、所謂『バグダード平和』の締結を見た。

英国は此の協商によりて独逸との親善を欲したであらう。されど其の最後の目的は、独露を相戦はしむるに在つたと言ひ得る。蓋し英国は、一九一一年八月十九日に成立せる露独協商によつて、独露両国が、中東に於て握手するに

至れることを、甚だしく不安に感じ、百方其の離間に苦心した。而して今次の『バグダード平和』は、従来単に近東に於て露国と提携せるに対し、更に中東に於て独逸と提携し、之によつて両国を控制し操縦し得べき地位を英国に与へた。斯くの如くにして『バグダード平和』は、君府を中心とする避け難き戦争を促進した。蓋し英独両国が土耳古に於て親善を確立せば、露国は君府進出のために啻に独逸と戦はざる可からざるのみに非ず、また独逸の背面掩護たる英国の外交と戦はざる可からざるに至るであらう。露国は斯くの如き形勢に陥るを恐れたるが故に、早く英国を誘致して独逸と戦ふを必要とする事情あつた。

英国は斯くの如くにして生ぜる今回の世界大戦に誘致せられた。英国は其の外交の根本問題なる印度政策を解決せんが為に、当然其の反独的バグダード政策を復活し、一方に於ては、露国の印度南下を転向せしめ、且独逸東漸政策の根拠を覆すの目的を以て、君府陥落を目標とし、他方に於ては、万一君府占領に失敗せる場合に、『ナイル・インダス』線を確保して、露独両国に備ふるの目的を以て、バスラ占領を目標として戦つた。而して一九一四年十一月二十一日、英国はバスラを占領した。フリードリッヒ・リストの警戒は茲に事実となり、またローリンソンが、英国の支配はコルナにまで及ばざる可からずとせる主張も、一と先づは遂げられたと言ふことが出来よう。